

博士論文

戦後日本の教員養成大学・学部における  
美術教育学の人的制度基盤の成立過程

平成 29 年度

筑波大学大学院人間総合科学研究科芸術専攻

有田 洋子

筑波大学

## 目 次

序章	1
第一節 本研究の背景	
1 本研究の原点	
2 美術教育学の制度的危機	
3 美術教育学の実質的な整備	
4 教育政策	
第二節 本研究の目的と諸概念の定義	
第三節 本研究の意義と可能性	
第四節 先行研究・研究史	
1 本研究の関連研究領域と先行研究	
2 美術教員史	
3 美術教育学会史	
4 美術史学史	
5 教員養成制度史	
6 教育政策史	
7 教科教育学研究	
8 各科教育学研究史	
第五節 問題の所在	
第六節 対象範囲	
第七節 研究方法	
第八節 本研究の構成と各章の要点	
第一章 美術教育学の人的制度基盤の成立過程の概観	27
第一節 本章の構成	
第二節 戦後の教員養成大学・学部に関わる教育政策の展開	
1 重要な大学政策決定の契機	
2 大学における教員養成の体制—講座制ではなく学科目制	
3 昭和 30 年代における方向転換—目的大学化	
4 学科目制と教育課程の基準	
5 教員養成大学・学部への大学院設置	
第三節 師範学校から教員養成大学・学部への美術関係教官の移行期	
1 教員養成大学及び教員養成学部を置く大学	
2 学芸大学・学芸学部と教育学部	

- 3 特別教科(美術・工芸)教員養成課程の設置
- 4 専攻科
- 5 師範学校から教員養成大学・学部への美術関係教官の移行

#### 第四節 学科目の設置期

- 1 学科目と講座
- 2 教養教育重視からの転換と文理学部改組
- 3 学科目制度までの各大学と文部省のやりとり
- 4 全国的な学科目整備の過程
- 5 各大学に示された学科目の実際
- 6 美術関係設置学科目類型とその変遷
- 7 各学科目の整備過程

#### 第五節 教科教育専攻大学院の設置期

- 1 大学院教育学研究科と美術教育専攻の設置
- 2 美術教育専攻設置のコンセプト

## 第二章 各教員養成大学・学部における美術教育学の人的制度基盤の成立過程—北海道・東北地方— . . . . . 69

### 第一節 構成と凡例

- 1 構成
- 2 美術関係教官勤務表の作成方法と凡例

### 第二節 北海道地方

- 1 北海道教育大学の概観
- 2 北海道教育大学（札幌）
- 3 北海道教育大学（岩見沢）
- 4 北海道教育大学（函館）
- 5 北海道教育大学（旭川）
- 6 北海道教育大学（釧路）

### 第三節 東北地方

- 1 弘前大学
- 2 岩手大学
- 3 宮城教育大学
- 4 秋田大学
- 5 山形大学
- 6 福島大学

## 第三章 各教員養成大学・学部における美術教育学の人的制度基盤の成立過程—関東地方— . . . . . 97

- 1 茨城大学
- 2 宇都宮大学
- 3 群馬大学
- 4 埼玉大学
- 5 千葉大学
- 6 東京学芸大学
- 7 横浜国立大学

#### 第四章 各教員養成大学・学部における美術教育学の人的制度基盤の成立過程—中部地方—

..... 113

- 1 新潟大学
- 2 富山大学
- 3 金沢大学
- 4 福井大学
- 5 山梨大学
- 6 信州大学
- 7 岐阜大学
- 8 静岡大学
- 9 愛知教育大学

#### 第五章 各教員養成大学・学部における美術教育学の人的制度基盤の成立過程—近畿地方—

..... 134

- 1 三重大学
- 2 滋賀大学
- 3 京都教育大学
- 4 大阪教育大学
- 5 神戸大学
- 6 奈良教育大学
- 7 和歌山大学

#### 第六章 各教員養成大学・学部における美術教育学の人的制度基盤の成立過程—中国・四国地方—

..... 151

##### 第一節 中国地方

- 1 鳥取大学
- 2 島根大学
- 3 岡山大学

4 広島大学	
5 山口大学	
第二節 四国地方	
1 徳島大学	
2 香川大学	
3 愛媛大学	
4 高知大学	
第七章 各教員養成大学・学部における美術教育学の人的制度基盤の成立過程—九州・沖縄地方—	172
1 福岡教育大学	
2 佐賀大学	
3 長崎大学	
4 熊本大学	
5 大分大学	
6 宮崎大学	
7 鹿児島大学	
8 琉球大学	
第八章 教員養成大学・学部における美術教育学の人的制度基盤の成立過程の実相—二事例—	188
第一節 はじめに	
第二節 島根大学の場合	
1 島根師範学校から島根大学教育学部への移行期	
2 学科目の設置と具体的人員の配置	
3 大学院美術教育専攻の設置と展開	
第三節 岡山大学の場合	
1 岡山師範学校から岡山大学教育学部への移行期	
2 学科目の設置と具体的人員の配置	
3 大学院美術教育専攻の設置と展開	
第四節 まとめ	
第九章 美術科教育教官の全体像	207
第一節 本章の構成	
第二節 全国美術科教育教官一覧	
1 全国美術科教育教官一覧表	

2 美術科教育教官の人数	
3 学科目・大学院設置に伴う教官の所属決定の類型	
4 美術科教育教官の出身母胎の推移	
5 自校出身者	
第三節 美術教育学の人的制度基盤の成立過程における人的種々相	
1 はじめに	
2 師範学校から大学移行期—「美術教育学」人的制度未成立期	
3 学科目「美術科教育」設置期	
4 大学院美術教育専攻の設置と「美術科教育」専門家の登場	
第四節 まとめ	
1 概括的・数値的検討	
2 人的種々相	
結章・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	230
第一節 本研究の目的と問題の所在	
第二節 本研究の成果	
第三節 本研究の意義と可能性、そして今後の課題	
1 本研究の意義	
2 本研究の可能性	
3 今後の課題	
参考文献・資料目録・・・・・・・・・・・・・・・・	237
謝辞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	264

※ 表 10～61 は出版予定のため掲載しない

## 序 章

### 第一節 本研究の背景

#### 1 本研究の原点

本研究の原点となったのが、平成 23 年 3 月の第 33 回美術科教育学会富山大会での美術教育史研究部会である<sup>1)</sup>。同大会の概要集には同部会のテーマ「美術教育学の制度的基盤の成立過程」が以下のように記されている<sup>2)</sup>。

##### 1. 今回の趣旨

戦前の師範学校から戦後の教員養成大学・学部、そして教科教育専攻大学院へと変遷するなかで、美術教育学研究の制度と人員配置が確立していく。それは美術教育学が成立したことと同義ではないものの、その過程は現在の我々の意識や学会の発生に関係していて、とても興味深い。直接的な関係者が亡くなりつつあることを考え、美術教育史研究の対象として確立しておきたい。

##### 2. 教員養成大学・学部の出発

中学校や高等女学校と同じ中等学校であった戦前の府県立師範学校は、昭和 18 年に官立の専門学校に昇格する。戦後は師範教育への反省から、教員養成は大学での実施、教員免許の開放性、教養教育重視が方針となる。師範学校は学芸大学や教育学部として出発する。ただ教員のほとんどは旧師範学校教員が継続して勤務した。講座も図画と工作を想定した 2 講座の大学が多かったと思われる。旧師範学校教員は図画と工作のことなら何でもできたので、大きな問題ではなかった。

##### 3. 教科教育研究の制度的確立

昭和 40 年あたりから教員養成政策は教養教育重視から教職の専門性重視へ転換する。その一つが昭和 39 年に成立した学科目制度である。これによって絵画・彫塑・構成・美術理論美術史・美術科教育という専門に人員を再配置することになった。そこで大きな問題になったのは、美術科教育にだれを配置するかであった。当時の教員にとって美術科教育は全員の専門ではあるが、研究業績を論文で評価されるような専門ではまったくなかった。それぞれの大学で紆余曲折があったと思われる。それでも形式的な配置であると解釈できる余裕がまだあった。

ところが、同じく昭和 50 年あたりから始まり、20 年かけて完成する、教員養成大学・学部に教科教育専攻の大学院を設置する政策は、この余裕を打ち砕いたと言える。美術科教育に配置された教員に、文部省設置の委員会で認める論文業績が無ければ、大学院は認可されないので、美術科教育配置の教員に対する重圧は深刻なものであった。そして、本格的に美術科教育研究の専門家の必要という認識が一般化することになった。

最初期に発足した東京芸術大学、東京学芸大学、大阪教育大学等の美術科教育専攻の大学院が、学科目整備や大学院設置の必要に応じる形で修了生を輩出する。また美術教育関係学会の

動きも活発になる。

#### 4. 部会員報告の項目

以上のような概観も踏まえながらも、微妙な問題もあるので、各大学の美術科教育研究の歴史を可能な範囲で報告する。以下のような項目を意識した報告になる。

1. 戦前の師範学校から戦後の教員養成大学・学部への移行
2. 学科目制度の発足と具体的人員の配置
3. 教科教育専攻大学院の設置と展開
4. 美術科教育学関連学会の変遷
5. 美術教育学は成立したか

○東京学芸大学の場合 平野英史

○大阪教育大学の場合 花篤實

○茨城大学教育学部の場合 有田洋子

[以下3行略]

上記概要の通り、平野英史によって東京学芸大学、花篤實によって大阪教育大学、そして有田によって地方の中規模大学である茨城大学と概要集に記載されていないが島根大学の事例研究が発表された。美術教育学研究を目的とする美術科教育学会の出自、歴史的意味を確認する試みであった。美術科教育学会そのものの成立過程は、『美術科教育学会二〇年史』<sup>3)</sup>で詳細に記述されている。この美術教育史研究部会の発表で、学会発足の背景にあった、教員養成大学・学部において美術研究と美術教育研究が未分化な状態から分化していく過程が確認された。

筆者は以後、他の教員養成大学・学部における美術教育学の人的制度基盤を網羅的に調査検討して、今日に至った。既に以下の大学については発表した<sup>4)</sup>。

論文発表：島根大学(平成23年)、岡山大学(平成24年)、東京芸術大学(平成25年)、山口大学(平成25年)、鳥取大学(平成26年)。

口頭発表：茨城大学(平成23年)、富山大学(平成23年)、大阪教育大学(平成23、26年)、京都教育大学(平成26年)、奈良教育大学(平成26年)、神戸大学(平成26年)、福岡教育大学(平成28年)、佐賀大学(平成28年)、長崎大学(平成28年)、熊本大学(平成28年)、大分大学(平成28年)、宮崎大学(平成28年)、鹿児島大学(平成28年)、岐阜大学(平成29年)、静岡大学(平成29年)、愛知教育大学(平成29年)、三重大学(平成29年)。

また、『美術科教育学会通信』No. 85(平成26年)に同学会美術教育史研究部会「研究ノート」三編の一つとして「戦後の教員養成大学・学部における美術教育学の制度的基盤の成立過程」を寄稿した<sup>5)</sup>。

平成23年に美術教育史研究部会が「美術教育学の制度的基盤の成立過程」という研究テーマを設定したのは、次節以下で述べる諸種の困難が次第に明確になっていくことを予測していたかのようであった。



## 2 美術教育学の制度的危機

昭和24年5月に発足した新制国立大学で美術教員養成がなされ始めて約70年が経過した。戦後初期の美術専門と未分化の状況から、昭和39年2月25日文部省令第3号「国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科目に関する省令」（通称「学科目制度」、以下、学科目制度と略記）によって制度上「美術科教育」の定員が作られ、昭和43年から平成11年にかけて大学院教育学研究科美術教育専攻・専修（以下、大学院美術教育専攻と表記）が設置されて「美術教育学」の人的制度が実質化するまでには、あまたの紆余曲折と先人の苦労があった。

本研究は、上記のような人的制度実質化までの過程を三時期に区分して検討する。本研究で言う三時期区分とは、第1期：師範学校から新制国立大学になった昭和24年前後から次期直前まで、第2期：教員養成大学・学部で学科目が導入された昭和39年から次期直前まで、第3期：各大学に大学院美術教育専攻が設置された時点から平成11年に全国設置が完了するまでとする。

「美術教育学」の人的制度が実質化した、すなわち日本のすべての教員養成大学・学部で大学院美術教育専攻が設置された平成11年から僅か十数年後の現在、美術教育学の人的配置は懸念される状況にある。まず、美術教育学を開拓してきた第一世代の教官は次々と定年退官・退職してしまった。彼らは未開拓の土地に美術教育学を建てようとした。当時を知る者にとっては当たり前の事実であり、またまだ生々しい現実の記憶が残っていて歴史的距離が十分でないためか、その経緯を歴史として検討する試みはなされていない。そうして、その起源を知らない、経緯や緊張を想像できない世代へと代替わりしつつある。

また、現在、美術教育学分野での教員公募のほずが、実技あるいは美術史の分野も兼担するという条件が附記されていることが増えている。そのような附記がなくとも、蓋を開けてみれば美術教育学分野での教員公募の採用者が、ある実技分野の専門家あるいは美術史専門家であったということも見受ける。あるいは、ある実技分野での教員公募のほずが、美術科教育も兼担するという条件が附記されていることもある。また、実務経験を大変に重視した公募もある。このように背景は違えども、かつての、一人の教官が美術に関することなら何でも指導した師範学校時代や初期の教員養成大学・学部の状況、あるいは昭和40年代に多く見られた「美術科教育」の学科目に所属してはいても専門は別の分野という状況へと逆行するかのような事例が散見される。その背景には、教員養成大学・学部における美術教育専攻分野の廃止・縮小、それらに関連する教官定員の削減等、教職大学院の設置と既存の教科教育専攻大学院の廃止<sup>6)</sup>、様々なものがあるだろう。

以上のように現在の美術教育関係人事の状況は、大学院設置時とは大きく転換した。しかし、以前の状況を知らない世代には大きく変わったとは認識されずに、当然の事態と受け止められていくおそれがある。歴史的経緯を知らないことは、歴史的な存在であることの自覚と事態の相対的な認識を妨げてしまうことにつながる。客観的な歴史的経緯を記述して、後の世代に伝えていくことが必要であろう。

### 3 美術教育学の実質的な整備

美術科教育学会の学会通信に、代表理事、理事等の緒言が No. 74（平成 22 年 6 月）から掲載されるようになった。そして、平成 25 年以降数回にわたって、美術教育学の成立に関わってきた当事者である代表理事（金子一夫・永守基樹）により、制度的成立の過程についてと、実質的内容の成立が未だ達成されていない危機的状況下にある旨が記される<sup>7)</sup>。

既述のように筆者が本研究テーマで論文発表を初めて行ったのが平成 23 年である。平成 30 年には、「美術教育学」の実質的確立を目指して発足した「美術科教育学会」も、前身の大学美術教科教育研究会から数えて 40 年を迎えようとしている。さらに美術科教育学会 40 年史の編纂も始まろうとしている。本研究では美術教育学の実質内容については対象範囲外とするが、「美術教育学」の実質的要件についての共通認識も充分には確立されていない。やっと前述した「美術教育学」の内容を問う論考（永守基樹）<sup>8)</sup>や、論文（藤原智也）<sup>9)</sup>が発表された。また前述したように、近年、金子一夫が「美術科教育学会通信」で懸念を表明し<sup>10)</sup>、さらに美術科教育学会誌『美術教育学』で美術教育学そのものについての論文を発表し始めている<sup>11)</sup>。

美術教育学が整備される契機は外的に何度もあったと考える。明確にそれと言えるのは本研究で取り上げる学科目導入であり、大学院美術教育専攻設置である。本研究の範囲外では、新構想大学もそうであったであろう。

もちろん、戦後新しい体制になって図画工作教育のあり方を協議する組織が作られた<sup>12)</sup>。昭和 21 年に東京高等師範学校・東京文理科大学図画工作教育関係者によって芸術学会が、昭和 22 年に東京美術学校・東京芸術大学図画工作教育関係者によって美術教育学会が設立され、活動を始めた。また昭和 21 年に大阪の図画工作教育関係者によって大阪児童美術研究会が、昭和 26 年には京都の図画工作教育関係者によって日本美術教育学会が組織された。また昭和 23 年に開かれた第一回全国図画工作教育大会で全国図画工作教育連盟が構想され、翌昭和 24 年に発足した（昭和 36 年から全国造形教育連盟と改称）。その他にも各県に図画工作教育の研究組織が作られている。これらは官公立学校教員が組織したといっても民間の団体であった。

日本が昭和 27 年に独立した後の昭和 28 年から文部省が教科教育学の組織的研究推進に乗り出す。まず文部省は同年から教科ごとの教員養成学部教官研究集会を始めた。昭和 30 年 10 月に開かれた第 3 回は図画工作科教育の協議会であった。そこではまだ教科教育学の構想は出ていなかった。

また、昭和 23 年～26 年に G. H. Q. の民間情報教育局によって第 1 期から第 8 期の IFEL (The Institute for Educational Leadership) 講座が実施された。教育学、教育行政、学校管理、各教科の戦後教育の内容に関して指導者となる教員への講習がなされた。しかし図画科教育及び工作科教育に関しては実施されなかったもので、占領終了後の昭和 27 年 11 月に、日本独自に第 9 期として参加者の旅費自弁のような形で図画科及び工作科の IFEL 講座が東京教育大学で行われた<sup>13)</sup>。講師は当時の教育学者で、参加者は各地方の図画工作科教育の指

導的立場にあった小・中・高・大の教員各々約 40 名であり、昭和 26 年の学習指導要領と共通の内容、すなわち戦後初期の生活主義的図画工作科の方向が講習された<sup>14)</sup>。その内容は本研究の範囲外になるが、文部省の考える戦後図画工作科教育内容を全国に広めることを意図していた。

しかし IFEL 講座にも関わらず、昭和 30 年代の教科教育学に対応する大学での授業「教科教育法」「教材研究」は次のような状況にあった<sup>15)</sup>。

教員養成のカリキュラムを考えていくと、重要な欠陥としてあげられてくるのが、『教科教育法』『教材研究』といった分野である。これらは『免許法』にも必修単位としてかけられ、各大学においてすでに実施されているが、重要であることは認められながらも、現実的には、もっとも安易におこなわれており、学生には好まれない講義の一つとなり、この講義に対する不満や要求は実に多い。／また、教師にとっても同様に非常に困難であり、不満も多い講義である。それは、『教科教育学』が科学的に研究されるべき対象でありながら、じゅうぶんに研究しつくされていないところに一つの原因があると考えられる。

そこで文部省は昭和 38 年度からすべての教科に関して以下のような教科教育研究推進の政策を実施した。(昭和 44 年の第 1 回美術科教育研究集会での文部省教職員養成課長の「主催者挨拶」<sup>16)</sup>)。

- ① 教員養成については主要な「教科教育学」について
- ② 大学教官・附属学校教官の緊密な関係のもとに
- ③ 3 年程度継続して研究・協議し
- ④ 最終年度に「教科教育(学)の研究」を刊行して研究集会の成果を公にする。

翌昭和 39 年に東京学芸大学教育研究所は『教科教育研究の諸問題』を刊行し、教科教育学一般と各教科の教科教育学の構想を提案した。これも文部省の意向に応じたものであろう。

それより前、昭和 27 年に教員養成大学・学部の学部長・教官・附属学校教官の組織である日本教育大学協会（以下、教大協と略記）が発足し、美術関係教官は第二部美術科教育部会（昭和 30 年に美術教育部門、昭和 32 年に美術部門と改称）に機関加盟することになった。昭和 41 年に日本教育大学協会教員養成課程検討委員会は全国の加盟大学の意見を総合して、教科教育学は教職専門と教科専門の交叉領域に位置づけた「教科教育学の基本構想案」を発表した。これは文部省の先の方針を受けたもので、教科教育学研究の推進は、文部省の教科教育の人的制度の整備促進と並行していたと言える。教大協の先の委員会は「教科教育学の基本構想案」に対する加盟大学の意見を集め、昭和 42 年 5 月に発表した。内容に関しては概ね賛成と条件付き賛成が多かった<sup>17)</sup>。

昭和44年11月に昭和30年度の図画工作科教育研究集会の次にあたる第1回美術科教育研究集会が文部省主催で千葉大学において開かれ、美術教育の立場から「教科教育学の基本構想案」が検討されている。本研究の範囲外になるのでその内容の検討はしないが、教大協案に対する全国の大学の意見を踏まえて協議がなされた。昭和45年に京都教育大学において第2回美術科教育研究集会、昭和47年1月に東京学芸大学において第3回が開かれた。そして教員養成大学・学部教官研究集会美術科教育部会は、昭和47年3月に『美術教育の研究』（東洋館出版社）を刊行した。これが文部省教職員養成課長の「主催者挨拶」で言われていた報告書であろう。

『美術教育の研究』は大きな成果ではあり、内容も整備されている。ただ、この報告書がその後の美術科教育学研究の出発点として、あるいは基本的な参考文献としてあまり言及されなかった。なぜ後続世代へ引き継がれなかったのかは今後の検討課題である。

また、後述の先行研究の「7 教科教育学研究」でも述べるように、昭和59年の時点でも各科の教科教育法の担当者には教科専門の教官が多く、教科教育学専門の意識や授業内容も不十分であった場合が多かった。

#### 4 教育政策

美術教育学の教員養成大学・学部における人的制度及び人的配置は、当然ながら国家の教育政策と連動している。ただ、教育政策は単純に決定されるわけではなく、様々な力のぶつかり合いを経て決定される。政策決定後にそれが実施される過程でも、抵抗は必ずあるし、また文部省告示によって法令の当初の趣旨が変質することもある。本研究で検討するが、学科目の導入にしても単純に実現したわけではなく、文部省との間で厳しい折衝をした大学は少なからずあった。また、決定された教育政策が実施されたとしても現実にはぶつかって修正、延期されていくことはよくある。例えば、平成19年6月成立の改正教育職員免許法により、平成21年4月1日から導入された教員免許更新制は、もともと不適格教員の排除を目的に論議されてきたはずである。それが教員の研修制度に修正されて実現した<sup>18)</sup>。教育政策は特に政策立案主体の意図とは違った結果をもたらすことがある<sup>19)</sup>。そのため法令は改定される。このようなダイナミズムは本研究においても留意する。

戦後日本の教員養成政策の展開に関しては、山田昇『戦後日本教員養成史研究』（平成5年）<sup>20)</sup>に詳細に記述されており、本研究においても参照する。ただ、各大学の対応、そして美術教育学の成立にその政策がどのような影響をもたらしたかについてはほとんど記されていない。それゆえ本研究では三時期区分を用いて各大学における具体的な美術教育学の人的制度整備過程を明らかにする。

#### 第二節 本研究の目的と諸概念の定義

本研究の目的は、第二次世界大戦後の日本における美術教育学の人的制度基盤成立過程を、全国の教員養成大学・学部の人的制度の成立と人的配置の面から三時期に区分して明ら

かにすることである。美術教育学の人的制度と人的配置は、美術教育学の言わば「学術インフラ整備」（後述の太田智己の言葉）であった。その過程を明らかにすること、すなわち起源を尋ねることによって、美術教育学の意義や歴史的必然性も明らかになることを期待した。

本研究で言う美術教育学とは美術と教育に関する現象を対象とする学問を意味する<sup>21)</sup>。よりていねいに定義すると、美術教育学とは、美術と教育に関する現象を客観的・論理的（厳密な概念規定と体系的整合性）・実証的に解明する科学である<sup>22)</sup>。宇佐美寛は教育哲学会の現状に触れて次のように言う。「教育に関わる一般的観念が〈教育思想〉であるとし、人は教育実践への関心からだれでもそれをもちうるという。そして、ただそれは学問ではなく、学問の研究対象である」<sup>23)</sup>とする。そして「哲学とは、学問の方法なのである。自・他の思想に対する疑い・批判の方法が哲学なのである」とする<sup>24)</sup>。この宇佐美の言う教育哲学と教育思想の違いを、美術教育学研究と美術教育思想の違いに援用する。単なる美術教育思想と美術教育学研究は一線を画す。学問として遂行するにあたっては、明確なディシプリン（分野特有の方法）をもつこと、そして先行言説を超えること、すなわち新知見や独創性をもつことが要求される。

美術教育学の制度には美術教育学関連の学会も考えられる。美術教育学関連学会は美術教育学の発展を目的とし、自由に参加・発表し、議論する組織である。実質的な美術教育学の内容に関わる制度であるが、会員の意志によってその制度は変更できる。それに対して教員養成大学・学部の人制制度は、誰もが自由に参加・行動できるわけではないし、所属者の意志によって変えられるわけでもない。様々な勢力の意向が反映するとはいえ、直接的には国の教育政策によって実現する決まり事である。そして全国の教員養成大学・学部にも適用されるだけに、美術教育学の消長に大きな影響をもたらす。それゆえ美術教育学の人制制度基盤の最も大きなものに教員養成大学・学部の美術教育学関係人制制度があると捉え、本研究ではこの成立過程を解明する。

教員養成大学・学部における美術教育学は、学校での美術科教育を対象とする学問、すなわち美術科教育学を想定するとはいえ、論理的には教科の存在より先行して、美術科教育の意義づけ・枠づけに限定されるものではないという意味をもたせるために、必要がない限り「美術教育学」を使用する。

本研究で言う「人制制度」とは職能の制度を意味する。本研究では美術教育学を専門に研究あるいは指導するという教官が規則として教員養成大学・学部にも定員化されたことを指す。「人制配置」はその定員化されたポストが具体的人物で満たされることを指す。また、師範学校官立化後から大学法人化前までの正式人員を「教官」、それ以外は「教員」と呼ぶことにする。人員の所属は「図画」「工作」「美術」「工芸」等、組織名は「講座」「学科」「科」「教室」「研究室」等と大学及び時期によって違う。本文中で使い分けると繁雑になるので、使い分けが必要な時以外は、便宜的に所属は「美術」、組織は「講座」に統一する。

さらに美術講座に所属する教官を総じて「美術関係教官」と呼ぶこととする。厳密に言う、師範学校教官は教科である「図画」か「工作」か、あるいはその両方に即している

ので、「図画教官」「工作教官」「図画工作教官」となる。なお教科名は、明治5年から「図画」（最初は「画学」「野画」）、明治19年から「手工」（昭和16年から「工作」）、昭和22年に小学校・中学校は「図画工作」となり、昭和33年に中学校は「美術」となる。

本研究で問題とする美術科教育に関わる教官は、厳密に言うと、学科目制度発足前は図画工作科教育法や美術科教育法といった美術科教育関係の授業の担当教官、学科目制度発足後は「学科目『美術科教育』」に「所属」する教官であり、大学院美術教育専攻設置後は学科目という枠とそれへの所属という次元から先に進んで「分野『美術科教育』」あるいは「分野『美術教育学』」の教官である。それら三つを総括して指す場合は、本文中においては「美術科教育教官」に統一する。

本研究で言う三時期区分を作業仮説として以下の図1のように設定する。水平軸を時間、垂直軸を大学数とする。先述したように、第1期：師範学校が新制国立大学になった昭和24年前後から次期直前まで、第2期：教員養成大学・学部で学科目が導入された昭和39年から次期直前まで、第3期：各大学に大学院美術教育専攻が設置された時点から平成11年に全国設置が完了するまでとする。第1期と第2期の始点は制度発足時で明確である。しかし第3期の始点は各大学の大学院美術教育専攻の設置が徐々になされるので各大学によって違う。それゆえ、昭和43年から平成11年までの全体を言わば斜線で区分する。

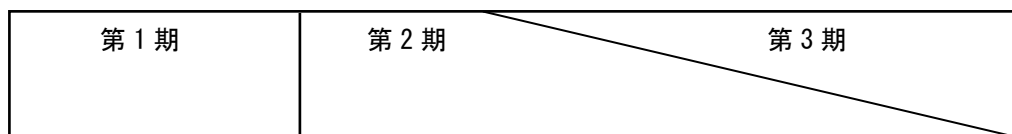


図1 本研究での三期区分の概念図

既に述べてきたように、教員養成大学・学部は大きな変化の渦中にある。美術教育学は、教員養成大学・学部に関する政策や社会の大きな変化に直面している。美術教育学が制度的に成立したかと思われるのに、大学改革によって美術教育学及びその専門家の位置は流動化している。教員養成大学・学部における美術教育学が成立する過程を跡づけることで、美術教育学が出現した必然性もより明らかになる。また現在、調査対象にすべき関係者が亡くなりつつあり、その理由からも現時点で調査する緊急性がある。

現在、美術教育学は、美術専門とは異なる独自性をもつ学としてある。しかし戦前の師範学校の図画教授法は、図画専門の内容と未分化であり、図画教員は図画専門の授業そしてその一環として図画教授法の授業も担当した。それでは、専門的な学として認められるようになった、すなわち、美術教育学の専門性は制度的にどのように成立したのであろうか。

美術教育学が実質的な学問として存在するためには、それを担う人的制度も必要である。美術教育学の場合、実質的な成立より人的制度とそれへの人的配置、具体的には教員養成大学・学部の教官の配置が先行する。美術教育学の実質的内容は配置された教官たちによ

って整備されていく。大学によって様相は様々であるが、師範学校の教員養成大学・学部への移行、学科目整備、そして大学院美術教育専攻設置へと進む中で美術教育学の人的制度と人的配置が確立していく。それは美術教育学の実質的整備の前提であった。

本研究は以上の人的制度と人的配置を、言わば美術教育学の「学術インフラ整備」過程として捉え、全国の教員養成大学・学部の美術教官の推移を網羅的に把握し、その全体像を数値的・類型的に明らかにし、諸要素の要因を考察する。

### 第三節 本研究の意義と可能性

美術教育史の本質的意義として、現在の特異性、過去によって押し出されてくる現在の地平が自覚されることを金子一夫は指摘する<sup>25)</sup>。「現在」は確実に今ここにあるのに、はっきりしないものであり、過去が明確なイメージになることによって、現在の輪郭も見えやすくなるという。それを踏まえれば、美術教育学の人的制度基盤の成立過程の解明によって、現在の美術教育学の制度的な状況も把握しやすくなる。

宮脇理も、柄谷行人の「風景の起源」を援用して「起源」の重要性を説く<sup>26)</sup>。一般に制度が成立してしまうとその起源は忘れ去られ、もともとあった当然のものとして意識される。美術教育学もそうである。しかし、その起源を問うことで、様々な可能性をもつダイナミズムを意識できる。

金子一夫は、歴史研究の面白さを次のように言う<sup>27)</sup>。

歴史研究のおもしろさの一つは、誰もが無視しているような対象を、すなわちつまらないとされているものを、新しい照明によって歴史的意義のある姿にして示すことである。あるいは、小さな事実を積み上げていって大きな真実を明らかにすることである。取り上げられないものほど、歴史的に重要であったりする。というのは、それは人々が無意識的に無視したいものであったり、その時代にはあまりにも常識的すぎて誰も言及していなくて現在では全くわからなくなってしまったものであったりするからである。

本研究が対象としているのも、まさにその時代には常識的すぎて特に言及されなかったため、現在それらの総体が見えなくなってしまった事実である。本研究はそれら小さな事実を配列していったらそれらの総体をもつ真実を浮かび上がらせようとしている。

また、本研究は対象群から数個の代表事例を抽出して一般化するのではなく、該当する対象を悉皆調査するところに意義がある。個々の教員養成大学・学部、そして全国教員養成大学・学部全体の三段階がどのような図（類型・数値的变化等）になるか、その全体像把握を試みるものである。平面に並べた大量データに可視化された形を読み取ろうとするのは、研究方法の節でも触れるが、金子一夫が「戦前中等学校図画教員勤務総覧的研究」にとってきた方法である<sup>28)</sup>。本研究はそれを参考にしている。

また、今後、美術教育学の学問的内容解明の基礎研究となり得る。つまり、美術教育学の学問的内容を明確にするためには、まず美術関係教官総覧が必要である。本研究によって、その総覧を示すことができる。教官総覧は、今後の美術教育学の学問的内容解明のため彼らの研究業績を検討する際の基礎データとなる。

さらに、本研究は教員養成大学・学部的美術関係教官の在職期間や担当分野等を明らかにする。それら教官に指導を受けた学生の多くはその地方の教職に就き、またそれら教官の多くは地方美術界の指導的立場にあった。それゆえ本研究は、将来的には戦後の地方美術教育史及び地方美術史研究の基礎資料としても寄与できる。

## 第四節 先行研究・研究史

### 1 本研究の関連研究領域と先行研究

本研究の直接的な先行研究、例えば戦後日本の美術教育学成立史、全国的な教員養成大学・学部における美術科教育教官一般の歴史研究は無い。各大学の大学史や美術講座の歴史、特定の美術教官の伝記は少なからずあるものの、それらは先行研究というより資料というべきものであり、第二章から第八章において調査資料として扱うことにする。本研究と対象が近い、分野が近接する等の関連研究領域の成果を先行研究として取り上げる。

関連研究領域として、まず美術教員史が人的配置の実態を調査検討する方法として参照される。次に美術教育学会史が美術教育学の人的制度と関連して展開していると考えられる。そして美術史が好事家の行為から意図的に科学へと確立していく過程を検討した研究は、人的制度の確立も検討しており、先行研究として取り上げる。

学校教育においては一般教科教育学研究史と各科教育学研究史が関連研究領域と想定できる。そして教員養成大学・学部の人的制度と人的配置が対象であるなら、それは教員養成制度史、さらに教育政策史が関連研究領域として想定される。

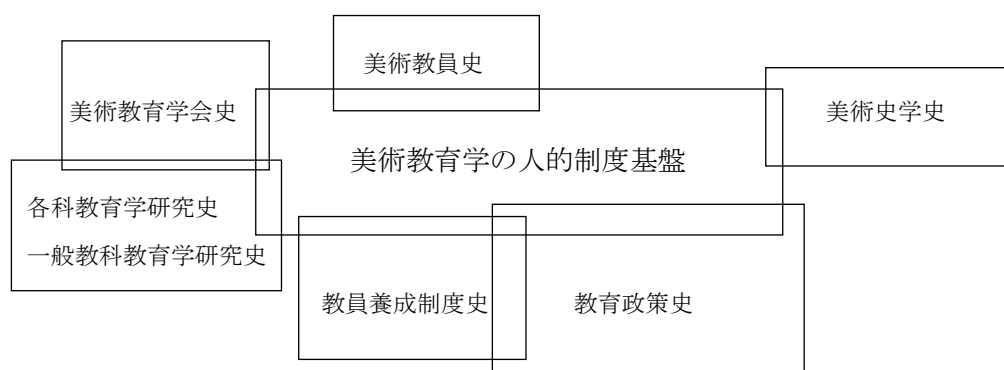


図2 本研究の関連研究領域



## 2 美術教員史

金子一夫は戦前を対象としてはいるが、全国図画教員勤務の一覧を作って研究している。本研究もこの方法を参考にして全国の教員養成大学・学部的美術講座の教員・教官の勤務一覧を作成して研究する。

- ・金子一夫「明治期中等学校図画教員総覧」（金子一夫『近代日本美術教育の研究 明治時代』（中央公論美術出版、平成4年）所収）
- ・同「大正・昭和戦前期の中等学校図画教員と出身美術学校の総覧的研究(1)～(5)」『茨城大学教育学部紀要(教育科学)』第61-64号、平成24-27年
- ・同「旧植民地の図画教員(一)～(八)」『一寸』第62-68号、平成27、28年
- ・同「旧植民地の図画教員 附論。旧植民地外の在外学校」『一寸』第69号、平成29年
- ・同「大正・昭和戦前期中等学校図画教員1 北海道(1)」『一寸』第70号、平成29年

金子の研究は、戦前の中等学校の図画教員勤務を網羅的に明らかにして、そこから美術教員養成、中等学校美術教育の変遷に進もうとするものであり、戦後の大学の美術科教育教官を主要対象とするものではない。金子は学校ごとに、図画教員の在職期間、専門、出身校等について整理して表を作成している。本研究では、在職期間、専門、出身校の整理は踏襲しつつ、師範学校・大学ごと、そして学科目ごとに整理する。

なお、戦後美術教育通史はいくつかあるが<sup>29)</sup>、美術教育学史に関する記述はなかった。

## 3 美術教育学会史

美術科教育学会二〇年史編纂委員会『美術科教育学会二〇年史』（美術科教育学会、平成11年）は、昭和54年3月の大学美術教科教育研究会発足から昭和57年の美術科教育学会発足を経て、平成10年までの学会活動を跡づけている。地方の教員養成大学・学部に大学院が設置され始めるなかで、美術教育学の実質的整備に向けて関わった多くの当事者が文章を書いている。雑然とした回想文集ではなく、確固とした学会史編集意図から学会発展を六時期に区分し、それぞれの時期の概括と関わった当事者の証言で構成している。本研究が人的制度と人的配置という外形的なものの研究であるのに対して、本書は関係者の意識の記述に満ちていて、本研究の肉付けに参照できる。

美術教育学の人的制度と人的配置の整備過程と美術科教育学会の展開は符合している。第一章で触れるが、昭和53年4月に学科目「美術科教育」が全国の大学に設置が完了し、教科教育専攻大学院も限定された大学から条件の整った大学から設置へと方針転換がなされ、昭和53年6月に愛知教育大学に大学院が設置された。昭和53年10月に新構想大学の兵庫教育大学と上越教育大学も開学した。ちょうどその年度の末である昭和54年3月に奇しくも美術科教育学会の前身である大学美術教科教育研究会が発足した。

これらの符合は、現在からの歴史的検討によって気づくことである。学科目「美術科教育」の設置と大学院設置方針の変更は直接関係するわけではない。大学美術教科教育研究会も、ある創設時会員によれば、学科目「美術科教育」所属教官が職責を果たすために研鑽しよう

として発足しただけで、学科目「美術科教育」の全国整備完了やその後の大学院設置という大きな流れは知るよしもなかった（平成 29 年 10 月 13 日聞き取り）。符合は「奇しくも」であるが、まったくの偶然ではなく、現在から見ると大きな歴史の流れであったことに気づく。当時の関係者はそれを知ることなく、無意識的にそれに沿って動いていた。それが歴史であろう。

#### 4 美術史学史

- ・太田智己『社会とつながる美術史学』（吉川弘文館、平成 27 年）

美術教育学に近い学問分野の成立過程を扱った研究であり、参考になった。

1920 年代から 50 年代にかけて美術史学は、好事家、ディレクタントの主観性・非論理性・感覚性を脱却し、研究者の客観性・論理性・実証性をもつ科学へ変貌した。それは、美術史学が学術研究を持続的・専門的・安定的に行うためのシステムであるアカデミズムを形成するためであった。それを踏まえて、美術史学アカデミズムと美術全集や美術展といった社会へとつながる事態の分析へ続ける。太田は、アカデミズム形成に果たしたものとして、学術インフラ整備（大学の美術史課程や研究機関整備とその人員定員化、学会の発足）、「科学」化志向、研究費受給体制を挙げる。

太田は美術史学の形成プロセスとして明快に「学術インフラの整備」を挙げた。本研究でも美術教育学の制度的な成立過程の解明に、この「インフラ」という比喻を援用する。美術史学が科学としての学になっていく過程は、美術教育学の学問的成立の過程を見るのに参照できよう。

#### 5 教員養成制度史

一般的な教員養成政策の歴史研究や教科教育学史に目を向けてみる。戦後日本教員養成史では以下の先行研究がある。

- ・山田昇『戦後教員養成史研究』（風間書房、平成 5 年）

戦後最初期から中央での政策画定について詳細な記述をしている。本研究が対象とする学科目の導入、教員養成大学・学部への大学院設置に関する政策決定について記述され、本研究の第一章において参照する。ただ、そのような政策が各大学においてどのように展開したかについては、東北大学・宮城教育大学という特殊事例の記述に止まる。本研究は新制国立大学の設置認可申請書等をはじめ全国各大学の資料を踏まえる。

- ・TEES 研究会『「大学における教員養成」の歴史的研究』（学文社、平成 13 年）

新制大学教育学部の発足から 1960 年代までの教育学部の問題を詳細に記述している。なお扱っているのがちょうど学科目制度導入直後あたりまでで、その後の大学院設置は論じられていない。同書の主題は教員養成の専門性の確立が一般教科の専門性（学問：アカデミズム）より後になってしまう現実の解明である。今日、教員養成の専門性に学問の専門性は必要ないという政策に再びなりつつあるなかで、本研究が美術教育学、すなわち専門性：

アカデミズムの人的制度成立過程の解明を主題にしているのと本書は共通の意識をもつと考えられる。つまり美術教育学は、大学・学部内では学問的他教科優位意識に対抗した面もあるが、より強くには美術講座内の美術専門優位、特に実技優位意識と対抗して自立してきた経緯がある。教育学部という枠内と美術講座という小枠内とで共通の事態があった。

## 6 教育政策史

・市川昭午『臨教審以後の教育政策』（教育開発研究所、平成7年）

昭和59年の臨時教育審議会開始から10年間の教育政策を検討している。学校教育全体の方向付けが、教育政策の市場まかせ、消費者優位の原則となっていること等が指摘されている。また、高等教育全般においてアカデミック・ディシプリンの崩壊が進んでいることも指摘されている。大学教育全般がそうであるならば、美術教育学のアカデミック・ディシプリンの構築がさらに困難になっているのも想定できる。

・ショッパ、レオナード・J.『日本の教育政策過程 1970～80年代教育改革の政治システム』小川正人監訳（三省堂、平成17年）英文原著は、1991年（平成3年）

日本の教育改革政策が政権だけではなく、文部省、そして外部団体と様々な諸力の総合として決定されている。政権の教育改革意向がしばしば文部省の抵抗で失敗することが指摘されている。美術教育学史において、このような諸力が働くことがあったのかは注意したい。

・桐田清秀「戦後日本教育政策の変遷—教育課程審議会答申とその背景—」『花園大学社会福祉学部研究紀要』第18号、平成22年、121-140頁

平成20年代までの教育課程審議会答申を中心に教育政策を考察し、現在、グローバリズムや環境問題が論議される時代にあって、学校教育が経済的要因で語られる段階を脱すべきことを指摘している。美術教育学に直接関係する記述はないが、社会状況の変化に対応することが求められることは注意したい。

## 7 教科教育学研究

既に「美術教育学の実質的な整備」で触れたように、昭和40年代までに文部省と日本教育大学協会によって教科教育学整備が推進された。昭和41年に広島大学に博士課程教科教育学科、さらに昭和53年に教育学部教科教育学科が発足している。昭和50年に日本教育大学協会が提案し、文部省の強い支援によって日本教科教育学会が結成された<sup>30)</sup>。その本部は先の広島大学教育学部教科教育学科であった。それ以前の昭和44年から静岡大学教育学部は「科学としての教科教育学」の共同研究を始めている<sup>31)</sup>。その後、大学や研究団体によって様々な教科教育学の確立に向けた試みが積み重ねられた。平成26年には教科教育学から分化した教科内容学会も設立された。ただ、いずれも教科教育学一般、あるいは美術科教育学に大きな影響を与えるものとはなっていない。

教科教育学一般と各教科教育学についての総合的研究書に以下のようなものがある。

- ・日本教育大学協会研究促進委員会『教科教育学研究』（同会、昭和 59 年）

昭和 39 年に発行された東京学芸大学教育研究所『教科教育研究の諸問題』（学芸図書）は、全教科的に教科教育学を扱った最初の書と思われる。それから 20 年後に発行された諸論考は教科教育学研究の認識の安定を示している。美術科教育に関しては村内哲二が「図画工作・美術科教育学の課題」と題する論考を寄せている。まだ美術科教育学史の記述はなく、昭和 57、58 年度の大学美術教育学会と美術科教育学会の学会誌の題目を紹介するに止まる。

「まえがき」では教科教育学の研究が遅れていることが述べられている。そして巻頭論文の蛭谷米司「教科教育学の成立と研究」の以下の書き出しの内容は歴史的証言として重要である。約 20 年で教科教育学研究は進んだが、大学の授業では教科専門が重視され、依然として教科教育学の専門性は意識されていないことを示している。

教科教育の研究は、いわゆる法令で規定する教科の内容の研究であればよいとされていることが多い。／そのために、教員養成の大学・学部などでも、例えば理科教育法の担当者が、自分がこれまで研究してきた自然科学の諸領域を一步も出ようとしないで、物理学、流体力学、ときには理論物理学といったように、また、生物学、細胞学、分子生物学などを研究の片手間に講じたり、あるいはまた、教授者の思いのままを学生に教授して終わるようなことも多いのである。

- ・広島大学教科教育学会『教科教育学Ⅰ—原理と方法—』（建帛社、昭和 61 年）

先に触れたように早くから教科教育学の確立に動き始めた広島大学の研究成果である。教科教育学と各科教育学の概要と歴史について総合的にまとめられている。戦後の教科教育研究の全貌がわかる。同書中で森分孝治は、ドイツの学問論を基礎とする教科教育学構想と、社会的必要と課題から進められるアメリカ的教科教育研究との対立があったものの、構想論よりも学問的レベルの研究を積み重ねていくことが学問を発展させていくと認識されたと言う（201 頁）。教科専門研究者に対して教科教育学構想論では対立するだけであるが、上記のような認識が教員養成大学・学部や教科専門研究者で教科教育担当者の意識に影響を与えていったと推測する。

同書で紹介されているわけではないが、著名な理科教育研究者小川正賢は京都大学農学部卒業であったが、昭和 56 年に茨城大学教育学部理科教育担当として赴任後に理科教育研究を始めている。

- ・兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科『教育実践学の構築—モデル論文の分析と理念型の提示を通して』（東京書籍、平成 18 年）

兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科が、教育実践学（教科実践学）として臨床教育学の構想について触れるとともに、各教科の修了論文をモデル論文として分析している。美術科教育実践学の一修了論文が西村俊夫によって分析されている。美術科教育学の深化を示すものである。ただ、美術科教育学の歴史的検討はなされていない。

## 8 各科教育学研究史

美術教育学、そして美術科教育学のように、普通教育学校の各教科内容に対応した教育学、そして教科教育学が考えられる。それらの歴史は美術教育学・美術科教育学の特殊性を考える上で参考にできる。教科によって早い遅いはあるが、どの教科教育学も美術科教育学と同じように師範学校教官の新制国立教員養成大学・学部への移行、学科目整備、教科教育専攻大学院の設置という段階を経て、該当教科教育学の人的制度が成立していく。

後に述べる社会科教育学もそうであったが、理科教育学も、戦後すぐの昭和 27 年に日本理科教育学会が発足したものの（前身の関東教育大学理科教育学会は昭和 26 年発足）、教員養成大学・学部はその専門家が着任するのはずっと後であったことは、先に見た蛭谷米司の言葉にある。音楽・美術・体育といった実技関係の戦前の最高学府は東京美術学校等の専門学校であったので、新制大学への教官移行は比較的容易であったものの教科教育学のディシプリンの発生は困難であったと言える。それに対して、戦前から旧制大学で学問が確立していて学会もあり、戦後には大学院設置もなされていた分野の教科専門がある教科の教科教育学は、それだけ新制大学への人的移行や人的配置は大変であったが、ディシプリンの発生条件はよかったと言える。

先の広島大学教科教育学研究会『教科教育学 I ー原理と方法ー』（建帛社、昭和 61 年）にも各科教育学研究の歴史が収載されているが、ここでは各教科単独の著書を見ておく。それらでは各科の教科教育学の人的制度や実質的内容の成立というより、関係学会の成立として語られている。それらの著書では関心が教科教育学の実質的内容の成立であり、それを裏付けるのが関係学会の成立という構図になっている。

### 国語

・野地潤家『国語教育学史』（共文社、昭和 49 年）

野地によれば、戦前の昭和 9 年に国語教育学会が創立されていた。そして、昭和 25 年 9 月に全国大学国語教育学会が発足した。その中心にいたのが西尾実である。西尾はそれより前の昭和 24 年 4 月の雑誌『実践国語』に「国語教育学樹立の必要と可能」を発表していた。そこで新制大学の国語教育の制度的側面に触れている。「国語科教育法」及び国語教育の講座が設けられることになり、国語教育学の制度的条件がそなわってきた。国語教育関係者が少ないわけではないのに、その講座担任者は必ずしもそういう方面に求められないで、国語学者や国文学者によって間に合わせようとしている。国語教育関係者だけでなく、国語国文学者も国語教育学を樹立すべき意図と責任をもってこれに当るべきであると述べている。昭和 30 年には日本国語教育学会も発足した。美術教育学に比べると、戦後すぐに国語教育学が早くから提唱され、国語教育講座教官が国語教育学を樹立すべきことが、学科目設置前から述べられていた。

## 社会

・東京教育大学社会科教育研究会『社会科教育の本質』（明治図書、昭和 46 年）及び内海巖『社会認識教育の理論と実践』（葵書房、昭和 46 年）

昭和 26 年に東京教育大学を基盤とする日本社会科教育学会、昭和 27 年に広島大学を基盤とする全国社会科教育学会が発足した。学会は戦後すぐに発足したものの、教員養成大学・学部とその専門家が着任するのはずっと後であった。

## 算数・数学

数学教育研究は戦前からの伝統があり、既然大正 8 年に日本中等教育数学会が設立され、学会誌『日本中等数学教育学会誌』を発行した。昭和 18 年には日本数学教育会と改称した。戦後も昭和 21 年に総会が再開され、昭和 23 年からは全国算数数学教育研究大会も併催される。学会誌発行も昭和 21 年から再開し、昭和 22 年に『数学教育』と改称し、さらに昭和 27 年に『算数教育』、昭和 36 年には数学教育学に特化した『数学教育学論究』を発行誌に加えた。そして会の名称を数学教育学会と改称して現在に至っている<sup>32)</sup>。

以上を見ると順調に進んできたように見えるが、占領期には G. H. Q. の民間情報教育局の指導によって学校教育では、戦前の「数理思想」は否定され、生活単元的教育へ変更を余儀なくされている。それに対して遠山啓などが主宰する民間教育研究団体が批判する状況があった<sup>33)</sup>。教育政策、数学教育学会、民間教育研究団体の主張が緊張関係にあって、数学科教育学を形作っていると言える。

## 理科

昭和 26 年 6 月に関東教育大学理科教育学会が発足し、関東地区における理科教育に関係する教員養成大学教官の研究の交換を行い、『理科教育概説』（誠文堂）を刊行した<sup>34)</sup>。昭和 26 年 11 月には日本教育大学協会第 2 部会の部門に参加した。さらに昭和 27 年 2 月に日本理科教育学会が設立され、東京教育大学及び広島大学で開かれた IFEL (The Institute for Educational Leadership) 理科教育講座の参加研究者を甲種会員、一般研究者を乙種会員として発足した。昭和 27 年 9 月より機関誌『理科の教育』を東洋館出版社より発刊、昭和 27 年 10 月 18 日、会員種別を廃し、日本教育大学協会からも独立し、学会の組織を拡大し、一般化して現在に至っている。

## 体育

・「1 体育科教育法から体育科教育学への歩み」「2 体育科教育学の成立」竹田清彦・高橋健夫・岡出美則『体育科教育学の探究—体育授業づくりの基礎理論』（大修館書店、平成 9 年）2-5 頁

昭和 47 年「体育科教育学の基本構想」をテーマとするシンポジウムが開催され、昭和 53 年に日本体育学会体育方法専門分科会にあった体育科教育に関する研究領域を「体育科教育学専門分科会」として分離・独立させることが総会で承認された。平成 7 年にはこれを母胎に体育科教育学会が結成された。最近では、スポーツ教育学が言われている。

## 第五節 問題の所在

本研究の問題の所在、すなわち解明すべき目標は、戦後日本の教員養成大学・学部で美術教育学を保証する人的制度と実際の人的配置が三段階で進んだとして、①それはどのように展開したか、②全国的推移はどのようなになるか、③個別事例の詳細はどのようなものになるか、④全国美術科教育教官の数値的・類型的把握はどのようなになるか、である。以下に各問題について記す。

### 1 美術教育学に関する人的制度はどのように展開したか

教員養成大学・学部的美術教育学に関する人的制度は、三段階で整備されたとして、各段階で解明すべき問題は次のようになる。第一段階では、師範学校から新制国立大学への美術関係教官の移行はどのようであったか。美術科教育という専門は制度的に明確になっていたか。第二段階では、昭和39年の学科目制度の発足と各大学における学科目の整備過程、特に学科目「美術科教育」設置の進行はどのようであったか。第三段階では、大学院教育学研究科と美術教育専攻の設置過程の実際はどのようであったか。すなわち、各大学の意向と設置の進行はどのようであったか。

### 2 美術教育学の人的配置の全国的推移はどのようなになるか

三段階で美術教育学の人的制度と人的配置は整備されたとしても、地方及び大学によって整備過程は随分違っている。そこで個々の教員養成大学・学部で、具体的にどのような人的制度の整備過程になったか、学科目「美術科教育」設置とそれへの人的配置は同時になされたか、さらにどのような人材が学科目及び大学院の美術科教育教官として配置されていたかを網羅的に見ておきたい。厩大な分量になるので、便宜的に北から地方に区分して提示するのがよいであろう。

### 3 美術教育学の人的配置の個別事例の詳細はどのようなものになるか

本研究は美術教育学関係の人的制度を検討するが、美術専門教官との関係もあり、各大学での人的配置の複雑な過程の実際は興味深い問題である。本研究は全国の教員養成大学・学部を悉皆調査するものの、個々の教員養成大学・学部での人的配置過程の実際のすべてを詳細に示すことは不可能である。そこで特定大学を事例として美術関係の人的配置の詳細がどのようであったかを検討したい。

### 4 全国美術科教育教官の数値的・類型的把握はどのようなになるか

全国の教員養成大学・学部配置された美術科教育教官数はどれくらいになるのか。そして彼らはどのように所属を決定したのか。彼らの修学校等の出身母胎は何であったのか。それらを数値として集計し、その変化を可視化する試みは未だされていない。この数値的

実証化と可視化ができれば、美術教育学の人的制度基盤の成立過程を基本的な像として示せたことになる。とはいえ数値に還元して集計し、それを可視化する認識方法とともに、そこからこぼれ落ちてしまう要素も検討したい。美術科教育担当体制のさまざまな形すなわちその類型、教官の所属決定のさまざまな形すなわちその類型はどのようなものであったかを明らかにする。さらに数値的・類型的把握では見えにくい具体的な人的種々相も検討する。

以上の四問題を各章で解決することで、戦後の教員養成政策が展開していく過程とそれに個々の教員養成大学・学部がどのように対応したかの過程が明らかとなり、美術教育学の人的制度基盤の成立過程を立体的な像として提示できよう。

## 第六節 対象範囲

前述したように、美術教育学の制度には、教員養成大学・学部の人的制度、美術教育関連学会等、様々あり得る。教員養成大学・学部の美術教育学の人的制度は、様々な勢力の意向が反映するとはいえ、直接的には国の教育政策によって実現する決まり事である。そして全国の教員養成大学・学部に適用されるだけに、美術教育学の消長に大きな影響をもたらす。それゆえ美術教育学の人的制度基盤の最も大きなものに教員養成大学・学部の美術教育学関係人的制度があると捉え、これを研究対象とする。

既に三時期区分に関して述べたように、師範学校の国立教員養成大学・学部への移行期から、学科目の設置を経て教科教育専攻大学院の設置までの時期を対象とする。具体的には、官立師範学校が新制国立大学に転換した昭和 24 年前後から、大学院美術教育専攻の設置が全国的に完了する平成 11 年までとする。ただ、大学院美術教育専攻設置時期は大学によって様々であるので、教官勤務表に関しては大正 15 年度から平成 15 年度までを一律に表示範囲とする。

研究対象は全国の国立教員養成大学・学部の美術講座とする。教員養成大学・学部ではない美術専門大学・学部での教員養成課程は、公立・私立大学も含めて今回は対象外とする。教員養成政策の主要な場はやはり国立の教員養成大学・学部であり、様々な問題はそこに集中していると考えられるからである。また新構想大学の兵庫教育大学、上越教育大学、鳴門教育大学に関しても、最初から教科教育を中心とする大学として設立されたため、成立過程の解明を目的とする本研究には馴染まないのが対象外とする。

## 第七節 研究方法

1 美術教育学は内容の実質的成立より前に人的制度と人的配置の整備が先んじたという立場に立つ。これは証明する以前にほとんどの関係者が認識する事実である。

2 既に何度も述べたが、①師範学校の教員養成大学・学部への移行、②学科目整備、③



大学院美術教育専攻設置という三段階で、美術教育学の人的制度と人的配置の成立過程を捉える。

3 全国の各教員養成大学・学部の人配置の調査を行い、教官勤務表を作成して可視化する。全国の教員養成大学・学部がある年度になったら一斉に変化したわけではなく、三時期区分内で変化していったはずである。その変化を確認する。

4 前述のように教科教育学に関する政策と、それに応える教員養成大学・学部の関係は、単純ではなく様々な要素が絡み合っていて、大学ごとに事情が異なる。同じ国立大学でも、それぞれ独特の文化・歴史を形成していて、驚くほど大学によって人的整備過程は違っている。個々に文化・歴史を形成している各大学における成立過程を検討する。なお、人の配置に関しては、制度と実質が異なる例が多々ある。外的要因である定員純増、内的要因である講座間の定員の配分等、外部からはなかなか知り得ない事情、公の記録に残りにくい事情等、複雑かつデリケートな問題が絡むことがある。それゆえこの件に関して本研究では、明らかとなった場合、記すことが可能な場合のみ触れることとする。

5 美術科教育教官がどのような大学等で養成されたのかを調査する。各大学の美術科教育教官の修学校を調べて、美術教育学の制度への人材養成的側面を明らかにする。

## 第八節 本研究の構成と各章の要点

問題の所在で挙げた四問題は、順に以下の第一章から第九章に対応させて解決する。

### 第一章 美術教育学の人的制度基盤の成立過程の概観

まず、戦後の教員養成大学・学部に関わる教育政策の展開を概略的に検討する。戦後の教員養成政策の原則を決定した教育刷新委員会での議論、講座制と学科目制の議論を確認した後、昭和 30 年代の目的大学化政策及び学科目制度、昭和 40 年代からの大学院設置政策等を検討する。

次に、三時期区分に対応させて、美術教育学の人的制度基盤の成立過程を検討する。

1. 師範学校から教員養成大学・学部への美術関係教官の移行期：国立公文書館蔵「大学設置認可申請書」を参照し、各新制国立大学における教育学部と学芸大学・学部の名称選択、師範学校教官の新制大学への移行計画を検討する。特に定員化された新制大学教官への師範学校教官の移行に関して、大学ではなく専門学校である東京美術学校と東京高等師範図画手工専修科出身の多い美術関係教官の場合、さらに専門学校出身でもない文検出身の教官の場合、どのように遇されたかを検討する。美術教育学の意識がまだ無い時点では教科専門業績が評価された可能性、また学閥をめぐる角逐の可能性も検討する。

2. 学科目の設置期：学科目はどのように決定されたか、また学科目制度に対する大学の反応を検討する。文部省から示された学科目構成は大学によって異なっていた。学科目制度改正によって学科目構成は順次改定されていく。その過程を数値的に明らかにし、グラフに可視化する。特に学科目「美術科教育」の全国の大学への設置過程を見る。

3. 教科教育専攻大学院の設置期：東京学芸大学への大学院美術教育専攻設置は昭和 43 年である。そこから、平成 11 年の全国設置完了までの設置数の変化をグラフにする。昭和 50 年代の大学院美術教育専攻は 1 年に 1 校程度の設置であったのに、平成年代に入ると設置件数が急増する。この方針転換の要因を検討する。また、大学院設置に対する大学による温度差にも注意する。

## 第二章 各教員養成大学・学部における美術教育学の人的制度基盤の成立過程—北海道・東北地方—

第二章から第七章で、美術教育学の人的制度基盤が、各教員養成大学・学部でどのように成立していったのかを見ていく。大学ごとの美術教官勤務表を作成し、その表から見えてくる実相の概略を三時期区分に沿って以下の観点で検討する。1. 師範学校から教員養成大学・学部への移行期：①美術関係教官の師範学校から大学への移行状況。②美術科教育（図画工作科教育）を専門とする教官、あるいは専門に担当する教官の有無。③資料が見つければ、美術科教育関係授業（美術科教育法）の担当者。2. 学科目の設置と具体的人員の配置：①昭和 39 年学科目制度発足時に示された学科目の種類。そして学科目「美術科教育」が置かれた時期。②学科目「美術科教育」に人的配置がなされた時期。③学科目「美術科教育」所属教官の特定。3. 大学院美術教育専攻の設置：①大学院教育学研究科の設置時期。②大学院美術教育専攻設置の時期。③大学院美術教育専攻設置時の分野「美術科教育」教官の特定。

北海道地方は北海道教育大学五分校で構成されている。各分校でどのように師範学校からの美術関係教官の移行がなされ、学科目「美術科教育」設置と教官充足がなされたのか、そして大学院美術教育専攻設置の進行過程を見る。

東北地方には規模の大きな総合大学と旧帝大の東北大学がある。特に東北大学教育学部に宮城師範学校から美術関係教官はどのように移行したかを注意する。

## 第三章 同 —関東地方—

関東地方には教員養成大学・学部の中心である東京学芸大学があり、また比較的規模の大きな大学が揃っている。戦後、文部省の美術教育政策への対応を担ってきたのが、関東地方の教員養成大学・学部の美術関係教官である。東京学芸大学では美術科教育専門の明確化や大学院設置が早かったことに注意する。

## 第四章 同 —中部地方—

中部地方は東海と北陸を含み、様々な地域差がある。また、金沢と名古屋という文化的中心も二つある。このような地方での、師範学校からの美術関係教官移行、学科目「美術科教育」や大学院美術教育専攻の設置進行過程を見る。特に規模の大きい愛知学芸大学への「教科教育教室」の設置、大学院の設置に関しては注意したい。

## 第五章 同 一近畿地方―

近畿地方には、東京学芸大学と教員養成大学の双璧をなす大阪学芸大学がある。また、近畿地方には大規模大学もあるが、比較的小規模の教員養成大学がいくつもある。このような地方での、師範学校からの美術関係教官移行、学科目「美術科教育」や大学院美術教育専攻の設置進行過程を見る。

## 第六章 同 一中国・四国地方―

中国地方には岡山大学と広島大学という大規模総合大学と、小規模大学がある。このような地方での、師範学校からの美術関係教官移行、学科目「美術科教育」や大学院美術教育専攻の設置進行過程を見る。特別教科(美術・工芸)教員養成課程の設置された岡山大学での学科目や大学院の設置進行過程にも注意したい。

四国地方には比較的小規模大学がある。そこでの師範学校から美術関係教官移行、学科目「美術科教育」や大学院美術教育専攻の設置進行過程を見る。

## 第七章 同 一九州・沖縄地方―

九州・沖縄地方には一つの教員養成大学と様々な規模の総合大学がある。このような地方での、師範学校からの美術関係教官の移行、学科目「美術科教育」や大学院美術教育専攻の設置進行過程を見る。特別教科(美術・工芸)教員養成課程の設置された佐賀大学での学科目や大学院の設置進行過程にも注意したい。

## 第八章 教員養成大学・学部における美術教育学の人的制度基盤の成立過程の実相―二事例―

それぞれの大学の美術教育学の人的制度基盤の成立過程の詳細すべてを収録することはできないので、本章で地方小規模大学の事例として島根大学、特別教科(美術・工芸)教員養成課程の置かれた大学の事例として岡山大学を代表として取り上げる。

島根大学は、小規模の地域密着型の大学である。師範学校から大学教育学部へ移行した美術関係教官の多くは地元の島根(県)師範学校卒業生や島根県出身者であることが予想される。学科目「美術科教育」も大学院美術教育専攻も設置は早くはなさそうである。このような過程は地方大学に多いと考えられる。

それに対して岡山大学は、中国・四国地方の中心であろうとした大学である。特別教科(美術・工芸)教員養成課程の設置も実現した。大学発足当時の教員養成大学・学部では教官の専門性は未分化であることが多かった。それに対して、特別教科(美術・工芸)教員養成課程の設置によって教官の美術専門が明確化した岡山大学では、同時に美術科教育の専門性も明確化したのか、またその後の大学院設置も早かったのか注意する。

## 第九章 美術科教育教官の全体像

全国美術科教育教官一覧を作成し、全国の美術科教育教官とその勤務を網羅的に把握する。美術科教育教官の推移を、1. 人数、2. 学科目・大学院設置に伴う教官の所属決定の類型、3. 出身母胎、4. 自校出身者という四観点で分析する。そして概括的・数値的実証によって美術教育学の人的制度基盤の成立過程の基本的像を捉える。さらに概括的・数値的実証では、こぼれ落ちてしまう個々の大学や教官の種々相を三時期区分にもとづき検討する。

以上の九つの章を通して四問題を解決し、美術教育学の人的制度基盤の成立過程を立体的な像として描く。

### 註

- 1) 美術科教育学会美術教育史研究部会「美術教育学の制度的基盤の成立過程」『第33回美術科教育学会富山大会概要集』81頁、平成23年3月27日発表。美術科教育学会美術教育史研究部会『美術教育史研究部会通信』第37号、平成23年5月。
- 2) 美術科教育学会美術教育史研究部会「美術教育学の制度的基盤の成立過程」前掲誌。
- 3) 美術科教育学会二〇年史編纂委員会『美術科教育学会二〇年史』（美術科教育学会、平成11年）。
- 4) 論文発表：有田洋子「美術教育学の制度的基盤の成立過程—島根大学における人的制度と配置—」『島根大学教育学部紀要』第45巻、平成23年、47-55頁。同「美術教育学の制度的基盤の成立過程—岡山大学における人的制度と配置—」前掲誌、第46巻、平成24年、91-100頁。金子一夫・有田洋子「美術教育学の制度的基盤の成立過程—東京芸術大学の場合—」『茨城大学教育学部紀要』第62号、平成24年、123-135頁。有田洋子「美術教育学の制度的基盤の成立過程—山口大学における人的制度と配置—」『島根大学教育学部紀要』第47巻、平成25年、61-69頁。同「美術教育学の制度的基盤の成立過程—鳥取大学における人的制度と配置—」前掲誌、第48巻、平成26年、27-38頁。  
口頭発表：有田洋子「美術教育学の制度的基盤の成立過程—茨城大学・島根大学の場合」（美術科教育学会美術教育史研究部会「美術教育学の制度的基盤の成立過程」）第33回美術科教育学会富山大会概要集』前掲誌。同「美術教育学の制度的基盤の成立過程—島根大学・岡山大学の場合」日本教育大学協会全国美術部門協議会平成23年度中国地区研究発表会、平成23年6月25日発表。同「美術教育学の制度的基盤の成立過程—大阪教育大学・岡山大学の場合」『第50回大学美術教育学会宮城大会宮城教育大学発表概要集』48頁、平成23年9月24日発表。有田洋子・金子一夫「美術教育学の

成立過程—東京芸術大学の場合」『第 34 回美術科教育学会新潟大会新潟大学発表概要集』102 頁、平成 24 年 3 月 28 日発表。有田洋子「美術教育学の制度的基盤の成立過程—関西の教員養成大学・学部の場合—」（美術科教育学会美術教育史研究部会「地方美術教育史の諸相Ⅱ」）『美術科教育学会第 36 回奈良大会発表概要集』23 頁、平成 26 年 4 月 20 日発表。同「美術教育学の制度的基盤の成立過程—九州地方—」『美術科教育学会第 38 回大阪大会発表概要集』24 頁、平成 28 年 3 月 19 日発表。同「美術教育学の制度的基盤の成立過程—東海地方—」『美術科教育学会第 39 回静岡大会発表概要集』17 頁、平成 29 年 3 月 27 日発表。

- 5) 有田洋子「研究ノート 美術教育史研究部会から -3- 戦後の教員養成大学・学部における美術教育学の制度的基盤の成立過程」『美術科教育学会通信』No. 85、平成 26 年 2 月、19-20 頁。
- 6) 立原慶一「第 32 回美術科教育学会仙台大会のご案内【最終案内】」『美術科教育学会通信』No. 73、平成 22 年 2 月、1 頁も、そのことを指摘する。
- 7) 金子一夫「美術教育研究の歴史的課題」『美術科教育学会通信』No. 82、平成 25 年 2 月、1-2 頁。永守基樹「代表理事就任にあたって—運営の基調と体制—」同誌、No. 83、平成 25 年 6 月、1-2 頁。同「2019 年問題—美術教育学の曲がり角」同誌、No. 91、平成 28 年 2 月、1-2 頁。
- 8) 永守基樹、前掲誌。
- 9) 藤原智也「ポスト・デモクラシーにおける美術科教育の正統性の問題」『美術教育学』第 37 号、平成 28 年、387-400 頁。
- 10) 金子一夫、前掲誌。
- 11) 金子一夫「美術教育方法論における超越的外部の必然性—『無規定的過程』その他」『美術教育学』第 37 号、平成 28 年、207-218 頁。同「現代美術教育学研究の問題点とその解決—贈与交換論による美術教育の再定義を通して」前掲誌、第 38 号、平成 29 年、179-191 頁。
- 12) 金子一夫『美術科教育の方法論と歴史〔新訂増補〕』（中央公論美術出版、平成 15 年）207 頁。
- 13) 宮脇理『工藝による教育の研究』（建帛社、平成 5 年）577-634 頁に、資料 13 として工作科教育部会の研究集録の重要部分が復刻されている。また学会発表として、佐藤昌彦・宮脇理「IFEL (The Institute For Educational Leadership) への眼差し—ものづくりの重要性、その認識を深めるための一路程として—」『第 33 回美術科教育学会富山大会研究発表概要集』35 頁、平成 23 年 3 月 26 日発表がある。
- 14) 『第九回 後期 教育指導者講習研究集録 図画科教育』（昭和 27 年 12 月序）。
- 15) 杉山明男「教員養成のカリキュラム」『岩波講座 現代教育学 18 教師』（岩波書店、昭和 36 年）151 頁。
- 16) 『第 1 回美術科教育研究集会報告書』昭和 44 年所収、文部省教職員養成課長宮地寛一

の「主催者挨拶」。

- 17) 三枝康高「科学としての教科教育学」『現代教育科学』第 143 号、昭和 44 年、82-83 頁。
- 18) 教員免許更新制導入をめぐる議論に関しては、国立国会図書館調査及び立法考査局文教科学技術課（瀬上翔）「教員免許・養成制度をめぐる議論—時代に対応した教員資格制度の構築—」『調査と情報—ISSUE BRIEF—』No.885、平成 27 年、に詳しい。
- 19) ショッパ、レオナード・J. 『日本の教育政策過程 1970～80 年代教育改革の政治システム』小川正人監訳（三省堂、平成 17 年）英文原著は、1991 年（平成 3 年）5 頁。金子一夫「美術教育研究の歴史的課題」『美術科教育学会通信』前掲誌。
- 20) 山田昇『戦後日本教員養成史』（風間書房、平成 5 年）。
- 21) 金子一夫『美術科教育の方法論と歴史〔新訂増補〕』前掲書、37 頁を参照して筆者が定義した。
- 22) 学としての定義は、太田智己『社会とつながる美術史学』（吉川弘文館、平成 27 年）30-37 頁を参照した。
- 23) 宇佐美寛『教育哲学』（東信堂、平成 23 年）95 頁。
- 24) 同上、97 頁。
- 25) 金子一夫「美術教育史の意義と方法」『アート・エデュケーション』vol.3 No.3、平成 3 年 5 月、7 頁。
- 26) 宮脇理「あとがきにかえて」『工藝による教育の研究』前掲書、638 頁。
- 27) 金子一夫「美術教育史の意義と方法」前掲誌、10 頁。
- 28) 金子一夫の「明治期中等学校図画教員総覧」（金子一夫『近代日本美術教育史の研究 明治時代』（中央公論美術出版、平成 4 年）所収）、「大正・昭和戦前期の中等学校図画教員と出身美術学校の総覧的研究(1)～(5)」『茨城大学教育学部紀要(教育科学)』第 61-64 号、平成 24-27 年。最新のものとしては、「大正・昭和戦前期中等学校図画教員 1 北海道(1)」『一寸』第 70 号、平成 29 年、49-65 頁。
- 29) 戦後日本の美術教育史の記述があるのは以下の書籍である。
  - ・山形寛『日本美術教育史』（黎明書房、昭和 42 年）第 6 章  
昭和 21～39 年が対象となっている。発行が昭和 42 年ということもあって昭和 39 年までを対象範囲としている。内容としては、図画工作科の出現、昭和 22、26、31、33 年の学習指導要領、検定教科書、研究団体について記されている。文部省に在職していた体験を交えた生々しい記述が特徴である。
  - ・中村亨『日本美術教育の変遷 教科書・文献による体系』（日本文教出版、昭和 54 年）  
昭和 20～昭和 52 年が対象となっている。副題の通り、教科書・文献を並べて解説している。学習指導要領を中心に記述されている。
  - ・西本繁夫『日本の美術教育発達史』（明治図書出版、平成 3 年）

昭和 21～平成元年が対象となっている。戦後だけを扱っている。内容としては、学習指導要領、検定教科書、研究団体の活動を生起順に特徴を記述している。西日本美術教育連盟、全大阪少年美術展について詳しい記述が特徴である。

- ・橋本泰幸『日本の美術教育—模倣から創造への展開』（明治図書、平成 6 年）  
全 9 章中の第 9 章が戦後美術教育史である。昭和 22～52 年が対象となっている。学習指導要領の変遷、民間教育運動団体、キミ子式や酒井式の提唱について簡単に記述されている。

- ・金子一夫『美術科教育の方法論と歴史』（中央公論美術出版、平成 10 年）  
第 4 部第 8～12 章が戦後日本美術教育史である。昭和 20～平成 9 年が対象となっている。戦後美術教育史に関して記述分量、時期区分、実証性などにおいて、戦後美術教育史記述に初めて歴史記述方法を自覚した研究である。ただ、美術教育研究の展開に関する記述はあるが、美術教育学に特化した記述はない。

- ・金子一夫『美術科教育の方法論と歴史〔新訂増補〕』（中央公論美術出版、平成 15 年）  
第 4 部第 8～13 章が戦後日本美術教育史である。昭和 20～平成 19 年が対象となっている。上記の増補版である。

- 30) 日本教育大学協会研究促進委員会『教科教育学研究』（日本教育大学協会研究促進委員会、昭和 59 年）21 頁。

- 31) 三枝康高、前掲書、77-85 頁。

- 32) 日本数学教育学会はホームページ <http://www.sme.or.jp/about/history/>（平成 29 年 10 月 20 日確認）に以下のような「沿革」を載せている。

1919（大正 8 年）、本会の前身である日本中等教育数学会が創立される。日本中等教育数学会は、中等教育における数学とその教授法に関する事項を研究し、その進歩改善を図ることを目的に設立される。毎年、総会を開催し、会員が一堂に会して研究協議を行うとともに、学会誌『日本中等教育数学会雑誌』を年 4、5 回発行し、会員に配布している。また、文部省（当時）へ数学教育に関する建議を行ったり、文部省からの諮問への答申を行ったりしている。1928（昭和 3）年には、社団法人となり（旧法）、社団法人日本中等教育数学会として活動する。1943（昭和 18）年には、かねてより懸案となっていた会の名称の変更が決議され、社団法人日本数学教育会と改称される。戦中・終戦直後においては、総会の開催や学会誌の発行ができない時期もあったが、1946（昭和 21）年には総会が再開され、1948（昭和 23）年の第 30 回総会からは毎年、全国算数数学教育研究大会と合わせて開催されるようになる。この年、定款も新しく改定され、戦後の新制度の下での再出発がなされる。学会誌も 1946（昭和 21）年から発行が再開され、翌 1947（昭和 22）年には雑誌名を『数学教育』と改めて『数学教育』第 1 巻（通巻第 29 巻）が発行される。また、1952（昭和 27）年には、初等教育における算数を対象とした新しい学会誌『算数教育』の発行も始まる。

1961（昭和 36）年には、数学教育の学術的研究、基礎的研究を専門とした学会誌『数

学教育学論究』の発行が新たに加えられ、1966（昭和 41）年から、学術的な研究論文の発表と討議を目的とした数学教育論文発表会が始まる。こうした学会の学術的な発展を鑑み、1969（昭和 44）年には、会の名称が再び変更され、社団法人日本数学教育学会と改称される。1974（昭和 49）年と 1983（昭和 58）年には、数学教育論文発表会は ICMI（International Commission on Mathematical Instruction）国際会議と合わせて開催され、2000（平成 12）年には ICME-9（9th International Congress on Mathematical Education）を開催している。2014（平成 26）年には法改正に伴い、公益法人の認定を受け、公益社団法人日本数学教育学会として、今日に至る。

また、数学教育学会ホームページ (<http://mes-j.or.jp/>（平成 29 年 10 月 20 日確認））は、同会の概要を以下のように説明している。

数学教育学会は、1959 年に発足し、数理科学と数学教育の学理と実践にもとづく総合的研究を通じて、すべての教育現場におけるより良い数学教育の実現を目指しそのために有用な活動を展開することを目的とする、日本学術会議に登録された協力学術研究団体です。

- 33) 蒔苗直道「戦後数学教育の指針『はじめのことば』に関する一考察」『筑波数学教育研究』第 18 号、平成 11 年、35-44 頁。
- 34) 日本理科教育学会「日本理科教育学会のこれまでの歩みについて」（日本理科教育学会ホームページ <http://www.sjst.jp/about/history/>（平成 29 年 10 月 20 日確認））。



## 第一章 美術教育学の人的制度基盤の成立過程の概観

### 第一節 本章の構成

美術教育学の人的制度基盤の成立過程について本研究が設定する三時期に対応して、第二節：戦後の教員養成大学・学部に関わる教育政策の展開、第三節：師範学校から新制国立教員養成大学・学部への美術関係教官の移行、第四節：学科目設置、第五節：教科教育専攻大学院の設置の順に検討する。

第二節では昭和 20 年代の戦後の教員養成の原則の確立、昭和 30 年代の政策転換、昭和 40 年代の教員養成の高度化として大学院設置と教育政策が転換していき、それに各大学や大学間組織が抵抗しながら推移していく事態を概観する。第三節では師範学校から新制国立大学への教官移行、特に美術関係教官の移行を検討する。その移行は大学によって様々であり例外もあるが、他教科に比べれば美術関係教官の移行は比較的円滑に進んだことを確認する。第四節では学科目設置がどのように進んだかを検討する。まず文部省の提案に「大学の自治」の観点から猛烈な抵抗をした大学があったこと、美術関係学科目中「美術科教育」が最初最も設置が少なかったのに昭和 53 年までに直線的に増加したことを確認する。第五節では教科教育専攻大学院の設置は、一部の大学あるいは新構想大学に設置するのが文部省の計画であったが、国立大学協会が大学に格差を設ける政策として強く反対したこと、その結果、全国の教員養成大学・学部設置されたこと、その設置速度の変化等を確認する。

### 第二節 戦後の教員養成大学・学部に関わる教育政策の展開

#### 1 重要な大学政策決定の契機

山田昇『戦後日本教員養成史研究』（平成 5 年）と TEES 研究会『「大学における教員養成」の歴史的研究』（平成 13 年）等によれば、教員養成大学・学部に関わる重要な教育政策の決定の契機は以下の三つとなる。

##### 1. 教育刷新委員会

昭和 21 年 12 月の第 17 回総会で「教員の養成は、総合大学及び単科大学において、教育学科を置いてこれを行うこと」とし、大学における教員養成が確認された。その後の教育刷新委員会で教養重視（昭和 22 年 4 月）、教員免許の開放制（昭和 22 年 4 月）、一県一教員養成大学・学部の設置（昭和 23 年 10 月）といった戦後教員養成の基本原則が決定され、それが教育政策として確定していく。

2. 昭和 33 年 7 月 28 日第 16 回中央教育審議会答申「教員養成制度の改善方策について」  
「教員養成を目的とする大学における養成」、「教員の養成は、国の定める基準によって大学において行う」という教員養成のための整備と教育基準を確立した。
3. 昭和 46 年 6 月中央教育審議会答申「今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策について」  
大学院設置条項、すなわち教員のうち、高度の専門性をもつ者に対し、特別の地位と給与を与える制度を創設するという内容が示された。さらに上記中教審答申を受けて昭和 47 年 7 月教育職員養成審議会建議「教員養成の改善方策について」で新構想大学の提案、すなわち既存の教員養成大学・学部大学院を設置するのではなく、新たに「創設」とした。それに対して国立大学協会が猛反発をした結果、新構想大学以外にも大学院を設置することになった。

## 2 大学における教員養成の体制—講座制ではなく学科目制

前述のように昭和 21 年教育刷新委員会第 17 回総会において、大学における教員養成が確認された。その後、教員免許の開放性、教養重視という戦後教員養成の基本原則が確立していく。さらに昭和 22 年大学基準協会は「大学基準」を制定し「大学はその目的、使命を達成するために必要な講座又はこれに代る適当な制度を設けなければならない」とした。

昭和 29 年 9 月「国立大学の講座に関する省令」で講座は「大学院に置かれる研究科の基礎となるものとする」とされた。すなわち大学院のない教員養成大学・学部は非講座制である。さらに昭和 31 年 10 月 22 日文部省令第 28 号「大学設置基準」の「第五条 大学は、その教育研究上の目的を達成するため、学科目制又は講座制を設け、これらに必要な教員を置くものとする。2 学科目制は教育上必要な学科目を定め、その教育研究に必要な教員を置く制度とする。3 講座制は、教育研究上必要な専攻分野を定め、その教育研究に必要な教員を置く制度とする」となり、講座制は「教育研究上」、学科目制は「教育上」必要な教員を置くこととされた。学科目制では研究という規定がない。

## 3 昭和 30 年代における方向転換—目的大学化

昭和 30 年代に大学における教員養成は方向を転換する。すなわち、目的大学化、教員養成の国家基準化である。これを国による統制として各大学等から反発があった。そして第三節 2 で詳述するが、昭和 41、42 年には学芸大学・学芸学部は教育大学・教育学部へ名称変更することとなる。

まず、昭和 33 年 7 月 28 日第 16 回中央教育審議会答申「教員養成制度の改善方策について」は「教員養成を目的とする大学における養成」と言う。これは教養重視の大学から教員養成大学・学部の目的大学への転換を意味した。そして「教員の養成は、国の定める基準によって大学において行う」とした。すなわち教員養成のための整備と教育基準を確立することを意味した。それに対して各大学や日本教育大学協会から、国による統制であり、

「大学の自治」という原則に反するとして批判が相次いだ。

それに対して文部省が諮問する教育職員養成審議会は昭和 37 年 11 月 12 日に「教員養成制度の改善について」を建議し、再度「教員養成の目的、性格を明確にし、それにふさわしい教育課程について国が基準を定める」とし、昭和 39 年 7 月 30 日に「教員養成のための教育課程の基準について（中間報告）」という具体的案を示した。

さらに、昭和 38 年 1 月 28 日第 19 回中央教育審議会答申「大学教育の改善について」には、大学の 1 目的・性格、2 設置・組織編成、3 管理運営、4 学生の厚生補導、5 入学試験、6 財源が示された。その 1～3 に関して次のようなことが記された。

1. 大学の目的大学化（大学の目的・使命と国家・社会との関連）。
2. 組織編成 (1) 大学・学部の分離統合（教員養成を目的とする大学・学部は「教員養成制度の改善について」を参考にして検討すべき）、(2) 教養課程の教育を行なう組織「教養部」の設置、(3) 講座制、学科目制（大学院大学の学部は講座制に、大学の学部は学科目制によるのが適当である。なお、教育研究上の基礎的な組織については、講座制、学科目制ともにさらに検討すべきである）。
3. 大学の管理運営と大学自治（大学には、社会制度として課せられた国家社会の要請と期待に応じる責任ある管理運営が必要である。大学の自治は、抽象的、観念的なものではなく、具体的、実質的にこれを考えなければならない。大学が社会制度としての性格をもつことにかんがみ、大学は国家・社会との連繫を深めることによって、ややもすれば陥りやすいその閉鎖性を排除することが望ましい）。

そして上記答申を踏まえて昭和 38 年 3 月 31 日「国立学校設置法の一部を改正する法律」が成立した。そこに第 6 条の 2 が追加され、第 7 条が改められた。すなわち、従来のように各大学に組織構成を任せるのではなく、文部省令で、学部に学科又は課程を置くこと、学部又は学科に講座又は学科目を置くこととその種類を決定すると規定された。

第六条の次に次の一条を加える。

（学科及び課程）

第六条の二 国立大学の学部に、文部省令で定めるところにより、学科又は課程を置く。

第七条を次のように改める。

（講座等）

第七条 国立大学の学部又は学科に講座又は学科目を、国立大学の教養部に学科目を、国立大学の大学附置の研究所に研究部門をそれぞれ置く。

2 前項の講座、学科目及び研究部門の種類その他必要な事項は、文部省令で定める。

その後に出された昭和 39 年 2 月 25 日文部省令第 3 号「国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科目に関する省令」を、土屋基規は次のように整理する（土屋基規『戦後日本教員養成の歴史的研究』（風間書房、平成 29 年）311-312 頁）。

この省令は、国立大学の内部組織を、①学科—講座制（旧制大学を基礎とする新制大学・学部）、②学科—学科目制（旧制高等学校、専門学校を基礎とする大学・学部）、③課程—学科目制（旧師範学校を基礎とする大学・学部）の三つに区分した。そしてこの区分のうち、「講座および学科」は教育研究機能をもつ大学の内部組織であり、「課程」は教育機能のみをもつ内部組織であって、国立の教育系大学・学部はすべてこの課程制の大学として、教員養成のためだけの教育を目的とすることとしたのである。

#### 4 学科目制と教育課程の基準

昭和 38 年 5 月に文部省大学学術局長名で教員養成大学・学部に限らず全国の国立大学長宛に「昭和 38 年度講座および学科目調について」の文書が出された<sup>1)</sup>。これは上述の学科目に関する省令作成ための調査であった。なお、教員養成大学・学部は、後述の改正国立学校設置法にもとづく文部省令で課程・学科目制とされた。同年 7 月に各大学からの回答結果を受けて、文部省大学学術局教職員養成課長名で各教員養成大学・学部長宛に「教員養成大学、学部の課程及び学科目について」の通知があった（百年史編集委員会『百年史 埼玉大学教育学部』（百年史刊行会、昭和 51 年）1064 頁）。これには再度の調査依頼と課程・学科目案作成に関する文部省案が示されていた。その後、文部省と各大学や関係学会との間で折衝が繰り返された。

その間の、同年 5 月 20 日に文部省大学学術局長から国立大学長宛に「国立学校設置法の一部を改正する法律の施行について」の文書が出されたことと、その抜粋が、東京学芸大学創立五十周年記念誌編集委員会『東京学芸大学五十年史 資料編』（東京学芸大学創立五十周年記念事業後援会、平成 11 年）135-136 頁）に記されている。それは今回の改正が国立学校の制度的整備のために必要であったことを説明するものであった。例えば、国立学校設置法第 6 条の 2 で「4 学科および課程を法令上明確に定めたこと」に関して以下のように説明されている。

学部には、専攻により学科又は課程を置くことは、大学設置基準（昭和 31 年文部省令第 28 号）の定める一般原則であるが、従来、各学部にならにそれらを具体的に設置するための規定がなく、各大学の内部規定にまかせていた。一方、改正前の国立学校設置法第 7 条の規定により、各学部になられる講座等は文部省令で定めることとなっていたが、この講座等と学部の内部組織である学科または課程との関連を明らかにしなければ、学部の教育研究組織の実態を表示し、その整合性を論ずることは困難であった。そこで学部の整備充実をはかるための制度的基礎を明確にするため、文部省令で定めるところにより、学部に学科または課程を置くこととしたのである。

さらに国立学校設置法第 7 条で「5 講座、学科目および研究部門を法令上明確に定めたこと」に関しては以下のように説明されている。

従来、各学部に置かれる講座またはこれに代わるべきものの種類その他必要な事項は、文部省令で定めることとなっていたが、実際には講座だけについて文部省令が定められていた。

ところが大学教育の発展に伴い、学科目制の学部についても、その内部組織を制度上明らかにし、今後の整備充実の基礎を確立することが必要となり、大学附置の研究所および新設の教養部についても、同様の事情があるので、講座、学科目および研究部門を文部省令で定めることを明定したのである。

文部省による学科目提示に対して同年9月7日に日本教育学会常任理事会が要望書を提出し、同年11月11日には和歌山大学学芸学部教授会が「文部省の学科目調査についての訴え」を発表した。和歌山大学学芸学部教授会の訴えに関しては後で検討する。

さらに同年11月26日に文部省大学学術局長名で各国立大学長宛に「国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科目に関する省令（仮称）の制定について」の文書が出され、文部省令原案が示された。それに対して大学からの意見が出された<sup>2)</sup>。

そのような折衝を経たものの、国立学校設置法第6条、第7条にもとづき、昭和39年2月25日文部省令第3号「国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科目に関する省令」が公布され、それまでの各大学・学部の自主的な組織編成は、同省令によって全国一律に定められることとなった。

#### 国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科目に関する省令 (昭和39年2月25日文部省令第3号)

国立学校設置法（昭和二十四年法律第百五十号）第六条の二及び第七条第二項の規定に基づき、国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科目に関する省令を次のように定める。

- 1 国立大学の学部学科又は課程を、国立大学の学部又は学科に講座を、国立大学の学部、教養部又は学科に学科目を、別表第一から別表第七十二までのとおり置く。
- 2 国立大学の大学院に置く研究科の〔略〕

#### 附則

- 1 この省令は、公布の日から施行し、昭和三十八年四月一日から適用する。
- 2 国立大学の講座に関する省令（昭和二十九年文部省令第二十三号）は、廃止する。

#### 別表第一

北海道大学 〔以下略〕

その後、昭和39年7月30日に教育職員養成審議会「教員養成のための教育課程の基準について（中間報告）」が発表された。前述したようにこれは昭和37年11月の建議に沿ったものであった。これに対して、反対を示す大学もあった。例えば、昭和39年9月に埼玉大学教育学部教授会は「教育職員養成審議会『教員養成のための教育課程の基準につい

て』の意見」を公表し、「『目的大学』『課程制』を前提とする、教員養成の国家基準案である」「大学の自治、学問の研究の自由を侵すことになり、教員養成を大学でおこなうという建前と矛盾するのではないか」「基準が必要だとしても、基準設定の主体の問題が検討されなければならない」として反対を表明した<sup>3)</sup>。

昭和 40 年 6 月 22 日教育職員養成審議会は先の中間報告に関する意見を踏まえて「教員養成のための教育課程の基準について」を建議した。一部、出された意見を踏まえて修正されたものの基本は中間報告と同じであった。

## 5 教員養成大学・学部への大学院設置

昭和 41 年に東京学芸大学大学院教育学研究科が設置された。そして昭和 43 年に大阪教育大学大学院教育学研究科が設置された。設置にあたっては、大学院設置審査委員会による大学院教官の厳しい審査が行われた。審査結果により修士課程の所属教官とそうでない教官に分けられた。後述するが、大阪教育大学では実技教官が反対して実技関係の専攻の設置が遅れた。

昭和 46 年 6 月中央教育審議会答申「今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策について」に「教員のうち、高度の専門性をもつ者に対し、特別の地位と給与を与える制度を創設すること」とあり、大学院の設置が示唆された。そして昭和 47 年 7 月教育職員養成審議会建議「教員養成の改善方策について」では、既存の教員養成大学・学部大学院を設置するのではなく、新たに「創設」とされた。これはいわゆる「新構想大学」構想であり、大学に格差をつけるものとした国立大学協会をはじめとして批判が巻き起こった。昭和 52 年 5 月に文部省は既存の教員養成系大学・学部のうち条件の整ったものからも大学院を設置していく方針を明らかにし、教員養成大学・学部への大学院設置が始まる。すなわち昭和 53 年に約 10 年ぶりに愛知教育大学に大学院教育学研究科が設置された。

## 第三節 師範学校から教員養成大学・学部への美術関係教官の移行期

### 1 教員養成大学及び教員養成学部を置く大学

戦後、学制改革により学校教育法が施行され、昭和 24 年施行の国立学校設置法により、昭和 24 年 5 月に新制国立大学が誕生した。戦後の教員養成は大学で行うことになったので全国に師範学校を母胎として教員養成大学及び教員養成学部を置く大学が設置された。なお沖縄には、昭和 21 年に沖縄文教学校、昭和 25 年に琉球大学が設置された。ただ、文部省管轄になったのは昭和 47 年の沖縄返還後であるので、本研究では琉球大学は昭和 47 年以降を取り上げる。琉球大学を除く 46 大学と主たる前身校一覧を表 1 に示す。本表は、第二章から第七章の全国の教員養成大学・学部における美術教育学の人的制度基盤の成立過程の調査にもとづいて作成した。

表 1 新制国立大学と前身母胎一覧

大学名	母胎	発足時設置学部
北海道学芸大学	北海道第一師範学校、北海道第二師範学校、北海道第三師範学校、北海道青年師範学校	学芸学部
弘前大学	弘前医科大学、弘前高等学校、青森師範学校、青森青年師範学校、青森医学専門学校	文理学部、教育学部、医学部
岩手大学	岩手師範学校、岩手青年師範学校、盛岡工業専門学校、盛岡農林専門学校	学芸学部、工学部、農学部
東北大学	東北大学、東北大学附属医学専門部、第二高等学校、宮城師範学校、宮城青年師範学校、仙台工業専門学校、宮城県女子専門学校	文学部、教育学部、法学部、経済学部、理学部、医学部、工学部、農学部
秋田大学	秋田師範学校、秋田青年師範学校、秋田鉱山専門学校	学芸学部、鉱山学部
山形大学	山形高等学校、山形師範学校、山形青年師範学校、米沢工業専門学校、山形県立農林専門学校	文理学部、教育学部、工学部、農学部
福島大学	福島師範学校、福島青年師範学校、福島経済専門学校	学芸学部、経済学部
茨城大学	水戸高等学校、茨城師範学校、茨城青年師範学校、多賀工業専門学校	文理学部、教育学部、工学部
宇都宮大学	栃木師範学校、栃木青年師範学校、宇都宮農林専門学校	学芸学部、農学部
群馬大学	前橋医科大学、群馬師範学校、群馬青年師範学校、前橋医学専門学校、桐生工業専門学校	学芸学部、医学部、工学部
埼玉大学	浦和高等学校、埼玉師範学校、埼玉青年師範学校	文理学部、教育学部
千葉大学	千葉医科大学、千葉医科大学附属医学専門部、千葉医科大学附属薬学専門部、千葉師範学校、千葉青年師範学校、東京工業専門学校、千葉農業専門学校	学芸学部、医学部、薬学部、工芸学部、園芸学部
東京学芸大学	東京第一師範学校、東京第二師範学校、東京第三師範学校、東京青年師範学校	学芸学部
横浜国立大学	神奈川師範学校、神奈川青年師範学校、横浜経済専門学校、横浜工業専門学校	学芸学部、経済学部、工学部
新潟大学	新潟医科大学、新潟医科大学附属医学専門部、新潟高等学校、新潟第一師範学校、新潟第二師範学校、新潟青年師範学校、長岡工業専門学校、新潟県立農林専門学校	人文学部、教育学部、理学部、医学部、工学部、農学部
富山大学	富山高等学校、富山師範学校、富山青年師範学校、富山薬学専門学校、高岡工業専門学校	文理学部、教育学部、薬学部、工学部
金沢大学	金沢医科大学、金沢医科大学附属医学専門部、金沢医科大学附属薬学専門部、第四高等学校、金沢高等師範学校、石川師範学校、石川青年師範学校、金沢工業専門学校	法文学部、教育学部、理学部、医学部、薬学部、工学部
福井大学	福井師範学校、福井青年師範学校、福井工業専門学校	学芸学部、工学部
山梨大学	山梨師範学校、山梨青年師範学校、山梨工業専門学校	学芸学部、工学部
信州大学	松本医科大学、松本高等学校、長野師範学校、長野青年師範学校、松本医学専門学校、長野工業専門学校、上田繊維専門学校、長野県立農林専門学校	文理学部、教育学部、医学部、工学部、農学部、繊維学部
岐阜大学	岐阜師範学校、岐阜青年師範学校、岐阜農林専門学校	学芸学部、農学部
静岡大学	静岡高等学校、静岡第一師範学校、静岡第二師範学校、静岡青年師範学校、浜松工業専門学校	文理学部、教育学部、工学部
愛知学芸大学	愛知第一師範学校、愛知第二師範学校、愛知青年師範学校	学芸学部
三重大学	三重師範学校、三重青年師範学校、三重農林専門学校	学芸学部、農学部
滋賀大学	滋賀師範学校、滋賀青年師範学校、彦根経済専門学校	学芸学部、経済学部
京都学芸大学	京都師範学校、京都青年師範学校	学芸学部
大阪学芸大学	大阪第一師範学校、大阪第二師範学校	学芸学部
神戸大学	神戸経済大学、神戸経済大学予科、神戸経済大学附属経営学専門部、姫路高等学校、神戸工業専門学校、兵庫師範学校、兵庫青年師範学校	文理学部、教育学部、法学部、経済学部、経営学部、工学部
奈良学芸大学	奈良師範学校、奈良青年師範学校	学芸学部
和歌山大学	和歌山師範学校、和歌山青年師範学校、和歌山経済専門学校	学芸学部、経済学部
鳥取大学	米子医科大学、鳥取師範学校、鳥取青年師範学校、米子医学専門学校、鳥取農林専門学校	学芸学部、医学部、農学部
島根大学	松江高等学校、島根師範学校、島根青年師範学校	文理学部、教育学部
岡山大学	岡山医科大学、岡山医科大学附属医学専門部、第六高等学校、岡山師範学校、岡山青年師範学校、岡山農業専門学校	法文学部、教育学部、理学部、農学部、医学部
広島大学	広島文理科大学、広島高等学校、広島工業専門学校、広島高等師範学校、広島女子高等師範学校、広島師範学校、広島青年師範学校、広島市立工業専門学校	文学部、教育学部、政経学部、理学部、工学部、水畜産学部
山口大学	山口高等学校、山口師範学校、山口青年師範学校、山口経済専門学校、宇部工業専門学校、山口県立獣医畜産専門学校	文理学部、教育学部、経済学部、工学部、農学部
徳島大学	徳島医科大学、徳島高等学校、徳島師範学校、徳島青年師範学校、徳島医学専門学校、徳島工業専門学校	学芸学部、医学部、工学部
香川大学	香川師範学校、香川青年師範学校、高松経済専門学校	学芸学部、経済学部
愛媛大学	松山高等学校、愛媛師範学校、愛媛青年師範学校、新居浜工業専門学校	文理学部、教育学部、工学部
高知大学	高知高等学校、高知師範学校、高知青年師範学校	文理学部、教育学部、農学部
福岡学芸大学	福岡第一師範学校、福岡第二師範学校、福岡青年師範学校	学芸学部
佐賀大学	佐賀高等学校、佐賀師範学校、佐賀青年師範学校	文理学部、教育学部
長崎大学	長崎医科大学、長崎医科大学附属薬学専門部、長崎高等学校、長崎師範学校、長崎青年師範学校、長崎経済専門学校	学芸学部、経済学部、医学部、薬学部、水産学部
熊本大学	熊本医科大学、熊本医科大学附属医学専門部、第五高等学校、熊本師範学校、熊本青年師範学校、熊本薬学専門学校、熊本工業専門学校	法文学部、教育学部、理学部、医学部、薬学部、工学部
大分大学	大分師範学校、大分青年師範学校、大分経済専門学校	学芸学部、経済学部
宮崎大学	宮崎師範学校、宮崎青年師範学校、宮崎県工業専門学校、宮崎農林専門学校	学芸学部、工学部、農学部
鹿児島大学	第七高等学校、鹿児島師範学校、鹿児島青年師範学校、鹿児島農林専門学校、鹿児島水産専門学校	文理学部、教育学部、農学部、水産学部

※第二～七章の調査で参照した各大学の大学史、要覧、ホームページ等に記された各校の沿革にもとづいて作成した。

新制国立大学設置に際して、基礎となる学校群、場合によっては所在府県が加わって「設置期成同盟」や「設置準備委員会」を立ち上げ「〇〇大学設置認可申請書」を文部省に提出して、交渉しつつ文部省の認可を受けた。現在、国立公文書館に、文部省に提出された各大学の設置認可申請書とそれに対する文部省の回答案が綴じられた簿冊群が収蔵されている。その申請書の多くが文部省に最初の提出時文書と思われ、当初の各大学設置計画やそれに対する文部省の対応を知ることができる貴重な資料である。

各大学の設置計画とその後の実現内容の違いは興味深い。例えば、後の東京学芸大学になる組織の提出した、昭和23年8月付の申請書の表紙には「東京<sup>学芸</sup>教育大学第二教育学部設置認可申請書」とある（簿冊番号：59/3A/29-6/445）。教育大学の「教育」が「学芸」と訂正され、「第二教育学部」が線で抹消されている。東北大学や広島大学の教員養成部と同じように、東京教育大学との統合を想定していた。しかし『東京学芸大学五十年史 資料篇』（平成11年）によれば、東京教育大学第二教育学部構想はすぐに取りやめになり、表紙だけを差し替えられたとある<sup>4)</sup>。また、後に大阪学芸大学となる組織の昭和23年7月25日付申請書の表紙は「大阪<sup>学芸</sup>教育大学設置認可申請書」である（簿冊番号：59/3A/30-1/758）。そして天王寺学部、平野学部、池田学部、富田林学部として、旧府立師範学校をそのまま学部にするという構想であった。これは各師範学校の独立意識が高くて、統合は容易でなかった証左である。もちろん、これらは実現することはなかった。また、後の広島大学は昭和24年2月付「設置申請」には「広島綜合大学」という大学名が記されていた（簿冊番号：59/3A/30-2/825）。

府県内に複数の師範学校があった場合、昭和18年に官立になる時に名称は統一されても、各師範学校の独立性は維持された。しかし、新制国立大学では、北海道学芸大学のように分校制は認めても、一大学、あるいは一学部への実質的統合が求められ、その実現までに長期間の大変な混乱と紆余曲折があった大学もあった。ただ、附属校までは統合はされなかったのも、現在も附属校が遠隔地に点在する場合があるのは、旧師範学校の附属学校校地に新制附属校が後身として残ったためである。

この国立公文書館蔵の「大学設置認可申請書」は、各大学の教員養成美術関係の人的配置計画を検討する際にも参照する。

## 2 学芸大学・学芸学部と教育学部

学部名称に関する考察は、TEES研究会『「大学における教員養成」の歴史的研究』（平成13年）<sup>5)</sup>に詳しく、本項ではまず基礎的事実として、開学時の教員養成大学・学部名称と、昭和41、42年の全国的な名称変更について確認しておく。なお「学芸大学」「学芸学部」に関して、基本は戦後の教養主義に則って、単科の教員養成大学と、同大学内に文理学部等を置く大学がこの名称を用いた。そして同書は、学芸大学・学部から教育大学・学部への名称変更への姿勢を、以下の三つに類型化した（381-381頁）。



- 1「教員養成を主目的としており、学部名称変更比較的抵抗がない」（「教員養成に『名実一致』」した）
- 2「学部名変更抵抗がないわけではないが、諸般の状況から容認した」（「『名を変えて実(利)を取る』ことを選んだ」）
- 3「学芸学部こだわりを有し名称変更著しい抵抗感がある」（「名は変えても実は変えない」）。

表1をもとに、開学時の大学と学部の名称を一覧表にして示しておく（表2）。

表2 新制国立大学の学芸大学・学部と教育学部一覧

北海道	北海道学芸大学	学芸学部	三重県	三重大学	学芸学部
青森県	弘前大学	教育学部	滋賀県	滋賀大学	学芸学部
岩手県	岩手大学	学芸学部	京都府	京都学芸大学	学芸学部
宮城県	東北大学	教育学部	大阪府	大阪学芸大学	学芸学部
秋田県	秋田大学	学芸学部	兵庫県	神戸大学	教育学部
山形県	山形大学	教育学部	奈良県	奈良学芸大学	学芸学部
福島県	福島大学	学芸学部	和歌山県	和歌山大学	学芸学部
茨城県	茨城大学	教育学部	鳥取県	鳥取大学	学芸学部
栃木県	宇都宮大学	学芸学部	島根県	島根大学	教育学部
群馬県	群馬大学	学芸学部	岡山県	岡山大学	教育学部
埼玉県	埼玉大学	教育学部	広島県	広島大学	教育学部
千葉県	千葉大学	学芸学部	山口県	山口大学	教育学部
東京都	東京学芸大学	学芸学部	徳島県	徳島大学	学芸学部
神奈川県	横浜国立大学	学芸学部	香川県	香川大学	学芸学部
新潟県	新潟大学	教育学部	愛媛県	愛媛大学	教育学部
富山県	富山大学	教育学部	高知県	高知大学	教育学部
石川県	金沢大学	教育学部	福岡県	福岡学芸大学	学芸学部
福井県	福井大学	学芸学部	佐賀県	佐賀大学	教育学部
山梨県	山梨大学	学芸学部	長崎県	長崎大学	学芸学部
長野県	信州大学	教育学部	熊本県	熊本大学	教育学部
岐阜県	岐阜大学	学芸学部	大分県	大分大学	学芸学部
静岡県	静岡大学	教育学部	宮崎県	宮崎大学	学芸学部
愛知県	愛知学芸大学	学芸学部	鹿児島県	鹿児島大学	教育学部

いくつかの大学では、昭和23、24年の間に名称変更が、計画主体と文部省の意向でなされている。既に確認したように、東京学芸大学と大阪学芸大学が最初「設置認可申請書」では東京教育大学、大阪教育大学となっていた。他にも、秋田大学の「設置認可申請書」に記された学部名は最初「教育学部」であった（簿冊番号：59/3A/29-4/252）。それを抹消して「学芸学部」と上書きしている。文部省の意向であろう。これが昭和41年の全国的な学芸学部から教育学部への変更を簡単に肯んじなかった秋田大学の意志につながっ

たのかもしれない。また千葉大学は昭和 23 年 7 月の「設置認可申請書」では学芸学部であったが、昭和 24 年 8 月に「千葉大学文理学部及び教育学部設置申請書」を提出して、教育学部になった（簿冊番号：59/3A/29-5/375）。これは東京医科歯科大学予科を学芸学部学芸部に包摂して文理学部とし、学芸学部教育部を教育学部とするものであった<sup>6)</sup>。また「国立新潟大学認可申請書 昭和二十三年九月三十日」では、教育学部に美術講座はあったが、高田分校の人文学部にずっと大きい芸能科を設置する計画であった（簿冊番号：59/3A/29-8/540、541）。これも実現しなかった。

その後、昭和 41 年 4 月 5 日法律第 48 号「国立学校設置法の一部を改正する法律」により、昭和 41 年に全国の学芸大学・学芸学部の多くが教育大学・教育学部に名称変更する。ただ、大阪学芸大学と秋田大学は学芸大学・学芸学部を通し、翌年の昭和 42 年 6 月 1 日になって大阪教育大学、秋田大学教育学部へと名称変更となった<sup>7)</sup>。東京学芸大学は既に東京教育大学があったために名称変更せず、現在に至る。この「教育大学」「教育学部」への名称変更は、時期区分としては次の学科目設置以後の事項となる。「学芸＝教養」教育を中心とする教員養成から教育の専門性への政策転換であり、「学科目」制度導入と政策的に整合する。

### 3 特別教科(美術・工芸)教員養成課程の設置

特別教科(美術・工芸)教員養成課程（初期は「特別教科(図画・工作)教員養成課程」、通称「特設美術」「特美」、以下、特設美術と略記）が高等学校教員養成に特化された課程として設置されていく。同課程は当時、供給困難とされていた中学校及び高等学校の美術・工芸の教員養成を図るため<sup>8)</sup>、地域ブロックごとに設置された。その地の美術産業との関わりがあることが多い。その設置に伴って多くの美術専門教官が新しく採用された。特に社会的評価のある美術専門教官は厚遇された。戦後の教養重視により、どの教員養成大学・学部においても多かれ少なかれ、いわゆる「ミニ芸大」の気風はあったが、とりわけ特設美術では、その気風は強かった。次々項で詳しく述べるように、一部の大学を除き、全国的にはこの時期、美術に関することなら何でもできた師範学校教官が大学教官として在職を続け、そして教官に制度的に細分化された特定の専門は決まっていなかった。それに対して、特設美術の設置された大学では、その設置を機に専門性が明確化していった。特設美術の設置された大学を設置年の早い順に以下に記す。

昭和 27 年 京都学芸大学  
昭和 28 年 岡山大学教育学部、佐賀大学教育学部  
昭和 30 年 岩手大学学芸学部  
昭和 33 年 北海道学芸大学札幌分校  
昭和 36 年 東京学芸大学  
昭和 42 年 高知大学教育学部

なお、当初計画と実際では特設美術が設置された大学は異なる。

『教員養成制度（五）昭和二十六年度』（戦後教育資料 V-13）（国立教育政策研究所蔵）中の「特別教科教員総合養成計画」では次のようにまず記される。

中学校及び高等学校における音楽科、図画工作科、書道科、家庭科、体育科及び職業科（中学校）に関する教科の教員は著しい不足を告げている。

この種教科教員の養成は従来教員養成を主とする各国立の大学、学部で行っていたが、その教員組織及び施設が充分でなく、学生募集に非常な困難があるので、次の要項によつて地域毎に充実した学科を設けて、ここで養成するものとする。

そして図画工作科に関しては、次のように計画されていた。なお、北海道の場合は、一応施設充実費のみを交付するものとするとしてされた。

地域別	大学
東北	岩手大学
関東	東京学芸大学
中部	金沢大学
近畿	京都学芸大学
中国四国	鳥取大学
九州	佐賀大学

中部地方の金沢大学、中国四国地方の鳥取大学が、計画と実際で異なっている。実際は中部地方には設置されず、中国四国地方では昭和 28 年に岡山大学、昭和 42 年に高知大学に最後の特設美術が設置された。

金沢大学に関して、金沢は美術産業の盛んな土地ながら、他に美術工芸専門の高等教育機関があったことが関係しているのかもしれない（昭和 21 年金沢美術工芸専門学校→昭和 25 年金沢美術工芸短期大学→昭和 30 年金沢美術工芸大学設立）。ただ、中部地方に特設美術が置かれないままとなってしまった理由は現時点では不明である。例えば、美術産業、規模、地理からして愛知学芸大学に置かれてもおかしくはないと思われるが、そうはならなかった。

鳥取大学ではなく岡山大学に特設美術が設置された理由も現時点でははっきりしない。同計画では岡山大学に特設音楽を設置するとされていたが、実際には島根大学に特設音楽が設置されたことが遠因にあるのかもしれない。

計画と実際が異なるのは美術だけではなくなかった。例えば、特設書道も計画では、東京学芸大学、愛知学芸大学、広島大学、実際は、東京学芸大学、新潟大学、奈良学芸大学、福

岡学芸大学、昭和 48 年になって愛知教育大学に設置された。

また、同計画では図画工作科の「講座及び職員数」は次のように記されていた。

講座	科目	職員数					
		教授	助教授	助手	雇	傭人	計
美術第一	芸術学、美術史	一	一		二	一	
美術第二	構成学、建築学	一	一				
美術第三	工芸学	一	一	一			
美術第四	絵画学（日本画）	一	一				
美術第五	絵画学（西洋画）	一	一	一			
美術第六	彫塑学	一	一	一			
計		六	六	三	二	一	一六

この講座、科目を最も忠実に実現したのが、昭和 27 年に全国で最初に特設美術を設置した京都学芸大学である。『京都教育大学百二十年史』（平成 13 年）には、特設美術設置に伴い「美学・美術史、構成学、工芸学、絵画学・日本画、絵画学・西洋画、彫塑学の学科群」が設けられたとある<sup>9)</sup>。その他の特設美術においても、若干の構成や名称等の違いはあるものの、美術専門分野を細分化した組織が作られる。

#### 4 専攻科

大学卒業、またはそれと同等の学力を有する者を対象とした専攻科の制度がある。以下のような美術専攻科・美術工芸専攻科を設置した大学がいくつかあった。後の大学院美術教育専攻とは違い、美術専門の特定分野を深く学ぶ科であった。これも教科専門の専門性を高める制度であったと言える。

昭和 29 年 東京学芸大学

昭和 29 年 大阪学芸大学

昭和 34 年 京都学芸大学、岡山大学教育学部、佐賀大学教育学部

昭和 35 年 岩手大学学芸学部

昭和 46 年 北海道教育大学札幌分校

#### 5 師範学校から教員養成大学・学部への美術関係教官の移行

師範学校から教員養成大学・学部への教官の移行は、全体的には難航した。それまで筆頭学校であったとはいえ中等学校であった師範学校が、昭和 18 年に官立専門学校となり、さらに昭和 24 年に大学に昇格することになった。短期間のうちにいわゆる「三段跳び」の昇格となった。旧帝国大学卒業者からすると旧師範学校が大学となることに抵抗があった。

旧帝国大学卒業者でも研究業績のない教官はいたので、師範学校教官の大学移行では、まず能力保証としての学歴が問題とされた。旧帝国大学卒業者であれば教授として移行、あるいは採用されたケースが多い。やはり、師範学校卒業者、文部省中等教員検定試験合格者（以下、「文検」と略記）で師範学校教官であった場合、大学教官への移行は厳しかった。文部省中等教員検定試験に合格するのは難しかったことで知られたが、その合格者でも文検合格は低い学歴と見なされて移行できなかったことが多い。また移行はできても、不遇の扱いを受けることもあった。例えば、師範学校で長年勤務してきた教官でも新制大学移行直後は講師や助教授に認定されることがあった。

美術関係教官の場合、他教科教官に比べれば、大学教官への移行は困難が少なかった。その背景の一つには、戦前の美術関係の最高学府は、東京美術学校や東京高等師範学校といった高等専門学校であり、それらの卒業生が美術関係教官の大部分を占めていたことがある。もう一つには、文展、日展、二科展等の入選といった実技が業績として高く評価されたことがある。文検合格者であっても、それらの業績が多ければ、東京美術学校や東京高等師範学校卒業者を差し置いて教授になった場合もあった。

大学教官になるには、公の教員資格審査を三つ通過しなければならなかった。一つは、戦前の「文官任用令」、戦後の「官吏任用叙級令」七条に規定された文部省普通試験委員による職務と資格の整合性の審査であった。

もう一つは、昭和 21 年勅令 263 号「教職員ノ除去、就職禁止及復職等ノ件」にもとづく、都道府県や大学に設置された「教員適格審査委員会」の審査である。これは職業軍人、著名な軍国主義者、極端な国粹主義者、占領政策に対する著名な反対者を教員にしないという目的の審査であった。ただ、この審査で除去された不適格者は少なかった。都道府県の教員適格審査委員会で不適格となったのは 123 万余名中 3930 人、大学教員適格審査委員会で不適格となったのは約 25000 人中 86 人であった<sup>10)</sup>。

最後の一つは、昭和 23 年 1 月から文部省の設置した大学設置委員会の大学設置基準にもとづく「新制大学設置認可審査」である。その一環として教官に関しては申請分野での教授、助教授、講師いずれが相当であるかを判定した。専門分野に応じて審査の分科会があったが、詳細は不明である。ただ、師範学校教官も徐々に大学教官に移行していったので、この審査も職位相当判定に関して教授判定は難しかったとされるが、学歴や業績が全く領域違いでなければ助教授及び講師判定は極端に厳しいものではなかった。

他教科に関しては多数の教官が転出・退職したことが多くの大学史に記述されている。これは以下に述べるような、師範学校内の設置計画組織で学歴や業績をもとに決定される「新制大学設置認可審査」推薦候補に上がるまでがまず大変であったためと推測される。

熾烈であったのは、設置計画組織内での順位争いであったと思われる。国立公文書館蔵の「新制大学設置認可申請書」群には教官の推薦順位表が綴じられているものがある。大学教官は定員が限られているので、計画組織が推薦順位を決定するに際して、学歴、学閥、業績等をめぐって計画組織内の準備委員会、学部内、講座内で大変な議論がなされた。特

に大学教官定員が現員に比べて少ない場合は、誰が後になるか、場合によっては身を引くかという問題になる。年度ごとに大学教官定員が増えていくにしても、「大学設置認可申請書」を見る限り、師範学校教官現員より大学教官定員は少ない。そうすると、この新制大学設置前後に他師範学校や他大学へ異動する例、附属学校教員となる例、「地方教官」といって都道府県立の新制中学や新制高校の教員になる例もあった。計画組織が作成した推薦順位表で推薦順位が低い、さらには推薦されなかった教官はそうせざるを得なかった。

当然、この時期に美術教育学というものは認識されていなかった。まず、特定分野の専門性は意識されても、その分野の教育に関する専門性は意識されなかった。美術に関しては図画か工作、あるいは美術か工芸が専門分野であった。美術教育学の認識がないところでは、美術専門能力が高ければ美術教育もできるという考えになろう。そして美術教育研究に特化しようとする者は、美術専門能力が低いと見られた。TEES研究会『「大学における教員養成」の歴史的研究』が指摘しているように<sup>11)</sup>、美術に限らず、当時の学芸学部・教育学部内では教科専門が教職・教科教育より上という意識があった。それには、師範学校教育が固くて狭い視野の人間を形成したという反省から、戦後の教員養成は教科教育よりも教養教育や教科専門教育が重視されたことも相俟っていた。美術講座でも教科専門、具体的には実技の能力の高さが教官評価の基準となった。当時を知る花篤實は「戦後の教員養成の制度の中で、特に芸術系は実技講座を中心に構成されたために、美術教育は実技教官の『余技』として扱われることが多かった」と述べる<sup>12)</sup>。

もう一つの状況として、師範学校には美術に関して何でもできた東京美術学校図画師範科や東京高等師範学校図画手工専修科・芸能科の卒業生が教官として多数在勤し、その多くが大学に移行したこともあった。彼らはもともと能力が高く、職務としては当然であるが、美術専門にもその教育にも力を発揮した。彼らの能力の高さと複雑な意識<sup>13)</sup>、そして地方の美術・美術教育に果たした役割は別個に検討すべき対象である。ここでは、皮肉なことに彼らの能力の高さが逆に美術教育専門の分化を遅らせた面もあったと指摘しておく。

なお、戦後の教員養成大学・学部の母胎として青年師範学校もあった。ただ、青年師範学校に勤務していたのは農業関係科目の教官がほとんどで、図画・工作教官は勤務していないことが普通である。まれに勤務していても師範学校、女子師範学校の兼務であった。それゆえ、青年師範学校教官の多くは、教員養成大学・学部の職業科教官に移行した。図画・工作教官に移行した例はほとんどないと思われる。

## 第四節 学科目の設置期

### 1 学科目と講座

既に述べたが、昭和22年大学基準協会の制定した「大学基準」では「大学はその目的、使命を達成するために必要な講座又はこれに代る適当な制度を設けなければならない」とされた。

さらに、昭和 29 年 9 月の「国立大学の講座に関する省令」では、講座は「大学院に置かれる研究科の基礎となるものとする」とされていたことからみて、大学院を置く大学の学部、つまり旧制大学を前身とする学部には講座制を採用し、戦後の新制大学の学部には学科目制を採用することを意味した<sup>14)</sup>。

さらに、昭和 31 年 10 月の文部省令第 28 号「大学設置基準」では次のようになる。

第五条 大学は、その教育研究上の目的を達成するため、学科目制又は講座制を設け、これらに必要な教員を置くものとする。

2 学科目制は、教育上必要な学科目を定め、その教育研究に必要な教員を置く制度とする。

3 講座制は、教育研究上必要な専攻分野を定め、その教育研究に必要な教員を置く制度とする。

つまり、学科目制は「教育上」必要な学科目を定め、講座制は「教育研究上」必要な専攻分野を定め、それに必要な教員を置くとされている。講座制が「教育研究上」必要な専攻分野を設定してそれに応じた教員組織を置く制度となっているのに対して、学科目制は「教育上」必要な学科目に即応した教員組織を置く制度となっている。すなわち、前者は教育と研究とを分離しない建前の制度にあるのに対して、後者はもっぱら教育上の必要性を原理とする制度である<sup>15)</sup>。

## 2 教養教育重視からの転換と文理学部改組

昭和 21 年教育刷新委員会第 17 回総会において、大学における教員養成という戦後教員養成の基本原則が成立した。そして戦後の大学は教養教育を重視し（一般教育は大学 4 年間で 2 年、短期大学 2 年間で 1 年）、教員免許は開放制となった。昭和 30 年代になると、徐々に教養教育重視からの転換が始まる。なお小中学校教育では、昭和 33 年に学習指導要領は法的拘束力をもつこととなり、中学校の図画工作科は美術科に変更され、科学技術教育振興を背景として新設された技術科に工業技術的内容を移行した。

そして教養教育重視からの転換が文理学部改組問題につながっていく。文理学部のある大学は、教育学部の教科専門を文理学部に任せていた。昭和 32 年の全国国立大学の学長会議で文理学部の組織改革問題が検討され、さらに池田内閣の高度経済成長に見合う大学制度改革を意図した昭和 38 年 1 月 28 日第 19 回中央教育審議会答申「大学教育の改善について」では次のことが示された<sup>16)</sup>。

文理学部は、人文科学、社会科学、自然科学にわたる教育研究の組織によつて専門教育を行なうとともに、全学の一般教育を担当することを目的として発足した。しかるに、〔中略〕文理学部は、所期の教育効果をあげることが困難な実情にある。〔中略〕すなわち、教員養成を目的とする学部、または人文科学系、社会科学系もしくは自然科学系の学部等に再編成すべきである。この場合、他の学部あるいは他の大学との分合を行なうことによつて、その目的を果たすことができることを考慮する必要がある。

そして昭和 40 年に文理学部は改組されて教養学部あるいは教養部が設置されることになった。なお平成 7 年に教養部は廃止される。この前後の教員養成大学・学部の動きを見ておくと、昭和 38 年から二年課程が廃止され、四年課程への振替が完了する。そして後述するが、昭和 39 年に学科目制度が発足した。昭和 40 年 6 月 15 日に国立大学学長会議において文部省より学芸学部を教育学部に名称変更するよう指導があり、昭和 41 年にほとんどの学芸大学・学部は教育大学・学部へ改称した。同年に東京学芸大学に大学院教育学研究科が設置された。このような流れのなかに学科目制度はある。

### 3 学科目制度までの各大学と文部省のやりとり

前述の通り、昭和 38 年 1 月 28 日第 19 回中央教育審議会答申「大学教育の改善について」を受けて、昭和 38 年 3 月 31 日「国立学校設置法の一部改正」となった。同法改正によって、従来のように各大学に組織構成を任せるのではなく、文部省令で、学部に学科又は課程を置くこと、学部又は学科に講座又は学科目を置くこととその種類を決定すると規定された。そして、省令作成のための調査として、同法改正直後の昭和 38 年 5 月に、各国立大学学長宛に文部省大学学術局長名による「昭和 38 年度講座および学科目調について」の文書が出された。各大学からの回答結果を受けて、文部省大学学術局教職員養成課長名で各教員養成大学・学部長宛に「教員養成大学、学部の課程及び学科目について」の通知があった。これには再度の調査依頼と課程・学科目案作成に関する文部省案が示された。さらに、同年 11 月 26 日に大学学術局長名で各国立大学学長宛に「国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科目に関する省令（仮称）の制定について」の文書が出され、文部省令原案が示された。そして、翌昭和 39 年 2 月 25 日文部省令第 3 号「国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科目に関する省令」が公布され、それまでの各大学・学部の自主的な組織編成は、同省令によって全国一律に定められることとなった。

その間、文部省と各大学等との間で折衝が繰り返された。本項ではこれら文部省の一連の動きに対する各大学の対応を見る。まず、東京学芸大学の場合は次のようであった<sup>17)</sup>。昭和 38 年 11 月に文部省から照会された原案に対して、とうていこれを容認することはできないという東京学芸大学内の意見が高まり、さらに諸地方大学の学芸学部や教育学部の教授会から訴えや問い合わせも東京学芸大学教授会に届けられた。そして、12 月 28 日付東京学芸大学学長名で文部省大学学術局長宛送り状（「国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科目に関する省令（仮称）の制定について（回答）」）を発した。

次に、文部省との詳細なやりとりの記録の残る埼玉大学と、「文部省の学科目調査についての訴え」を表明した和歌山大学の事例について見てみる。

#### (1) 埼玉大学の場合

埼玉大学の場合、『百年史 埼玉大学教育学部』（昭和 51 年）に「課程＝学科目制の採用」として詳しく記されている<sup>18)</sup>。それによると以下のやりとりがあった。順に番号をつけて整理して経過を示す。



- 1 昭和 38 年 5 月 21 日付文部省大学学術局長名による埼玉大学学長宛に「講座及び学科目調査」の通達があった。教育学部長は学科主任会議で検討させ、その結果を文部省に提出した。教授会に提案はされていない。
- 2 昭和 38 年 7 月 24 日付文部省大学学術局教職員養成課長名による埼玉大学教育学部長宛の「教員養成大学、学部の課程及び学科目について」の通知による再度の調査依頼があった。これが初めて教授会の議題となったのは、その一ヶ月余り後の 8 月 30 日に至ってからのことであった。8 月 30 日の教授会以降同年年末に至るまで、毎回議論が重ねられた。当初は何のために文部省がかかる調査を実施するかについて、趣旨が必ずしも明確ではなく、多様に解釈されたが、次第に学科目を省令に記載するための有力な手がかかりとなるとの判断が共通のものとなるにつれて、これを警戒する空気が強まった。つまり学科目を省令によって拘束すること、それによって将来教育学部の性格が大きく変更されることへの危惧であった。一方にはそうした危険性をもちつつも、将来、教官定員増の資料として役立つのではないかと希望の観測をする向きもあって議論が白熱化した。なかには、報告すること自体が、課程制を認めることになるとの理由で報告を拒否すべきだという意見もあった。
- 3 昭和 38 年 9 月、紆余曲折の末、埼玉大学教育学部は合計 61 学科目とする案を提出した。特徴的なのは「数学概論」「科学概論」「音楽概論」「美術概論」といった各科概論が現実に即して提示されたことである。しかし、文部省からこれら概論は学科目ではなく授業科目とすべき旨の指摘がなされた。
- 4 昭和 38 年 10 月、教授会での検討の結果、上記概論を削除し合計 57 学科目が提出された。
- 5 昭和 38 年 12 月、文部省令原案が示され、昭和 39 年 2 月に文部省令「国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科目に関する省令」が制定された。

同書には文部省と埼玉大学とでやりとりされた学科目がすべて表として示されている。そこから美術関係学科目を抜き出して示す。

文部省原案 昭和 38 年 7 月	埼玉大学案 昭和 38 年 9 月	埼玉大学案 昭和 38 年 10 月	文部省令原案 昭和 38 年 12 月	文部省令 昭和 39 年 2 月
絵画	美術概論	絵画	絵画	絵画
彫塑	絵画	工芸・彫塑	彫塑	彫塑
構成	工芸・彫塑	構成	構成	構成
美術理論及び美術史	構成	美術理論及び美術史	美術科教育	美術科教育
・	美術理論及び美術史	・		
・	・	・		
美術科教育※	美術科教育※	美術科教育※		

※学科目の提示順：まず各教科専門(国語から順に提示)、次に「(共通)」として各教科教育と教育学関連(教育原理等)がまとめて示される。

## (2) 和歌山大学の場合

和歌山大学の場合は、和歌山大学教育学部『和歌山大学教育学部創立百周年記念 100 年のあしあと』（昭和 50 年）に記されている。それによると以下のやりとりがあった。

昭和 38 年 7 月 24 日、文部省から教員養成大学・学部の課程、学科目作成について調査依頼がくる。その直後から文部省の学科目案に対して意見の相違があり、和歌山大学学芸学部教授会は、同年 11 月 11 日「文部省の学科目調査についての訴え」を発表した。それを抜萃して引用する<sup>19)</sup>。

われわれが教職員養成課の示すひな型どおりの報告を拒否している主な理由は次の点です。

- (1) 教職員養成課の示した学科目は、明らかに「教職員免許法施行規則」によるものであり、免許を授与する必要上の区分にすぎず、学問研究上の必要からの分類という観点が欠如しています。なるほどわれわれの学部が、現状では学科・講座性をとりえないにしても、大学である限り、研究と教育を結合し、それを最大限に生かす組織としての学科目分類を志向するのは当然のことです。しかるに、5 月 20 日付け大学学術局長からの通知による「課程」についての解釈、ならびに今般の学科目基準は明らかに教員養成を主とする大学、学部の研究機関としての性格を弱め、単なる免許状授与のための教育機関にかえてゆく方向を示すものといわざるを得ません。研究機関としての性格を失った大学で（それをしも大学と呼ぶならば）如何なる教員が養成されるでしょうか。

われわれの深く憂うるのはまずこの点なのです。

- (2) 第二に、何故に教員養成を主とする大学・学部にたいしてのみ、このような画一的基準に基づく調査の再提出を求めるのでしょうか。その理由が明確でないばかりか、大学自治の尊重という点からも問題があります。〔中略〕

さらに、教職員養成課は、教員養成を主とする大学・学部は非常にバラエティにとんでいるので、とくに基準を示す必要があるといっていますが、そもそも学芸大学、学芸学部、教育学部という三つの類型は文部省自身が立案したものであり、学科目にバラエティのあるのは当然の結果でしょう。したがって現状では、それぞれの独自性と歴史的伝統の尊重を原則として行政指導がなされるのが望ましいのであって、決して画一的基準で統制されるべき性質のものではありません。〔以下略〕

昭和 38 年 11 月 26 日、文部省から「国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科目に関する省令の制定」について依頼があり、この問題をめぐる心労から学部長の病状悪化により、同年 12 月 10 日に学芸学部長は併任をとかれる<sup>20)</sup>。

その後、文部省庶務課長が出向いて学部教授会と懇談して 12 月中に妥協案が成立し、学部が主張した自主的な学科目体制は「教室制」として残された<sup>21)</sup>。そして昭和 39 年 2 月 25 日に「国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科目に関する文部省令」が制定された。この時、和歌山大学学芸学部の美術関係学科目は、美術関係教官 4 人であったのに絵画、彫塑の二つであった。

4 全国的な学科目整備の過程

昭和 39 年 2 月 25 日 文部省令第 3 号「国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科目に関する省令」により、各大学に置かれるべき学科目が示された。教員養成大学・学部における美術関係学科目は、絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、美術科教育の五つが示された。最初から五つすべての学科目がすべての大学に置かれたわけではなく、実際の教官配置や定員等、実情を踏まえて何度も改正された。なお特設美術の場合はこの五つを基本としつつ、五つ以上の多種の学科目が示された。学科目「美術科教育」がすべての大学に設置完了したのが昭和 53 年 4 月である。その昭和 53 年 4 月までに示された同省令及び同省令改正の一覧を示す（表 3）。なお教員養成大学・学部における美術関係学科目に関わる改正の蘭を色づけして示す。美術科教育の学科目の設置完了の昭和 53 年 4 月改正の欄は他と異なる色づけをした。

表 3 学科目関係省令一覧

1	国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科目に関する省令（昭和39年2月25日文部省令第3号）
2	昭和39年 4月 1日号外文部省令第12号〔第一次改正〕
3	昭和40年 3月31日号外文部省令第20号〔第二次改正〕
4	昭和41年 4月 5日号外文部省令第23号〔第三次改正〕
5	昭和42年 4月22日号外文部省令第3号〔第四次改正〕
6	昭和42年 5月31日号外文部省令第13号〔第五次改正〕
7	昭和43年 4月 1日号外文部省令第8号〔第六次改正〕
	昭和43年 5月 1日号外文部省令第13号〔第七次改正〕
8	昭和43年 6月12日号外文部省令第17号〔第八次改正〕
9	昭和44年 4月 1日号外文部省令第9号〔第九次改正〕
10	昭和44年 5月21日号外文部省令第14号〔第一〇次改正〕
	昭和44年 6月 9日文部省令第16号〔第一一次改正〕
	昭和45年 4月 1日号外文部省令第7号〔第一二次改正〕
	昭和45年 4月13日文部省令第9号〔第一三次改正〕
11	昭和45年 4月17日号外文部省令第14号〔第一四次改正〕
	昭和46年 4月 1日号外文部省令第19号〔第一五次改正〕
	昭和47年 4月 1日文部省令第14号〔第一六次改正〕
12	昭和47年 5月13日号外文部省令第29号〔沖縄の復帰に伴う文部省関係省令の改正に関する省令七条による改正〕
13	昭和47年 5月22日号外文部省令第33号〔第一七次改正〕
14	昭和48年 3月31日号外文部省令第5号〔第一八次改正〕
15	昭和48年 4月27日号外文部省令第11号〔第一九次改正〕
	昭和48年 9月27日号外文部省令第20号〔第二〇次改正〕
	昭和49年 4月 1日号外文部省令第7号〔第二一次改正〕
	昭和49年 4月11日号外文部省令第14号〔第二二次改正〕
16	昭和49年 6月22日号外文部省令第34号〔第二三次改正〕
	昭和49年10月 1日文部省令第41号〔第二四次改正〕
17	昭和50年 4月16日文部省令第16号〔国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科目に関する省令等の一部を改正する省令一・二条による改正〕
	昭和50年 4月22日文部省令第20号〔第二五次改正〕
	昭和50年10月 1日文部省令第35号〔第二六次改正〕
	昭和51年 4月 1日文部省令第13号〔第二七次改正〕
18	昭和51年 5月10日号外文部省令第24号〔国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科目に関する省令等の一部を改正する省令一・二条による改正〕
	昭和51年 5月25日文部省令第27号〔第二八次改正〕
	昭和51年10月 1日文部省令第34号〔第二九次改正〕
	昭和52年 4月 1日文部省令第7号〔第三〇次改正〕
19	昭和52年 4月18日号外文部省令第14号〔国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科目に関する省令等の一部を改正する省令一・二条による改正〕
	昭和52年 5月 2日文部省令第24号〔第三一次改正〕
	昭和52年10月 1日文部省令第34号〔第三二次改正〕
20	昭和53年 4月 1日号外文部省令第13号〔第三三次改正〕

「日本法令索引」国立国会図書館（<http://hourei.ndl.go.jp/SearchSys/viewEnkaku.do?jsessionid=1E7D16EA392DBD757D1CA9331AD36B33?i=jYE0kne9iOGzP9RBMjv5VQ%3d%3d>（平成 29 年 4 月 3 日確認））を参照して表を作成した。なお上記の昭和 48 年 9 月 27 日号外文部省令第 20 号に関して、本節次項以下の図表作成に用いた現代日本教育制度史料編集委員会『現代日本教育制度史料』第 40 巻（東京法令出版、平成元年）425 頁では、日付が 9 月 29 日となっている。ひとまず本章の図表では前者の 9 月 27 日を採用する。

5 各大学に設置された学科目の実際

前述したように、美術関係学科目は、絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、美術科教育の五つであった。ただ、最初から全大学に五つすべての学科目が示されたわけではない。まず文部省から各大学に照会があり、各大学の実情等を踏まえながら、学科目が示された。

実際に各大学に示された美術関係学科目を、学科目制度及び同改正のなされた順に表にして章末資料に示しておく。本表及び本節の次項以降の図表は現代日本教育制度史料編集委員会『現代日本教育制度史料』第 25-45 巻（東京法令出版、昭和 62 年-平成 2 年）を参照して作成した。

本項ではまず昭和 39 年 2 月 25 日文部省令第 3 号「国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科目に関する省令」に示された各大学の学科目一覧表を作成した（表 4）。表 4 から次のことがわかった。独特の学科目の示された特設美術以外の大学に関して、最初から 5 学科目が揃っていたのは 8 大学であった。最も多かったのは、美術科教育を除く、絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史の 4 学科目のパターンで 12 大学であった。次に多かったのは、美術理論・美術史を除く、絵画、彫塑、構成、美術科教育の 4 学科目で 4 大学であった。なお 2 学科目のみという大学も 3 大学あった。

さらにそれぞれの学科目に目を向けると、絵画と彫塑は圧倒的に多く設置されている。そして、美術科教育の学科目が最初から示されていたのは 16 大学であった。特設美術には美術科教育ではなく美術・工芸科教育の学科目が置かれた。特設美術の美術・工芸科教育を加えても 21 大学と、全大学の半数にも満たない。

以上のように、最初の学科目制度で各大学に示された学科目を概観すると、美術科教育の学科目設置は整備途上であることがうかがえる。その後どのように変化していくのか、次項以下で検討していく。

表 4 昭和 39 年 2 月発令各大学美術関係学科目一覧

学科目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b>	福島大学	千葉大学	信州大学	愛知学芸大学	大阪学芸大学	山口大学	鹿児島大学					
絵画、彫塑、構成、 <b>美術科教育</b>	山形大学	茨城大学	埼玉大学	神戸大学								
絵画、彫塑、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b>	愛媛大学											
絵画、構成、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b>	横浜国立大学	高知大学										
絵画、彫塑、 <b>美術科教育</b>	徳島大学											
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史	秋田大学	宇都宮大学	群馬大学	新潟大学	富山大学	金沢大学	岐阜大学	三重大学	鳥取大学	長崎大学	大分大学	宮崎大学
絵画、彫塑、構成	弘前大学	香川大学	熊本大学									
絵画、彫塑、美術理論・美術史	福井大学	山梨大学										
絵画、構成、美術理論・美術史	東北大学	広島大学										
彫塑、構成、美術理論・美術史	静岡大学											
絵画、彫塑	滋賀大学	和歌山大学	島根大学									
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b> 、書道、書道史、書道科教育	福岡学芸大学	特別教科(書道)教員養成課程										
絵画、彫塑、美術理論・美術史、書道、書道史	奈良学芸大学	特別教科(書道)教員養成課程										
日本画、西洋画、木工、染織、金工、陶芸、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術・工芸科教育</b>	北海道学芸大学	特別教科(美術・工芸)教員養成課程										
日本画、東洋画、西洋画、木工、染織、金工、彫塑、写真、構成、美術理論・美術史、 <b>美術・工芸科教育</b>	岩手大学	特別教科(美術・工芸)教員養成課程										
日本画、西洋画、木工、金工、陶芸、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術・工芸科教育</b>	佐賀大学	特別教科(美術・工芸)教員養成課程										
日本画、西洋画、木工、金工、彫塑、構成、 <b>美術・工芸科教育</b> 、書道、書道史	東京学芸大学	特別教科(美術・工芸)教員養成課程 特別教科(書道)教員養成課程										
西洋画、木工、陶芸、彫塑、構成、 <b>美術・工芸科教育</b>	岡山大学	特別教科(美術・工芸)教員養成課程										
日本画、西洋画、木工、金工、陶芸、彫塑、写真、構成、美術理論・美術史	京都学芸大学	特別教科(美術・工芸)教員養成課程										

※琉球大学に関する記載はない(沖縄返還前)  
※大学単位で示され分校単位には示されない

- ・学科目「美術科教育」及び「美術・工芸科教育」を朱色で示した。
- ・表記順は、上から、5 学科目揃ったもの、次に学科目「美術科教育」を含むことと学科目数の多いことを基準に並べた。昭和 39 年時点で特設美術設置大学、特設書道設置大学は分けて示した。
- ・現代日本教育制度史料編集委員会『現代日本教育制度史料』第 25-45 巻（東京法令出版、昭和 62 年-平成 2 年）を参照して作成した。

## 6 美術関係設置学科目類型とその変遷

学科目制度の改正に伴って、各大学の学科目の組み合わせ類型と、類型の多少傾向はどのように変化していくのか表とグラフに可視化して見る。本項及び次項の表とグラフは以下の原則に沿って作成する。

- (1) 特別教科(書道)教員養成課程(以下、特設書道と略記)が置かれた大学では、書道は美術と同じ講座となっている場合があるが、ここでは便宜的に、書道、書道史、書道科教育は集計しない。
- (2) 特別教科(美術・工芸)教員養成課程に示された学科目に関しては、日本画、東洋画、西洋画は「絵画」、造形芸術学は「美術理論・美術史」、美術・工芸科教育、美術工芸科教育は「美術科教育」として集計し、木工、染織、金工、陶芸、写真は集計しない。
- (3) 琉球大学は昭和47年から学科目が示される。琉球大学に関しては、示された学科目の絵画、織染、陶芸、彫塑、構成、美術科教育のうち、織染、陶芸は集計しない。
- (4) 大学院美術教育専攻設置後は、5学科目とは異なる体制となるため、表の末尾に記す。
- (5) 下記の三つの改正は美術関係学科目の数の増減に関係しないので除外して検討する。  
なお改正年の前の数字は表3で付した番号である。

9 昭和44年4月1日文部省令第9号「国立大学の学科及び課程並びに学科目に関する省令の一部を改正する省令」：一つ前の改正(8 昭和43年6月12日文部省令第17号「国立大学の学科及び課程並びに学科目に関する省令の一部を改正する省令」)で北海道教育大学の学科目の記載順に変更があり、「美術・工芸科教育、美術理論・美術史」の順になった。その記載順が「美術理論・美術史、美術・工芸科教育」に戻ったこと以外に美術関係学科目に変更はない。

12 昭和47年5月13日文部省令第29号「沖縄の復帰に伴う文部省関係省令の改正に関する省令」第7条 国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科目に関する省令(昭和三十九年文部省令第三号)の一部を次のように改正する。別表第七十五の次に次の別表を加える。：「琉球大学 教育学部」が加わり、美術の学科目に関しては「絵画、織染、陶芸、彫塑、構成、美術科教育」が示された。ただ、次の改正(13 昭和47年5月22日文部省令第33号「国立大学の学科及び課程並びに学科目に関する省令の一部を改正する省令」)には琉球大学はまだ記載されない。15 昭和48年4月27日文部省令第11号「国立大学の学科及び課程並びに学科目に関する省令の一部を改正する省令」になって記載され、ここで琉球大学の学科目は集計する。

14 昭和48年3月31日号外文部省令第5号「国立大学の学科及び課程並びに学科目に関する省令の一部を改正する省令」：愛知教育大学に特別教科(書道)教員養成課程が加わった。

(6) 学科目制度の改正により、各大学の類型は変化していく。各類型に新しく加わった大学を表の下部に加えていく。

(7) 表中の大学名の色分けで、いつの改正による変化なのかを示す。いつの改正かは、章末資料の表と連動させているので、そちらを合わせて参照されたい。

さて、前項で確認した特徴的な3類型を抽出して、美術関係学科目五つが揃っている完全講座体制をA型、絵画、彫塑、構成、美術科教育の4学科目体制をB型、絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史の4学科目体制をC型とする。その三つの型の経年増減を表にすると次のようになる。

表5 A型 絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、美術科教育（完全講座）

校名	2019年9月12	2019年9月12	2019年10月13	2019年12月14	2019年12月14	2020年2月15	2020年3月16	2020年4月17	2020年4月18	2020年4月19	2020年4月20	2020年4月21	2020年4月22	2020年4月23	2020年4月24	2020年4月25	2020年4月26	2020年4月27	2020年4月28	2020年4月29	2020年4月30	2020年5月1	2020年5月2	2020年5月3	2020年5月4	2020年5月5	2020年5月6	2020年5月7	2020年5月8	2020年5月9	2020年5月10	2020年5月11	2020年5月12	2020年5月13	2020年5月14	2020年5月15	2020年5月16	2020年5月17	2020年5月18	2020年5月19	2020年5月20	2020年5月21	2020年5月22	2020年5月23	2020年5月24	2020年5月25	2020年5月26	2020年5月27	2020年5月28	2020年5月29	2020年5月30	2020年5月31	2020年6月1	2020年6月2	2020年6月3	2020年6月4	2020年6月5	2020年6月6	2020年6月7	2020年6月8	2020年6月9	2020年6月10	2020年6月11	2020年6月12	2020年6月13	2020年6月14	2020年6月15	2020年6月16	2020年6月17	2020年6月18	2020年6月19	2020年6月20	2020年6月21	2020年6月22	2020年6月23	2020年6月24	2020年6月25	2020年6月26	2020年6月27	2020年6月28	2020年6月29	2020年6月30	2020年7月1	2020年7月2	2020年7月3	2020年7月4	2020年7月5	2020年7月6	2020年7月7	2020年7月8	2020年7月9	2020年7月10	2020年7月11	2020年7月12	2020年7月13	2020年7月14	2020年7月15	2020年7月16	2020年7月17	2020年7月18	2020年7月19	2020年7月20	2020年7月21	2020年7月22	2020年7月23	2020年7月24	2020年7月25	2020年7月26	2020年7月27	2020年7月28	2020年7月29	2020年7月30	2020年7月31	2020年8月1	2020年8月2	2020年8月3	2020年8月4	2020年8月5	2020年8月6	2020年8月7	2020年8月8	2020年8月9	2020年8月10	2020年8月11	2020年8月12	2020年8月13	2020年8月14	2020年8月15	2020年8月16	2020年8月17	2020年8月18	2020年8月19	2020年8月20	2020年8月21	2020年8月22	2020年8月23	2020年8月24	2020年8月25	2020年8月26	2020年8月27	2020年8月28	2020年8月29	2020年8月30	2020年8月31	2020年9月1	2020年9月2	2020年9月3	2020年9月4	2020年9月5	2020年9月6	2020年9月7	2020年9月8	2020年9月9	2020年9月10	2020年9月11	2020年9月12	2020年9月13	2020年9月14	2020年9月15	2020年9月16	2020年9月17	2020年9月18	2020年9月19	2020年9月20	2020年9月21	2020年9月22	2020年9月23	2020年9月24	2020年9月25	2020年9月26	2020年9月27	2020年9月28	2020年9月29	2020年9月30	2020年10月1	2020年10月2	2020年10月3	2020年10月4	2020年10月5	2020年10月6	2020年10月7	2020年10月8	2020年10月9	2020年10月10	2020年10月11	2020年10月12	2020年10月13	2020年10月14	2020年10月15	2020年10月16	2020年10月17	2020年10月18	2020年10月19	2020年10月20	2020年10月21	2020年10月22	2020年10月23	2020年10月24	2020年10月25	2020年10月26	2020年10月27	2020年10月28	2020年10月29	2020年10月30	2020年10月31	2020年11月1	2020年11月2	2020年11月3	2020年11月4	2020年11月5	2020年11月6	2020年11月7	2020年11月8	2020年11月9	2020年11月10	2020年11月11	2020年11月12	2020年11月13	2020年11月14	2020年11月15	2020年11月16	2020年11月17	2020年11月18	2020年11月19	2020年11月20	2020年11月21	2020年11月22	2020年11月23	2020年11月24	2020年11月25	2020年11月26	2020年11月27	2020年11月28	2020年11月29	2020年11月30	2020年12月1	2020年12月2	2020年12月3	2020年12月4	2020年12月5	2020年12月6	2020年12月7	2020年12月8	2020年12月9	2020年12月10	2020年12月11	2020年12月12	2020年12月13	2020年12月14	2020年12月15	2020年12月16	2020年12月17	2020年12月18	2020年12月19	2020年12月20	2020年12月21	2020年12月22	2020年12月23	2020年12月24	2020年12月25	2020年12月26	2020年12月27	2020年12月28	2020年12月29	2020年12月30	2020年12月31	2021年1月1	2021年1月2	2021年1月3	2021年1月4	2021年
----	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	----------	----------	----------	----------	-------

※現代日本教育制度史料編集委員会『現代日本教育制度史料』第25-45巻（東京法令出版、昭和62年-平成2年）を参照して作成した。

特設美術の置かれた大学は表の下部にまとめて示す。大学院が設置された場合は★をつけてさらにその下部に示す。特設書道の置かれた

大学に関しては先の二例のように位置を変えることはしない。表6・7も同様

表6 B型 絵画、彫塑、構成、美術科教育

[illegible]

表7 C型 繪畫、彫塑、構成、美術理論·美術史

[illegible]

C型が減ってA型が増加していることが分かる。それをもっと明確にするため、折れ線グラフとして示す。

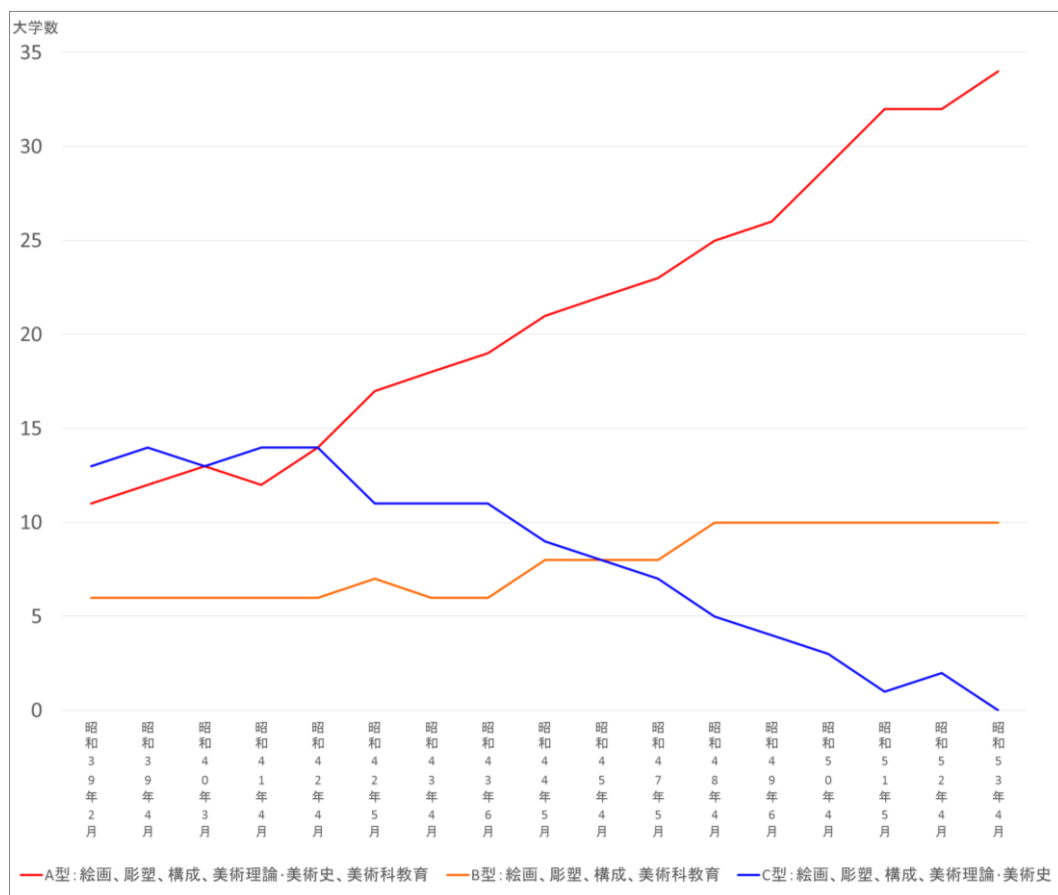


図3 美術関係学科目類型の変化

※現代日本教育制度史料編集委員会『現代日本教育制度史料』第25-45巻（東京法令出版、昭和62年-平成2年）を参照して作成した。

図3のように、5学科目を揃えた完全講座A型が右肩上がりに増加し、その分、最初は最多類型であった絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史の4学科目のC型が減る形になる。絵画、彫塑、構成、美術科教育の4学科目のB型は微増する。学科目が整備されていくことが見てとれる。

減っていく絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史の4学科目のC型に欠けている学科目は美術科教育である。5科目類型が増えていくことは、欠けていた美術科教育が増加していくことを示している。それを次項で確認する。

## 7 各学科目の整備過程

各学科目の設置数の経年変化をグラフと表にした（図4、表8）。まず学科目の設置数が減った事例は、設置済みの構成が廃された信州大学の他にはない。ただ、その後再設置されている。なお昭和43年までの所で微減して見える箇所は、東北大学教育学部の教員養成部廃止と宮城教育大学開学によるものである。グラフで一目瞭然なのは、他の学科目はほぼ横ばいなのに美術科教育だけ順調に増加していることである。昭和39～53年の美術教育に関する政策は明確に学科目「美術科教育」の増設であった。このような変化は明確に指摘されたことはなかった。

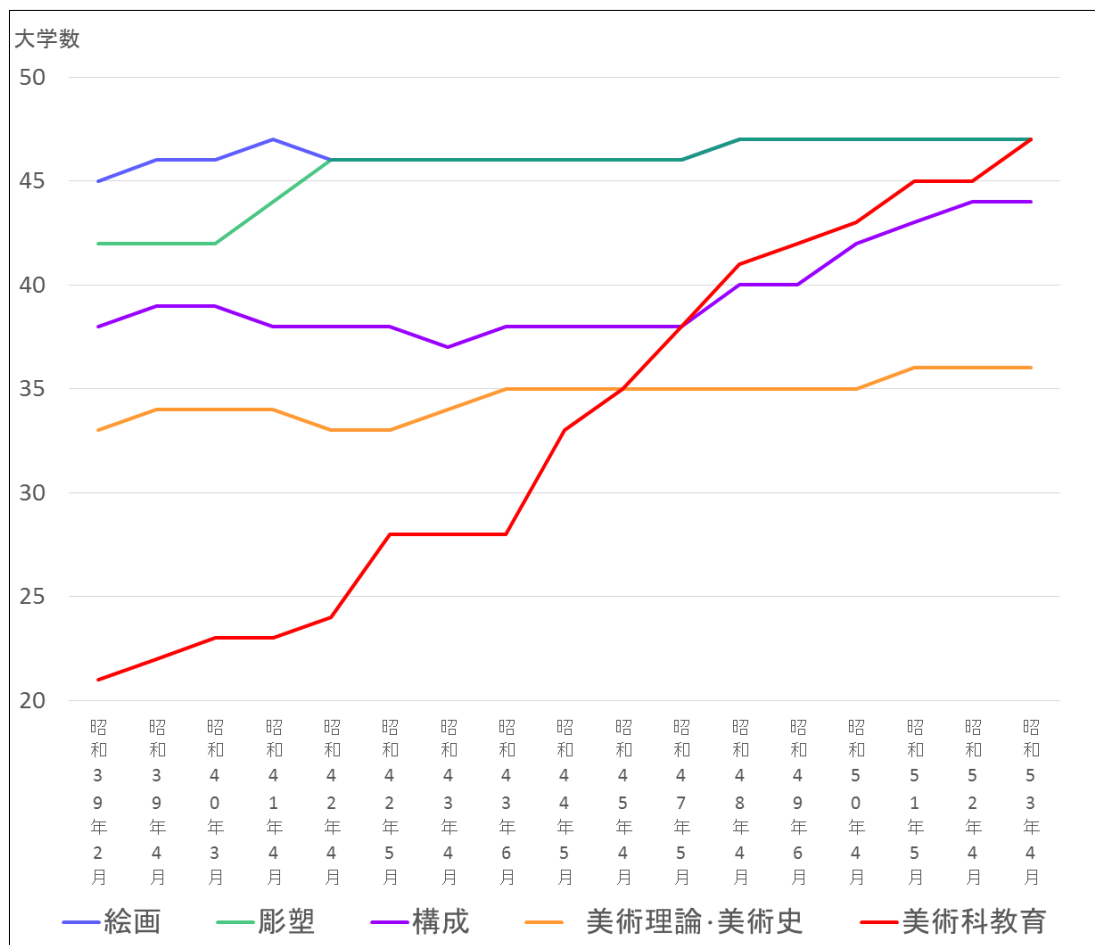


図4 美術関係各学科目設置数の変化

※現代日本教育制度史料編集委員会『現代日本教育制度史料』第25-45巻（東京法令出版、昭和62年-平成2年）を参照して作成した。

表8 美術関係各学科目設置数の変化と整備過程

	絵画	彫塑	構成	美術理論・美術史	美術科教育	設置完了学科目	最終設置大学
昭和39年2月	45	42	38	33	21		
昭和39年4月	46	42	39	34	22	絵画	静岡大学
昭和40年3月	46	42	39	34	23		
昭和41年4月	47	44	38	34	23		
昭和42年4月	46	46	38	33	24	彫塑	横浜国立大学・高知大学※
昭和42年5月	46	46	38	33	28		
昭和43年4月	46	46	37	34	28		
昭和43年6月	46	46	38	35	28		
昭和44年5月	46	46	38	35	33		
昭和45年4月	46	46	38	35	35		
昭和47年5月	46	46	38	35	38		
昭和48年4月	47	47	40	35	41		
昭和49年6月	47	47	40	35	42		
昭和50年4月	47	47	42	35	43		
昭和51年5月	47	47	43	36	45		
昭和52年4月	47	47	44	36	45		
昭和53年4月	47	47	44	36	47	美術科教育	山梨大学・金沢大学

※昭和42年特設美術設置による

※現代日本教育制度史料編集委員会『現代日本教育制度史料』第25-45巻（東京法令出版、昭和62年-平成2年）を参照して作成した。



それではもう少ししていねいに学科目設置の変化を見ていく。

絵画（昭和 39 年 4 月）、彫塑（昭和 42 年 4 月）、そして美術科教育（昭和 53 年 4 月）の順に、全国の教員養成大学・学部への設置が完了した。この時点では構成と美術理論・美術史の全国設置は完了していない。

昭和 39 年 2 月時点では、学科目の全国設置数は、多い順に、絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、そして美術科教育であった。これは、学科目の提示順と同じである。提示順には意味がある。基本的に法令の記載順序の原則として先に記されているものほど優位性があると解釈される。美術科教育にいきなり優位性を与えるのは控えたのであろう。

美術科教育の学科目の整備過程で、特筆すべきは、昭和 39 年 2 月時点では、美術科教育の学科目設置数は 5 学科目中最少であったのが、右肩上がり増設されていったことである。昭和 45 年 4 月には美術理論・美術史の学科目設置数を抜き、その次の改正の昭和 47 年 5 月には構成の学科目を抜き、昭和 53 年 4 月にはすべての大学に美術科教育の学科目が設置完了した。昭和 39 年 2 月に示されてから約 14 年後となる。設置数は昭和 43 年 6 月までは一回の改正につき 1～3 大学ずつ増加していったが、次の改正の昭和 44 年 5 月にはいきなり 5 大学増加する。この頃は大学院教育学研究科が設置され始めた頃で、美術教育専攻は昭和 43 年に東京学芸大学に最初に設置された。

学科目「美術科教育」が設置完了した昭和 53 年は、大学院教育学研究科が愛知教育大学に大阪教育大学に設置されて以来 10 年ぶりに設置された年で、それまで限られた大学に設置されていた大学院が、条件の整った大学から設置される方針に転換した頃であった。また大学美術教科教育学会も同年度末に創立された。現在から見ると、昭和 53 年は大きな転換点であった。

その他の学科目、絵画と彫塑の全国設置完了時期も見ておく。

まず、絵画が最も早く昭和 39 年 4 月に全国設置完了した。昭和 39 年 2 月時点では、唯一、静岡大学に絵画が示されなかった。ただ、この時期、静岡大学に絵画を専門とする教官は在職していた。しかも静岡大学は美術関係教官数の比較的多い大学であり、大学院美術教育専攻設置時期も全国で 6 番目と早い。そのような大学で、絵画がどのような事情で最初に学科目に示されなかったのか、なんらかの記載間違いなのかは現時点では不明である。

次に、彫塑が昭和 42 年 4 月に全国設置完了した。昭和 39 年 2 月時点で、彫塑が示されなかったのは、東北大学、横浜国立大学、広島大学、高知大学の 4 大学である。彫塑の学科目は、昭和 41 年 4 月に広島大学、昭和 42 年 4 月に横浜国立大学と高知大学に示され、彫塑の設置は完了する。なお、東北大学の教員養成課程は廃止され、宮城教育大学へ引き継がれる形となった。

## 第五節 教科教育専攻大学院の設置期

### 1 大学院教育学研究科と美術教育専攻の設置

全国の大学院教育学研究科と同美術教育専攻の設置年を美術教育専攻設置順に示す(表9)。

表9 全国大学院教育学研究科及び同美術教育専攻設置年(美術教育専攻設置順)

大学名	発足時学部名	教育学研究科設置		美術教育専攻設置		備考
東京学芸大学	学芸学部	昭和41年	1966	昭和43年	1968	
大阪教育大学	学芸学部	昭和43年	1968	昭和50年	1975	
愛知教育大学	学芸学部	昭和53年	1978	昭和53年	1978	
横浜国立大学	学芸学部	昭和54年	1979	昭和54年	1979	
岡山大学	教育学部	昭和55年	1980	昭和55年	1980	昭和28年特美設置
静岡大学	教育学部	昭和56年	1981	昭和56年	1981	
神戸大学	教育学部	昭和56年	1981	昭和56年	1981	平成4年10月発達科学部に改組
広島大学	教育学部	昭和55年	1980	昭和56年	1981	
千葉大学	学芸学部	昭和57年	1982	昭和57年	1982	
奈良教育大学	学芸学部	昭和58年	1983	昭和58年	1983	
新潟大学	教育学部	昭和59年	1984	昭和59年	1984	
福岡教育大学	学芸学部	昭和58年	1983	昭和61年	1986	
茨城大学	教育学部	昭和63年	1988	昭和63年	1988	
宇都宮大学	学芸学部	昭和59年	1984	昭和63年	1988	
三重大学	学芸学部	平成元年	1989	平成元年	1989	
宮城教育大学	教育学部	昭和63年	1988	平成2年	1990	
群馬大学	学芸学部	平成2年	1990	平成2年	1990	
金沢大学	教育学部	昭和57年	1982	平成2年	1990	
埼玉大学	教育学部	平成2年	1990	平成2年	1990	
京都教育大学	学芸学部	平成2年	1990	平成2年	1990	昭和27年特美設置
琉球大学	教育学部	平成2年	1990	平成2年	1990	
秋田大学	学芸学部	平成元年	1989	平成3年	1991	
福島大学	学芸学部	昭和60年	1985	平成3年	1991	
滋賀大学	学芸学部	平成3年	1991	平成3年	1991	
山口大学	教育学部	平成3年	1991	平成3年	1991	
北海道教育大学札幌	学芸学部	平成4年	1992	平成4年	1992	札幌・岩見沢合同院設置 昭和33年特美設置
北海道教育大学岩見沢	学芸学部	平成4年	1992	平成4年	1992	札幌・岩見沢合同院設置
信州大学	教育学部	平成3年	1991	平成4年	1992	
香川大学	学芸学部	平成4年	1992	平成4年	1992	
熊本大学	教育学部	昭和61年	1986	平成4年	1992	
和歌山大学	学芸学部	平成5年	1993	平成5年	1993	
愛媛大学	教育学部	平成5年	1993	平成5年	1993	
佐賀大学	教育学部	平成5年	1993	平成5年	1993	昭和28年特美設置
長崎大学	学芸学部	平成6年	1994	平成6年	1994	
大分大学	学芸学部	平成4年	1992	平成6年	1994	
宮崎大学	学芸学部	平成6年	1994	平成6年	1994	
岩手大学	学芸学部	平成7年	1995	平成7年	1995	昭和30年特美設置
山形大学	教育学部	平成5年	1993	平成7年	1995	
福井大学	学芸学部	平成4年	1992	平成7年	1995	
島根大学	教育学部	平成3年	1991	平成7年	1995	
北海道教育大学旭川	学芸学部	平成5年	1993	平成8年	1996	
富山大学	教育学部	平成6年	1994	平成8年	1996	
岐阜大学	学芸学部	平成7年	1995	平成8年	1996	
鳥取大学	学芸学部	平成6年	1994	平成8年	1996	
高知大学	教育学部	平成8年	1996	平成8年	1996	昭和42年特美設置
山梨大学	学芸学部	平成7年	1995	平成9年	1997	
北海道教育大学函館	学芸学部	平成5年	1993	平成10年	1998	
北海道教育大学釧路	学芸学部	平成7年	1995	平成10年	1998	
鹿児島大学	教育学部	平成6年	1994	平成10年	1998	
弘前大学	教育学部	平成6年	1994	平成11年	1999	
徳島大学	学芸学部	/	/	/	/	昭和61年総合科学部に改組

※第二～七章の調査で参照した各大学の大学史、要覧、ホームページ等に記された各校の沿革にもとづいて作成した。

大学院美術教育専攻は昭和 43 年の東京学芸大学を皮切りに、最終の平成 11 年弘前大学まで 31 年かかっている。そして、教育学研究科の設置と其中的美術教育専攻の設置の年は、必ずしも一致しない。最初の約 10 年間に東京学芸大学、大阪教育大学に設置されたのは、規模が大きく教員養成大学の基幹的位置にあったためであろう。

その後、前述したように、教員のうち、高度の専門性をもつ者に対し、特別の地位と給与を与える制度として大学院を創設することとなり、新構想大学に限らず、既存の教員養成大学・学部のうち条件の整ったところからも設置していくこととなる。愛知教育大学、横浜国立大学、岡山大学、静岡大学と設置されていくにつれて、教育学研究科や美術教育専攻の設置を計画する大学も出てくる。もちろん、大学自治という観念があるので文部省は各大学の意志を無視してあからさまに教育学研究科の設置を要求することは初期段階ではなかった。それゆえ早期に教育学研究科や美術教育専攻を設置した大学は、比較的規模が大きく教官の業績も揃っていた基幹的大学で、なおかつ教育学研究科設置に積極的な大学であった。

大学によっては教育学部や美術専攻の上に大学院を上乗せする必然性を疑っていた大学教官や地域住民がいたことは事実である。埼玉大学は規模が大きく都心に近いのに、教育学研究科設置が平成 2 年と遅めであったのは、設置に対する学部内の意思統一が遅れたためとされる。『埼玉大学五十年史』（平成 11 年）にも、大要次のように記されている<sup>22)</sup>。昭和 51 年から埼玉大学と横浜国立大学と千葉大学とで連合して大学院設置する動きがあったが、条件の整った大学から設置するという文部省の方針転換により頓挫した。その後、昭和 58、59、60 年度の三回にわたって文部省から大学院設置のための調査費の配分を受けるが、計画と教官の業績等が揃わなかったため設置されなかった。「調査費が 3 年度にわたり配分されたこと、それにも拘わらず設置申請に至らなかったのは、異例」であったと言う。大学院を設置させたい文部省と、意思統一が遅れている同大学の困惑が垣間見える。

また、当初、美術・音楽・体育といった実技講座では大学院設置に反対する教官も少なからずあり、構想・設置が難航することもあった。例えば、大阪教育大学の教育学研究科の設置は昭和 43 年であるのに、美術教育専攻の設置は昭和 50 年と時期に開きがあるのは、そのためである<sup>23)</sup>。

次に表 9 をもとにして、大学院教育学研究科及び美術教育専攻設置数の変化をグラフにした（図 5・6）。それを見ると平成元年までは 1 年に約 1 大学設置されるペースであったのに、平成 2 年には美術教育専攻が一気に 6 大学に設置されている。うち 4 大学は教育学研究科の設置と同時で、先述の埼玉大学もそこに入る。それ以後は 1 年に数大学ずつ設置され、全国設置完了を急いだと見える。つまり、平成 2 年から実現する政策変更があった。すなわち、文部省は設置に消極的な大学の意志を尊重することをやめ、設置に積極的になるように働きかけた。

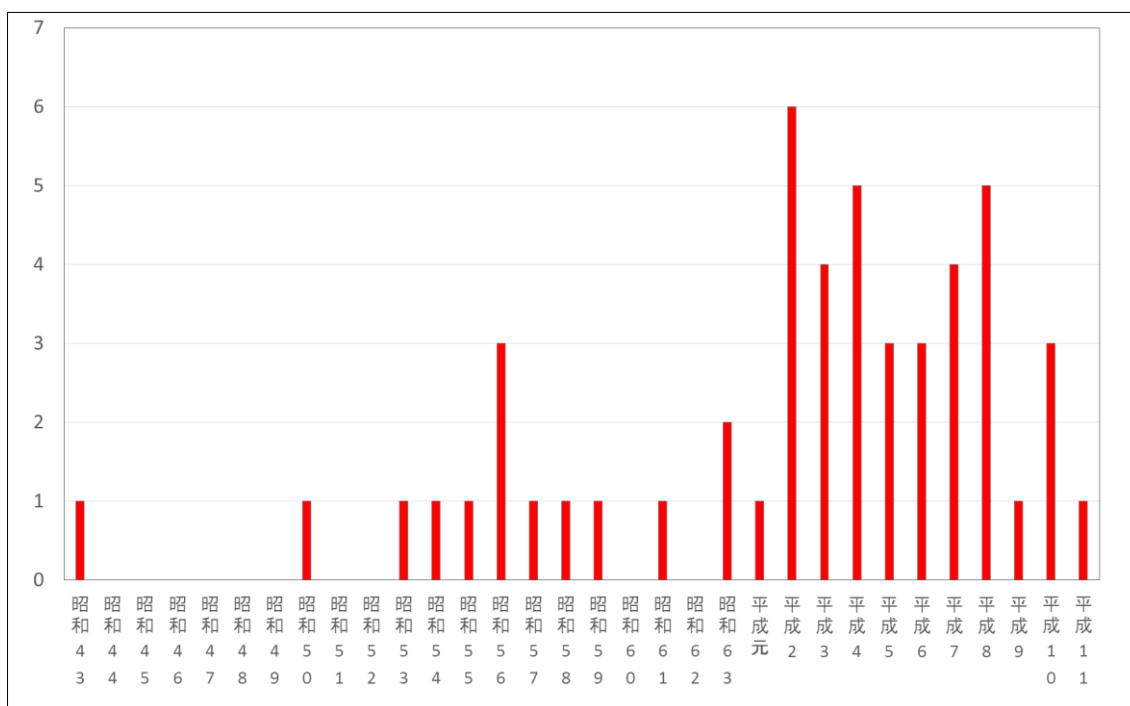


図5 大学院美術教育専攻設置数の変遷

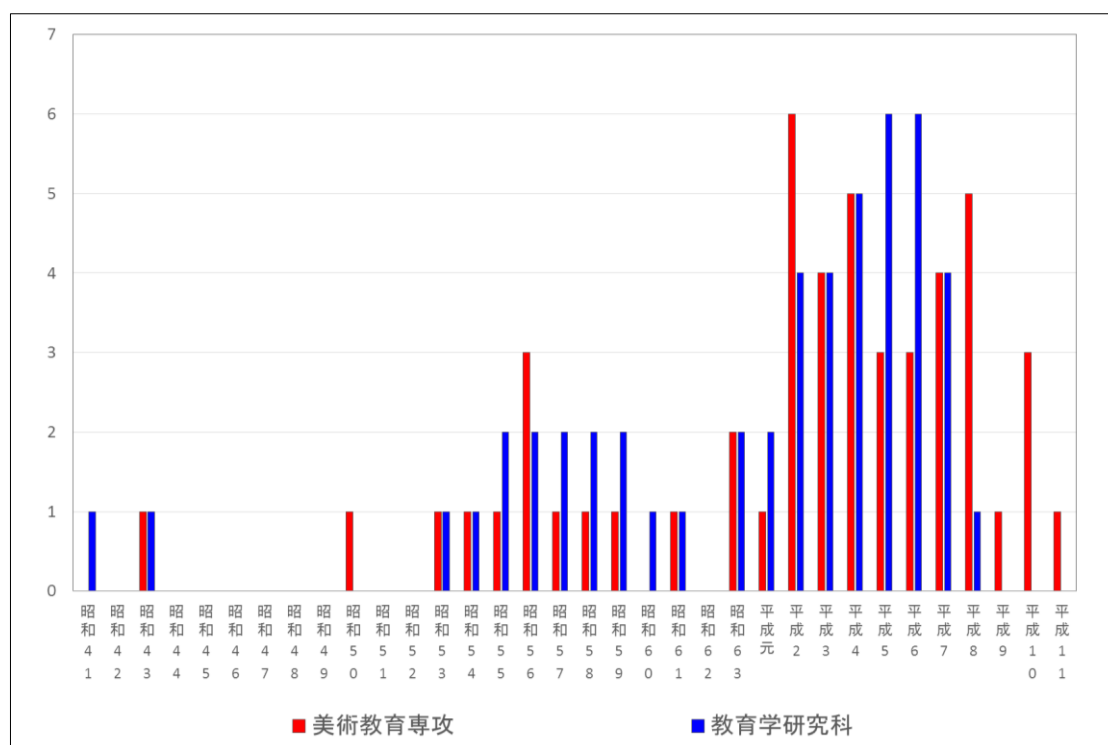


図6 大学院教育学専攻科と美術教育専攻設置数の変遷

文部省『学制百二十年史』（ぎょうせい、平成4年）には次のように記されている<sup>24)</sup>。

新制大学発足後しばらくの間、国立大学の大学院の設置についてはかなり制限的な方針が採られていたが、経済社会や職業分野の複雑高度化に伴い、昭和四十年代になって設置が次第に進められるようになった。国立の教員養成大学についても、優れた人材を教職に招致することを目的として、要件の整った大学から大学院修士課程を設置することとし、まず、四十一年度に東京学芸大学、四十三年度に大阪教育大学に設置し、しばらく間を置いて、五十三年度から愛知教育大学をはじめ、逐次設置を進めてきた。

特に近年においては、臨時教育審議会や教育職員養成審議会の答申において、現職教員の再教育と教員養成大学・学部教育・研究水準の向上を図る観点から、大学院修士課程の設置促進が指摘されていること、及び大学院修士課程修了程度を基礎資格とする「専修免許状」が平成元年度から新設されたこと等に対応するため、その設置を進めている。

教員養成の大学院は、当面、設置の要件が整った大学に設置することとし、平成二年度及び三年度においては、それぞれ四大学に大学院修士課程を設置し、三年度現在、教員養成学部（四九学部）のうち三一学部に修士課程を設置している。これらの大学院においては、昼夜開講制の実施等、教育内容・方法に工夫を加え、教員の資質向上に大きな役割を果たしており、これらの大学院にも積極的な派遣が期待される。

この政策転換の背景に何があったのかは即断できない。ただ、平成元年に教育職員免許法が改正されて専修免許状が登場したことは、大学院教育学研究科未設置大学に設置を急がせる要因としてあった。

## 2 美術教育専攻設置のコンセプト

大学院研究科の美術教育専攻設置認可を得るためには、文部省の設置審議会の美術専門委員会で教官の教育・研究業績審査を通らなければならなかった。以下、昭和50年代後半に審査を受けた美術科教育教官からの聞き取りをもとに記述する（平成23年3月聞き取り）。

美術科教育分野担当者は教育学・保育専門委員会の審査も受けなければならなかった。美術と教育学・保育の二つの専門委員会で担当文部官僚が委員に当該専攻のコンセプトと設置要員の業績を説明する。官僚としては、専門委員会に上げた以上それを通すことが任務である。その際、官僚は該当美術教育専攻のコンセプトと、そのコンセプトに要員がいかに合致しているかを説明する。その美術教育専攻のコンセプトは各大学によって違っていた。例えば、設置要員の実技専門の教官にも美術科教育に関する論文が求められた大学と、全く求められなかった大学があった。これは全教官で美術科教育的内容を指導する体制を強調した美術教育専攻と、各要員の専門性を強調した美術教育専攻というコンセプトの違いからくる。専攻のコンセプトは各大学の既存人材の特徴を踏まえて、文部官僚が各大学の大学院設置計画担当者と折衝して決め、それに合わせて設置要員の最終的な研究分野の決定や業績蓄積努力が求められた。場合によってはコンセプト実現に必要な新たな教官の採用が求められた。専門委員会での審議や判定、改善事項は、官僚から各大学の大学

院計画担当者に伝えられ、当事者の教官には大学院計画担当者から間接的に伝えられた。現在、それを具体的に知ることは不可能に近い。ただ、美術専門委員会での審査では、東京芸術大学出身者は有利であったと言われる。

ただ、平成2年以降、大学院設置を急ぐようになってからは、専門委員会での審査基準が弾力化されたように見える。すなわち研究業績重視から教育業績・実務業績の重視への転換である。現在、必ずしも研究業績ではなく実務実績で大学教員に採用できているように見える。平成13年3月改正「大学設置認可に係る各種関係規定改正」中「教員の資格審査 ア」にも、「教育上の経歴・経験、教育方法の実践例、過去に制作した教科書・教材、当該教員の教育上の能力に関する各大学の評価及び職務上の実績等を踏まえ、教育上の能力等を有しているかどうかを総合的に審査するものとし、研究業績は必須のものでないことに留意する。」とある。これが教職大学院の実務教員の基準にもなっている。このような実務業績の重視が平成初期から始まっていたのではないかと推測する。

初期の大学院設置時に厳しい研究業績審査を越えてきた教官にとっては隔世の感がある。そして、大学院教育の質的保証や、あるいは大学院教育が目指す大学院修了生像の再設定等の議論を引き起こすものではないかと思われる。

## 註

- 1) 本項の学科目制度をめぐる経過は、その詳細な記録のある百年史編集委員会『百年史 埼玉大学教育学部』（百年史刊行会、昭和51年）1063-1067頁、東京学芸大学二十年史編集委員会『東京学芸大学二十年史一創基九十六年史一』（東京学芸大学創立二十周年記念会、昭和45年）83-86頁、和歌山大学教育学部『和歌山大学教育学部創立百周年記念 100年のあしあと』（和歌山大学教育学部、昭和50年）53頁を主に参照して記述した。文書名に関しては、現代日本教育制度史料編集委員会『現代日本教育制度史料』第24巻（東京法令出版、昭和62年）598頁にもとづいて記述した。ただし昭和38年7月の「教員養成大学、学部課程及び学科目について」に関しては、その文書名の記されていた百年史編集委員会『百年史 埼玉大学教育学部』（百年史刊行会、昭和51年）1064頁による。なお、学科目制度全体に関しては、土屋基規『戦後日本教員養成の歴史的研究』（風間書房、平成29年）311-327頁に詳述されている。
- 2) この昭和38年11月26日の文部省大学学術局長名の「国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科目に関する省令（仮称）の制定について」の文書内容と東京学芸大学の対応については、東京学芸大学二十年史編集委員会、前掲書に詳しい。
- 3) 百年史編集委員会、前掲書、1077-1079頁。
- 4) 東京学芸大学創立五十周年記念誌編集委員会『東京学芸大学五十年史 資料篇』（東京学芸大学創立五十周年記念事業後援会、平成11年）9頁。
- 5) TEES研究会『「大学における教員養成」の歴史的研究』（学文社、平成13年）370-383頁。

- 6) 百年史編集委員会『百年史 千葉大学教育学部』（百年史刊行会、昭和 56 年）447 頁。
- 7) 秋田大学教育学部創立百周年記念会『創立百年史 秋田大学教育学部』（秋田大学教育学部創立百周年記念会、昭和 48 年）519-523 頁。
- 8) 「教員養成課程の整備・充実」文部省『学制百年史』（帝国地方行政学会、昭和 47 年）933 頁に「中学校および高等学校の教科担当の教員のうち、供給が困難なものについては、国が計画的にその養成を図ることとし、二十七年度から、数学、理科、音楽、美術・工芸、書道、保健体育および看護について特別教科教員養成課程を、国立の教員養成大学・学部を設置してきている」と記される。
- 9) 京都教育大学一二〇周年記念誌編集委員会『京都教育大学百二十年史』（京都教育大学、平成 13 年）489 頁。
- 10) 長浜功『昭和教育史の空白』（日本図書センター、昭和 61 年）30 頁。
- 11) TEES 研究会、前掲書。
- 12) 花篤實「一 学会の過去と未来」美術科教育学会二〇年史編纂委員会『美術科教育学会二〇年史』（美術科教育学会、平成 11 年）74 頁。
- 13) 金子一夫「美術史の中の美術教育」北澤憲昭 他『美術のゆくえ、美術史の現在』（平凡社、平成 11 年）52-68 頁。
- 14) 百年史編集委員会『百年史 埼玉大学教育学部』前掲書、1062 頁。
- 15) 海後宗臣・寺崎昌男『大学教育』（東京大学出版会、昭和 44 年）145 頁。「大学設置基準と講座制・学科目制の問題」が 145-157 頁に詳述される。同書は、文部省が昭和 26 年の時点で既に昭和 31 年の大学設置基準の講座制と学科目制とほとんど同一のプランを準備していたこと（149 頁）、昭和 31 年の大学設置基準は、結局、旧制時代の大学と高等学校・専門学校との間にあった、研究教育機関と教育機関という原理的な違いを新制度のなかに再現させたこと（149-150 頁）を指摘する。
- 16) 「文理学部改組問題の展開」百年史編集委員会、前掲書、1048-1051 頁。
- 17) 東京学芸大学二十年史編纂委員会、前掲書、83-86 頁。
- 18) 百年史編集委員会、前掲書、1063-1067 頁。
- 19) 和歌山大学教育学部、前掲書、53 頁。
- 20) 同上。
- 21) 和歌山大学 50 年史編纂委員会『和歌山大学 50 年史』（和歌山大学、平成 12 年）123-124 頁。
- 22) 埼玉大学 50 年史編纂専門委員会『埼玉大学五十年史』（埼玉大学 50 年史刊行会、平成 11 年）394-398 頁。
- 23) 「花篤先生退官記念座談会」大阪教育大学美術教育講座・芸術講座『美術科研究』第 16 号、平成 10 年、1-19 頁。
- 24) 「第三編 教育・学術・文化・スポーツの進展と新たな展開 第四章 教員及び教員養成 三 大学院修士課程の設置」『学制百二十年史』文部科学省 HP ([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/html/others/detail/1318357.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1318357.htm) (平成 29 年 9 月 10 日確認))。

## 資料

### 1 学科目制度改正による各大学の美術関係設置学科目の変化

(1) 表の作成方法に関して、表の上部に当該省令においてどの大学に何の学科目が加減されたのかを示す。

(2) 大学院が設置された場合、(1)で示す際に★を付ける。さらに学科目の次の段階へ進んだということで、表の右端に移動する。

以下、本文中に示したものと同じである。

(3) 表の作成にあたって、学科目「美術科教育」及びそれに準ずる「美術・工芸科教育」を朱色で示した。

(4) 表記順は、上から、5 学科目揃ったもの、次に学科目「美術科教育」を含むことと学科目数の多いことを基準に並べた。書道を美術講座に含む大学、特設美術設置大学は分けて示した。

(5) 学科目の改正により、各大学の類型は変化していく。各類型に新しく加わった大学を表の右端に加えていく。

(6) 表中の大学名の色分けで、どの学科目制度改正による変化なのかを示す。

※ 現代日本教育制度史料編集委員会『現代日本教育制度史料』第 25-45 巻（東京法令出版、昭和 62 年-平成 2 年）を参照して作成した。

2 昭和39年4月1日 文部省令第12号「国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科目に関する省令」																								
静岡大学 + 絵画																								
三重大学 + 美術科教育																								
滋賀大学 + 構成																								
熊本大学 + 美術理論・美術史																								
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b>	福島大学	千葉大学	信州大学	愛知学院大学	大阪学院大学	山口大学	鹿児島大学	三重大学																
絵画、彫塑、構成、 <b>美術科教育</b>	山形大学	茨城大学	埼玉大学	神戸大学																				
絵画、彫塑、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b>	愛媛大学																							
絵画、構成、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b>	横浜国立大学	高知大学																						
絵画、彫塑、 <b>美術科教育</b>	徳島大学																							
絵画、彫塑、美術理論・美術史	秋田大学	宇都宮大学	群馬大学	新潟大学	富山大学	金沢大学	岐阜大学	鳥取大学	長崎大学	大分大学	宮崎大学	静岡大学	熊本大学											
絵画、彫塑、構成	弘前大学	香川大学	滋賀大学																					
絵画、彫塑、美術理論・美術史	福井大学	山梨大学																						
絵画、構成、美術理論・美術史	東北大学	広島大学																						
彫塑、構成、美術理論・美術史																								
絵画、彫塑	和歌山大学	島根大学																						
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b> 、書道、書道史、書道科教育	福岡学院大学	特設書道																						
絵画、彫塑、美術理論・美術史、書道、書道史	奈良学院大学	特設書道																						
日本画、西洋画、木工、染織、金工、陶芸、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術・工芸科教育</b>	北海道学院大学	特設美術																						
日本画、西洋画、木工、染織、金工、彫塑、写真、構成、美術理論・美術史、 <b>美術・工芸科教育</b>	岩手大学	特設美術																						
日本画、西洋画、木工、金工、陶芸、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術・工芸科教育</b>	佐賀大学	特設美術																						
日本画、西洋画、木工、金工、彫塑、構成、 <b>美術・工芸科教育</b> 、書道、書道史	東京学院大学	特設美術	特設書道																					
西洋画、木工、陶芸、彫塑、構成、 <b>美術・工芸科教育</b>	岡山大学	特設美術																						
日本画、西洋画、木工、金工、陶芸、彫塑、写真、構成、美術理論・美術史	京都学院大学	特設美術																						



3 昭和40年3月31日文部省令第20号「国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科目に関する省令の一部を改正する省令」																											
岐阜大学 +美術科教育																											
新潟大学 特設書道設置																											
宮城教育大学 初出 (美術関係学科目はまだ示されない)																											
東北大学 まだ教員養成課程の記載は残り、これまで同様、絵画、構成、美術理論・美術史が示される																											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24			
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、美術科教育	福島大学	千葉大学	信州大学																								
絵画、彫塑、構成、美術科教育	山形大学	茨城大学	埼玉大学	神戸大学	大阪学芸大学	山口大学	鹿児島大学	三重大学	岐阜大学																		
絵画、彫塑、美術理論・美術史、美術科教育	愛媛大学																										
絵画、構成、美術理論・美術史、美術科教育		高知大学																									
絵画、彫塑、美術科教育	徳島大学																										
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史	秋田大学	宇都宮大学	群馬大学	富山大学	金沢大学	鳥取大学	長崎大学	大分大学	宮崎大学	静岡大学	熊本大学																
絵画、彫塑、構成	弘前大学	香川大学	滋賀大学																								
絵画、彫塑、美術理論・美術史	福井大学	山梨大学																									
絵画、構成、美術理論・美術史	東北大学	広島大学																									
彫塑、構成、美術理論・美術史																											
絵画、彫塑	和歌山大学	島根大学																									
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、美術科教育、書道、書道史、書道科教育	福岡学芸大学	特設書道																									
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、書道史、書道、書道科教育	新潟大学	特設書道																									
絵画、彫塑、美術理論・美術史、書道、書道史	奈良学芸大学	特設書道																									
日本画、西洋画、木工、染織、金工、陶芸、彫塑、構成、美術理論・美術史、美術・工芸科教育	北海道学芸大学	特設美術																									
日本画、東洋画、西洋画、木工、染織、金工、彫塑、写真、構成、美術理論・美術史、美術・工芸科教育	岩手大学	特設美術																									
日本画、西洋画、木工、金工、陶芸、彫塑、構成、美術理論・美術史、美術・工芸科教育	佐賀大学	特設美術																									
日本画、西洋画、木工、金工、彫塑、構成、美術・工芸科教育、書道、書道史	東京学芸大学	特設美術	特設書道																								
西洋画、木工、陶芸、彫塑、構成、美術・工芸科教育	岡山大学	特設美術																									
日本画、西洋画、木工、金工、陶芸、彫塑、写真、構成、美術理論・美術史	京都学芸大学	特設美術																									
4 昭和41年4月5日文部省令第23号「国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科目に関する省令の一部を改正する省令」																											
宮城教育大学 +絵画、彫塑																											
信州大学 - 構成																											
広島大学 +彫塑																											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24			
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、美術科教育	福島大学	千葉大学	愛知教育大学	大阪学芸大学	山口大学	鹿児島大学	三重大学	岐阜大学																			
絵画、彫塑、構成、美術科教育	山形大学	茨城大学	埼玉大学	神戸大学																							
絵画、彫塑、美術理論・美術史、美術科教育	愛媛大学	信州大学																									
絵画、構成、美術理論・美術史、美術科教育	横浜国立大学	高知大学																									
絵画、彫塑、美術科教育	徳島大学																										
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史	秋田大学	宇都宮大学	群馬大学	富山大学	金沢大学	鳥取大学	長崎大学	大分大学	宮崎大学	静岡大学	熊本大学	広島大学															
絵画、彫塑、構成	弘前大学	香川大学	滋賀大学																								
絵画、彫塑、美術理論・美術史	福井大学	山梨大学																									
絵画、構成、美術理論・美術史	東北大学																										
彫塑、構成、美術理論・美術史																											
絵画、彫塑	和歌山大学	島根大学	宮城教育大学																								
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、美術科教育、書道、書道史、書道科教育	福岡教育大学	特設書道																									
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、書道史、書道、書道科教育	新潟大学	特設書道																									
絵画、彫塑、美術理論・美術史、書道、書道史	奈良教育大学	特設書道																									
日本画、西洋画、木工、染織、金工、陶芸、彫塑、構成、美術理論・美術史、美術・工芸科教育	北海道教育大学	特設美術																									
日本画、東洋画、西洋画、木工、染織、金工、彫塑、写真、構成、美術理論・美術史、美術・工芸科教育	岩手大学	特設美術																									
日本画、西洋画、木工、金工、陶芸、彫塑、構成、美術理論・美術史、美術・工芸科教育	佐賀大学	特設美術																									
日本画、西洋画、木工、金工、彫塑、構成、美術・工芸科教育、書道、書道史	東京教育大学	特設美術	特設書道																								
西洋画、木工、陶芸、彫塑、構成、美術・工芸科教育	岡山大学	特設美術																									
日本画、西洋画、木工、金工、陶芸、彫塑、写真、構成、美術理論・美術史	京都教育大学	特設美術																									

5 昭和42年4月22日文部省令第3号「国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科目に関する省令の一部を改正する省令」																									
東北大学 一 絵画、美術理論・美術史																									
宮城教育大学 + 美術科教育																									
横浜国立大学 + 彫塑																									
高知大学 + 西洋画、金工、彫塑、美術科教育 特設美術設置（西洋画、金工、彫塑、構成、美術理論・美術史、美術科教育が示される）																									
※愛知教育大学「美術理論・美術科教育・美術史」という記載となる。次の改正では元に戻る。																									
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b>		福島大学	千葉大学	愛知教育大学	大阪教育大学	山口大学	鹿児島大学	三重大学	岐阜大学	横浜国立大学															
絵画、彫塑、構成、 <b>美術科教育</b>		山形大学	茨城大学	埼玉大学	神戸大学																				
絵画、彫塑、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b>		愛媛大学	信州大学																						
絵画、構成、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b>																									
絵画、彫塑、 <b>美術科教育</b>		徳島大学	宮城教育大学																						
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史		秋田大学	群馬大学	富山大学	金沢大学	鳥取大学	長崎大学	大分大学	宮崎大学	静岡大学	熊本大学	広島大学													
絵画、彫塑、構成		弘前大学	香川大学	滋賀大学																					
絵画、彫塑、美術理論・美術史		福井大学	山梨大学																						
絵画、構成、美術理論・美術史																									
彫塑、構成、美術理論・美術史																									
絵画、彫塑		和歌山大学	島根大学																						
構成		東北大学																							
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b> 、書道、書道史、書道科教育		福岡教育大学	特設書道																						
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、書道史、書道、書道科教育		新潟大学	特設書道																						
絵画、彫塑、美術理論・美術史、書道、書道史		奈良教育大学	特設書道																						
日本画、西洋画、木工、染織、金工、陶芸、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術・工芸科教育</b>		北海道教育大学	特設美術																						
日本画、東洋画、西洋画、木工、染織、金工、彫塑、写真、構成、美術理論・美術史、 <b>美術・工芸科教育</b>		岩手大学	特設美術																						
日本画、西洋画、木工、金工、陶芸、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術・工芸科教育</b>		佐賀大学	特設美術																						
日本画、西洋画、木工、金工、彫塑、構成、 <b>美術・工芸科教育</b> 、書道、書道史		東京学芸大学	特設美術	特設書道																					
西洋画、金工、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術・工芸科教育</b>		高知大学	特設美術																						
西洋画、木工、陶芸、彫塑、構成、 <b>美術・工芸科教育</b>		岡山大学	特設美術																						
日本画、西洋画、木工、金工、陶芸、彫塑、写真、構成、美術理論・美術史		京都教育大学	特設美術																						
6 昭和42年5月31日文部省令第13号「国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科目に関する省令の一部を改正する省令」																									
宇都宮大学 + 美術科教育																									
滋賀大学 + 美術科教育																									
大分大学 + 美術科教育																									
宮崎大学 + 美術科教育																									
※愛知教育大学「美術理論・美術史、美術科教育」という記載に戻る																									
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b>		福島大学	千葉大学	愛知教育大学	大阪教育大学	山口大学	鹿児島大学	三重大学	岐阜大学	横浜国立大学	宇都宮大学	大分大学	宮崎大学												
絵画、彫塑、構成、 <b>美術科教育</b>		山形大学	茨城大学	埼玉大学	神戸大学	滋賀大学																			
絵画、彫塑、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b>		愛媛大学	信州大学																						
絵画、構成、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b>																									
絵画、彫塑、 <b>美術科教育</b>		徳島大学	宮城教育大学																						
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史		秋田大学	群馬大学	富山大学	金沢大学	鳥取大学	長崎大学	静岡大学	熊本大学	広島大学															
絵画、彫塑、構成		弘前大学	香川大学																						
絵画、彫塑、美術理論・美術史		福井大学	山梨大学																						
絵画、構成、美術理論・美術史																									
彫塑、構成、美術理論・美術史																									
絵画、彫塑		和歌山大学	島根大学																						
構成		東北大学																							
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b> 、書道、書道史、書道科教育		福岡教育大学	特設書道																						
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、書道史、書道、書道科教育		新潟大学	特設書道																						
絵画、彫塑、美術理論・美術史、書道、書道史		奈良教育大学	特設書道																						
日本画、西洋画、木工、染織、金工、陶芸、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術・工芸科教育</b>		北海道教育大学	特設美術																						
日本画、東洋画、西洋画、木工、染織、金工、彫塑、写真、構成、美術理論・美術史、 <b>美術・工芸科教育</b>		岩手大学	特設美術																						
日本画、西洋画、木工、金工、陶芸、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術・工芸科教育</b>		佐賀大学	特設美術																						
日本画、西洋画、木工、金工、彫塑、構成、 <b>美術・工芸科教育</b> 、書道、書道史		東京学芸大学	特設美術	特設書道																					
西洋画、金工、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術・工芸科教育</b>		高知大学	特設美術																						
西洋画、木工、陶芸、彫塑、構成、 <b>美術・工芸科教育</b>		岡山大学	特設美術																						
日本画、西洋画、木工、金工、陶芸、彫塑、写真、構成、美術理論・美術史		京都教育大学	特設美術																						

7 昭和43年4月1日 文部省令第8号「国立大学の学科及び課程並びに学科目に関する省令の一部を改正する省令」																											
東北大学 一構成（教員養成課程の記載がなくなる）																											
★東京学芸大学 大学院美術教育専攻設置																											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24			
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b>	福島大学	千葉大学	愛知教育大学	大阪教育大学	山口大学	鹿児島大学	三重大学	岐阜大学	横浜国立大学	宇都宮大学	大分大学	宮崎大学															
絵画、彫塑、構成、 <b>美術科教育</b>	山形大学	茨城大学	埼玉大学	神戸大学	滋賀大学																						
絵画、彫塑、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b>	愛媛大学	信州大学																									
絵画、構成、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b>																											
絵画、彫塑、 <b>美術科教育</b>	徳島大学	宮城教育大学																									
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史	秋田大学	群馬大学	富山大学	金沢大学	鳥取大学	長崎大学	静岡大学	熊本大学	広島大学																		
絵画、彫塑、構成	弘前大学	香川大学																									
絵画、彫塑、美術理論・美術史	福井大学	山梨大学																									
絵画、構成、美術理論・美術史																											
彫塑、構成、美術理論・美術史																											
絵画、彫塑	和歌山大学	島根大学																									
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b> 、書道史、書道科教育	福岡教育大学	特設書道																									
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、書道史、書道、書道科教育	新潟大学	特設書道																									
絵画、彫塑、美術理論・美術史、書道、書道史	奈良教育大学	特設書道																									
日本画、西洋画、木工、染織、金工、陶芸、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術・工芸科教育</b>	北海道教育大学	特設美術																									
日本画、東洋画、西洋画、木工、染織、金工、彫塑、写真、構成、美術理論・美術史、 <b>美術・工芸科教育</b>	岩手大学	特設美術																									
日本画、西洋画、木工、金工、陶芸、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術・工芸科教育</b>	佐賀大学	特設美術																									
西洋画、金工、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術・工芸科教育</b>	高知大学	特設美術																									
西洋画、木工、陶芸、彫塑、構成、 <b>美術・工芸科教育</b>	岡山大学	特設美術																									
日本画、西洋画、木工、金工、陶芸、彫塑、写真、構成、美術理論・美術史	京都教育大学	特設美術																									
院・絵画第一、絵画第二、彫刻、デザイン第一、デザイン第二、工芸第一、工芸第二、造形芸術学、 <b>美術科教育第一</b> 、 <b>美術科教育第二</b> 、書道、書道史（第二課程は必修土曜夜、以下同様）	東京学芸大学	特設美術	特設書道																								
8 昭和43年6月12日 文部省令第17号「国立大学の学科及び課程並びに学科目に関する省令の一部を改正する省令」																											
宮城教育大学 +構成、美術理論・美術史																											
※北海道教育大学 記載順の変更（美術・工芸科教育、美術理論・美術史の順になる）。次の改正では元に戻る。																											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24			
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b>	福島大学	千葉大学	愛知教育大学	大阪教育大学	山口大学	鹿児島大学	三重大学	岐阜大学	横浜国立大学	宇都宮大学	大分大学	宮崎大学	宮城教育大学														
絵画、彫塑、構成、 <b>美術科教育</b>	山形大学	茨城大学	埼玉大学	神戸大学	滋賀大学																						
絵画、彫塑、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b>	愛媛大学	信州大学																									
絵画、構成、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b>																											
絵画、彫塑、 <b>美術科教育</b>	徳島大学																										
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史	秋田大学	群馬大学	富山大学	金沢大学	鳥取大学	長崎大学	静岡大学	熊本大学	広島大学																		
絵画、彫塑、構成	弘前大学	香川大学																									
絵画、彫塑、美術理論・美術史	福井大学	山梨大学																									
絵画、構成、美術理論・美術史																											
彫塑、構成、美術理論・美術史																											
絵画、彫塑	和歌山大学	島根大学																									
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b> 、書道史、書道科教育	福岡教育大学	特設書道																									
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、書道史、書道、書道科教育	新潟大学	特設書道																									
絵画、彫塑、美術理論・美術史、書道、書道史	奈良教育大学	特設書道																									
日本画、西洋画、木工、染織、金工、陶芸、彫塑、構成、 <b>美術・工芸科教育</b> 、美術理論・美術史	北海道教育大学	特設美術																									
日本画、東洋画、西洋画、木工、染織、金工、彫塑、写真、構成、美術理論・美術史、 <b>美術・工芸科教育</b>	岩手大学	特設美術																									
日本画、西洋画、木工、金工、陶芸、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術・工芸科教育</b>	佐賀大学	特設美術																									
西洋画、金工、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術・工芸科教育</b>	高知大学	特設美術																									
西洋画、木工、陶芸、彫塑、構成、 <b>美術・工芸科教育</b>	岡山大学	特設美術																									
日本画、西洋画、木工、金工、陶芸、彫塑、写真、構成、美術理論・美術史	京都教育大学	特設美術																									
院・絵画第一、絵画第二、彫刻、デザイン第一、デザイン第二、工芸第一、工芸第二、造形芸術学、 <b>美術科教育第一</b> 、 <b>美術科教育第二</b> 、書道、書道史	東京学芸大学	特設美術	特設書道																								
9 昭和44年4月1日 文部省令第9号「国立大学の学科及び課程並びに学科目に関する省令の一部を改正する省令」																											
※北海道教育大学 記載順が戻る（美術理論・美術史、美術・工芸科教育の順になる）																											

10 昭和44年5月21日文部省令第14号「国立大学の学科及び課程並びに学科目に関する省令の一部を改正する省令」																								
弘前大学 + 美術科教育																								
京都教育大学 + 美術工芸科教育																								
奈良教育大学 + 美術科教育																								
香川大学 + 美術科教育																								
長崎大学 + 美術科教育																								
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b>	福島大学	千葉大学	愛知教育大学	大阪教育大学	山口大学	鹿児島大学	三重大学	岐阜大学	横浜国立大学	宇都宮大学	大分大学	宮崎大学	宮城教育大学	長崎大学										
絵画、彫塑、構成、 <b>美術科教育</b>	山形大学	茨城大学	埼玉大学	神戸大学	滋賀大学	弘前大学	香川大学																	
絵画、彫塑、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b>	愛媛大学	信州大学																						
絵画、構成、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b>																								
絵画、彫塑、 <b>美術科教育</b>	徳島大学																							
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史	秋田大学	群馬大学	富山大学	金沢大学	鳥取大学	静岡大学	熊本大学	広島大学																
絵画、彫塑、構成																								
絵画、彫塑、美術理論・美術史	福井大学	山梨大学																						
絵画、構成、美術理論・美術史																								
彫塑、構成、美術理論・美術史																								
絵画、彫塑	和歌山大学	島根大学																						
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b> 、書道、書道史、書道科教育	福岡教育大学	特設書道																						
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、書道史、書道、書道科教育	新潟大学	特設書道																						
絵画、彫塑、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b> 、書道、書道史	奈良教育大学	特設書道																						
日本画、西洋画、木工、染織、金工、陶芸、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術・工芸科教育</b>	北海道教育大学	特設美術																						
日本画、東洋画、西洋画、木工、染織、金工、彫塑、写真、構成、美術理論・美術史、 <b>美術・工芸科教育</b>	岩手大学	特設美術																						
日本画、西洋画、木工、金工、陶芸、彫塑、写真、構成、美術理論・美術史、 <b>美術工芸科教育</b>	京都教育大学	特設美術																						
日本画、西洋画、木工、金工、陶芸、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術・工芸科教育</b>	佐賀大学	特設美術																						
西洋画、金工、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術・工芸科教育</b>	高知大学	特設美術																						
西洋画、木工、陶芸、彫塑、構成、 <b>美術・工芸科教育</b>	岡山大学	特設美術																						
院：絵画第一、絵画第二、彫刻、デザイン第一、デザイン第二、工芸第一、工芸第二、造形芸術学、 <b>美術科教育第一</b> 、 <b>美術科教育第二</b> 、書道、書道史	東京学芸大学	特設美術	特設書道																					
11 昭和45 年4月17日文部省令第14号「国立大学の学科及び課程並びに学科目に関する省令の一部を改正する省令」																								
静岡大学 + 美術科教育																								
島根大学 + 美術科教育																								
岡山大学 + 金工																								
高知大学 + 木工																								
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b>	福島大学	千葉大学	愛知教育大学	大阪教育大学	山口大学	鹿児島大学	三重大学	岐阜大学	横浜国立大学	宇都宮大学	大分大学	宮崎大学	宮城教育大学	長崎大学	静岡大学									
絵画、彫塑、構成、 <b>美術科教育</b>	山形大学	茨城大学	埼玉大学	神戸大学	滋賀大学	弘前大学	香川大学																	
絵画、彫塑、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b>	愛媛大学	信州大学																						
絵画、構成、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b>																								
絵画、彫塑、 <b>美術科教育</b>	徳島大学	島根大学																						
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史	秋田大学	群馬大学	富山大学	金沢大学	鳥取大学	熊本大学	広島大学																	
絵画、彫塑、構成																								
絵画、彫塑、美術理論・美術史	福井大学	山梨大学																						
絵画、構成、美術理論・美術史																								
彫塑、構成、美術理論・美術史																								
絵画、彫塑	和歌山大学																							
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b> 、書道、書道史、書道科教育	福岡教育大学	特設書道																						
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、書道史、書道、書道科教育	新潟大学	特設書道																						
絵画、彫塑、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b> 、書道、書道史	奈良教育大学	特設書道																						
日本画、西洋画、木工、染織、金工、陶芸、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術・工芸科教育</b>	北海道教育大学	特設美術																						
日本画、東洋画、西洋画、木工、染織、金工、彫塑、写真、構成、美術理論・美術史、 <b>美術・工芸科教育</b>	岩手大学	特設美術																						
日本画、西洋画、木工、金工、陶芸、彫塑、写真、構成、美術理論・美術史、 <b>美術工芸科教育</b>	京都教育大学	特設美術																						
日本画、西洋画、木工、金工、陶芸、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術・工芸科教育</b>	佐賀大学	特設美術																						
西洋画、木工、金工、陶芸、彫塑、構成、 <b>美術・工芸科教育</b>	岡山大学	特設美術																						
西洋画、木工、金工、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術・工芸科教育</b>	高知大学	特設美術																						
院：絵画第一、絵画第二、彫刻、デザイン第一、デザイン第二、工芸第一、工芸第二、造形芸術学、 <b>美術科教育第一</b> 、 <b>美術科教育第二</b> 、書道、書道史	東京学芸大学	特設美術	特設書道																					

63

64

18 昭和51年5月10日文部省令第24号「国立大学の学科及び課程並びに学科目に関する省令の一部を改正する省令」																											
秋田大学 + 美術科教育																											
山形大学 + 美術理論・美術史																											
島根大学 + 構成																											
広島大学 + 美術科教育																											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24			
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b>	福島大学	千葉大学	大阪教育大学	山口大学	鹿児島大学	三重大学	岐阜大学	横浜国立大学	宇都宮大学	大分大学	宮崎大学	宮崎教育大学	長崎大学	静岡大学	熊本大学	群馬大学	鳥取大学	富山大学	信州大学	愛媛大学	秋田大学	山形大学	広島大学				
絵画、彫塑、構成、 <b>美術科教育</b>	茨城大学	埼玉大学	神戸大学	滋賀大学	弘前大学	香川大学	徳島大学	島根大学																			
絵画、彫塑、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b>	福井大学																										
絵画、構成、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b>																											
絵画、彫塑、 <b>美術科教育</b>	和歌山大学																										
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史	金沢大学																										
絵画、彫塑、構成																											
絵画、彫塑、美術理論・美術史	山梨大学																										
絵画、構成、美術理論・美術史																											
彫塑、構成、美術理論・美術史																											
絵画、彫塑																											
絵画、織染、陶芸、彫塑、構成、 <b>美術科教育</b>	琉球大学																										
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b> 、書道、書道史、書道科教育	福岡教育大学	愛知教育大学	特設書道																								
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b> 、書道史、書道、書道科教育	新潟大学	特設書道																									
絵画、彫塑、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b> 、書道、書道史、書道科教育	奈良教育大学	特設書道																									
日本画、西洋画、木工、染織、金工、陶芸、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術・工芸科教育</b>	北海道教育大学	特設美術																									
日本画、東洋画、西洋画、木工、染織、金工、彫塑、写真、構成、美術理論・美術史、 <b>美術・工芸科教育</b>	岩手大学	特設美術																									
日本画、西洋画、木工、金工、陶芸、彫塑、写真、構成、美術理論・美術史、 <b>美術工芸科教育</b>	京都教育大学	特設美術																									
日本画、西洋画、木工、金工、陶芸、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術・工芸科教育</b>	佐賀大学	特設美術																									
西洋画、木工、金工、陶芸、彫塑、構成、 <b>美術・工芸科教育</b>	岡山大学	特設美術																									
西洋画、木工、金工、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術・工芸科教育</b>	高知大学	特設美術																									
院：絵画第一、絵画第二、彫刻、デザイン第一、デザイン第二、工芸第一、工芸第二、造形芸術学、 <b>美術科教育第一</b> 、 <b>美術科教育第二</b> 、書道、書道史	東京学芸大学	特設美術	特設書道																								
院：絵画第一、絵画第二、彫塑、デザイン、工芸、造形芸術学、 <b>美術科教育</b>	大阪教育大学																										
19 昭和52年4月18日文部省令第14号「国立大学の学科及び課程並びに学科目に関する省令の一部を改正する省令」																											
山梨大学 + 構成	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24			
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b>	福島大学	千葉大学	大阪教育大学	山口大学	鹿児島大学	三重大学	岐阜大学	横浜国立大学	宇都宮大学	大分大学	宮崎大学	宮崎教育大学	長崎大学	静岡大学	熊本大学	群馬大学	鳥取大学	富山大学	信州大学	愛媛大学	秋田大学	山形大学	広島大学				
絵画、彫塑、構成、 <b>美術科教育</b>	茨城大学	埼玉大学	神戸大学	滋賀大学	弘前大学	香川大学	徳島大学	島根大学																			
絵画、彫塑、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b>	福井大学																										
絵画、構成、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b>																											
絵画、彫塑、 <b>美術科教育</b>	和歌山大学																										
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史	金沢大学	山梨大学																									
絵画、彫塑、構成																											
絵画、彫塑、美術理論・美術史																											
絵画、構成、美術理論・美術史																											
彫塑、構成、美術理論・美術史																											
絵画、彫塑																											
絵画、織染、陶芸、彫塑、構成、 <b>美術科教育</b>	琉球大学																										
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b> 、書道、書道史、書道科教育	福岡教育大学	愛知教育大学	特設書道																								
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b> 、書道史、書道、書道科教育	新潟大学	特設書道																									
絵画、彫塑、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b> 、書道、書道史、書道科教育	奈良教育大学	特設書道																									
日本画、西洋画、木工、染織、金工、陶芸、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術・工芸科教育</b>	北海道教育大学	特設美術																									
日本画、東洋画、西洋画、木工、染織、金工、彫塑、写真、構成、美術理論・美術史、 <b>美術・工芸科教育</b>	岩手大学	特設美術																									
日本画、西洋画、木工、金工、陶芸、彫塑、写真、構成、美術理論・美術史、 <b>美術工芸科教育</b>	京都教育大学	特設美術																									
日本画、西洋画、木工、金工、陶芸、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術・工芸科教育</b>	佐賀大学	特設美術																									
西洋画、木工、金工、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術・工芸科教育</b>	高知大学	特設美術																									
西洋画、木工、金工、陶芸、彫塑、構成、 <b>美術・工芸科教育</b>	岡山大学	特設美術																									
院：絵画第一、絵画第二、彫刻、デザイン第一、デザイン第二、工芸第一、工芸第二、造形芸術学、 <b>美術科教育第一</b> 、 <b>美術科教育第二</b> 、書道、書道史	東京学芸大学	特設美術	特設書道																								
院：絵画第一、絵画第二、彫塑、デザイン、工芸、造形芸術学、 <b>美術科教育</b>	大阪教育大学																										

20 昭和53年4月1日 文部省令第13号「国立大学の学科及び課程並びに学科目に関する省令の一部を改正する省令」																								
金沢大学 + 美術科教育																								
山梨大学 + 美術科教育																								
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b>	福島大学	千葉大学	大阪教育大学	山口大学	鹿児島大学	三重大学	岐阜大学	横浜国立大学	宇都宮大学	大分大学	宮崎大学	宮崎教育大学	長崎大学	静岡大学	熊本大学	群馬大学	鳥取大学	富山大学	信州大学	愛媛大学	秋田大学	山形大学	広島大学	金沢大学
絵画、彫塑、構成、 <b>美術科教育</b>	茨城大学	埼玉大学	神戸大学	滋賀大学	弘前大学	香川大学	徳島大学	島根大学																
絵画、彫塑、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b>	福井大学																							
絵画、構成、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b>																								
絵画、彫塑、 <b>美術科教育</b>	和歌山大学																							
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史																								
絵画、彫塑、構成																								
絵画、彫塑、美術理論・美術史																								
絵画、構成、美術理論・美術史																								
彫塑、構成、美術理論・美術史																								
絵画、彫塑																								
絵画、織染、陶芸、彫塑、構成、 <b>美術科教育</b>	琉球大学																							
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b> 、書道、書道史、書道科教育	福岡教育大学	愛知教育大学	特設書道																					
絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b> 、書道史、書道、書道科教育	新潟大学	特設書道																						
絵画、彫塑、美術理論・美術史、 <b>美術科教育</b> 、書道、書道史、書道科教育	奈良教育大学	特設書道																						
日本画、西洋画、木工、染織、金工、陶芸、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術・工芸科教育</b>	北海道教育大学	特設美術																						
日本画、東洋画、西洋画、木工、染織、金工、彫塑、写真、構成、美術理論・美術史、 <b>美術・工芸科教育</b>	岩手大学	特設美術																						
日本画、西洋画、木工、金工、陶芸、彫塑、写真、構成、美術理論・美術史、 <b>美術・工芸科教育</b>	京都教育大学	特設美術																						
日本画、西洋画、木工、金工、陶芸、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術・工芸科教育</b>	佐賀大学	特設美術																						
西洋画、木工、金工、彫塑、構成、美術理論・美術史、 <b>美術・工芸科教育</b>	高知大学	特設美術																						
西洋画、木工、金工、陶芸、彫塑、構成、 <b>美術・工芸科教育</b>	岡山大学	特設美術																						
院：絵画第一、絵画第二、彫刻、デザイン第一、デザイン第二、工芸第一、工芸第二、造形芸術学、 <b>美術科教育第一、美術科教育第二、書道、書道史</b>	東京学芸大学	特設美術	特設書道																					
院：絵画第一、絵画第二、彫塑、デザイン、工芸、造形芸術学、 <b>美術科教育</b>	大阪教育大学																							



## 2 美術関係学科目設置数の変化と整備過程（詳細版）

	絵画	彫塑	構成	美術理論・美術史	美術科教育
昭和39年2月	45	42	38	33	21
昭和39年4月	46 静岡大学+1	42	39 滋賀大学+1	34 熊本大学+1	22 三重大学+1
昭和40年3月	46	42	39	34	23 岐阜大学+1
昭和41年4月	47 宮城教育大学(※1)+1	44 宮城教育大学(※1)・広島大学+2	38 信州大学-1	34	23
昭和42年4月	46 東北大学(※2)-1	46 横浜国立大学・高知大学(※3)+2	38	33 東北大学(※2)-1	24 宮城教育大学(※1)+1
昭和42年5月	46	46	38	33	28 宇都宮大学・滋賀大学・大分大学・宮崎大学+4
昭和43年4月	46	46	37 東北大学(※2)-1	34 東京学芸大学(※4)+1	28
昭和43年6月	46	46	38 宮城教育大学(※1)+1	35 宮城教育大学(※1)+1	28
昭和44年5月	46	46	38	35	33 弘前大学・京都教育大学・奈良教育大学・香川大学・長崎大学+5
昭和45年4月	46	46	38	35	35 静岡大学・島根大学+2
昭和47年5月	46	46	38	35	38 福井大学・和歌山大学・熊本大学+3
昭和48年4月	47 琉球大学(※5)+1	47 琉球大学(※5)+1	40 徳島大学・琉球大学(※5)+2	35	41 群馬大学・鳥取大学・琉球大学(※5)+3
昭和49年6月	47	47	40	35	42 新潟大学+1
昭和50年4月	47	47	42 信州大学・愛媛大学+2	35	43 富山大学+1
昭和51年5月	47	47	43 島根大学+1	36 山形大学+1	45 秋田大学・広島大学+2
昭和52年4月	47	47	44 山梨大学+1	36	45
昭和53年4月	47	47	44	36	47 金沢大学・山梨大学+2

※1宮城教育大学新設による

※2東北大学教員養成部廃止による

※3高知大学特設美術設置による

※4東京学芸大学大学院美術教育専攻設置による（造形芸術学を美術理論・美術史として集計）

※5沖縄返還による

※現代日本教育制度史料編集委員会『現代日本教育制度史料』第25-45巻（東京法令出版、昭和62年-平成2年）を参照して作成した。

### 3 学科目「美術科教育」の全国教員養成大学・学部への整備

大学数		設置大学
昭和39年2月	21	北海道学芸大学・岩手大学・山形大学・福島大学・茨城大学・埼玉大学・千葉大学・東京学芸大学・横浜国立大学・信州大学・愛知学芸大学・大阪学芸大学・神戸大学・岡山大学・山口大学・徳島大学・愛媛大学・高知大学・福岡学芸大学・佐賀大学・鹿児島大学 以上21
昭和39年4月	22	三重大学+1
昭和40年3月	23	岐阜大学+1
昭和41年4月	23	
昭和42年4月	24	宮城教育大学(※1)+1
昭和42年5月	28	宇都宮大学・滋賀大学・大分大学・宮崎大学+4
昭和43年4月	28	
昭和43年6月	28	
昭和44年5月	33	弘前大学・京都教育大学・奈良教育大学・香川大学・長崎大学+5
昭和45年4月	35	静岡大学・島根大学+2
昭和47年5月	38	福井大学・和歌山大学・熊本大学+3
昭和48年4月	41	群馬大学・鳥取大学・琉球大学(※2)+3
昭和49年6月	42	新潟大学+1
昭和50年4月	43	富山大学+1
昭和51年5月	45	秋田大学・広島大学+2
昭和52年4月	45	
昭和53年4月	47	金沢大学・山梨大学+2

※1宮城教育大学新設による

※2沖縄返還による

※現代日本教育制度史料編集委員会『現代日本教育制度史料』第25-45巻（東京法令出版、昭和62年-平成2年）を参照して作成した。

## 第二章 各教員養成大学・学部における美術教育学の人的制度基盤の成立過程 —北海道・東北地方—

### 第一節 構成と凡例

#### 1 構成

第二章から第七章で、美術教育学の人的制度基盤が、各教員養成大学・学部でどのように成立していったのかを見ていく。全大学を一つの章にまとめると他章とのバランスを欠くので、便宜的に地方で章分けをする。すなわち第二章で北海道・東北地方、第三章で関東地方、第四章で中部地方、第五章で近畿地方、第六章で中国・四国地方、第七章で九州・沖縄地方の教員養成大学・学部における美術教育学の人的制度基盤の成立過程の概略を示す。各々の大学の美術教育学の人的制度基盤の成立過程の詳細は、各々論文に相当する。すべてを収録することはできないので、第八章で島根大学と岡山大学を代表として取り上げる。

諸資料から美術関係教官勤務表を作成し、その表から見えてくる実相の概略を三時期区分に沿って検討する。表作成に用いた諸資料は、各章の表の末尾に示す。なお教官名の後の（ ）内には修学校を記しておく。検討の観点は以下の通りである。

1. 師範学校から教員養成大学・学部への移行期：①美術関係教官の師範学校から大学への移行状況。②美術科教育（図画工作科教育）を専門とする教官、あるいは専門に担当する教官の有無。③資料が見つければ、美術科教育関係授業（美術科教育法）の担当者。

2. 学科目の設置と具体的人員の配置：①昭和 39 年学科目制度発足時に示された学科目の種類。そして学科目「美術科教育」が置かれた時期。②学科目「美術科教育」に人的配置がなされた時期。③学科目「美術科教育」所属教官の特定。

3. 大学院美術教育専攻の設置：①大学院教育学研究科の設置時期。②大学院美術教育専攻の設置時期。③大学院美術教育専攻設置時の分野「美術科教育」教官の特定。

各大学の最初の学科目構成と学科目「美術科教育」設置年は、現代日本教育制度史料編集委員会『現代日本教育制度史料』第 25-45 巻（東京法令出版、昭和 62 年-平成 2 年）を参照して記す。

#### 2 美術関係教官勤務表の作成方法と凡例

各教員養成大学・学部の美術関係教官勤務表の作成方法と凡例は、序章の先行研究で述べた通り、金子一夫の戦前期中等学校図画教員勤務表を参考に作成する<sup>1)</sup>。具体的にはまず、各大学及び学部の大学史・学部史を基礎文献として調査する。在職教官名、在職期間、専門、所属学科目、出身校を確認する。ただ、それらがすべて記載されている場合は非常に少ない。教官名すら記載されていない場合もある。次に、各都道府県で年度ごとに発行されていた『学事関係職員録』『教職員録』、各大学・学部の各種出版物、各同窓会による各種出版物、各教官による出版物等を調査し、さらに関係者に聞き取り調査ができる場合はする。それらを総合して、美術関係教官勤務表を作成する。

## 凡例

○縦の朱線は、左から順に、大学設置、学科目制度発足、大学院設置の時期を示す。特設美術が設置された場合はその時期を縦の青線で示す。

○横の実線は在職期間を示す。点線は非常勤講師としての、破線は附属校への在職期間を示す。

○横の線の両端の数字が就任と退任の年月日を表す。定年退官の確認が取れた場合は定年と示す。転出先の確認がとれた場合は転出先を示す。

○横の線の端が黒丸の場合は就任あるいは退任の年(月日)が明確であることを示す。

○横の線の端が矢印の場合はその時点までの勤務が確実であることを示す。

○横の線の上部には判明した場合は職位とその就任年月を示す。

○職位の左に就任年月が示されていないものは、年度ごとに発行された各都道府県・各師範学校・各大学の職員録・要覧・一覧・便覧・概要等に記された職位を示したものである。そのため現実にはそれより以前の就任である可能性がある。

○後任者が前任者転退任年と同年の次月以降に就任した場合、その月の境を斜線(/)で示す。

○人名の後の括弧内には学科目ないし担当教科を示す。さらにその後に判明した場合は修学校名の略記と卒業・修了年月を示す。満期退学の場合は「満」と記す。

○その他、当該教官に関して重要と思われる情報があつた場合、横の線の下部に示す。

○書道教官に関しては、美術講座に含まれていた場合のみ示し、書道講座、特設書道といったように独立していた場合は示さない。

○副手、技能補佐員は示さない。

○灰色の文字及び線は、所属が美術講座以外であることを示す。

○学校名の略記は以下のように行う。その他の学校に関しても同じ要領で略記する。

師範学校に関しては頭文字と「師」あるいは「女師」を、大学に関しては頭文字と「大」を組み合わせる。ただし、頭文字だけでは他校と判別不能の場合はその限りではない。大学院に関しては、当該大学の略記の「大」を削除して「院」と示す。例えば、札幌師範学校は「札師」、福島県女子師範学校は「福島女師」、東京学芸大学は「東学大」と示す。鳥取大学関係を例にすると以下のようになる。

鳥師：鳥取県師範学校(昭和17年以前)。鳥取師範学校(昭和18年以降)。鳥女師：鳥取県女子師範学校。鳥青師：鳥取青年師範学校。男子部：鳥取師範学校男子部。女子部：鳥取師範学校女子部。鳥大師：鳥取大学鳥取師範学校。鳥青学養成所：鳥取県立青年学校教員養成所。八頭高女：鳥取県立八頭高等女学校。鳥大：鳥取大学。鳥院：鳥取大学大学院。その他、教官の修学校は以下のように略記する。以下に挙げていない校名も同様に略記する。なお当該大学を卒業後、同じ大学の大学院に進学した場合は「同院」と示す。

文検：文部省中等学校教員検定試験(西用：西洋画・用器画、日用：日本画・用器画)。東美図師：東京美術学校図画師範科。東芸大：東京芸術大学。東高師図手：東京高等師範学校図画手工専修科。東教大：東京教育大学。帝美：帝国美術学校。京絵専：京都市立絵画専門学校。京市美大：京都市立美術大学。京高工：京都高等工芸学校。

## 第二節 北海道地方

### 1 北海道教育大学の概観

北海道教育大学は、札幌、岩見沢、函館、旭川、釧路に各校が置かれ、一つの大学でありかつ実質は五つの大学でもあるという他大学にはない独特の様相をもつ。それゆえ、北海道地方に関してのみ、各校の検討の前に、本項を設けて、先に師範学校の出発から法人化までの変遷の概略、学科目制度で示された学科目、教官の特徴、北海道教育大学における美術教育学の人的制度基盤の成立過程の特徴について確認しておく。そして次項以下で各校について検討する。

#### (1) 北海道教育大学の変遷

まず、明治 19 年 9 月に札幌師範学校、大正 3 年 4 月に函館師範学校、大正 12 年 4 月に旭川師範学校、大正 12 年 3 月に岩見沢に庁立青年学校教員養成所が創立する<sup>2)</sup>。昭和 18 年の師範学校の官立化に伴い名称変更することとなり、それぞれ、北海道第一師範学校、北海道第二師範学校、北海道第三師範学校、北海道青年師範学校となる。なお、昭和 15 年に北海道女子師範学校が創立し、昭和 18 年から北海道第一師範学校女子部となる。

戦後、師範学校の大学昇格に伴い、昭和 24 年 5 月に北海道第一師範学校を母胎に北海道学芸大学札幌分校、北海道第二師範学校を母胎に北海道学芸大学函館分校、北海道第三師範学校を母胎に北海道学芸大学旭川分校が創立する。岩見沢の北海道青年師範学校は北海道学芸大学札幌分校岩見沢分教場に引き継がれた後、昭和 29 年 4 月に北海道学芸大学岩見沢分校となる。それまで高等教育機関のなかった釧路には北海道学芸大学釧路分校が昭和 24 年 5 月に新設される。昭和 33 年 4 月、北海道学芸大学札幌分校に特別教科(美術・工芸)教員養成課程が設置される。昭和 41 年 4 月、北海道学芸大学学芸学部から北海道教育大学教育学部に名称変更される。平成 5 年 4 月、分校制が廃止され、分校名が札幌校、函館校、旭川校、釧路校、岩見沢校と改称される。そして平成 16 年 4 月、国立大学法人化された。

#### (2) 学科目制度で示された学科目

昭和 39 年 2 月の最初の学科目は分校ごとではなく北海道学芸大学一括で、日本画、西洋画、木工、染織、金工、陶芸、彫塑、構成、美術理論・美術史、美術・工芸科教育が示された。札幌に特設美術が設置されていたので、それに対応した学科目となっている。札幌は別として、他の各 4 分校に当時これらの学科目すべてを担えるような教官定員も現員もなかった。

#### (3) 北海道学芸大学・北海道教育大学の美術関係教官の特徴

1. 自校出身者及び北海道出身者が多い。
2. 札幌分校と旭川分校は、東京美術学校・東京芸術大学出身者が圧倒的に多い。函館分校と釧路分校は東京高等師範学校・東京教育大学出身者が多い。
3. 長年勤務する者が多い。それは師範学校の美術関係教官にもあてはまる。ただし、釧路分校は初期に転出入が多い。

#### (4) 北海道教育大学における美術教育学の人的制度基盤の成立過程の特徴

北海道の教員養成大学における美術教育学の人的制度基盤の成立過程の特徴は、三時期に区分して以下のようにまとめられる。

1. 師範学校から教員養成大学へ美術関係教官はほぼ移行した。この時期は美術科教育を専門に担当・研究する教官はいなかった。この時期は制度的には美術科教育の専門性は保証されておらず、ましてや「美術教育学」は認識されていなかった。

2. 美術科教育の学科目の設置は遅めであった。在職教官の所属移動と、大学院美術教育専攻設置先発校で養成された美術科教育専門家の新規採用によって、定員は充足された。最初期の担当者は必ずしも美術科教育専門家とは限らなかった。

3. 大学院の設置も遅めであった。平成 4 年に北海道で最初の大学院美術教育専攻が札幌分校と岩見沢分校の協同で設置された。その後、平成 8 年に旭川校、平成 10 年に全国で最後から二番目に函館校と釧路校にそれぞれ設置された。大学院設置時期に美術科教育専門家が揃えられていった。大学院の美術科教育分野教官の出身母胎は徐々に北海道教育大学となっていった。大学院美術教育専攻設置により、北海道の美術教育学の人的制度基盤の整備は完了した。

## 2 北海道教育大学（札幌）

1. 北海道第一師範学校（札幌師範学校）から北海道学芸大学札幌分校へ美術関係教官はほぼ移行した。長きにわたって師範学校に勤務していた菅原次郎と吉田五左衛門に師事した藤野高常、そして吉田に師事した戸坂太郎、寺井信一が着任し、大学に移行する。吉田五左衛門（岩手県師範学校・文検手工）は大正 7 年から昭和 25 年まで札幌師範学校・北海道第一師範学校に勤務した。校内に手工教育専科教員養成機関を付設するなど、北海道手工教育の発展に尽力した<sup>3)</sup>。著書に『小学校手工科に適用せる木工製図及工作法 改訂増補版』（北海道教育新聞社、昭和 4 年）がある。

昭和 33 年 4 月特別教科(美術・工芸)教員養成課程の設置に伴って新しく多くの教官が採用された。東京芸術大学出身者の採用が多い。特設美術の設置によって学科目制度に先んじて教官の専門性が明確になった。ただ、美術科教育を専門に担当・研究する教官はいなかった。美術科教育関係授業は分担されていた。

2. 構成（塗装工芸）を専門に担当・研究していた伊藤隆一（東京芸術大学工芸）が昭和 58 年頃に美術科教育の学科目に所属を移動する。それ以前から美術科教育関係授業は伊藤隆一、絵画（日本画）を専門とする川井 坦<sup>ひろし</sup>（北海道学芸大学札幌分校）、金工を専門とする畠山三代喜（北海道第三師範学校・日本大学芸術学部・東京芸術大学）が主として担当していた<sup>4)</sup>。

3. 平成 4 年 4 月に札幌・岩見沢両校の協同で大学院教育学研究科が設置され、そこに美術教育専攻も設置された。札幌分校の伊藤隆一と岩見沢分校の福山博光の美術科教育分野二名体制で、北海道教育大学では最初の大学院美術教育専攻が設置された。

### 3 北海道教育大学（岩見沢）

1. 昭和 29 年 4 月に札幌分校岩見沢分教場は北海道学芸大学岩見沢分校となる。北海道青年師範学校から移行した美術関係教官は見当たらなかった。札幌分校から移った藤野高常、砂田友治、青沼功と、新しく採用された宮脇理の体制でスタートした。美術科教育関係授業は分担されており、特に砂田友治（北海道函館師範学校・東京高等師範学校）が多数受けもっていた<sup>5)</sup>。美術科教育を専門に担当・研究する教官はいなかった。

2. 昭和 56 年に福山博光（高知大学・大阪教育大学大学院）が最初の学科目「美術科教育」所属教官として着任した。

3. 前述の通り、平成 4 年 4 月に札幌・岩見沢両校の協同で大学院が設置された。岩見沢分校からは福山博光が大学院美術科教育分野の担当となった。

### 4 北海道教育大学（函館）

1. 北海道第二師範学校（函館師範学校）から北海道学芸大学函館分校へ美術関係教官はほぼ移行した。美術科教育を専門に担当・研究する教官はいなかった。

2. 昭和 50 年頃に絵画を専門とする宮林繁雄（東京美術学校図画師範科）が絵画から美術科教育の学科目に所属を移動した。宮林は大学美術教科教育研究会第一回研究会（昭和 54 年 3 月）の参加者であった。昭和 56 年、宮林の定年退官に伴い、福田隆眞（岡山大学・東京教育大学大学院）が学科目「美術科教育」で着任する。昭和 63 年、福田の山口大学転出に伴い、山田一美（東京学芸大学・同院）が学科目「美術科教育」で着任する。

3. 山田の金沢大学転出に伴い、佐藤昌彦（福島大学・上越教育大学大学院）が着任する。さらに「酒井式」描画指導法で知られる酒井臣吾（新潟大学）が着任する。平成 5 年 4 月に大学院教育学研究科が設置される。そして平成 10 年 4 月に大学院美術教育専攻が、佐藤と酒井の美術科教育分野二名体制で設置された。

### 5 北海道教育大学（旭川）

1. 北海道第三師範学校（旭川師範学校）から北海道学芸大学旭川分校へ美術関係教官はほぼ移行した。美術科教育を専門に担当・研究する教官はいなかった。美術科教育関係授業は分担もしくは非常勤講師が担当していた。

2. 昭和 56 年頃に絵画を専門とする神田一明（東京芸術大学）が絵画から美術科教育の学科目に所属を移動する。平成 2 年 4 月に武田薫（大阪教育大学大学院）が学科目「美術科教育」で着任する。それに伴い、神田は絵画の学科目に所属を移動する。

3. 平成 5 年に大学院教育学研究科が設置される。平成 8 年に南部正人（北海道学芸大学・横浜国立大学・筑波大学研究生）が香川大学より転入する。そして平成 8 年 4 月に大学院美術教育専攻が、武田と南部の美術科教育分野二名体制で設置された。

## 6 北海道教育大学（釧路）

1. 北海道学芸大学釧路分校は昭和 24 年 5 月に新設された。北海道第三師範学校から望月正男が異動し、徐々に新しい教官が着任していった。美術科教育を専門に担当・研究する教官はいなかった。

2. 昭和 47 年頃に絵画を専門とする福井凱将（北海道学芸大学釧路分校）が絵画から美術科教育の学科目に所属を移動した。福井は美術教育の論文や著書を執筆していく。

3. 北海道音威子府高等学校に勤務していた佐々木宰（北海道教育大学函館分校）が平成 6 年に着任する。平成 7 年に大学院教育学研究科が設置される。そして平成 10 年 4 月に大学院美術教育専攻が福井と佐々木の美術科教育分野二名体制で設置された。

## 第三節 東北地方

### 1 弘前大学

1. 青森師範学校から弘前大学教育学部へ美術関係教官は全員は移行しなかった。昭和 20 年前後は教官の入れ替わりが多い。大学へ移行した教官を見ると、青森県出身者が多い。川村精一郎、笹森清一郎、小島義三郎がそうである。大学移行後、唯一の助手で新規採用された石原英雄は栃木県出身であった。石原は彫塑を主に担当していた。この時期は美術科教育を専門に担当・研究する教官はいなかった。

2. 学科目制度発足時に示された学科目は、絵画、彫塑、構成の三つであった。昭和 44 年 5 月に学科目「美術科教育」が設置された。石原英雄（東京高等師範学校）が彫塑から美術科教育の学科目に所属を移動することによって人的配置がなされた。なお、学科目「美術科教育」設置前の昭和 40 年代前半の『学生便覧』では「美術科教育法」は堀米勢吉、「工芸科教育法」は石原英雄の担当とされる。堀米勢吉は、後に「幼児教育学教室」に移り「保育内容の研究」所属教官となり、昭和 58 年に上越教育大学に転出する。石原は昭和 52 年に広島大学教育学部東雲分校に転出する。石原転出後は、弘前大学における美術科教育の学科目は東京芸術大学出身者が担っていく。石原の後任として、埼玉県公立学校教員であった内田義夫（東京芸術大学彫刻）が着任する。ただ内田は昭和 55 年に亡くなってしまう。内田の後任として、木工芸作家でもあった篁敏生が着任する。

3. 平成 2 年、篁の退官に伴い、その後任として星邦男（東京芸術大学・明星大学人文学部通信）が着任する。平成 10 年に東京芸術大学大学院で美術教育学を専攻した蝦名敦子（明治学院大学・東京芸術大学・同院美術教育学・同博）が着任する。蝦名は実践研究を続けていく。平成 6 年 4 月に大学院教育学研究科が設置される。そして平成 11 年 4 月に大学院美術教育専攻が、星と蝦名の美術科教育分野二名体制で設置された。全国で最後の設置であり、これによって全国の教員養成大学・学部大学院美術教育専攻設置が完了した。



## 2 岩手大学

1. 岩手師範学校から岩手大学学芸学部へ美術関係教官はほぼ移行した。昭和 30 年 7 月 1 日に特設美術が、岩手大学学芸学部美術科を母胎として、盛岡短期大学美術工芸科の教官が移る形で新設された<sup>6)</sup>。森口多利(多里)、深澤省三、佐々木一郎の三名が盛岡短期大学美術工芸科から移行した。昭和 30 年代に入ると絵画を専門とする藤原徳太郎が美術科教育関係授業を主として担当するようになっていく。この時期は美術科教育を専門に担当・研究する教官はいなかった。

2. 学科目制度発足時に示された学科目は、特設美術であったので、日本画、東洋画、西洋画、木工、染織、金工、彫塑、写真、構成、美術理論・美術史、美術・工芸科教育であった。藤原徳太郎(北海道札幌師範学校・東京美術学校図画師範科)が学科目「美術科教育」に所属した。藤原は、昭和 5 年から昭和 44 年までの長きにわたって岩手(県)師範学校及び岩手大学に勤務した。藤原の退官後、美術科教育の学科目は短期間所属する教官と非常勤講師によって維持されていく。昭和 45 年に、宮村他家次(東京美術学校図画師範科)が写真から、千葉運孝(日本大学)が技術講座の機械から美術科教育の学科目に所属を移動する。二名とも師範学校から移行した教官であった。千葉は元々美術講座の所属で、技術新設に伴い技術に籍を移していた。ただ、同年 9 月に宮村は辞職し、同年 12 月に千葉は亡くなってしまう。その間及びその後の暫くの間は藤原徳太郎、森口多利、鈴木信一が非常勤講師で支えた。その後、三神弘彦(東京教育大学大学院)が美術理論・美術史から美術科教育の学科目に所属移動するものの、昭和 50 年に金沢大学に転出する。昭和 51 年に長田謙一(東京芸術大学・同院)、昭和 52 年に種倉紀昭(東京教育大学・同院)が着任し、10 年ほどはこの二名によって美術科教育の学科目は担われる。昭和 61 年頃に種倉は専門である日本画に所属移動し、昭和 63 年に長田は千葉大学へ転出する。昭和 61 年に煤孫康二(岩手大学・筑波大学大学院)が着任し、美術科教育の学科目はようやく安定した。

3. 平成 7 年 4 月に大学院教育学研究科が設置され、そこに美術教育専攻も設置された。この設置の時期のみ、日本画に移動していた種倉が美術科教育分野担当に 2 年間程戻り、大橋皓也(東京美術学校油絵)が非常勤講師で加わった。煤孫、種倉、大橋の美術科教育分野三名体制で大学院美術教育専攻は始まった。

## 3 宮城教育大学

1. 宮城師範学校から東北大学教育学部への教官の移行は難航した。旧帝国大学と師範学校の組み合わせであるので、どの講座の教官の移行も難航した。全国的には比較的問題が少なく移行が認められる傾向にあった美術関係教官であるが、東北大学教育学部に全員は移行できなかった。昭和 20 年頃在職しながらも大学に移行しなかった教官に、宮森正三郎、花岡一、高久一郎、藤崎幸恵が確認された。宮森正三郎(東京美術学校図画師範科)は大正 8 年から長年にわたって勤めていたのに移行しなかったのは、年齢が理由にあったのかもしれない。花岡一(東京高等師範学校図画手工専修科)は、昭和 25 年に北海道学芸大学函館

分校に転出し、後に技術講座に移る。女子部に在職していた高久一郎（東京高等師範学校図画手工専修科）と藤崎幸恵のその後の動向は不明である。大学へ移行した教官は、師範学校官立化以降に着任した大宮司正一（東京美術学校図画師範科）と峰岸耐七郎（東京高等師範学校図画手工専修科）であった。大学移行後着任した教官には、杉村惇、山西謙二、豊田郭が確認された。昭和 26 年に着任した杉村惇（東京美術学校西洋画）は後に日展の重鎮となる。東北大学教養部『昭和 27 年 4 月 東北大学教養部学生便覧』の「教養部関係教職員名簿」によると、教育教養部に在職する美術関係教官は次の通りであった。助教授・美術：杉村惇、講師・美術：大宮司正一、講師・美術：峰岸耐七郎、講師・美術：山西謙二、非常勤・美術史：村田潔。教授不在で、大学移行後着任の杉村が唯一の助教授で、それ以外は皆講師であった。この時期は美術科教育を専門に担当・研究する教官はいなかった。

2. 昭和 39 年 2 月学科目制度発足時に示された学科目は、絵画、構成、美術理論・美術史の三つであった。そして、昭和 40 年 4 月に東北大学から分離・独立する形で、宮城教育大学が設置された。東北大学の教員養成課程は廃止されていく。宮城教育大学に最初に示された学科目は昭和 41 年 4 月時点では絵画、彫塑であった。その後、昭和 42 年 4 月に学科目「美術科教育」が示された。昭和 48 年 11 月に井手則雄（東京美術学校彫刻）が着任し、その所属となる。井手は、彫刻作家、詩人として活躍するとともに、美術教育に関する著書を多数執筆し、昭和 34 年には新しい絵の会創立に参加する等、美術教育に関わる活動をしていた。箕田源二郎他『井手則雄追悼文集』（矢野和江、昭和 63 年）所収の世古一弥「心やさしき自由の人」（38、39 頁）によると、採用にあたっては、当時の学長林竹二の要請があったらしい。さらに昭和 55 年 6 月に坂本小九郎（岩手県立盛岡短期大学美術工芸科彫刻科）が着任し、学科目「美術科教育」所属となる。ただ「人事異動」『宮城教育大学学報』第 14 号（昭和 63 年）では学科目「彫塑」となっていた。坂本は青森県中学校等での版画指導で有名であった。井手は坂本着任の翌年に定年退官となるが、その在職の重なる約 1 年間で、宮城教育大学教授学研究会から共著『U・U 教育シリーズ No. 1 版画の授業—幼児から少年期まで—』（昭和 56 年）を出している。教授学研究会は、昭和 44 年 6 月林竹二の学長就任後、学内に作られた授業の臨床的研究を目指す研究グループである。昭和 56 年、井手の定年退官後、その後任として、神戸大学教育学部附属住吉小学校より、梶田幸恵（神戸大学）が美術科教育の学科目で着任する。以上、この時期の美術科教育担当者は、井手則雄、坂本小九郎、上野省策に教えを受けた梶田幸恵と続く。当時、学長は林竹二（学長任期：昭和 44 年 6 月から昭和 50 年 6 月までの二期）で、齋藤喜博（昭和 49 年 8 月 1 日から昭和 50 年 4 月 1 日まで在職）も在職した時期で、宮城教育大学全体として左派系教官によって大学改革がなされていたと思われる。

3. 昭和 63 年 4 月に大学院教育学研究科が設置される。そして平成 2 年 4 月に大学院美術教育専攻が、坂本と梶田の美術科教育分野二名体制で設置された。

## 4 秋田大学

1. 秋田師範学校から秋田大学学芸学部へ美術関係教官はほぼ移行した。移行した教官を見ると、秋田県出身者が多い。確認できているだけでも、三浦真一、大島茂枝、三浦金之進、阿部米蔵、佐々木邦雄、石田勝郎がそうである。なお、秋田師範学校から大学に移行した大島茂枝、その後任に横山ツエと女性教官が続く。この時期は美術科教育を専門に担当・研究する教官はいなかった。

2. 昭和 39 年 2 月学科目制度発足時に示された学科目は、絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史の四つであった。そして、昭和 51 年 5 月に学科目「美術科教育」が示された。昭和 51 年 5 月に木村 素<sup>もとむ</sup>（愛知教育大学・東京教育大学大学院）が着任し、その所属となる。昭和 63 年、木村の静岡大学転出に伴い、昭和 61 年に構成で採用されていた横山智也（秋田大学・京都教育大学専攻科・東京教育大学大学院）が美術科教育の学科目に所属を移動した。なお、木村着任以前は、絵画の学科目に所属していた佐々木良三や、構成の学科目に所属していた都築邦春が美術科教育関係授業を分担していた<sup>7)</sup>。

3. 大学院美術教育専攻設置に際し、横山は構成に戻り、それと入れ替わりに昭和 63 年に構成で採用された遠藤敏明（千葉大学・スウェーデン国立リンシェピン大学・千葉大学大学院・筑波大学大学院）が美術科教育に所属を移動する。スロイド教育の研究者である。さらに石原英雄（東京高等師範学校）が、弘前大学、広島大学を経て秋田大学に平成 3 年 3 月に着任する。定年退官はその 2 年後の平成 5 年 3 月であった。いわゆる大学院設置要員であった。平成元年 4 月に大学院教育学研究科が設置される。そして平成 3 年 4 月に大学院美術教育専攻が、石原と遠藤の美術科教育分野二名体制で設置された。

## 5 山形大学

1. 山形師範学校から山形大学教育学部へ美術関係教官の全員は移行しなかった。国立公文書館蔵の大学設置認可申請書「山形大学創立案 其二 昭和二三」で名の挙げた四名のうち、長野亘のみ移行した。他の三名は、画業に専念するため退職、あるいは他県の新制高等学校に転任するなどした。この時期は美術科教育を専門に担当・研究する教官はいなかった。

2. 昭和 39 年 2 月学科目制度発足時に示された学科目は、絵画、彫塑、構成、美術科教育の四つであった。いずれかの時点で、絵画を専門とする長野亘（東京高等師範学校）が学科目「美術科教育」に所属した。長野は絵画制作だけでなく、山形県における古美術調査や高橋由一研究も行い、さらに昭和 40 年以降は美術教育に関する論考、昭和 44 年に附属幼稚園長併任となってからは幼児の美術教育に関する論考を発表した。その後、新たに着任した絵画を専門とする青山光佑（東京芸術大学油画・同院）が学科目「美術科教育」の所属となる。青山は版画家として知られる。後に滋賀大学に美術科教育教官として着任する新関伸也（岩手大学・山形大学大学院）との共著、版画を題材とした論文、長瀬校を中心とする想画教育に関する論文等がある。平成 2 年には、東京芸術大学同窓の滋賀大学の美術科教育教官の秋元幸茂との共著『発想につなげる美術教育の手法イメージの発見・再発見』（明治図書出版）

を出版した。

3. 平成元年に水島尚喜（東京学芸大学大学院）が着任し、美術科教育二名体制となる。水島は東京学芸大学附属竹早小学校教諭からの転任であった。学習指導要領作成協力者でもある。平成 5 年 4 月に大学院教育学研究科が設置された。そして、平成 7 年 4 月に大学院美術教育専攻が、青山と水島の美術科教育分野二名体制で設置された。

## 6 福島大学

1. 福島師範学校から福島大学学芸学部へ美術関係教官はほぼ移行した。移行した教官を見ると、福島県出身者が多い。確認できているだけでも、山川忠義、青津清喜、亀田春亀、武藤重典がそうである。当時、福島大学は全二学部の比較的規模の小さな大学であったと思われるが、美術関係教官は昭和 30 年度時点で助手も含めると 10 名在職した。新制国立大学になって暫くすると、教官の出身母胎は、東京教育大学・筑波大学が多くを占めるようになっていく。福島大学学芸学部『学生便覧』（昭和 28 年度）によると、昭和 28 年度の図工科教育法は、山川忠義と加藤（五郎か茂雄か不明）が持っていた。この時期は美術科教育を専門に担当・研究する教官はいなかった。

2. 昭和 39 年 2 月学科目制度発足時に示された学科目は、絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、美術科教育の五つすべてであった。そして昭和 39 年から 43 年のいずれかの時点で、「美術第二」講座所属であった宮脇理（東京教育大学）が学科目「美術科教育」に所属する。宮脇は、北海道学芸大学岩見沢分校教官となった後、東京教育大学附属小学校教諭となり、昭和 35 年に福島大学に着任し、昭和 46 年に文部省中等教育局中学校教育課へ転出する。その後任として宮脇と東京教育大学で同級であった倉園昭雄（東京教育大学）、さらに倉園の長崎大学転出に伴って、後任として昭和 51 年に片野一（東京学芸大学大学院）が学科目「美術科教育」所属教官として着任する。倉園も片野も木工芸作家でもあった。片野は昭和 56 年頃に構成に所属を移動する。

3. 昭和 56 年に佐久間敬（福島大学）が美術科教育の学科目で着任する。さらに昭和 58 年に絵画の助手として採用された版画家の丸山浩司（多摩美術大学・東京芸術大学大学院）が昭和 59 年頃に美術科教育に所属を移動する。昭和 60 年 4 月に大学院教育学研究科が設置される。そして、平成 3 年 4 月に、佐久間と丸山の美術科教育分野二名体制で、大学院美術教育専攻が設置された。

## 註

- 1) 「図表の凡例」金子一夫『近代日本美術教育の研究—明治時代—』（中央公論美術出版、平成4年）447頁。
- 2) 北海道教育大学の変遷に関しては、『北海道学芸大学概要』（昭和26年7月現在）、北海道教育大学50周年記念史編集委員会『北海道教育大学50年史』（北海道教育大学、平成11年）を主として参照した。
- 3) 吉田五左衛門先生の顕彰碑を設立する会『みんなの五左さん』（吉田五左衛門先生の顕彰碑を設立する会、昭和46年）。
- 4) 北海道学芸大学札幌分校『履修手引』昭和32-34、36-38年度。北海道学芸大学札幌分校『昭和35年度前期開設科目』。北海道学芸大学札幌分校『履修手引付表』昭和36-38、40年度開設科目。北海道学芸大学札幌分校『学生便覧付表』昭和41、43-55年度開設（授業）科目。
- 5) 『北海道学芸大学岩見沢分校要覧』昭和31年7月1日現在。北海道学芸大学岩見沢分校『履修要項』昭和39年度。北海道学芸大学岩見沢分校『開講科目一覧表』昭和44年度。北海道学芸大学岩見沢分校『授業時間割』昭和48、53、56-58年度。北海道学芸大学岩見沢分校『開講科目一覧』平成8、10、12年度。北海道教育大学岩見沢分校『開講科目一覧表』昭和45、46、49-53、56-58年度。
- 6) 岩手大学『岩手大学五十年史』（岩手大学創立50周年記念誌編集委員会、平成12年）240-241頁。
- 7) 昭和40年代後半に秋田大学学生であった方による教示（平成28年10月に聞き取り）。及び秋田大学旧教官による教示（平成30年2月に聞き取り）。

表10 北海道教育大学（札幌）

表11 北海道教育大学（岩見沢）

表12 北海道教育大学（函館）





表14 北海道教育大学（釧路）





表17 宮城教育大学









## 北海道地方

### 北海道教育大学

まず、北海道学芸大学・北海道教育大学の5校に関して次の資料を用いて表の基礎を作成した。『北海道学芸大学概要』(昭和26年7月現在)。北海道聯合教育会・北海道教職員組合調査部『北海道教育関係職員録』昭和14-18、20、22-30年度。北海道学芸大学『職員住所録』24-29年度(5校分名簿有)。北海道学芸大学/北海道教育大学庶務部『北海道学芸大学職員録』昭和29-平成15年度(なお昭和36年度版はないが、昭和37年度版は昭和37年1月1日発行)。北海道学芸大学『北海道学芸大学要覧』26-40年度。北海道学芸大学/北海道教育大学『学生便覧』昭和38-41年度。北海道教育大学研究発表委員会『北海道教育大学研究者総覧』(北海道教育大学総務部総務課、平成15年)。

#### 1 北海道教育大学(札幌)

北海道学芸大学札幌分校・北海道学芸大学札幌分校創立七十周年記念事業協賛会『北海道学芸大学札幌分校七十小史』(昭和31年)(教官勤務表(着任昇進年月及び出身校有))。北海道教育大学札幌分校創立九十周年記念事業協賛会『北海道教育大学札幌分校九十年小史』、昭和51年(教官勤務表(着任昇進退職年月有)、授業名有)。北海道学芸大学札幌分校『履修手引』昭和32-34、36-38年度(32、33年度:名簿、カリキュラム、授業及び担当者名有(美術科教育担当者不明)、34年度以降:名簿、カリキュラム、授業及び担当者名あり(美術科教育授業担当者名有))。北海道学芸大学札幌分校『昭和35年度前期開設科目』。北海道学芸大学札幌分校『履修手引付表』昭和36-38、40年度開設科目。北海道学芸大学札幌分校『学生便覧付表』昭和41、43-55年度開設(授業)科目。北海道学芸大学札幌分校『昭和55年度開設授業の概要』。北海道教育大学教育学部札幌校『北海道教育大学札幌 教育と研究』No.1(平成5年)。同、No.2(平成8年)。札幌芸術の森美術館『丸山隆彫刻展図録』(財団法人札幌市芸術文化財団、平成16年)。畠山三代喜『畠山三代喜 金工の世界』(畠山三代喜、平成10年)。阿部宏行「北海道の美術教育の礎に関する一考察〜藤野高常の教育的視座について〜」北海道教育大学紀要(教育科学編)第63巻第1号(平成24年)1-12頁。

#### 2 北海道教育大学(岩見沢)

創立75周年記念誌編集委員会『北海道教育大学岩見沢校創立75周年記念誌』(北海道教育大学岩見沢校、平成10年)(現・前職員一覧有(就任転退出年月、担当学科目)、各教官の研究活動や卒業研究の動向等、美術研究室についての記述有(53-56頁))。80周年記念事業委員会記念誌部『北海道教育大学青陵会80周年記念誌「八十年誌」』(北海道教育大学青陵会、平成15年)(旧職員一覧有(就任転退出年月))。創立90周年を祝う会実行委員会記念事業部記念誌編集委員会『北海道教育大学青陵会90周年記念誌「90年誌」』(北海道教育大学青陵会、平成25年)。『北海道学芸大学岩見沢分校要覧』昭和31年7月1日現在(美術講座の現職員名、就任年月、担当学科目が次のように記される。文部教官教授

青沼功 漢字一般 字学概論 書道演習。文部教官教授 砂田友治 素描 絵画 図学 図工教材研究。文部教官助教授 藤野高常 美術 水彩画 図画 小学図工。文部教官講師 宮脇理 木材工芸 彫塑 木材工芸特講 小学図工。非常勤講師 山岡三秋 窯芸 実習)。北海道学芸大学岩見沢分校『履修要項』昭和 39 年度。北海道学芸大学岩見沢分校『開講科目一覧表』昭和 44 年度。北海道学芸大学岩見沢分校『授業時間割』昭和 48、53、56-58 年度。北海道学芸大学岩見沢分校『開講科目一覧』平成 8、10、12 年度。北海道教育大学岩見沢分校『開講科目一覧表』昭和 45、46、49-53、56-58 年度。「年譜」北海道立近代美術館『砂田友治展 人間原像—一生へのオマージュ』(北海道立近代美術館、平成 14 年) 78-83 頁。

### 3 北海道教育大学(函館)

北海道函館師範学校『創立二十五年史』(北海道函館師範学校、昭和 11 年)(前・現職員一覧有(着任年月))。『北海道学芸大学 函館分校要覧(昭和 34 年 6 月・開学十周年記念)』(昭和 34 年)。夕陽会『会員名簿』(昭和 57 年 12 月 1 日現在)(夕陽会、昭和 57 年)。北海道教育大学函館分校創立六十年史編纂委員会『創立六十年史』(北海道教育大学函館分校、昭和 50 年)。北海道教育大学教育学部函館校『北海道教育大学教育学部函館校創立 80 周年開学 45 周年記念要覧』(北海道教育大学教育学部函館校、平成 6 年)。北海道教育大学函館校創立 90 周年記念行事準備委員会『北海道教育大学函館校創立 90 周年記念要覧』(北海道教育大学函館校、平成 16 年)。夕陽会 90 周年記念事業委員会『北海道教育大学夕陽会創立 90 周年記念誌「九十年誌」』(夕陽会、平成 20 年)。北海道立函館美術館『折原久左エ門展 金属造形—創造の軌跡』(北海道立函館美術館、平成 23 年)。

### 4 北海道教育大学(旭川)

北海道学芸大学旭川分校四十年史編集委員会『北海道学芸大学旭川分校四十年史』(北海道学芸大学旭川分校四十年史刊行委員会、昭和 39 年)(同書の「美術講座研究室」(228-231 頁)には教官の転出・専門・出身校等、「現・旧職員一覧」(113-127 頁)には教官の転出年月日職位等の記述がある)。北海道教育大学旭川分校創立六十周年記念誌集員会『北海道教育大学旭川分校六十年史』(北海道学芸大学旭川分校六十周年記念事業実行委員会、昭和 59 年)(前掲書と同様、「美術講座研究室」「現・旧職員一覧」、さらに「教員の発令には文部省の設置した資格審査会の合格判定が必要で、本学が教員人事権を完全に確立したのは昭和 29 年のことであつた」(34 頁)という記述がある)。北海道教育大学旭川校記念誌出版小委員会『北海道教育大学旭川分校七十周年記念誌』(北海道教育大学旭川校創立七十周年並びに大学院開設記念会、平成 5 年)(美術講座、現・旧職員(転出年月職位等)の記述有)。片山晴夫 他『北海道教育大学旭川分校 80 周年記念誌』(北海道教育大学旭川校 80 周年記念事業実行委員会、平成 15 年)(美術講座、現・旧職員(転出年月職位等)の記述有)。海老名尚 他『北海道教育大学旭川分校 90 周年記念誌』(北海道教育大学旭川校 90 周年記念事業実行委員会、平成 25 年)(美術講座、

現・旧職員(転出年月職位等)の記述有)。北海道学芸大学/教育大学旭川分校/校『学生便覧』昭和 38-平成 11 年度。朝倉力男記念美術館『朝倉力男洋画作品集』(朝倉力男記念美術館、平成 4 年)。北海道立旭川美術館『生の刻印/雪景の譜 朝倉力男展図録』(北海道立旭川美術館、平成 7 年)。

#### 4 北海道教育大学(釧路)

北海道教育大学釧路分校二十年史編集委員会『北海道教育大学釧路分校二十年史』(北海道教育大学釧路分校二十年史刊行委員会、昭和 43 年)。北海道教育大学釧路分校 40 周年記念誌刊行委員会『北海道教育大学釧路分校 40 年史—この十年のあゆみ』(北海道教育大学釧路分校 40 周年記念事業実行委員会、平成元年)。北海道教育大学釧路校六十年史編集委員会『北海道教育大学釧路校六十年史』(北海道教育大学釧路校創立 60 周年記念事業実行委員会、平成 22 年)。北海道学芸大学/教育大学釧路分校『講義時間割一覧表』昭和 40、52 年度。なお理科教育研究室の沿革に関しては、生方秀紀・栢野彰秀『理科教育研究室 40 周年記念誌』(北海道教育大学釧路校理科教育研究室、平成 20 年)に詳しい。

### 東北地方

#### 1 弘前大学

まず、昭和 23 年以前在職教官に関しては主に次の資料を参照して表を作成した。青森師範学校同窓会『会員名簿』(青森師範学校同窓会、昭和 26 年)。青森県師範学校『創立四十年記念誌』(大正 4 年)。青森県師範学校『創立六十年記念誌』(昭和 11 年)。『青森県学事関係職員録』大正 7、9、11-13、昭和 3-6、9、11、13、18 年度。『青森県教育職員録』(大正 15 年)。青森師範学校『青森師範学校概要』(昭和 23 年)。青森県師範学校同窓会・弘前大学教育学部『青森師範学校志』(弘前大学出版会、平成 18 年) 295-303 頁。昭和 24 年以降は主に次の資料を参照した。弘前大学二十年史編纂委員会『弘前大学二十年史』(弘前大学、昭和 48 年)。弘前大学創立 50 周年記念事業実行委員会 50 年史編纂専門委員会『弘前大学五十年史 通史編』『同 資料編』(弘前大学・弘前大学創立 50 周年記念事業後援会、平成 11 年)。弘前大学『学生便覧』昭和 28-平成 15 年度(弘前大学)(教官名簿有。昭和 28-36 年度は教官専門分野有。昭和 39-平成 15 年度は学科目有)。弘前大学事務部庶務課(昭和 41-48 年度は弘前大学事務局庶務部庶務課、昭和 49 年度以降は弘前大学庶務部庶務課)『弘前大学要覧』昭和 25、27、31、32・33、34・35、36・37、38・39・40、41・42、43・44、45・46、47・48、49・50・51、52・53、54・55、56・57、58・59、60・61、62・63、平成元・2、3・4、6、9、12 年度(弘前大学)(名簿有。昭和 32・33 度から旧教職員名簿及び転退出年月有)。弘前大学庶務課『弘前大学学報』昭和 24-平成 16 年。昭和 56-平成 13 年在職教官に関しては、弘前大学自己評価委員会『弘前大学教育・研究者総覧』平成 7、9、11、13 年度(弘前大学)を参照した。堀米勢吉の経歴に関しては、堀米勢吉『堀米勢吉画集』(堀米勢吉、昭和 58 年)を参照した。

## 2 岩手大学

まず、次の資料をもとに表を作成した。記念誌編集委員会『岩手大学特設美術科創設 40 周年記念誌』（特設美術科創設 40 周年記念事業実行委員会、平成 7 年）には特設美術の学科組織の変遷や教官の所属が記される。岩手大学創立 50 周年記念誌編集委員会『岩手大学五十年史』（岩手大学、平成 12 年）には「歴代在籍教員」の在職期間と担当科目（288-290 頁）、特設美術の設置（240-241 頁）の記述がある。さらに次の資料を参照した。岩手県教育会『岩手県学事関係職員録』大正 15、昭和 4、6-8、10、12-19、35、36、44-47、49 年度。岩手大学『学習案内』昭和 36-52 年度。岩手大学『学生便覧』昭和 53-平成 11 年度。岩手大学庶務課『岩手大学通報』昭和 25-平成 16 年度。岩手県師範学校一覧表（昭和 8 年 4 月 30 日現在）。岩手大学学芸学部美術同窓会『会報』第 1 号（発行年不明）。岩手大学教育学部創基百年記念発行委員会『岩手大学教育学部 創基百年』（岩手大学教育学部、昭和 51 年）152-153 頁。岩手大学教授藤原徳太郎氏退官記念事業会『記念のしおり』（昭和 44 年）。平沢広・菊池桂・伊藤真紀子「伊藤昌彦年譜」『シリーズⅥ [岩手の現代作家] 伊藤昌夫 伊藤由美子 ゴトウ・シュウ 田村史郎』（萬鐵五郎記念美術館、平成 11 年）。海野経『海野経・ノート』（海野経、昭和 59 年）。深澤省三『深澤省三画集』（荻生書房、平成元年）。岩手県立美術工芸学校関係に関しては、佐々木一郎『岩手の美術と共に歩んで』（昭和 62 年）、岩手大学アートフォーラム『森口多里その足跡を辿る』（岩手大学アートフォーラム、平成 21 年）、ミューズの花びら編集委員会『ミューズの花びら』（美工会、平成 18 年）を参照した。

## 3 宮城教育大学

まず、宮城師範学校同窓会『同窓会名簿昭和 41 年版』（宮城師範学校同窓会、昭和 41 年）をもとに開学より昭和 26 年 3 月までを作成した。「母校前職員（前号の続き）」宮城県師範学校同窓会『同窓会報』第 7 号（昭和 3 年）を参照して、昭和 3 年までの細かい着任転退出年月を示した。宮城県教員組合『宮城県教育関係職員録』昭和 21 年度（昭和 21 年 3 月）を参照して、昭和 21 年現在在職者と職位と担当科目を示した。「教育教養部・分校教官一覧」東北大学教育学部 50 年史編集委員会『東北大学教育学部 50 年の歩み』（東北大学教育学部、平成 11 年）109-110 頁をもとに、戦後から東北大学教育学部時代までを作成した。宮城教育大学開学後は次の資料を参照した。「学部教員在職表」宮城教育大学二十年史資料集編纂委員会『宮城教育大学二十年史資料集Ⅱ』（宮城教育大学二十年史資料集編纂委員会、平成 63 年）404-413 頁（昇任年月有）。「学部教員在職表」宮城教育大学三十年史資料集編纂委員会『宮城教育大学三十年史資料集Ⅱ』（宮城教育大学三十年史資料集編纂委員会、平成 8 年）985-996 頁（昇任年月有）。「学部教員在職表」宮城教育大学 40 年史資料集編集委員会『宮城教育大学四十年史資料集Ⅱ』（宮城教育大学 40 年史資料集編集委員会、平成 18 年）1527-1529 頁（昇任年月記載無）。細かい着任転退出昇任年月、学科目は宮城教育大学庶務課『学報』、宮城教育大学学生生活委員会『学園だより』を参照した。さらに、次の資料を参照して補正した。東

北大学教養部『昭和 27 年 4 月 東北大学教養部学生便覧』(昭和 27 年) 72-74 頁。渡辺雄彦『渡辺雄彦作品集 1968-1998』(平成 11 年)。土屋瑞穂作品集を作る会『土屋瑞穂の彫刻』(土屋瑞穂作品集を作る会、平成 10 年)。高橋喜和作品集刊行会・代表土屋瑞穂・事務局宮城県美術館普及部内『高橋喜和作品集』(高橋喜和作品集刊行会、平成 7 年)。坂本小九郎に関して、創童舎『東北の子ども版画』(東北電力、平成 7 年)。杉村惇に関して、尾崎真人ほか『TOHOKU/TOKYO 1925~1945—東北の画家たち』(読売新聞社・美術館連絡協議会、平成 12 年) 122 頁。高山登に関して、宮城県美術館『特別展「アートみやぎ 2003」図録』(宮城県美術館、平成 15 年) 91 頁。平垣内清に関して、「新任教官自己紹介」宮城教育大学学生生活委員会『学園だより』第 94 号、宮城教育大学学生生活委員会、平成 12 年 7 月、5 頁。

#### 4 秋田大学

まず、昭和 23 年以前在職教官に関しては主に次の資料を参照して表を作成した。秋田県師範学校『秋田県師範学校一覧表』昭和 7 年 4 月現在。同、昭和 8 年 4 月現在。秋田県女子師範学校『秋田県女子師範学校一覧表』昭和 3-6、6、9、13、15 年。秋田県教育会『秋田県教育関係職員録』大正 15、昭和 2-16 年度。昭和 24 年以降は主に次の資料を参照した。秋田大学庶務部庶務課『秋田大学一覧』秋田大学庶務部庶務課、昭和 24・25、26、27・28、29・30、31・32、33・34、35・36、37・38、39・40、41・42、43・44、45・46・47、48・49、50・51、52・53、54・55、56・57、58・59、60・61、62・63、平成元・2、3・4、5・6、7・8、9・10、11・12、13・14 年度(名簿有。昭和 41・42 年度から平成元・2 年度まで学科目有。昭和 52・53 年度には旧教職員名簿及び勤務期間有)。秋田大学学生部『学生便覧』昭和 37、39-41 年度(昭和 43-平成 14 年度には教職員名簿無)。秋田大学事務部庶務課『秋田大学学報』秋田大学事務部庶務課第 1-302(291、295 欠)号、昭和 20-平成 15 年 2 月 1 日。秋田大学教育学部『秋田大学教育学部研究者総覧』(秋田大学、平成 4 年)。秋田大学教育文化学部『秋田大学教育文化学部研究者総覧』(秋田大学、平成 11 年)。秋田大学『秋田大学研究者総覧』(秋田大学、平成 19 年)、同(平成 22 年)。阿部米蔵『阿部米蔵作品集』(秋田マイクロ写真印刷、昭和 52 年)。阿部米蔵『構成の理論—詩精神の探求』(秋田マイクロ写真印刷、昭和 42 年)を参照した。薄金兼次郎『芸術学入門—人間形成のための芸術理解—』(内田老鶴圃、昭和 38 年)。横山ツエに関して、秋田県立近代美術館『第 62 回国民体育大会公開競技スポーツ芸術主催事業 特別企画展描かれた秋田展図録』(秋田県立近代美術館、平成 19 年) 63 頁。佐々木良三『絵をつくる 人生を描く』(秋田魁新報社、平成 27 年)。猪巻明『猪巻明日本画展』(喜多方市美術館、平成 20 年)。遠藤敏明『〈自然と生きる〉木でつくろう 手でつくろう』(小峰書店、平成 24 年)。

#### 5 山形大学

昭和 23 年以前在職教官に関しては、金子一夫「学術研究助成基金補助金成果報告書平成 25~27 年度『大正・昭和戦前期の中等学校図画教員と出身美術学校の総覧的研究』課題番号 25370126 第 1 部直轄学校~三重県」平成 28 年、60-61 頁を参照した。昭和 24 年以

降在職教官に関しては、山形大学教育学部同窓会『昭和三十年十月現在 会員名簿』（昭和 30 年）、山形大学『会員名簿 昭和 46 年版』（昭和 46 年）に示された在職期間を参照した。さらに次の資料を参照した。「年譜」長野亘『寂（私の記録）』（長野亘教授退官記念誌出版委員会、昭和 50 年）110-120 頁。「真下慶治記念美術館ホームページ」の「プロフィール」（[http://www.massimo-k.org/01\\_profile.html](http://www.massimo-k.org/01_profile.html)（平成 29 年 8 月 20 日確認））。山形教育学部九十年誌編集委員会『山形大学教育学部九十年誌』（山形大学教育学部同窓会、昭和 43 年）。

## 6 福島大学

昭和 23 年以前在職教官に関しては主に次の資料を参照した。「旧職員」福島県師範学校『福師創立六十年』（福島県師範学校、昭和 8 年）（就職・退職年月有）35-50 頁。「職員表」『福島県女子師範学校一覧表』昭和 8 年 5 月 1 日現在（就職年月・資格有）。「職員」福島県女子師範学校『福島県女子師範学校沿革史』（福島県女師範学校、昭和 8 年）21-26 頁。『福島県教育関係職員録』大正 15、昭和 3、4、6、7、12、14、16、18、21 年度。福島県女子師範学校同窓会『会員名簿』昭和 6 年 12 月現在。昭和 24 年以降は主に次の資料を参照した。福島大学学芸学部『学生便覧』昭和 28 年度（教官名簿・授業名・担当者名有）。福島県教員組合『職員録 昭和 29 年度』（福島県学校生活協同組合、昭和 29 年）。福島大学『福島大学職員録』昭和 35、36、40、43、45-55、62-平成 4、9-11、13、14 年度。福島県教育会館『福島県教育関係職員録』昭和 58-平成 4、6-11、13、14 年度。福島大学庶務課『福島大学学報』第 1-256 号、昭和 24-64 年。福島大学庶務課『福島大学要覧』昭和 63、平成 5、8 年度。福島大学教育学部同窓会吾峰会『会員名簿』昭和 36、41、46、51、56、62、平成 5、11 年度（昭和 56 年度以降は在職年月有。昭和 28 年度は卒業生名簿のみ）。福島大学教育学部『福島大学教育学部研究者総覧』（平成 5 年）。福島大学教育学部『学科課程表』昭和 59-63 年度。「旧職員一覧表」「停年退職者一覧」福島大学教育学部百年史編纂委員会『福島大学教育学部百年史』（福島大学教育学部同窓会吾峰会、昭和 49 年）621-657 頁。福島大学教育学部同窓会『福島大学教育学部同窓会吾峰会百十年史』（福島大学教育学部同窓会吾峰会、平成 9 年）。次の資料も参照した。大江孝『画家 美術教育 美校での王様 叔父飛田昭喬の前期』（喬樹会、昭和 54 年）。梅宮英亮「山川忠義の絵画」梅宮英亮『福島県洋画界と三人の画家たち』（歴史春秋出版、昭和 63 年）94-127 頁、奥付著者略歴。青津清喜『青津清喜画集』（青津清喜、昭和 55 年）。

### 第三章 各教員養成大学・学部における美術教育学の人的制度基盤の成立過程

#### —関東地方—

##### 1 茨城大学

1. 茨城師範学校から茨城大学教育学部へ美術関係教官はほぼ移行した。移行した教官を見ると、東京美術学校図画師範科出身者が圧倒的に多い。この傾向はその後も続く。東京美術学校図画師範科出身教官が多かったこともあり、美術科教育法関係授業は、どの教官でも担当し得る状況にあったが、代々主任が受け持つということになっていた。当時の美術講座の中心教官の稲村退三（東京府青山師範学校・東京美術学校図画師範科）の美術科教育重視の意向が背景にあるらしい<sup>1)</sup>。稲村は昭和43年学習指導要領美術編作成協力者でもあった。ただ、この時期は美術科教育を専門に担当・研究する教官はいなかった。

2. 昭和39年2月学科目制度発足時に示された学科目は、絵画、彫塑、構成、美術科教育であった。そして昭和42年に、宮澤治正（東京美術学校図画師範科）、山崎猛（茨城大学）が学科目「美術科教育」に所属することとなる。宮澤は絵画、山崎は構成の学科目からの所属移動になった。山崎は、中学校教員として彫塑研究をしようとしていたところ、構成の学科目で大学に採用され、美術科教育に学科目を移動し、そして研究分野は彫塑であった<sup>2)</sup>。美術科教育の学科目は制度的に成立したものの、所属教官の研究内容との整合性は完全ではなかった。

3. 昭和53年に金子一夫（茨城大学・東京芸術大学大学院美術教育学）が、宮澤の後任として美術科教育の学科目で新規採用される。この時期、山崎は多くの論文を執筆している。なお、大学院設置のために実技教官にも論文業績を問うことを文部省から示唆された大学もあるが、茨城大学では実技教官は実技のみが問われた<sup>3)</sup>。そして昭和63年4月に大学院教育学研究科が設置され、そこに美術教育専攻も、山崎と金子の美術科教育分野二名体制で設置された。

##### 2 宇都宮大学

1. 栃木師範学校から宇都宮大学学芸学部へ美術関係教官はほぼ移行した。移行した教官を見ると、東京美術学校出身者が圧倒的に多い。この傾向はその後も続く。師範学校から長く勤務する内田利太郎（東京美術学校図案）が学内及び栃木県の図画工作教育の中心的存在であったが、昭和33年8月に亡くなってしまう。この時期は美術科教育を専門に担当・研究する教官はいなかった。

2. 昭和39年2月学科目制度発足時に示された学科目は、絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史であった。そして、昭和42年5月に学科目「美術科教育」が示された。同年6月1日に美術科教育の学科目の新設が教授1名の定員で認められ、同年12月1日に、渡辺安友（川

端画学校・東京美術学校図画師範科)が学科目を絵画から美術科教育に所属移動した<sup>4)</sup>。渡辺は栃木県出身の日本画家であった。さらに昭和48年4月に石川毅(横浜国立大学・東京芸術大学大学院美学)が着任し、美術科教育二名体制となる。

3. 昭和55年、渡辺の退官に伴い、その後任として、岡崎昭夫(高知大学・大阪教育大学大学院)が美術科教育の学科目で着任する。昭和59年4月に大学院教育学研究科が設置される。そして、昭和63年4月に大学院美術教育専攻が、石川と岡崎の美術科教育分野二名体制で設置された。

### 3 群馬大学

1. 群馬師範学校から群馬大学学芸学部へ美術関係教官はほぼ移行した。この時期は美術科教育を専門に担当・研究する教官はいなかった。後述するように学科目「美術科教育」に人的配置がなされるまで美術科教育関係授業は分担されていた。美術講座では唯一の教授として清水刀根男(号:刀根)が昭和25年に着任した。最初期は清水以外の教官の出身校は、群馬(県)師範学校と東京高等師範学校に大別される。また、清水をはじめとして二科会で活躍する作家も多い。その後大学院設置までどの時期にも自校出身教官が一人以上在職する。

2. 昭和39年2月学科目制度発足時に示された学科目は、絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史であった。そして、昭和48年4月に学科目「美術科教育」が示された。昭和49年に絵画の学科目で採用された町田洋二(東京高等師範学校)が、昭和50年代に美術科教育の学科目に所属移動した。町田は、群馬大学着任以前は群馬県立高等学校に勤務しており、その時から群馬大学の美術科教育関係授業を非常勤講師で受け持っていた。町田が学科目「美術科教育」に所属移動するまでは、美術科教育関係授業は分担されていた<sup>5)</sup>。

3. 昭和63年に櫻井俊夫(東京芸術大学・同専攻科)が美術科教育の学科目で着任する。櫻井は東京都指導主事経験者かつ昭和53年学習指導要領美術編作成協力者で、兵庫教育大学からの転入であった。さらに、平成2年に新井哲夫(多摩美術大学絵画・横浜国立大学大学院)が美術科教育で着任する。そして平成2年に大学院教育学研究科が設置され、そこに美術教育専攻も櫻井と新井の美術科教育分野二名体制で設置された。

### 4 埼玉大学

1. 埼玉師範学校から埼玉大学教育学部へ美術関係教官はほぼ移行した。最初期は埼玉(県)師範学校出身教官が比較的多かった。徐々に東京高等師範学校・東京教育大学出身教官が多くなっていく。その後もこの傾向は続く。この時期は美術科教育を専門に担当・研究する教官はいなかった。

2. 昭和39年2月学科目制度発足時に示された学科目は、絵画、彫塑、構成、美術科教育であった。最初から美術科教育の学科目は示されたが、それへの人的配置は暫くなされなかった。暫くの間、美術科教育関係授業は、文部省教科調査官であった小池喜雄が非常勤講師として担当した<sup>6)</sup>。そして昭和50年に埼玉大学で最初の学科目「美術科教育」所属教官とし



て、文部省教科調査官経験者であった松本巖（東京文理科大学倫理学）が着任する。さらに昭和 51 年に都築邦春（愛知教育大学・東京教育大学大学院）が二人目の学科目「美術科教育」所属教官として着任する。都築は、山本鼎、特に農民美術の研究の第一人者である。秋田大学からの転入で、秋田大学では構成の学科目に所属していた。大学院設置前に美術科教育二名体制となったが、昭和 56 年 2 月に松本は急逝してしまう。松本の後任として、昭和 56 年 12 月に榎原弘二郎（東京教育大学・同院）が着任する。工芸教育研究者である。愛媛大学からの転入で、愛媛大学でも美術科教育の学科目に所属していた。

3. 平成 2 年 4 月に大学院教育学研究科が設置され、そこに美術教育専攻も都築と榎原の美術科教育分野二名体制で設置された。

## 5 千葉大学

1. 千葉師範学校から千葉大学学芸学部へ美術関係教官はほぼ移行した。なお東京医科歯科大学予科の包摂により昭和 25 年 4 月に学芸学部は文理学部と教育学部に改組される。最初期は図画・絵画教官は東京美術学校図画師範科出身者、工作・工芸教官は東京高等師範学校出身者が多かった。昭和 37 年の主たる授業担当は、森桂一は絵画実技、海老沢厳夫は絵画実技と教材研究、武内和夫は美術史(西洋)、奈良坂昂は工芸(染織)、伊藤孝は工芸(彫塑)と設計・製図と材料学であった<sup>7)</sup>。この時期は美術科教育を専門に担当・研究する教官はいなかった。

2. 昭和 39 年 2 月学科目制度発足時に示された学科目は、絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、美術科教育の五つすべてであった。森桂一（東京美術学校図画師範科）が学科目「美術科教育」に所属する。森は昭和 15 年に千葉県師範学校に着任してから昭和 45 年に定年退官するまで長きにわたって勤務し、学内及び千葉県の美術教育における中心的存在であった。森の定年退官後、絵画を専門とする太田洋三（東京芸術大学）が美術科教育の学科目に所属する。太田は前任校の福島大学では絵画の学科目に所属していた。春陽会で活躍する画家でもあった。昭和 55 年頃、太田は絵画の学科目に所属を移動し、昭和 48 年に絵画で新規採用されていた戸田健夫（千葉師範学校）が美術科教育の学科目に所属を移動する。戸田は、森桂一との共著『水彩画の基礎』（ダヴィット社、昭和 48 年）を出版し、その後も『水彩画の道しるべー制作・鑑賞から発表まで』（ダヴィット社、平成 6 年）、『水彩の指導』（三晃書房、平成 5 年）等、水彩画に関する著書を出版する。二科会で活躍する水彩画家でもあった。

3. 大学院設置のため、長南光男（東京高等師範学校）が構成から美術科教育に所属を移動する。長南の前職は東京教育大学附属中学校教諭であった。昭和 57 年に大学院教育学研究科が設置され、そこに美術教育専攻も戸田と長南の美術科教育分野二名体制で設置された。なお、大学院設置の数年後に戸田は絵画に所属を移動し、藤澤英昭（東京教育大学）が美術科教育で着任する。

## 6 東京学芸大学

東京学芸大学に関しては、序章で記した平野英史の口頭発表資料<sup>8)</sup>に詳細が記されている。

1. 東京第一師範学校、東京第二師範学校、東京第三師範学校から東京学芸大学へ、美術関係教官の移行は難航した。他大学や公立中学校に転出した者もいた。そして大学設置後、新たに多数の教官が採用された。東京学芸大学の場合、開学当初より美術専門と美術科教育は別組織に分けられていた。さらに昭和 36 年に特設美術が設置され、教官の専門性の明確化が進んだ。すなわち学科目制度に先んじて教官の専門性が明確化され、組織上も実質の授業担当も美術専門と美術科教育は分化していた。美術科教育を専門に担当・研究する次の教官がいた。糟谷実（長崎県師範学校・東京美術学校図画師範科）、山田武（東京美術学校図画師範科）、林部伝七（文検西用・東京高等師範学校図研）、吉田義英（東京高等師範学校芸能科）。

2. 昭和 39 年 2 月学科目制度発足時に示された学科目は、日本画、西洋画、木工、金工、彫塑、構成、美術・工芸科教育であった。美術・工芸科教育は、上述の糟谷、山田、林部、吉田がそのまま引き継いだ。

3. 東京学芸大学には全国で最初の大学院教育学研究科が昭和 41 年 4 月に設置された。そして昭和 43 年 4 月に全国で最初の大学院美術教育専攻が設置された。ただ、大学院設置直前、糟谷は昭和 40 年 3 月に定年退官し、山田は昭和 42 年 3 月に定年退官し、林部は昭和 41 年 12 月に亡くなってしまう。昭和 42 年 4 月に村内哲二（東京高等師範学校・東京文理科大学教育学専攻）、伊東正明（東京美術学校図画師範科）、鈴木清が美術科教育で新規採用される。さらにこの頃は非常勤講師として新井秀一郎（東京美術学校師範科）も在職していた。新井は、昭和 37 から昭和 44 年まで附属小金井中学校教諭兼大学非常勤講師で、昭和 44 年 4 月より大学に着任する。大学院美術教育専攻の美術科教育分野は、吉田、村内、伊東、新井（非常勤講師）の体制で始まった。その後、多数の美術教育研究者を輩出していく。

## 7 横浜国立大学

1. 神奈川師範学校から横浜国立大学学芸部への教官の移行は難航した。美術関係教官の移行も難航した。昭和 20 年代に在職しながらも大学へは移行しなかった教官、大学に完全移行する直前の昭和 26 年に退職する教官もいた。大学移行後、新たに着任した教官に山本正男がいた。大学開学の頃から美学が講座に位置づけられ、山本がその担当者となった。山本は後に東京芸術大学へ転出し、同大学院美術教育学専攻でも美術教育研究者養成に関わることとなる。そして、三浦寛三（東京高等師範学校図画手工専修科）が色彩学と美術科教育関係授業を主として、その他に絵画や工芸や図学も受け持っていた<sup>9)</sup>。

2. 昭和 39 年 2 月学科目制度発足時に示された学科目は、絵画、構成、美術理論・美術史、美術科教育であった。三浦が最初の学科目「美術科教育」所属教官となった。

3. 昭和 54 年、三浦は定年退官となり、その後任として、岡山大学より宮脇理（東京教育大学）が学科目「美術科教育」所属教官として転入する。そして昭和 54 年 4 月に大学院教育

学研究科が設置され、そこに美術教育専攻も設置された。なお、岡山大学の大学院美術教育専攻設置は昭和 55 年 4 月であり、宮脇は岡山大学と横浜国立大学の両方の大学院設置に関わっていたものと思われる。さらに宮脇は昭和 59 年に筑波大学に転出して、同大学大学院の芸術教育学研究室の担当教官となり、美術教育研究者養成に携わることとなる。

## 註

- 1) 昭和 48 年 3 月茨城大学卒業生による教示（平成 23 年 3 月聞き取り）。
- 2) 茨城大学美術科同窓会『六号館』第 9 号 山崎猛先生御退官記念特集号（茨城大学美術科同窓会、平成 8 年）。
- 3) 1) と同じ。
- 4) 宇都宮大学教育学部史編纂委員会『宇都宮大学教育学部百十五年史』（宇都宮大学教育学部、平成元年）1248 頁。
- 5) 昭和 34 年群馬大学卒業生による教示（平成 29 年 9 月聞き取り）。
- 6) 埼玉大学旧教官による教示（平成 30 年 2 月聞き取り）。
- 7) 『日本教育大学協会第二部会全国美術部門 会員名簿』（昭和 38 年 3 月）。
- 8) 平野英史「美術教育学成立過程の制度史的研究（東京学芸大学の場合）」（口頭発表資料）、美術科教育学会美術教育史研究部会「美術教育学の制度的基盤の成立過程」第 33 回美術科教育学会富山大会、平成 23 年 3 月 27 日。
- 9) 教育学部史編纂委員会『横浜国立大学教育学部の歩み』（横浜国立大学教育人間科学部、平成 14 年）715-733 頁。

表21 茨城大学




表22 宇都宮大学




表23 群馬大学




表24 埼玉大学




表25 千葉大学






表26 東京学芸大学





表27 横浜国立大学



## 関東地方

### 1 茨城大学

昭和 23 年以前在職教官に関しては主に次の資料を参照した。金子一夫「学術研究助成基金補助金成果報告書平成 25～27 年度『大正・昭和戦前期の中等学校図画教員と出身美術学校の総覧的研究』課題番号 25370126 第 1 部直轄学校～三重県」平成 28 年、96-97 頁。昭和 24 年以降在職教官に関しては主に次の資料を参照した。茨城大学美術科同窓会『六号館』第 2 号（稲村退三先生ご退官記念特集号）（昭和 42 年）。同、第 3 号（宮澤治正先生ご退官記念特集号）（昭和 53 年）。同、第 4 号（大道武男先生ご退官記念特集号）（昭和 54 年）。同、第 5 号（巻島友治先生ご退官記念特集号）（昭和 57 年）。同、第 6 号（城戸夏男先生ご退官記念特集号）（昭和 58 年）。同、第 7 号（西田亨先生御退官記念特集号）（昭和 60 年）。同、第 8 号（上田薫先生御退官記念特集号）（平成 7 年）。同、第 9 号（山崎猛先生御退官記念特集号）（平成 8 年）。同、第 10 号（後藤末吉先生御退官記念特集号）（平成 9 年）。同、第 11 号（森田義之先生御退官記念特集号）（平成 11 年）。同、第 12 号（松田正己先生御退職記念特集号）（平成 17 年）。同、第 13 号（十河雅典先生御退職記念特集号）（平成 21 年）。同、第 14 号（寺本輝正先生御退職記念特集号）（平成 28 年）。同、第 15 号（金子一夫先生御退職記念特集号）（平成 28 年）。

### 2 宇都宮大学

まず、宇都宮大学教育学部史編纂委員会『宇都宮大学教育学部百十五年史』（宇都宮大学教育学部、平成元年）を参照した。「研究室の歩み」中の「美術科」（1246-1267 頁）に、大学移行から大学院設置までの教官の定員配置とその人事、授業担当、学科目、専門分野、出身校等が詳細に記されており、これを基礎として大学移行後の表を作成した。同書の一年後に発行された宇都宮大学大学史編纂委員会『宇都宮大学四十年史』（宇都宮大学、平成 2 年）もあわせて参照した。「教育学部の歴史的概要」（493-515 頁）、「教官組織と定員の推移」（528-534 頁）、「美術科」（562-563 頁）を参照した。昭和 23 年以前在職教官に関しては主に次の資料を参照して表を作成した。金子一夫「学術研究助成基金補助金成果報告書平成 25～27 年度『大正・昭和戦前期の中等学校図画教員と出身美術学校の総覧的研究』課題番号 25370126 第 1 部直轄学校～三重県」平成 28 年、108-109 頁。栃木県師範学校「旧職員名簿」『創立六拾年』（栃木県師範学校、昭和 8 年）64-100 頁。「母校教官」宇都宮大学教育学部史編纂委員会、前掲書、1396-1398 頁。あわせて次の資料も参照した。下野教育会(昭和 3-5 年度)/栃木県教育会(昭和 6-27 年度)/栃木県連合教育会(昭和 28-53 年度)『栃木県学事関係職員録』昭和 3-8、10-18、23-24、27-44、46-53 年度。宇都宮大学『職員録』昭和 39、40、42-47、51-平成 7 年度。宇都宮美術館『渡辺安友展』（宇都宮美術館、平成 18 年）。宇都宮美術館『矢口洋展』（宇都宮美術館、平成 16 年）。

### 3 群馬大学

まず、群馬大学『群馬大学十年史』（群馬大学、昭和 38 年）及び群馬大学教育学部百年

史編修委員会『群馬大学教育学部百年史』（群馬大学教育学部同窓会、昭和 54 年）を参照した。昭和 23 年以前在職教官に関しては主に次の資料を参照して表を作成した。群馬県師範学校同窓会『会員名簿』昭和 5 年 12 月現在。同、昭和 11 年 12 月現在。金子一夫「学術研究助成基金補助金成果報告書平成 25～27 年度『大正・昭和戦前期の中等学校図画教員と出身美術学校の総覧的研究』課題番号 25370126 第 1 部直轄学校～三重県」平成 28 年、120-121 頁。昭和 24 年以降は主に次の資料を参照した。「教官の研究」群馬大学教育学部百年史編修委員会、前掲書、796-804 頁。『昭和 24 年 11 月 群馬大学要覧』。『学生便覧』昭和 30、37、39-41 年度。『大学一覧』昭和 31 年度、昭和 36 年度。『群馬大学教育学部案内』平成 17 年度。群馬大学自己評価等実施委員会専門委員会『群馬大学教官総覧』（群馬大学庶務部庶務課、平成 5 年）。群馬大学学芸学部同窓会『会員名簿』昭和 27 年 10 月現在。同、昭和 35 年 1 月現在。群馬大学教育学部同窓会『会員名簿』昭和 50 年 3 月現在。同、昭和 60 年 3 月現在。大学美術教育学会『会員名簿』昭和 55 年度。清水刀根男の日本美術学校卒業年に関して、『日本美術学校同窓会名簿』では昭和 3 年、日本文化財研究所アーカイブデータベース（<http://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/10108.html>（平成 29 年 8 月 10 日確認））では大正 13 年とされ、表にはその両方を示しておく。狩野守に関して、「年譜」「あとがき」狩野守『狩野守画集』（光村印刷、平成 13 年）172-174、176-177 頁を参照した。

#### 4 埼玉大学

まず、百年史編集委員会『百年史 埼玉大学教育学部』（百年史刊行会、昭和 51 年）をもとに教官勤務表を作成した。同書「埼玉県師範学校教職員一覧表」（416-436 頁）、「埼玉県女子師範学校教員一覧」（688-710 頁）、「埼玉師範学校教職員一覧」（857-866 頁）、「表 1 埼玉県実業補習学校教員養成所教員の氏名、最終学歴および教員免許科目」（882 頁）、「図 1 埼玉県実業補習学校教員養成所の教員」（882 頁）、「図 1 埼玉県立青年学校教員養成所の教員」（914 頁）、「埼玉大学教育学部教職員一覧表」（1235-1244 頁）を参照した。昭和 23 年以前在職教官に関しては、金子一夫「学術研究助成基金補助金成果報告書平成 25～27 年度『大正・昭和戦前期の中等学校図画教員と出身美術学校の総覧的研究』課題番号 25370126 第 1 部直轄学校～三重県」平成 28 年、130-131 頁を参照した。その他次の資料を参照した。埼玉大学自己評価等委員会『埼玉大学教官総覧 1993』（埼玉大学、平成 5 年）。『同 1998』（平成 10 年）。『同 2001』（平成 14 年）。都築邦春「本田貴侶教授の人と業績」『埼玉大学紀要 教育学部』第 57 巻第 1 号、平成 20 年、171-177 頁。なお、竹野谷仁重の逝去年月に関して、「埼玉県師範学校教職員一覧表」（百年史編集委員会、前掲書、432 頁）では 42 年 2 月、「埼玉大学教育学部教職員一覧表」（同）では 41 年 2 月に死亡退職とされる。

#### 5 千葉大学

昭和 23 年以前在職教官に関しては次の資料を参照した。「創立以来ノ旧職員」千葉県師範学校『創立六十周年記念千葉県師範学校沿革史』（千葉県師範学校、昭和 9 年）9-14

頁。『千葉師範学校一覧 昭和十八年度』（千葉師範学校、昭和 18 年）181-195 頁。金子一夫「学術研究助成基金補助金成果報告書平成 25～27 年度『大正・昭和戦前期の中等学校図画教員と出身美術学校の総覧的研究』課題番号 25370126 第 1 部直轄学校～三重県」平成 28 年、142-143 頁。昭和 24 年以降在職教官に関しては次の資料を参照した。「第八章 美術教育史」「第二章 書道教育史」百年史編集委員会『百年史 千葉大学教育学部』（百年史刊行会、昭和 56 年）1039-1096 頁、783-832 頁。千葉大学五十年史編集委員会『千葉大学五十年史』（千葉大学、平成 11 年）284-285 頁。『千葉大学学報』第 2-623 号（昭和 26 年 8 月 15 日-昭和 62 年 5 月 15 日）、第 27 号（別冊）（平成 18 年 4 月 1 日）。大学美術教育学会『会員名簿』昭和 58-平成 8 年度。森桂一の経歴に関して、『千葉大学学報』第 361 号（昭和 45 年 5 月 1 日）を参照した。戸田健夫の経歴に関して、「著者略歴」森桂一・戸田健夫『水彩画の基礎』（ダヴィット社、昭和 48 年）、「著者略歴」戸田健夫『水彩画の道しるべー制作・鑑賞から発表まで』（ダヴィット社、平成 6 年）、「著者略歴」戸田健夫『水彩の指導』（三晃書房、平成 5 年）を参照した。太田洋三の経歴に関して、『太田洋三画集』（生活の友社デザインセンター、平成 9 年）を参照した。大木武男の経歴に関して、大木武男『デザインの全体像』（三一書房、昭和 46 年）を参照した。武内和夫の経歴に関して、『千葉大学学報』第 623 号（昭和 62 年 5 月 15 日）、武内和夫「武内和夫年譜」『武内和夫作品集』（武内和夫、昭和 62 年）、「著者紹介」武内和夫『たのしい絵の教室』（国土社、昭和 50 年）を参照した。なお千葉大学五十年史編集委員会、前掲書、284 頁に、研究科開設にそなえて造形芸術学に教養部教授の中森義宗が兼任として参加したことが記される。

## 6 東京学芸大学

まず、東京学芸大学二十年史編集委員会『東京学芸大学二十年史一創基九十六年史一』（東京学芸大学創立二十周年記念会、昭和 45 年）、東京学芸大学創立五十周年記念誌編集委員会『東京学芸大学五十年史 通史編』『同 資料編』（東京学芸大学創立五十周年記念事業後援会、平成 11 年）を参照した。人事、学科目制度、大学院設置等、詳細に記述されている。教官の在職期間、担当・専門分野に関しては、東京学芸大学二十年史編集委員会、前掲書、353-378、518-519、524-525、576、613-614、638、642、648、654-655、668、673、675-682、703-705、715-728 頁及び、東京学芸大学創立五十周年記念誌編集委員会、前掲書（通史編）、776-778 頁を参照した。あわせて次の資料も参照した。東京府青山師範学校『東京府青山師範学校一覧』（昭和 15 年現在）、同（昭和 17 年 6 月 1 日現在）。『東京府第一師範学校一覧』（昭和 19 年 9 月 1 日現在）。金子一夫「学術研究助成基金補助金成果報告書平成 25～27 年度『大正・昭和戦前期の中等学校図画教員と出身美術学校の総覧的研究』課題番号 25370126 第 1 部直轄学校～三重県」平成 28 年、178-179 頁。

## 7 横浜国立大学

まず、教育学部史編纂委員会『横浜国立大学教育学部の歩み』（横浜国立大学教育人間

科学部、平成 14 年)を参照した。「美術教室の歩み」(715-733 頁)に、大学移行後の教官の転退出入、授業担当、学科目等が詳細に記されており、これを基礎として大学移行後の表を作成した。あわせて次の資料も参照した。『神奈川県公立学校職員録』昭和 28 年度(昭和 28 年 6 月 10 日現在)(横浜国立大学教官名簿有)(昭和 26、30、39、41、43-45、47、49-51 年度版は学長・学部長等役職者名のみ記述。昭和 26 年度は『神奈川県公立学校職員名簿』)。昭和 23 年以前在職教官に関しては、金子一夫「学術研究助成基金補助金成果報告書平成 25~27 年度『大正・昭和戦前期の中等学校図画教員と出身美術学校の総覧的研究』課題番号 25370126 第 1 部直轄学校~三重県」平成 28 年、158-159 頁を参照した。小関利雄の経歴に関して、神奈川県立近代美術館「略歴」『小関利雄と子供たちの世界』(神奈川県立近代美術館、平成 17 年)及び、「著者紹介」竹田信夫・小関利雄『図案 単位と構成』(同学社、昭和 29 年)を参照した。三浦寛三の経歴に関して、三浦寛三『色彩学概論(再訂版)』(創文社、昭和 55 年)を参照した。國領経郎の経歴に関して、「略年譜」横浜美術館学芸部『國領経郎展』(横浜美術館、平成 11 年)130-136 頁を参照した。真鍋一男の経歴に関して、宮脇理「構成・デザイン教育に貢献された真鍋一男先生 日本デザイン学会名誉会員・真鍋一男先生へのインタビュー」『デザイン学研究』No. 83、11-12 頁を参照した。

## 第四章 各教員養成大学・学部における美術教育学の人的制度基盤の成立過程

### —中部地方—

#### 1 新潟大学

先に新潟大学教育学部の概要を記しておく<sup>1)</sup>。新潟第一師範学校は新潟大学教育学部に、新潟第一師範学校女子部は新潟大学長岡分校に、新潟第二師範学校は新潟大学高田分校に、新潟青年師範学校は新潟大学新発田分校となった。昭和26年4月より各分校は、教育学部長岡分校・高田分校・新発田分校と改称された。発足時の教育学部の学科は教育学科・芸能学科・家政学科であった。教育学科は各分校に、芸能学科は高田分校に、家政学科は長岡分校に置かれた。昭和28年4月に新発田分校は閉校となり新潟分校と改称され、昭和31年4月に新潟分校は教育学部本校に統合された。昭和34年度から四年制課程に一本化され、教育学科は小学校教育科と中学校教育科に分離され、芸能学科は芸能科に、家政学科は家政科と改称された。そして、教育学部には小学校教員養成課程と中学校教員養成課程が設置され、昭和39年4月から高田の芸能科と長岡の家政科は中学校教員養成課程に組み込まれた。なお昭和40年に特設書道が高田に設置された。さらに五十嵐地区への統合移転が昭和57年4月に完了した。昭和59年4月に大学院教育学研究科が設置され、「美術教育専修」にそれまでの美術科と書道科が統合された。その後、改組により平成10年4月に教育学部は教育人間科学部となった。

1. 新潟第一師範学校（新潟）、新潟第一師範学校女子部（長岡）、新潟青年師範学校（新発田）、新潟第二師範学校（高田）から新潟大学教育学部へ美術関係教官の全員は移行しなかった。なお、前述したように実現しなかったものの高田分校に人文学部芸能科を作る計画があった。高田分校人文学部芸能科教官として申請した者の多くは高田分校の芸能学科に移行した。この時期の美術科教育関係授業の主たる担い手は次の通りである。新潟では師範学校から長年勤務を続けていた諸橋政範（東京美術学校図画師範科）が絵画とともに担当した。先の「国立新潟大学認可申請書 昭和二十三年九月三十日」でも「各科教育」担当として申請されていた。長岡分校では当時在職していた唯一の美術関係教官で師範学校から勤務を続けていた大川民次郎が工作・工芸をはじめ多様な授業とともに受け持った。高田分校では分校主事でもあり師範学校から長年勤務してきた牧野実（東京美術学校図画師範科）が担当し、牧野退官後は後任の三浦顕栄（東京美術学校師範科）が絵画とともに担当した。

2. 昭和39年2月学科目制度発足時に示された学科目は、絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史の四つであった。そして、昭和49年6月に学科目「美術科教育」が示された。なお、新潟大学ホームページ「学部のあゆみ・沿革」によると、昭和49年4月11日に学科目「美術科教育」増設とされる<sup>2)</sup>。そこに、絵画を専門とする三浦顕栄と、構成を専門とする青柳三郎（新潟大学）が所属を移動した。三浦は県下の美術教育の指導者的存在であるとともに、国際美術教育連合会員で昭和41年の第17回国際会議に日本代表として参加し「故郷を愛し

故郷の発展をねがう美術教育」と題した発表をするなど精力的な活動を行った<sup>3)</sup>。青柳は新潟大学卒業後、新潟大学教育学部附属長岡小学校教諭、長岡市教育委員会指導主事等を経て、昭和 43 年新潟大学に着任した。美術教育に関する著書もあり、二科会で活躍する画家としても知られる。三浦も青柳も学科目「美術科教育」に所属する前から美術科教育関係授業を担当していた。

3. 昭和 59 年 4 月に教育学研究科が設置され、そこに美術教育専攻も、三浦と青柳の美術科教育分野二名体制で設置された。

## 2 富山大学

1. 富山師範学校から富山大学教育学部へ美術関係教官はほぼ移行した。学科目「美術科教育」が設置されるまで、美術科教育関係授業は分担されていた。主として受け持っていたのは、大学移行直後、唯一の教授で美学・美術史を専門とする玉生正信（京都大学）であった。玉生は美術科教育の論考も発表している。専門の美学・美術史関係授業と兼任した美術科教育関係授業では、海外の美術教育文献の講読等が行われていた<sup>4)</sup>。この時期、美術科教育を専門に担当・研究する教官はいなかった。

2. 昭和 39 年 2 月学科目制度発足時に示された学科目は、絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史の四つであった。そして、昭和 50 年 4 月に学科目「美術科教育」が示された。昭和 48 年に着任し、構成、彫塑の学科目に所属していた長谷川総一郎（富山大学）が美術科教育の学科目に所属を移動した。長谷川は美術科教育学会の前身の大学美術教科教育研究会の第一回研究会からの参加者であり、その後も美術教育研究と木彫制作の両方を続けていく。

3. 平成 6 年 4 月に大学院教育学研究科が設置される。平成 7 年に竹井史（琉球大学・神戸大学大学院）が新たに採用される。そして、平成 8 年 4 月に大学院美術教育専攻が、長谷川と竹井の美術科教育分野二名体制で設置された。

## 3 金沢大学

1. 金沢大学は比較的規模の大きな大学である。ただ教育学部は小さめで、その中での美術講座はさらに小さめであり、昭和 40 年代に美術関係教官三名体制だった時期もあった。教育学部は、石川師範学校、石川青年師範学校、金沢高等師範学校の一部を包括統合して発足した。美術関係教官は、石川師範学校から金沢大学教育学部へ全員は移行しなかった。昭和 20 年頃在職しながら大学に移行しなかった教官として、北浜淳（石川県師範学校）、宮崎央（東京美術学校図画師範科）、宮下重吉（東京高等師範学校図画手工専修科）が確認された。大学発足後、北浜は金沢大学教育学部附属中学校に勤める。後述するが、北浜は後に金沢大学に異動する。宮崎は金沢大学高等師範部附属中学校・高等学校、そして金沢大学教育学部附属高等学校に勤め、美術教育に関する論文も発表していった。大学に師範学校から長く勤めた教官はおらず、大学発足後着任した唯一の教授の逝去、教官の転出、技術科への所属の移動等、短期間で教官が入れ替わる事態が続いた。この時期、美術科教育を専門に担当・研究する教



官はいなかった。

2. 昭和 39 年 2 月学科目制度発足時に示された学科目は、絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史の四つであった。そして、昭和 53 年 4 月に学科目「美術科教育」が全国で最後に設置された。昭和 43 年に絵画の学科目で採用されていた上述の北浜淳が、昭和 55 年に美術科教育の学科目に移った。なお金沢大学教育学部『授業要項』（昭和 45 年度後期-昭和 51 年度後期）によると、既に美術科教育関係授業の多くは北浜が担当していた。昭和 59 年に北浜は退官する。その後の学科目「美術科教育」所属教官には、西野範夫（多摩美術大学）、向坂一弥（東京高等師範学校芸能科）、新川昭一（東京美術学校師範科）、山田一美（東京学芸大学・同院）と文部省と関わりの強い教官が続く。

3. 昭和 57 年 4 月に大学院教育学研究科が設置される。そして、平成 2 年に、向坂と新川、さらに吉田貞介（金沢大学）の美術科教育分野三名体制で、大学院美術教育専攻が設置された。吉田は教育工学センター（平成 3 年改組後附属教育実践研究指導センター）所属で、平成 2-8 年度は大学院の美術科教育分野、平成 9-12 年度は大学院の理科教育分野を担当した。また、平成 2-4 年度は宮坂元裕、平成 5-6 年度は竹内博が非常勤講師で大学院の美術教育関係集中講義を担当した。

#### 4 福井大学

1. 福井師範学校から福井大学学芸学部へ美術関係教官はほぼ移行した。図画教官の木戸武雄と川端哲雄は福井県師範学校卒業生で、工芸教官の原卓美と笠原行雄も含めて、全員が福井県出身者であった。福井大学『学生便覧』（昭和 25-28 年度）によると、開学最初期は木戸と原（後に技術講座へ移動）がそれぞれ複数の「図工科教育法」を担当し、笠原と川端は「図画工作科教材研究」を担当していた。木戸武雄（福井県師範学校・文検西用）は初期の学科主任で、福井県美術教育協会を創設して理事長も務めた。学内外における美術教育の中心的存在であったと推察されるが、昭和 31 年に病没してしまう。この時期に美術科教育を専門に担当・研究する教官はいない。

2. 昭和 39 年 2 月学科目制度発足時に示された学科目は、絵画、彫塑、美術理論・美術史の三つであった。そして、昭和 47 年 5 月に学科目「美術科教育」が示された。昭和 49 年にその所属教官として田代勝（東京教育大学彫塑・東京芸術大学大学院彫刻）が着任する。田代は筑波大学に転出し、後任として笠置三郎（東京芸術大学大学院彫刻）が学科目「美術科教育」所属教官として東京学芸大学附属竹早小学校より転入する。田代、笠置ともに専門は彫刻であった。

3. 平成 4 年 4 月に大学院教育学研究科が設置される。同年、新潟県の公立学校教員を長く続けて当時新潟県公立学校校長であった古田洋司（新潟大学）が美術科教育で新規採用される。そして、平成 7 年 4 月に大学院美術教育専攻が、笠置と古田の美術科教育分野二名体制で設置された。

## 5 山梨大学

1. 山梨師範学校から山梨大学学芸学部へ美術関係教官はほぼ移行した。教官の多くが山梨県出身者であった。山梨大学『学生便覧』(昭和 27 年)によると、堀内孝恵<sup>たかよし</sup>(東京高等師範学校研究科・文検図画)が図画教育法の授業、中山耕一郎(横浜市立教員養成所・文検手工)が工作教育法の授業を主として担い、他の教官も分担していた。この時期、図画教官と工作教官は計四名で、全員で分担するのが実情にあったと思われる。このような分担体制は比較的小規模の地方大学に多く見られた。この時期は美術科教育を専門に担当・研究する教官はいなかった。

2. 昭和 39 年 2 月学科目制度発足時に示された学科目は、絵画、彫塑、美術理論・美術史の三つであった。そして、昭和 53 年 4 月に学科目「美術科教育」が全国で最後に設置された。昭和 58 年に着任した寺坂公雄<sup>ただお</sup>(愛媛大学)が学科目「美術科教育」に所属し、暫く後に絵画の学科目に所属移動する。寺坂は画家で、後に日展理事長にもなる。昭和 60 年に富安敬二(東京芸術大学工芸・同院)が美術科教育の学科目で新しく採用される。平成 2 年、富安の立教大学転出に伴い、その後任として、筑波大学助手であった栗田真司(東京学芸大学大学院・筑波大学大学院)が美術科教育の学科目で採用される。

3. 平成 7 年 4 月に大学院教育学研究科が設置される。平成 9 年に井上正作(東京芸術大学工芸・同院美術教育学)が三重大学より転入する。そして、同年、井上と栗田の美術科教育分野二名体制で大学院美術教育専攻が設置された。

## 6 信州大学

信州大学は複雑な異動と移動が多数見られた。それゆえ他大学よりも紙幅を使う。

1. 長野師範学校から信州大学教育学部へ美術関係教官の全員は移行しなかった。長野師範学校は教官数が多く、信州大学に移行する際、男子部のあった長野に教育学部本部、女子部のあった松本に分校が置かれた。大学に移行しなかった教官は、大沢左一(戦後すぐに逝去)、山西謙二(山形師範学校に転出)、森口富太郎(長野県内中学校に異動)である。さらに、特異な事例として、大学発足直前まで長野師範学校に勤務していた田原幸三と宮坂彦一が、大学へ移行せず長野県内の高等学校に異動し、その後、信州大学に着任する。宮坂は後に最初の学科目「美術科教育」に所属する。

『信州大学教育学部九十年史』(昭和 40 年)及び『信州大学教育学部三十年誌』(昭和 57 年)は、教官の在職期間、担当授業、学科目所属を詳細に記録している<sup>5)</sup>。後者によると、昭和 25 年度の図画工作科教育法の授業は、長野本校では田原幸三、松本分校では森一雄と百瀬渥が担当した。その後、図画工作科教育法及び美術科教育法の授業は、長野本校では石川泰男が昭和 26-40 年、松本分校では森一雄が昭和 27-29 年、百瀬渥が昭和 36-39 年に担当した。いずれにしても美術科教育専門ではなく、絵画等の他分野との兼担であった。美術科教育を専門に担当・研究する教官はいなかった。

2. 昭和 39 年 2 月学科目制度発足時に示された学科目は、絵画、彫塑、構成、美術理論・美

術史、美術科教育の五つすべてが揃い、それらへの人の配置もすぐになされた。ただ、その後の約 10 年間は、便宜的な学科目所属が多かったようである。それは学科目「美術科教育」に限らない。例えば、学科目「美術理論・美術史」に関しては、昭和 51 年に笠原明子が着任するまでは、初任者の多くが着任後の数年間所属する形で維持されていた。そして最初の学科目「美術科教育」所属教官は上述の松本深志高等学校から昭和 29 年に大学に戻ってきていた宮坂彦一（東京高等師範学校図画手工専修科）であった。ただ、昭和 41 年、教育学部の長野への統合と松本分校の廃止、そして教養部新設に伴って、宮坂は教養部に移ることとなる。

宮坂が教養部に移った翌昭和 42 年、採用後 1 年目の横田<sup>とおる</sup>（信州大学・東京芸術大学・同専攻科）が学科目「美術科教育」に移る。横田は、昭和 41 年に採用され美術理論・美術史の学科目に所属し、翌 42 年に美術科教育の学科目に移り、そして昭和 45 年に専門である彫塑の学科目に移った。横田の彫塑に所属移動に伴い、絵画を担当していた石川泰男（東京高等師範学校図画手工専修科）が学科目「美術科教育」に所属を移る。石川と宮坂は東京高等師範学校の同期生でもあった。

昭和 50 年、石川退官に伴って、その後任として、関谷俊行（信州大学長野師範学校・信州大学）が学科目「美術理論・美術史」から「美術科教育」に所属を移る。関谷は信州大学第一期生で、信州大学に 38 年と 3 ヶ月の長きにわたって在職した。学科目に限らず何度も所属を移動した。そして美術科教育学会で最初期から活動した。信州大学教育学部と美術教育学研究における初期の功労者の一人と言えよう。「母校とともに 47 年 付関谷俊行教授略歴」『関谷俊行教授退官記念論文集』（平成 8 年）<sup>6)</sup>によると、関谷は昭和 5 年長野に生まれ、昭和 22 年 4 月長野師範学校に入学、昭和 25 年 3 月に信州大学長野師範学校本科を卒業し、昭和 25 年 3 月から信州大学長野師範学校附属長野中学校教諭となり、昭和 26 年 4 月信州大学教育学部第 3 年次編入学して昭和 28 年に卒業した。そして、関谷俊行「教員養成 38 年を回顧して」『信州大学学報』第 492 号に着任後の様子が詳細に記される<sup>7)</sup>。それによると、昭和 31 年 1 月 1 日に松本分校助手として採用されて主に工芸を担当した。中学校美術科にデザイン教材を導入するようになったので昭和 36 年 5 月から 37 年 3 月まで文部省内地研究員制度によって千葉大学工学部意匠学科で「デザインの方法について」を研究した。昭和 37 年 4 月に戻ってきたら、新設された技術科へ所属を移動し、昭和 39 年は学科目「技術科教育」の所属となった。学部統合のあった昭和 41 年に再び美術科に籍を移し、昭和 41 年は学科目「絵画」、昭和 42 年から学科目「美術理論・美術史」の所属となり、昭和 41 年の学部統合・教養部新設に伴う教育学部定員減のため廃止された学科目「構成」の授業の手伝いもした。そして昭和 50 年に学科目「美術科教育」所属となった。関谷は美術科教育学会の前身の大学美術教科教育研究会の第一回研究会から研究発表をし、学会化の後には理事にもなった。

3. 平成元年に橋本光明（千葉大学）が新たに採用される。橋本は、千葉大学教育学部附属小学校、筑波大学附属小学校に勤務した後に信州大学に着任した。平成 3 年 4 月に大学院教育学研究科が設置される。そして平成 4 年 4 月に大学院美術教育専攻が、関谷と橋本の美術科教育分野二名体制で設置された。

## 7 岐阜大学

1. 岐阜師範学校から岐阜大学学芸学部へ美術関係教官はほぼ移行した。岐阜大学『学生便覧』（昭和 31、33、34 年度）と『大学要覧』（昭和 33-35 年度）によると、昭和 31-35 年頃は土屋常義（東京美術学校図画師範科）が美術科教育関係授業を中心に担当していた。ただ、美術科教育専門担当ではなく、美術専門の授業も担当していた。土屋は、長野県出身で、大正 15 年より岐阜県師範学校教諭となり、岐阜大学学芸学部を昭和 36 年に退職するまで 35 年間にわたって勤務した。昭和 36 年に『円空の彫刻』を出版した。円空研究の先駆者として知られる。なお師範学校教官の出身校は、図画教官は東京美術学校、手工・工作教官は東京高等師範学校であることが多く、大学移行後もその傾向は続く。また大学院設置までどの時期にも自校出身教官が一人以上在職し、美術科教育の中心的担い手となった。

2. 昭和 39 年 2 月学科目制度発足時に示された学科目は、絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史の四つであった。昭和 40 年 3 月に学科目「美術科教育」が設置された。昭和 45 年頃に、工芸・彫塑を専門としていた田代栄喜（岐阜県師範学校・文検手工）が学科目「美術科教育」に所属を移動した。昭和 19 年に岐阜師範学校女子部に着任してから昭和 51 年に退職するまで 31 年と数か月にわたって勤務した。田代の後任として、東京都公立中学校で勤務していた富岡卓博（東京教育大学大学院）が着任する。富岡は、美術科教育の論文や著書執筆のほか、油画制作も専門的に行っていた。

3. 平成 6 年に、辻泰秀（岐阜大学・大阪教育大学大学院）が着任する。大阪教育大学大学院で花篤實に師事した。図画工作・美術科授業に活用される実践研究論文を多数執筆した。また、この時期、辻は同講座教官との共著を含め多くの研究論文を執筆した。岐阜大学の場合、大学院設置には実技教官にも論文業績が求められた。平成 7 年 4 月に大学院教育学研究科が設置される。そして平成 8 年 4 月に大学院美術教育専攻が、辻と富岡の美術科教育分野二名体制で設置された。

## 8 静岡大学

1. 複数の師範学校が包括されるケースでは教官の移行は難航しがちであるが、静岡第一師範学校（静岡）、静岡第二師範学校（浜松）の場合、静岡大学教育学部へ美術関係教官はほぼ移行した。この時期はまだ美術科教育を専門に担当・研究する教官はいなかったものの、静岡本校では松岡圭三郎（静岡県静岡師範学校・東京美術学校図画師範科）、浜松分校では北野熊雄（熊本県第二師範学校・東京美術学校図画師範科）が中心となって学内に止まらず静岡県の美術教育を振興した。二名とも師範学校時代から勤務し戦前は静岡の視学委員も務めていた。師範学校着任から松岡は 37 年、熊野は 35 年にわたって勤務を続けた。二名に教えを受けた美術教育者は多く、例えば学習院初等科で昭和 18 年から昭和 54 年まで勤務し、造形教育センター初期会員であった坪内千秋（静岡県静岡師範学校・東京高等師範学校）も、松岡に薫陶を受けた一人である。松岡、北野はともに専門は絵画で、美術専門授業も担当していた。

2. 昭和 39 年 2 月学科目制度発足時に示された学科目は、彫塑、構成、美術理論・美術史の三つであった。第一章で触れたが、絵画が最初の学科目制度時に示されなかった唯一の例である。当時絵画を専門とする教官は在職しており、かつ静岡大学のように規模の大きい大学になぜそのようなことが起きたのかは不明である。そして、昭和 45 年 4 月に学科目「美術科教育」が設置された。昭和 35 年に松岡の後任として最初は絵画の学科目で着任していた森正一（静岡県静岡師範学校・東京高等師範学校）が美術科教育の学科目に所属を移動した。森は画家でもあり、静岡県静岡師範学校在学中は松岡に師事していた。関係者の話によると最初から着任の数年後には美術科教育の主担当となることを前提にした採用で、学科目「美術科教育」設置よりも早く、昭和 40 か 41 年には美術科教育関係授業を専門に担当していた<sup>8)</sup>。さらに昭和 47 年に寺澤節雄（東京教育大学工芸・同専攻科工芸・同大学彫塑）が新しく採用され、森と寺澤の美術科教育二名体制となった。

3. 昭和 56 年、森の退官に伴いその後任として、樋口敏生（東京高等師範学校芸能科）が着任する。樋口は奈良教育大学、文部省初等中等教育局を経て静岡大学に着任した。その 4 年後の昭和 59 年に横浜国立大学に転出する。昭和 56 年 4 月に大学院教育学研究科が設置され、そこに美術教育専攻も、寺澤と樋口の美術科教育分野二名体制で設置された。

## 9 愛知教育大学

1. 愛知第一師範学校（名古屋）、愛知第二師範学校（岡崎）から愛知学芸大学へ美術関係教官はほぼ移行した。大学開学当初は、名古屋分校（名古屋市）、豊川分校（豊川市）、安城分校（安城市）が置かれた。豊川分校は昭和 25 年 4 月に岡崎市に移転して岡崎分校と改称、安城分校は昭和 27 年 3 月に廃止される。昭和 27 年 4 月までには、岡崎に本部・後期 2 年課程・前期 2 年課程、名古屋に前期 2 年課程と整理され、この体制は昭和 45 年 4 月に刈谷市に統合移転するまで続いた<sup>9)</sup>。愛知学芸大学には、開学当初から美術教室とは別に名古屋分校に「教科教育教室」が設置された。そこに師範学校から大学へ移行した川口四郎（東京高等師範学校）が図工科教育担当として所属した。愛知学芸大学の場合、大学開学当初から美術科教育を専門に担当する教官がいたことが特徴的である。なお、師範学校の教官の出身校は東京高等師範学校が多かった。大学移行後は、名古屋分校の教官及び手工・工作教官は東京高等師範学校、岡崎分校の教官は東京美術学校出身者が多くなっていく。

2. 昭和 39 年 2 月学科目制度発足時に示された学科目は、絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、美術科教育の五つがすべて揃っていた。学科目「美術科教育」には川口が継続して所属した。なお昭和 42 年に「教科教育教室」はなくなり<sup>10)</sup>、川口は「美術教室」に移動した。その後、大野元三（東京美術学校工芸図案）が構成から美術科教育の学科目に所属を移動する。さらに、昭和 44 年に松本光司（東京芸術大学）、昭和 46 年に丹羽皓夫（愛知学芸大学）、昭和 47 年に西光寺亨（東京美術学校図画師範科）が美術科教育の学科目で新規採用された。

3. 前述の通り全国で三番目に、昭和 53 年に大学院教育学研究科が設置され、そこに美術教育専攻（正式名称：「教育学研究科修士課程芸術教育専攻」）が、大野、西光寺、丹羽の美

術科教育分野三名体制で設置された。そのすぐ後に、昭和 57 年に磯部洋司（愛知教育大学・東京芸術大学大学院壁画）、竹内清（愛知学芸大学）、昭和 59 年に藤江充（愛知教育大学・東京芸術大学大学院美学）が美術科教育教官として着任した。

## 註

- 1) 新潟大学教育学部高田分校『高田分校三十年史』（新潟大学教育学部高田分校、昭和 56 年）237-238 頁。
- 2) 「学部のあゆみ・沿革」新潟大学教育学部ホームページ ([http://www.ed.niigata-u.ac.jp/modules/faculty/index.php?content\\_id=3](http://www.ed.niigata-u.ac.jp/modules/faculty/index.php?content_id=3) (平成 29 年 9 月 8 日確認))。
- 3) 新潟大学教育学部高田分校『高田分校三十年史』（同校、昭和 56 年）。
- 4) 昭和 47 年富山大学卒業生による教示（平成 23 年 3 月聞き取り）。
- 5) 信州大学教育学部九十年史編集委員会『信州大学教育学部九十年史』（信濃教育会、昭和 40 年）。信州大学教育学部三十年誌刊行会『信州大学教育学部三十年誌』（信州大学教育学部三十年誌刊行会、昭和 57 年）。
- 6) 信州大学教育学部美術科同窓会関谷俊行教授退官記念行事实行委員会『関谷俊行教授退官記念論文集』（平成 8 年）。
- 7) 関谷俊行「教員養成 38 年を回顧して」庶務部庶務課『信州大学学報』第 492 号（平成 7 年 3 月 1 日）。
- 8) 静岡大学関係者による教示（平成 28 年 11 月聞き取り）。
- 9) 愛知教育大学史編さん専門委員会『愛知教育大学史』（愛知教育大学、昭和 50 年）125 頁。
- 10) 同上、207 頁。



表29 富山大学








表31 福井大学




表32 山梨大学




表33 信州大学




表34 岐阜大学




表35 静岡大学





表36 愛知教育大学



## 中部地方

### 1 新潟大学

まず、新潟大学二十五年史編集委員会『新潟大学二十五年史 総編』『同 部局編』（新潟大学二十五年史刊行委員会、昭和 49 年）、新潟大学五十年史編集委員会『新潟大学五十年史 部局編』（新潟大学五十年史刊行会、平成 12 年）、新潟大学教育学部高田分校『高田分校三十年史』（新潟大学教育学部高田分校、昭和 56 年）、新潟大学教育学部長岡分校創立三十周年並びに閉校記念事業実行委員会『悠久の丘—新潟大学教育学部長岡分校創立三十周年並びに閉校記念誌—』（新潟大学教育学部長岡分校創立三十周年並びに閉校記念事業実行委員会、昭和 56 年）を基礎として表を作成した。「美術科教室」に関しては、新潟大学二十五年史編集委員会、前掲書（部局編）、194-195、289、385-359 頁、新潟大学五十年史編集委員会、前掲書、270-271 頁、新潟大学教育学部高田分校、前掲書、236-243 頁、新潟大学教育学部長岡分校創立三十周年並びに閉校記念事業実行委員会、前掲書、47 頁を参照した（本文に記した美術科教育関係授業を担当した教官の特定にもこれを参照した）。さらに『新潟大学学生便覧 昭和 28 年度』、新潟大学『学生便覧』昭和 28、31-34 年度、新潟大学『大学院学生便覧』昭和 59 年度を参照した。青柳三郎の経歴に関しては、青柳三郎『児童画の指導』（美術出版社、昭和 52 年）を参照した。

### 2 富山大学

まず、富山大学『富山大学十五年史』（富山大学、昭和 39 年）、富山大学年史編纂委員会『富山大学五十年史』（富山大学、平成 19 年）を参照した。昭和 23 年以前在職教官に関しては、金子一夫「学術研究助成基金補助金成果報告書平成 25～27 年度『大正・昭和戦前期の中等学校図画教員と出身美術学校の総覧的研究』課題番号 25370126 第 1 部直轄学校～三重県」平成 28 年、158-159 頁を参照した。昭和 24 年以降在職教官に関しては、「美術科各研究室のプロファイル」富山大学教育学部学窓会『会誌』第 38 号（昭和 47 年）、富山教育学窓会『会員名簿』昭和 27、31、36、40、44、48、50-平成元年度を参照した。なお玉生正信には「美術教育における創造性の形成と造形性」『美學』第 22 号(2)（昭和 46 年）1-10 頁等、美術教育に関する論文もある。

### 3 金沢大学

まず、金沢大学 50 年史編纂委員会『金沢大学五十年史部局篇』金沢大学創立 50 周年記念事業後援会、平成 11 年を基礎として表を作成した。ただ、同書は記述文章と勤務表で、教官の転出入年月等が異なっていた。そのため次の資料をもとに表を補正した。石川県教育会『石川県学事関係職員録』昭和 2、10-12、14-18、21、22 年度（昭和 2 年 7 月、10 年 4 月、11 年 5 月、12 年 4 月、15 年 4 月、16 年 4 月、17 年 4 月、18 年 10 月、21 年 7 月、22 年 5 月、23 年 6 月、25 年 6 月、27 年 6 月現在）石川県教職員組合『石川県学事関係職員録』昭和 23 年度。石川県教職員組合・石川県学校消費生活協同組合『石川県学事関係職員録』昭和 29-54 年度（54 年度までは金沢大学教職員名簿有、平成 28 年度までは金沢大学図書館に有）。金沢大学学生部『学生便覧』昭和 25-平成 12 年度（以降は教官名



簿の記載無)。『金沢大学総覧』昭和 25 年度 (昭和 25 年 10 月 1 日現在教官名簿有)。金沢大学『金沢大学一覧』昭和 33-37、43、46 年度 (昭和 43 年度は学科目有)。金沢大学点検評価委員会『金沢大学研究者総覧』(金沢大学点検評価委員会、平成 9 年) (平成 8 年 7 月 1 日現在)。金沢大学『教員調査』昭和 51 年度 (昭和 51 年 5 月 1 日)、昭和 52 年度 (昭和 52 年 5 月 1 日現在)、昭和 53 年度 (昭和 53 年 5 月 1 日現在)。金沢大学『昭和五一五年度附属施設等教員調査』(昭和 55 年 5 月 1 日現在)。金沢大学教育学部『授業要項』昭和 45 年度後期、昭和 46 年度前期、昭和 46 年度後期、昭和 47 年度後期、昭和 47 年度Ⅴ・Ⅶ期、昭和 48 年度前期、昭和 48 年度後期、昭和 49 年度前期、昭和 49 年度後期、昭和 50 年度前期、昭和 51 年度後期。金沢大学学生部『金沢大学大学院便覧』金沢大学学生部、平成 2-26 年度 (平成 2-9 年度は教官名簿、授業名、授業担当者名、授業概要有。平成 10 年度からは教官名簿のみ)。金沢大学庶務課『金沢大学事務通報』。宮坂元裕「訃報 林先生ご逝去」『公益社団法人日本美術教育連合ニュース』No. 147、平成 28 年 6 月、21 頁。高桑純吉、遠田運雄と奈良年男の経歴に関して、「作家略歴」石川県立美術館『石川県立美術館開設 50 周年記念 近代日本美術の精華—東京芸大美術館コレクションを中心に—』(石川県立美術館、平成 21 年) 141-147 頁を参照した。

#### 4 福井大学

まず、昭和 23 年以前在職教官に関しては次の資料を参照して表を作成した。金子一夫「学術研究助成基金補助金成果報告書平成 25～27 年度『大正・昭和戦前期の中等学校図画教員と出身美術学校の総覧的研究』課題番号 25370126 第 1 部直轄学校～三重県」平成 28 年、292、293 頁。福井県師範学校同窓会『同窓会報告』第 25-38 号、昭和 2-15 年 (旧教員・当該年度教員名簿有)、福井師範学校同窓会『同窓会誌』昭和 22 年、福井師範学校校友会『啓成詞林』第 44 号、昭和 8 年 (教官名簿有) (第 45、51-53 号は教官名簿無)。福井県鯖江女子師範学校、福井県立鯖江高等女学校『昭和十六年七月 我ガ校ノ教育』昭和 16 年、福井県鯖江女子師範学校、福井県立鯖江高等女学校『みどり』第 10 号、昭和 13 年 (教官名簿有) (第 9 号は教官名簿無)。昭和 24 年以降は、福井大学『学生便覧』昭和 25-平成 15 年度 (平成 16 年度以降は教官名簿無)。福井大学事務部庶務課『福井大学学報』第 1 号-Vol. 54、昭和 24-平成 15 年を基礎として表を作成した。さらに、川端哲雄の経歴に関して、11 年会酒井ブロッカー同『雪の輪—福師 11 年会 50 周年記念文集一』(春近文庫、昭和 61 年) を参照した。田中隆盛の経歴に関して、田中隆盛『田中隆盛油絵展』(田中隆盛、昭和 50 年) を参照した。

#### 5 山梨大学

昭和 23 年度以前在職教官に関しては、金子一夫「学術研究助成基金補助金成果報告書平成 25～27 年度『大正・昭和戦前期の中等学校図画教員と出身美術学校の総覧的研究』課題番号 25370126 第 1 部直轄学校～三重県」平成 28 年、298、299 頁を参照した。昭和 39 年以前在職教官に関しては主として丸田銓二郎『山梨大学学芸学部沿革史』(山梨大学学芸学部、昭和 39 年) を参照して表を作成した。大学移行後に関しては次の資料を参

照して表を作成した。『国立山梨大学創設案』（昭和 23 年 7 月 30 日設置申請）及び『山梨大学（改定案）教官年次別及び学部別教室別配当名簿表』（ともに山梨大学附属図書館蔵）。山梨大学『学生便覧』昭和 27-平成 16 年度（教官名簿有。昭和 27 年度のみ授業名と担当者名の記載有）。山梨大学『職員録』昭和 27、28、35-39、41-50、52、53、55-63、平成 5-14 年度。山梨大学『山梨大学要覧』昭和 30-平成 14 年度。山梨大学『山梨大学概要』昭和 40-平成 14 年度。山梨大学『学報』第 1-494 号（昭和 26-平成 12 年）。

## 6 信州大学

次の資料をもとに表を作成した。信州大学教育学部九十年史編集委員会『信州大学教育学部九十年史』信濃教育会、昭和 40 年。信州大学教育学部三十年誌刊行会『信州大学教育学部三十年誌』信州大学教育学部三十年誌刊行会、昭和 57 年。信州大学教育学部五十年誌編纂部会『信州大学教育学部五十年誌』信州大学教育学部創立 50 周年記念事業実施委員会、平成 11 年。信州大学教育学部業生名簿刊行会『信州大学教育学部卒業生名簿』信州大学教育学部卒業生名簿刊行会、昭和 56 年。以上を参照して、平成 11 年までの教官の在職期間、担当分野・担当学科目を示した。信濃教育会事務所『長野県学事関係職員録』大正 15-平成 15 年度を参照して、当該年現在在職者と職位を示した。信州大学庶務課『職員録』昭和 27-29、36、39 年度から、当該年現在在職者と職位と担当分野及び担当学科目を示した。その他、参照したものを次に挙げる。卒業生名簿作成委員会『信州大学教育学部卒業生名簿 昭和三十八年』創立九十周年記念会、昭和 38 年。信州大学教育学部美術科同窓会『信州大学教育学部美術科 30 周年記念誌』信州大学教育学部美術科同窓会、昭和 55 年。記念誌編纂専門部会『信州大学創立 50 周年記念誌：新たな創造と交流を目指して』信州大学、平成 11 年。信州大学自己点検・評価運営委員会『信州大学研究者総覧 1995』信州大学、平成 7 年。信州大学自己点検・評価委員会『信州大学教育研究者総覧 2001 年度版』信州大学、平成 14 年。

## 7 岐阜大学

まず、次の資料を基礎として表を作成した。岐阜県師範学校父母会『名簿』大正 15、昭和 2、5、7、8、9、10、12、13、15、16 年度。『岐阜県学事関係職員録』昭和 22、24-49 年度。岐阜大学庶務部庶務課『岐阜大学要覧』昭和 25、自 33 至 35、43、45、48、51、54、57、60、63、平成 4、10 年度（『学報』第 7 号昭和 26 年 11 月 15 日）によると古い要覧は庶務課に保管されているらしい）。岐阜大学『学生便覧』昭和 31、33、34、42、43、59 年度。岐阜県師範同窓会『会報』（会員名簿）第 15 号（昭和 6 年）、第 16 号（昭和 7 年）、第 17 号（昭和 8 年）、第 19 号（昭和 10 年）、第 20 号（昭和 11 年）、第 25 号（昭和 17 年）（前・現職員名簿有、転退出入年月記載無）。岐阜大学教育学部同窓会『会員名簿』平成 11 年（教官転退出入年有）。岐阜大学学芸学部/教育学部同窓会『会員名簿』昭和 26、31、35、38、48 年。岐阜大学『大学要覧』（岐阜大学、昭和 25 年）及び同書の「学部及び学科の組織」（4 頁）。岐阜大学研究者一覧編集委員会『岐阜大学研究者一覧』（岐阜大学、昭和 55 年）。岐阜大学自己評価実施委員会『岐阜大学研究者一覧』（岐阜大学、平成 7 年）及び

同（平成 11 年）。岐阜大学庶務部『学報』。そして、岐阜大学の教示によって、表を補正した。また、次の資料も参照した。齋藤暁子「昭和初期手工教育の実際—加茂農林学校における木工による手工教育を探る」『美術教育学』第 29 号、平成 20 年。土屋常義「水彩画家早川国彦 人と作品」東海女子短期大学『紀要』第 5 号、東海女子短期大学、昭和 50 年、9 頁。坂井の経歴に関しては、御宿正司「坂井範一年譜」、「坂井範一のあゆみ」岐阜県美術館『郷土作家紹介シリーズ 1 色と形の世界 坂井範一展』（昭和 58 年）54-59 頁を参照した。岐阜大学『学生便覧』昭和 31、33、34 年度、『大学要覧』昭和 33、34、35 年度では、土屋常義は「美術・美術教育」担当とあった。土屋の経歴に関しては、円空顕彰会・岐阜県文化財保護協会『土屋常義先生叙勲記念』（昭和 48 年）を参照した。その他、土屋常義「私の青春日記」『岐阜日日新聞』昭和 45 年 7 月 26 日、6 頁、土屋常義「児童画について」『岐阜タイムス』昭和 30 年 4 月 21 日、4 頁を参照した。

#### 8 静岡大学

まず、静岡大学 10 年史編集委員会『静岡大学十年史』（静岡大学、昭和 37 年）。静岡大学二十五年史編集委員会『静岡大学二十五年史』（静岡大学、昭和 51 年）、静岡大学 50 周年記念誌編集委員会通史編小委員会『静岡大学の五十年』（静岡大学、平成 11 年）を参照した。その上で、美術講座に関して具体的に記された静岡大学創立 50 周年記念事業実行委員会・静岡大学教育学部美術教室『静岡大学創立五十周年記念美術展』（静岡大学教育学部美術教室、平成 11 年）にもとづいて表を作成した。さらに、次の資料にもとづいて表を補正した。静岡大学事務局庶務課『静岡大学要覧』昭和 37・38、39・40、41・42、43・44、45・46、47・48、49・50、51・52、53・54、55・56、57・58、61、62 年度。静岡大学『学報』第 1-346、349-363、365-518 号（昭和 37 年 6 月 1 日-平成 19 年）。『静岡大学教官総覧』（平成 5 年）。松岡圭三郎に関しては、松岡圭三郎画集刊行会『松岡圭三郎画集』（静岡教育出版会、昭和 45 年）を参照した。

#### 9 愛知教育大学

まず、愛知教育大学史編さん専門委員会『愛知教育大学史』（愛知教育大学、昭和 50 年）及び愛知教育大学『50 周年記念誌編集資料 歴代職員名簿統計』（平成 11 年）を基礎として表を作成した。昭和 23 年以前在職教官に関しては、金子一夫「学術研究助成基金補助金成果報告書平成 25～27 年度『大正・昭和戦前期の中等学校図画教員と出身美術学校の総覧的研究』課題番号 25370126 第 1 部直轄学校～三重県」平成 28 年、348、349 頁を参照した。さらに、次の資料を参照した。『教職 60 年・画業 70 年 鈴木三五郎記念画集』（名古屋市博物館、昭和 55 年）。『鈴木三五郎先生 80 年記念展』（名古屋市博物館、昭和 55 年）。「年譜」刈谷市美術館、松本育子『松本光司展』（刈谷市美術館、平成 4 年）88-91 頁。「年譜」画集編集委員会『市川晃画集』（市川晃先生退官記念画集刊行会、昭和 61 年）139-152 頁。画集編集委員会『磯谷桂治画集』（磯谷桂治先生退官記念画集刊行会、昭和 61 年）及び、同書中「年譜」128 頁、「回想」85-127 頁。大野元三先生退官記念行事事務局『回想録 子どもはなぜ絵をかくか』（昭和 58 年）。

## 第五章 各教員養成大学・学部における美術教育学の人的制度基盤の成立過程

### —近畿地方—

#### 1 三重大学

1. 三重師範学校から三重大学学芸学部へ美術関係教官はほぼ移行した。この時期はまだ美術科教育を専門に担当・研究する教官はいなかった。

2. 昭和 39 年 2 月学科目制度発足時に示された学科目は、絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史の四つであった。昭和 39 年 4 月に学科目「美術科教育」が設置された。昭和 42 年頃、園田正治（東京高等師範学校図画手工専修科）が構成から美術科教育に所属を移動した。園田は『子どもの絵と脳のはたらき』（黎明書房、昭和 51 年）等、著書も多数出版する。昭和 51 年、園田の退官に伴いその後任として、昭和 51 年に藤江充（愛知教育大学・東京芸術大学大学院美学）が美術科教育の学科目で着任する。昭和 59 年に藤江は愛知教育大学に転出する。その後任として同年に柴田和豊（大阪教育大学・東京芸術大学大学院美術教育学）が美術科教育の学科目で宮崎大学より転入する。

3. 昭和 60 年に浜本昌宏（多摩美術大学）が鳥取大学より転入する。美術科教育は柴田、浜本の二名体制となる。そして平成元年 4 月に大学院教育学研究科が設置され、そこに美術教育専攻も設置される。柴田は平成元年に東京学芸大学に転出し、その後任に同年 10 月、井上正作（東京芸術大学工芸・同院美術教育学）が福岡教育大学より転入する。大学院設置の審査は柴田で通したものである。

#### 2 滋賀大学

1. 滋賀師範学校から滋賀大学芸学部へ美術関係教官のほぼ半数は移行した。国立公文書館蔵の「滋賀大学設置認可申請書」には、当時京都大学副手であった歴史学者の角田文衛を美術工芸の教授とするとあったが実現しなかった。この時期はまだ美術科教育を専門に担当・研究する教官はいなかった。

2. 昭和 39 年 2 月学科目制度発足時に示された学科目は、絵画、彫塑の二つであった。そして昭和 42 年 5 月に学科目「美術科教育」が設置された。絵画を専門とする北川威夫（滋賀県師範学校・文検西用）が学科目「美術科教育」に所属した。昭和 52 年、北川の退官に伴いその後任として、秋元幸茂（東京芸術大学油画）が美術科教育の学科目で採用される。秋元は版画家として知られる。前述したように、山形大学の青山光祐との美術科教育に関する共著も執筆した。

3. 平成 3 年 4 月に大学院教育学研究科が設置され、そこに美術教育専攻も設置された。大学院設置を機に、秋元は絵画に移動し、絵画の学科目の所属していた鶴房健蔵（滋賀大学）が美術科教育に移動した。鶴房は光風会、日展等で活躍する画家として知られる。さらに、橘美知子（跡見女子大学・東京芸術大学大学院美術教育学）が新たに着任する。橘は平成 2

年に絵画で採用されたが、すぐに美術科教育に移動する。以上のように、大学院美術教育専攻は、鶴房と橘の美術科教育分野二名体制で始まった。

### 3 京都教育大学

1. 京都師範学校から京都学芸大学芸学部へ美術関係教官はほぼ移行した。『京都教育大学百二十年史』（平成 13 年）には次のように記される<sup>1)</sup>。昭和 27 年 4 月に「特別教科(図画・工作)教員養成課程」が設置された。学科組織として、従来の美術科のほかに「特修美術科」が設けられた。当時、美術科は「一般美術（般美）」、特修美術科は「特美」と呼ばれ、カリキュラムの上では般美は教員養成、特美は専門家養成と、性格付けがはっきりと区別されていた。特修美術科の美術学部としての独立構想もあったとされる。特修美術科設置に伴い、美学・美術史、構成学、工芸学、絵画学・日本画、絵画学・西洋画、彫塑学の学科群が設けられた。当時は美術教育の専任教官はおらず、絵画の富士一男、松井清人らが中心になってその指導を行っていた。

以上から、「特別教科(図画・工作)教員養成課程」の設置に伴い、学科目制度に先んじて、教官の専門が明確化していき、美術科教育関係授業を中心に担う教官も富士一男（東京高等師範学校図画手工専修科）、松井清人（山口県師範学校・東京高等師範学校図画手工専修科）に概ね定まっていたことがうかがえる。富士と松井は東京高等師範学校の同期生でもある。なお、昭和 27 年に創立した日本美術教育学会（初代会長：京都大学教授井島勉）の二代会長となる中村二柄（京都大学）は大学開学当初から美学・美術史を専門とする教官として在職していた。

2. 昭和 39 年 2 月学科目制度発足時に示された学科目は、日本画、西洋画、木工、金工、陶芸、彫塑、写真、構成、美術理論・美術史であった。そして、昭和 44 年 5 月に学科目「美術工芸科教育」が示され、昭和 49 年頃に松井清人が西洋画から所属を移動した。特設美術の設置された大学で発足当初に美術科教育の学科目が示されなかったのは京都学芸大学だけである。また他の特設美術では学科目「美術・工芸科教育」が示されるところ、京都教育大学には学科目「美術工芸科教育」が示された。

なお、『京都教育大学百二十年史』（平成 13 年）には次のように記されている。昭和 41 年の学科目は、美術科は絵画、工芸、書道で、特修美術科は美学美術史、構成学、工芸学、絵画学(日本画)、絵画学(西洋画)、彫塑学であった<sup>2)</sup>。昭和 46 年にカリキュラム改訂により、特修美術科の専攻別の入試が廃止され、カリキュラムに共通教育科目が設けられ専門教育から教員養成への充実が図られ、全体的に教員養成大学としての機能が増すことになった<sup>3)</sup>。このカリキュラム改革に伴い、それまで美術教育を担当していた絵画の松井清人が美術教育の専任教官となり、はじめて美術教育の教官が配置された<sup>4)</sup>。美術工芸科教育の学科目は昭和 49 年に追加となった<sup>5)</sup>。

松井の後任として、昭和 50 年に森市松（東京高等師範学校芸能科）が美術科教育の学科目で着任する。森は美術科教育の著書や論考を発表していく。森は後に埼玉大学に転出し、そ

ここでは主として陶芸の実技授業を担当することとなる。森の後任として昭和 56 年に竹内博（東京学芸大学）が美術科教育の学科目で着任する。竹内は、東京学芸大学附属竹早中学校からの転任で、20 年以上の中学校教員歴をもつ。森も竹内も学習指導要領作成協力者であった<sup>6)</sup>。

3. 平成 2 年 4 月に大学院教育学研究科が設置され、そこに美術教育専攻も設置された。平成 2 年に菅沼嘉弘（愛知学芸大学）が美術科教育教官として鳥取大学より転入する。竹内、菅沼の美術科教育分野二名体制での大学院美術教育専攻設置であった。

#### 4 大阪教育大学

大阪教育大学に関しては、序章で触れた花篤實の口頭発表資料に詳細が記されている<sup>7)</sup>。それと那賀貞彦「絵画・工芸教室」『大阪教育大学教室沿革史』（平成 8 年）<sup>8)</sup>、「花篤先生退官記念座談会」（平成 10 年）<sup>9)</sup>等を参照すると以下のようなことであった。

1. 新制大阪学芸大学は大阪第一師範学校男子部（天王寺）、大阪第一師範学校女子部（平野）、大阪第二師範学校男子部（池田）、大阪第二師範学校女子部（富田林）の 4 校を統合して設置された。これらから大阪学芸大学への教官の移行は難航した。他教科に比べれば美術関係教官は移行しやすかったものの、それでも全員は移行できず誰が残り誰が転出するかは大問題となった。第一章で触れたように文部省に受け入れられなかったが、最初の新制大学設置認可計画書は 4 校を独立温存する内容であった。各校の独立意識は強かった。さらに大阪学芸大学になると師範学校時より教官定員がずっと少なくなるので誰かが転出せざるを得なかった。難航するのは当然であった。花篤實によれば美術では誰が残るか大阪の西光寺で三日三晩の大激論があり、東京美術学校・文検出身者と東京高等師範学校出身者が対立し、結果、東京美術学校・文検出身者の多くが残ることになった<sup>10)</sup>。東京高等師範学校出身者の多くは転出あるいは大阪学芸大学附属校教官となった。園田正治は三重大学に、梶一郎は神戸大学に転出した。

天王寺分校の高妻巳子雄（大阪府天王寺師範学校・東京美術学校図画師範科）と池田分校の河井達海（岡山県師範学校・文検西用）の奇しくも同年齢の二人が大学開学期の美術関係の中心的人物であった。高妻は、大阪地域の図画工作教育の中心となり講演活動や研究会活動等に活躍し、また親分肌で面倒見がよく、学生の就職の世話や住むに困る学生の面倒までみていたらしい<sup>11)</sup>。それに対し、河井は文検出身で日展入選常連であり、大学開学当初美術関係教官で唯一の教授となった。二者は様々に違うが、ともに実技を基盤とした美術教育を主張した。「いずれにせよ二人とも芸術家気質というか、強烈な個性で。方法は違っても、戦後の新制大学としての美術の教員養成のスタートを、自由な芸大スタイルと言うか、教育システム（それも多分の観念で）で戦前の師範学校からの脱却を図ったのでしょね。」と花篤は語る<sup>12)</sup>。

なお大阪学芸大学は昭和 34 年から学科制となり、学科目制度導入に先んじて教官の専門が明確化していく。

2. 昭和 39 年 2 月に示された学科目は絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、美術科教育の五つすべてであった。昭和 39 年に美術科教育担当として花篤實（大阪学芸大学）が採用され、美術教育学の人的整備は完了した。ただ、着任直後は、絵画（河井達海）や工芸（西田虎一）の助手で、赴任後二年間は授業を受け持たなかった<sup>13)</sup>。師範学校から大学への移行時に美術関係教官は実技業績で判定されたことから、当時の学長にも、教科教育ではなく、実技の業績をつくるように助言されていたという<sup>14)</sup>。とりあえず学科目制度の枠に应じる姿勢を示し、実質は別ということであった。

「花篤先生退官記念座談会」に、河井から「美術教育の講座を持ってからも、絵は基本だからしっかり絵を描くように絶えず言われていた」、そして花篤が美術教育の大学院準備担当をしていた時、既に退官していた高妻から「今度出来る美術教育の大学院は、理論中心で東京高等師範型だ。我が国の美術教育は山本鼎画伯以来実技を中心に発展してきた」と叱責されたとある<sup>15)</sup>。当時の美術関係教官の意識がうかがえる。制度上は美術教育学の人的整備は確定されたが、美術教育学関係業績をもつ若手人材は皆無に近く赴任しても美術教育学研究をどう蓄積していくか誰も想像できなかった。

3. 昭和 42 年 6 月に大阪学芸大学は大阪教育大学に名称変更となった。昭和 43 年 4 月に大学院教育学研究科が設置されたものの、美術・音楽・体育に関しては 7 年遅れての設置となった。それは実技教官の多くが先の高妻と同じく実技研究を主張したためである。「花篤先生退官記念座談会」には「大学院設立の課程で美術、音楽といった芸術系の教官が最後まで消極的で、他学科より 6、7 年遅れた筈だよ。始めにいったように芸術系は芸大方式を目指していたので、「学」というのは門外だし、第一我が国にそんな大学での芸術教育研究講座のパターンがそれまで無かったので、戸惑ったというより、そんな大学院をやる暇があれば、一枚でも作品を作ると教授たちが公言して開き直っている状況だった」とある<sup>16)</sup>。そのような中、花篤は学長要請で大学院美術教育専攻先発校である東京学芸大学や東京芸術大学等へ赴き、さらに文部省在外研究派遣でアメリカの大学へ赴き情報収集を行うなど、大学院美術教育専攻設置に向けて奔走した<sup>17)</sup>。そして昭和 50 年に大阪教育大学に大学院美術教育専攻が全国で二番目に設置された。その前の昭和 45 年に那賀貞彦（東京芸術大学）が美術科教育の学科目で、昭和 47 年に熊田真幸（東京芸術大学・同院）が造形芸術学の学科目で新たに着任していた。彼ら理論系教官も大学院教育に加わり、実技中心ではなく現代美術理論を軸とする大阪教育大学独自の美術教育学研究のスタイルを打ち立て、多くの美術教育研究者を輩出した。

## 5 神戸大学

1. 兵庫師範学校から神戸大学教育学部へ教官の移行は難航した。美術関係教官に関してはほぼ移行したものの、師範学校官立化後の数年間は転出入が多かった。唯一の教授として大学に移行したのが、美学・美術史を専門とする黒田英一郎である。黒田は兵庫師範学校男子部部長を務め、戦後の男子部再建に尽力した。昭和 34 年から学部長を務めたものの、昭

和 35 年 12 月 31 日に急逝してしまう<sup>18)</sup>。黒田の後任として、昭和 36 年に上野省策（東京美術学校図画師範科）が着任する。上野は、昭和 33 年に『美術教育』（国土社）を出版し、その後も美術教育に関する著書・論文を執筆していく。昭和 37 年度の担当授業は、上野省策は素描・版画・教育法・美術史で、梶一郎はデザイン・工芸・教育法で<sup>19)</sup>、美術科教育関係授業は上野と梶が分担していた。上野着任以前の「美術科教材研究」の授業は、昭和 24 年度に関しては、住吉分校は兼行武四郎（東京美術学校図画師範科）、明石分校は安藤勲（東京美術学校図画師範科）が担当していた<sup>20)</sup>。なお、この時期の神戸大学について特筆すべきは、教育学部創設当初から大学院設置構想があり、講座名称が「美術科教育講座」とされ、昭和 38 年 4 月より教育科学科と教科教育学科による学科制が実施されたことである<sup>21)</sup>。両学科は、学科目組織の整備とその講座制への切りかえと相俟って、大学院課程構成の基盤とする計画であった。

2. 昭和 39 年 2 月学科目制度発足時に示された学科目は、絵画、彫塑、構成、美術科教育の四つであった。学科目「美術科教育」には上野が所属した。昭和 50 年、上野の退官に伴いその後任として、附属住吉小学校に勤務していた東山明（神戸大学）が美術科教育の学科目で着任する。

3. 昭和 55 年に大勝恵一郎（東京美術学校油画）が新たに美術科教育の学科目で採用される。鳥取大学からの転入であった。昭和 56 年 4 月に大学院教育学研究科が設置され、そこに美術教育専攻も東山と大勝の美術科教育分野二名体制で設置された。その後、平成 4 年 10 月に教育学部は発達科学部に改組となり、平成 12 年 3 月に教育学部廃止、翌年 3 月に教育学研究科廃止となった。

## 6 奈良教育大学

1. 奈良師範学校から奈良学芸大学に美術関係教官はほぼ移行した。移行した教官は東京美術学校、東京高等師範学校、京都大学の出身者であった。最初期は美術科教育を専門とする教官はいなかった。

2. 昭和 39 年 2 月学科目制度発足時に示された学科目は、絵画、彫塑、美術理論・美術史の三つであった。そして昭和 44 年 5 月に学科目「美術科教育」が設置され、昭和 45 年 9 月に樋口敏生（東京高等師範学校芸能科）が採用され、それに所属する。昭和 50 年、樋口の静岡大学転出に伴い、鈴木寛男（島根県師範学校・同専攻科・東京美術学校図画師範科）が学科目を絵画から美術科教育に移動する。さらに昭和 49 年から 51 年まで原口勝海（奈良学芸大学）も学科目を絵画から美術科教育に移動する。そして昭和 51 年に比留間良介（東京芸術大学油画・同院）が美術科教育の学科目で新たに採用される。比留間は美術教育に関する論文を執筆した。そして画家でもあった。この頃から既に美術科教育二名体制が築かれた。

なお、鈴木寛男と大勝恵一郎が発起人となって発足した大学美術教科教育研究会の研究会は昭和 54 年 3 月の第 1 回から昭和 57 年 3 月の第 4 回まで奈良教育大学で開催された。その後、同研究会は美術科教育学会となった。



3. 昭和 58 年 4 月に大学院教育学研究科が設置され、そこに美術教育専攻も鈴木と比留間の美術科教育分野二名体制で設置された。

## 7 和歌山大学

1. 和歌山師範学校から和歌山大学学芸学部にも美術関係教官の全員は移行しなかった。大学移行後、保田重右衛門(保田龍門)を招聘した。国立公文書館蔵の『学事要覧』(昭和 28 年 4 月-昭和 29 年 3 月)では、美術教育関係授業は、保田と師範学校から勤務を続けた峠原敏夫を除く教官で分担されていた。

2. 昭和 39 年 2 月学科目制度発足時に示された学科目は、絵画、彫塑の二つであった。そして、昭和 47 年 5 月に学科目「美術科教育」が設置された。同年に長谷川哲哉(愛知教育大学・東京芸術大学大学院美術教育学)が着任し、美術科教育の学科目に所属する。長谷川は東京芸術大学大学院美術教育学専攻第一期修了生であった。修了研究題目は「ハーバード・リードの芸術教育論」である。大学美術教科教育研究会の第 1 回研究会からの参加者でもあった。後に『ミューズ教育思想史の研究』(風間書房、平成 17 年)を出版する。

3. 平成 3 年に、永守基樹(大阪教育大学大学・同院)が美術科教育の学科目で採用される。佐賀大学からの転入であった。平成 5 年 4 月に大学院教育学研究科が設置され、そこに美術教育専攻も長谷川と永守の美術科教育分野二名体制で設置された。

## 註

- 1) 京都教育大学 120 周年記念誌編集委員会『京都教育大学百二十年史』(京都教育大学、平成 13 年) 488-491 頁。
- 2) 同上、574 頁。
- 3) 同上、612 頁。
- 4) 同上、612 頁。
- 5) 同上、575 頁。
- 6) 森は昭和 53 年小学校学習指導要領図画工作科編作成協力者、竹内は昭和 53 年と平成元年の中学校学習指導要領美術編作成協力者である。
- 7) 花篤實「大阪教育大学における美術教育学の制度的基盤の成立過程」(口頭発表資料)、美術科教育学会美術教育史研究部会「美術教育学の制度的基盤の成立過程」第 33 回美術科教育学会富山大会、平成 23 年 3 月 27 日。
- 8) 「絵画教室・工芸教室」大阪教育大学 120 周年記念誌編纂委員会『大阪教育大学教室沿

革史』（大阪教育大学 120 周年記念誌編纂委員会、平成 8 年）339-367 頁。

- 9) 「花篤先生退官記念座談会」大阪教育大学美術教育講座・芸術講座『美術科学研究』第 16 号、平成 10 年、1-19 頁。花篤實を囲んでの、那賀貞彦、岩崎由紀夫、田中久和による座談会の談話記録をまとめたもので、大阪学芸大学創立から大学院の設置とその後の展開が詳細かつ豊かな肉づけをもって記される。
- 10) 平成 23 年 8 月 1 日聞き取り。
- 11) 同上及び大阪児童美術研究会『敬慕 高妻巳子雄先生』（大阪児童美術研究会、昭和 58 年）。
- 12) 「花篤先生退官記念座談会」前掲誌、5 頁。
- 13) 平成 23 年 8 月 1 日聞き取り。
- 14) 同上。
- 15) 「花篤先生退官記念座談会」前掲誌、5 頁。
- 16) 同上、8 頁。
- 17) 同上、8 頁。花篤實、前掲口頭発表資料。
- 18) 神戸大学教育学部沿革史編集委員会『神戸大学教育学部沿革史』（神戸大学教育学部、昭和 46 年）449-450 頁。
- 19) 『日本教育大学協会第二部会全国美術部門 会員名簿』（昭和 38 年 3 月）。
- 20) 神戸大学教育学部五十年史編集委員会『神戸大学教育学部五十年史』（神戸大学紫陽会、平成 12 年）237-238 頁。
- 21) 同上、213-214、207-212、301-308 頁。

表37 三重大学




表38 滋賀大学




表39 京都教育大学




表40 大阪教育大学






表42 奈良教育大学







表43 和歌山大学



## 近畿地方

### 1 三重大学

まず、三重大学開学 50 周年記念誌刊行専門委員会『三重大学五十年史』通史編・部局史編・資料編（三重大学開学 50 周年記念事業後援会、平成 11 年）。三重大学教育学部同窓会百周年記念事業会『三重大学教育学部創立百年史』（三重大学教育学部同窓会百周年記念事業会、昭和 52 年）を参照した。ただ、同書には美術講座の詳細な沿革や教官についての記述はなかったので、表の作成にあたっては主に次の資料を参照した。昭和 23 年以前在職教官に関しては次の資料を参照して表を作成した。金子一夫「学術研究助成基金補助金成果報告書平成 25～27 年度『大正・昭和戦前期の中等学校図画教員と出身美術学校の総覧的研究』課題番号 25370126 第 1 部直轄学校～三重県」平成 28 年、374、375 頁。三重大学『職員録』昭和 33 年 2 月、34 年 12 月、36 年 4 月、37 年 5 月、38 年 8 月、39 年 10 月、43 年 11 月、44 年か（表紙欠落不明、同書の綴り順に沿って判断）、45 年 11 月、46 年 12 月。大学美術教育学会『会員名簿』（昭和 55 年）。三重大学ホームページ「三重大学教員紹介」（[http://kyoin.mie-u.ac.jp/402\\_KYOIN\\_Search.aspx](http://kyoin.mie-u.ac.jp/402_KYOIN_Search.aspx)（平成 29 年 7 月 20 日確認））

### 2 滋賀大学

まず次の資料を参照した。滋賀大学史編集委員会『滋賀大学史』（滋賀大学創立 40 周年記念事業、平成元年）（旧教官・現名簿有（304-310 頁））。滋賀大学史編集委員会『滋賀大学史—50 周年を迎えて—』（滋賀大学創立 50 周年記念事業実行委員会、平成 11 年）。川崎源『滋賀大学教育学部百年沿革史』（滋賀大学教育学部同窓会『会報』第 26 号（昭和 51 年）の別冊）。川崎源『滋賀大学教育学部百二十年史』（滋賀大学同窓会、平成 13 年）。滋賀大学史編集委員会『滋賀大学史』234、246-247 頁及び川崎源『滋賀大学教育学部百二十年史』119 頁には、昭和 39 年度設置学科目は「絵画、彫塑、構成」、昭和 42 年度「美術科教育」新設と記される。昭和 23 年以前在職教官に関しては次の資料を参照した。滋賀県師範学校『滋賀県師範学校六十年史』（滋賀県師範学校、昭和 10 年）。金子一夫「学術研究助成基金補助金成果報告書平成 25～27 年度『大正・昭和戦前期の中等学校図画教員と出身美術学校の総覧的研究』課題番号 25370126 第 2 部滋賀県～在外学校」平成 28 年、4、5 頁。滋賀県教職員組合『教育関係職員録 昭和 23 年度』（滋賀県教職員組合、昭和 23 年）。昭和 24 年以降在職教官に関しては次の資料を参照した。滋賀大学学芸学部同窓会『会報』第 16 号（昭和 40 年）。滋賀大学自己評価等検討委員会『滋賀大学研究者総覧 1999』（滋賀大学企画広報室、平成 11 年）。山尾平『山尾平作品集 みち芝』（山尾平作品集刊行委員会、平成 10 年）。北川威夫遺作展委員会主催『北川威夫遺作展』案内（平成 4 年）。秋元幸茂作品集出版と展覧会開催実行委員会『秋元幸茂作品集』（秋元幸茂作品集出版と展覧会開催実行委員会、平成 12 年）。鶴房健蔵『湖彩—鶴房健蔵作品集』（鶴房健蔵、平成 6 年）。『山田良定と郷土の弟子たち展』（「山田良定と郷土の弟子たち展」実行委員会、平成 17 年）。そして滋賀大学の教示により表を

補正した。

### 3 京都教育大学

まず次の資料を参照して表を作成した。京都教育大学開学 30 周年記念誌編集委員会『京都教育大学開学三十周年記念誌』（京都教育大学、昭和 55 年）。京都教育大学一二〇周年記念誌編集委員会『京都教育大学百二十年史』（京都教育大学、平成 13 年）、特に「美術科」に関しては、同書の 488-490、611-614、705-708 頁を参照した。さらに次の資料を参照した。京都府教育会『京都府学事関係職員録』（京都府教育会、大正 15-昭和 18、25-平成 15 年度）。

### 4 大阪教育大学

まず、大阪学芸大学『大阪学芸大学 15 年史』（大阪学芸大学、昭和 39 年）、大阪教育大学 120 周年記念誌編纂委員会『大阪教育大学教室沿革史』（大阪教育大学 120 周年記念誌編纂委員会、平成 8 年）を参照した。美術講座に関しては、大阪学芸大学、前掲書、62-63、252-267 頁、大阪教育大学 120 周年記念誌編纂委員会、前掲書、339-367 頁、「花篤先生退官記念座談会」大阪教育大学美術教育講座・芸術講座『美術科研究』第 16 号、平成 10 年、1-19 頁を参照した。さらに、教育通信社『大阪府学事職員録』昭和 17、18、21 年度、大阪教員組合『大阪府学校職員録』昭和 24 年度、大阪教職員組合『大阪府学校教職員録』昭和 25、26、27、29、30、33、35-42、44、47-60 年度を参照した。同職員録によると、昭和 47-49 年度の三年間は「美術科教育」は藤原昇一・花篤實・水上喜行・那賀貞彦の四名体制となり、さらに昭和 50 年度及び昭和 51 年度の二年に限っては那賀貞彦が「絵画第二」となっていた（ご本人に確認したところ、絵画の授業を担当したことはなく、便宜的な所属であったのであろうとのことであった（平成 26 年 3 月聞き取り）。昭和 50 年の大学院美術教育専攻設置直前のことであった）。その他、次の資料を参照した。河井洋『河井達海画集』（芸術春秋社、昭和 52 年）。大阪児童美術研究会『敬慕 高妻巳子雄先生』（大阪児童美術研究会、昭和 58 年）。

### 5 神戸大学

まず、次の資料を参照した。神戸大学教育学部沿革史編集委員会『神戸大学教育学部沿革史』（神戸大学教育学部、昭和 46 年）。神戸大学教育学部五十年史編集委員会『神戸大学教育学部五十年史』（神戸大学紫陽会、平成 12 年）。神戸大学百年史編集委員会『神戸大学百年史』（通史・部局史）（神戸大学、平成 17 年）。特に『神戸大学教育学部五十年史』は、学部の沿革が詳細に記され、神戸大学教育学部前身校からの「教職員在職年数一覧」の表もあり参考になった。「あとがき」は編集委員会を代表して船寄俊雄が記している。さらに次の資料も参照した。兵庫県教育会『兵庫県学事関係職員録』大正 14、昭和 7、9、10、13、17、19 年度。兵庫県教職員組合『昭和 23 年度職員録』。兼行武四郎先生「退官記念画集」刊行会『兼行武四郎画集』（昭和 42 年）（同書には、兼行は習字の教員の後任としての採用であって習字の免許を持っていたことが採用に関わったことが記される。東京美術学校での習字の師は岡田起作(号瀧水)）。上野省策『斎藤喜博と美術教育』（一莖書房、

昭和 59 年)。

## 6 奈良教育大学

次の資料を参照して表を作成した。奈良教育大学創立百周年記念会百年史部『奈良教育大学史一百年の歩み一』(奈良教育大学創立百周年記念会、平成 2 年)。奈良教育大学大学院設置 20 年記念誌編集実行委員会『奈良教育大学大学院 20 年史』(奈良教育大学大学院設置 20 年記念誌編集実行委員会、平成 16 年)。奈良教育大学大学院教育学研究科美術教育専攻美術コース書道コース『奈良教育大学大学院美術教育専攻修了研究報告』(奈良教育大学大学院美術教育講座(美術コース、書道コース)第 1 号-第 16 号(平成 11 年-平成 16 年)。国立大学法人奈良教育大学点検評価委員会『奈良教育大学教員総覧』(奈良教育大学、平成 18 年)。金子一夫「学術研究助成基金補助金成果報告書平成 25～27 年度『大正・昭和戦前期の中等学校図画教員と出身美術学校の総覧的研究』課題番号 25370126 第 2 部滋賀県～在外学校」平成 28 年、12、13 頁

## 7 和歌山大学

まず、次の資料を参照した。和歌山大学『十年のあゆみ』(和歌山大学、昭和 34 年)。和歌山大学教育学部『和歌山大学教育学部創立百周年記念 100 年のあしあと』(和歌山大学教育学部、昭和 50 年)。和歌山大学 50 年史編纂委員会『和歌山大学 50 年史』(和歌山大学、平成 12 年)。昭和 23 年以前在職教官に関しては主に次の資料を参照して表を作成した。和歌山県教育会『和歌山県学事関係職員録』昭和 2、4、5、9、10、11-17 年度。和歌山県師範学校『師範学校一覧表』(昭和 10 年 10 月 1 日現在)。和歌山県女子師範学校『同窓会名簿』(和歌山県女子師範学校、昭和 17 年)。和歌山県女子師範学校『会員名簿』(昭和 15 年 9 月現在)。昭和 24 年以降在職教官に関しては主に次の資料を参照して表を作成した。「在職教員一覧」和歌山大学 50 年史編纂委員会、前掲書、624-629 頁。紀学同窓会『紀学同窓会会員名簿』(昭和 46 年)。和歌山大学自己点検・評価委員会『和歌山大学の現状と課題 1993』(和歌山大学、平成 5 年)。峠原敏夫の経歴に関しては、峠原敏夫『峠原敏夫画集』(峠原敏夫、昭和 60 年)を参照した。保田重右衛門(保田龍門)の経歴に関しては、寺口淳治「保田龍門自筆年譜」和歌山県立近代美術館『大正のまなざし—若き保田龍門とその時代—』(和歌山県立近代美術館、平成 6 年) 112-119 頁を参照した。樋口弘之に関しては、樋口弘之『白色ポルトランドセメントを主材料とした学園像(その他)(Monument)の制作研究 1959～1970』(昭和 45 年)を参照した。

## 第六章 各教員養成大学・学部における美術教育学の人的制度基盤の成立過程

### —中国・四国地方—

#### 第一節 中国地方

##### 1 鳥取大学

1. 鳥取師範学校から鳥取大学学芸学部へ美術関係教官はほぼ移行できた。大学移行直後の美術科教育関係授業は在職教官全員で分担していたが、昭和 31 年度からは船井美周<sup>よしちか</sup>（東京美術学校図画師範科）が主に担当するようになった<sup>1)</sup>。初期の在職教官のほとんどは小中高等学校での教諭歴を有していた。船井以外は鳥取県出身であった。船井は絵画と美術科教育の授業を兼担していた。この時期に美術科教育を専門に担当・研究する教官はいなかった。

2. 昭和 39 年 2 月の科目制度発足時に示された学科目は、絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史の四つであった。昭和 48 年 4 月に学科目「美術科教育」が設置され、船井が絵画から所属を移動した。船井は画家であり、かつ美術教育に関する論文発表もしていた。船井の退官後、学科目「美術科教育」所属教官には、大勝恵一郎（東京美術学校油画科）、浜本昌宏（多摩美術大学）、菅沼嘉弘（愛知学芸大学）と「美術教育を進める会」の歴代代表が続く。

3. 菅沼の後任として、平成 4 年に高浦（島崎）浩（東京学芸大学）が着任する。平成 6 年 4 月に大学院教育学研究科が設置される。平成 7 年に喜久山悟（熊本大学・横浜国立大学大学院）が新たに採用される。そして平成 8 年 4 月に大学院美術教育専攻が、高浦と喜久山の美術科教育分野二名体制で設置された。二人とも美術教育研究と同時に実技制作も続けたことが特徴的である。

##### 2 島根大学

1. 島根師範学校から島根大学教育学部へ美術関係教官はほぼ移行できた。初期の島根大学美術講座は、書道の金森米三郎、図画（絵画）の井上善教、工作（工芸）の天野茂時、図画工作（絵画工芸）の小谷忠芳という体制で始まった。美術科教育関係授業は小谷忠芳（広島高等師範学校第二臨時教員養成所図画専修科）が担当した<sup>2)</sup>。この時期に美術科教育を専門に担当・研究する教官はいなかった。

2. 昭和 39 年 2 月学科目制度発足時に示された学科目は、絵画、彫塑の二つであった。そして昭和 45 年 4 月に三つ目の学科目として「美術科教育」が設置された。石野眞（島根大学）が彫塑から美術科教育の学科目へ所属移動した。昭和 51 年、猿田量<sup>はかる</sup>（東京芸術大学・同院美学）が美術科教育の学科目で採用され、石野は構成に所属移動する。その後、大学院設置の頃まで島根大学の美術科教育関係授業は猿田一人が担当した。猿田の修士論文題目は「批評の不在」であり、大学赴任後も美術教育研究とともに美学研究を続けた。大学院美術教育専攻設置直前に猿田は、美術理論・美術史に所属移動した。

3. 平成 3 年 4 月に大学院教育学研究科が設置された。平成 6 年に間鍋武敷（島根大学）、平成 7 年に川路澄人（鹿児島大学・千葉大学大学院・筑波大学大学院）が新しく採用される。間鍋は大阪で中学校教員を長く勤め、学習指導要領作成協力者でもあった。そして、平成 7 年 4 月に大学院美術教育専攻が間鍋と川路を美術科教育分野担当として設置された。

### 3 岡山大学

1. 岡山師範学校から岡山大学教育学部へ美術関係教官はほぼ移行した。最初期は師範学校から移行した佐藤義太郎が一時期、教育法を担当したとする資料<sup>3)</sup>はあるものの、美術科教育を専門とする教官はいなかった。昭和 28 年特設美術設置に伴って、多数の教官が新たに採用され、学科目制度に先んじて教官の専門性が明確化された。昭和 32 年に戸田忠吾（栃木県師範学校・東京高等師範学校）が採用され、美術科教育関係授業の主担当者となった。ただ、戸田は手工・技術科教育を専門としていた。

2. 昭和 39 年 2 月学科目制度発足時に示された学科目は西洋画、木工、陶芸、彫塑、構成、美術・工芸科教育であった。学科目「美術・工芸科教育」に戸田が所属した。戸田の後任として昭和 46 年に黒川建一（東京教育大学大学院）が着任する。黒川は幼児教育を専門としていた。昭和 49 年に愛知教育大学に幼児教育の教官として転出する。

3. 黒川の後任として、昭和 50 年に宮脇理、さらに昭和 53 年に吉田<sup>すずぐ</sup>漱（東京美術学校）が着任する。吉田は浮世絵研究家であり歌人でもあった。宮脇は大学院美術教育専攻設置直前の昭和 54 年に横浜国立大学転出となったことは既に記した。宮脇の後任として昭和 54 年に熊本高工<sup>たかのり</sup>（東京府青山師範学校・東京教育大学）が着任する。昭和 55 年 4 月に大学院教育学研究科が設置され、そこに美術教育専攻も設置された。東京学芸大学、大阪教育大学、愛知教育大学、横浜国立大学に次いで全国で五番目の設置であった。各地方の教員養成大学・学部大学院が設置され始めた最初期は、全国的に美術科教育を専門とする人材は少なかった。岡山大学のように、大学院設置に際し、学外から人材を招聘した大学は少なくない。それだけに大学院設置は大きな改革であったことが言える。

### 4 広島大学

広島大学教育学部は、旧制大学と高等師範学校と師範学校が包括された特殊事例であり、大学設置後も独得の変遷をたどる。それゆえその概観を先に記しておく<sup>4)</sup>。

広島文理科大学、広島高等師範学校、広島女子高等師範学校、広島師範学校、広島青年師範学校を包括して、広島大学教育学部が教育学部本部、東雲分校、三原分校（昭和 37 年東雲分校に統合）、福山分校の体制で発足した。教育学部本部は広島高等師範学校と広島文理科大学の教育学科、東雲分校と三原分校は広島師範学校、福山分校は広島青年師範学校と広島女子高等師範学校を母胎とした。昭和 28 年 4 月、教育学専攻、教育行政学専攻、実験心理学専攻、教育心理学専攻の四専攻から成る大学院教育学研究科（修士課程・博士課程）が設置された。昭和 41 年 4 月に同研究科に教科教育学専攻（修士課程・博士課程）が増設され

た。ただ、同専攻に美術は置かれなかった。昭和 53 年 6 月に教育学部（本部福山分校）が再編され、学校教育学部（東雲分校）が設置された。昭和 55 年 4 月に大学院学校教育研究科が設置され、美術教育専攻の修士課程は昭和 56 年 4 月に設置された。平成 12 年に教育学部と学校教育学部は教育学部に統合・改組され、大学院教育学研究科と大学院学校教育研究科も改組・統合されて大学院教育学研究科が設置された。

1. 広島文理科大学からの移行を除いて、師範学校教官の移行は難航した<sup>5)</sup>。美術関係教官はほぼ移行したが、昭和 30 年までに二名が辞職している。最初期に美術科教育を専門に担当・研究する教官はいなかった。

2. 昭和 39 年 2 月学科目制度発足時に示された学科目は、絵画、構成、美術理論・美術史の三つであった。そして、昭和 51 年 5 月に学科目「美術科教育」が設置された。昭和 53 年に石原英雄（東京高等師範学校）が学科目「美術科教育」所属教官として弘前大学より転入した。石原着任以前の美術科教育法関係授業は砂原久（広島高等師範学校第二臨時教員養成所図画専修科）が担当していた時期がある<sup>6)</sup>。

3. 昭和 55 年 4 月に大学院「学校教育研究科」が設置される。昭和 56 年に橋本泰幸（東京学芸大学・同院）が学科目「美術科教育」所属教官として鹿児島大学より転入する。そして昭和 56 年 4 月に大学院「学校教育研究科美術教育専攻」が、石原と橋本の美術科教育分野二名体制で設置された。

## 5 山口大学

1. 山口師範学校から山口大学教育学部へ美術関係教官はほぼ移行した。最初期は美術科教育を専門とする教官はいなかった。なお、戦前の師範学校の教官は東京美術学校出身者が多く、戦後は東京高等師範学校・東京教育大学出身者が多くを占めていくようになっていく。

2. 昭和 39 年 2 月学科目制度発足時に示された学科目は、絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、美術科教育の五つすべてであった。ただ暫くは学科目「美術科教育」に人的配置はなされなかった。それまで書道、工作・工芸、絵画、美術理論・美術史と様々な分野を担当してきた森本宏（東京美術学校図画師範科）が、昭和 45 年に所属を移動することで学科目「美術科教育」への人的配置がなされた。さらに森本の定年の一年前の昭和 54 年に武市勝（東京教育大学）が美術科教育の学科目で新たに採用される。武市は版画との兼任担任であった。

3. 武市の鳴門教育大学転出に伴い、昭和 62 年に岡田匡史（筑波大学大学院・プラット・インスティテュート大学院絵画・筑波大学大学院博）が着任する。さらに、昭和 63 年に福田隆眞（岡山大学・東京教育大学大学院）が北海道教育大学函館分校から転入する。福田は、美術教育研究と構成・デザイン研究を両立した。そして、平成 3 年 4 月に大学院教育学研究科が設置され、そこに大学院美術教育専攻も福田と岡田の美術科教育分野二名体制で設置された。

## 第二節 四国地方

### 1 徳島大学

1. 徳島師範学校から徳島大学学芸学部へ美術関係教官はほぼ移行した。最初期は美術科教育を専門に担当・研究する教官はいなかった。

2. 昭和 39 年 2 月学科目制度発足時に示された学科目は、絵画、彫塑、美術科教育の三つであった。最初の学科目「美術科教育」には、河野<sup>かわの</sup>太郎（東京美術学校図画師範科）が所属した。『徳島大学職員録』によると、河野の所属は、昭和 39 年は絵画、昭和 40 年以降は美術科教育となっていた。河野は、大学開学期の美術講座で唯一の教授で、講座の中心的存在あり、東光会等で活躍する画家でもあった。さらに昭和 40 年に村上正典（京都市立美術大学工芸科陶磁器）が美術科教育の学科目に採用される。昭和 48 年、河野の退官に伴いその後任として、徳島大学教育学部附属中学校教諭であった河崎良行（徳島大学・東京芸術大学研究生）が美術科教育の学科目で採用される。河崎は二紀会で活躍する彫刻家でもあった。

その後、徳島大学教育学部は改組により昭和 61 年に総合科学部となる。河崎は徳島大学総合科学部の彫塑の担当となり、村上は鳴門教育大学に転出し、陶芸の担当となる。

### 2 香川大学

1. 香川師範学校から香川大学学芸学部へ美術関係教官の全員は移行しなかった。東京美術学校出身者は移行した。大学移行後に新しく教官が着任していく。昭和 31 年に池川敏幸（愛媛師範学校・東京高等師範学校研究科・東京教育大学）が着任した。池川は二科会で活躍する彫刻家でもあった。香川大学『履修の手引き』の昭和 36 年度以降を確認することができた。それによると、少なくとも昭和 36 年度から美術科教育関係授業は、池川が主として担当していた。香川大学では工芸の教員免許も出していたので工芸科教育法の授業が開講され、それも池川が担当していた。

2. 昭和 39 年 2 月学科目制度発足時に示された学科目は、絵画、彫塑、構成の三つであった。そして昭和 44 年 5 月に四つ目の学科目として「美術科教育」が設置された。池川敏幸が学科「美術科教育」に所属を移動した。なお、それまで池川が一手に担っていた美術科教育関係授業は昭和 47 年頃から分担されるようになる。池川は平成元年に南部正人が着任するまで工芸科教育法を主に担当した。美術科教育法は、昭和 47-52 年度は学科目「絵画」に所属する神田融が、昭和 53 年度は岡山大学に在職していた宮脇理が非常勤講師として担当した。神田には著書『造形芸術と美術教育』（月書房、昭和 41 年）がある。そして、昭和 54 年に藤瀬敬（東京美術学校図画師範科）が学科目「美術科教育」所属教官として新たに採用され、以降、藤瀬が美術科教育法の授業を担当することとなる。

3. 藤瀬の後任として、昭和 62 年に渡辺庄三郎（香川大学）が美術科教育の学科目で着任する。以降、渡辺が美術科教育法の授業を担当する。渡辺は東京都教育委員会指導主事を務めていた。さらに平成元年に南部正人（北海道教育大学・横浜国立大学大学院・筑波大学研



研究生)が美術科教育の学科目で新たに採用される。南部の修了論文題目は「ハーバード・リードの総合論」であった。平成4年4月に大学院教育学研究科が設置され、そこに美術教育専攻も渡辺と南部の美術科教育分野二名体制で設置された。

### 3 愛媛大学

1. 愛媛師範学校から愛媛大学教育学部へ美術関係教官はほぼ移行した。藤谷庸夫<sup>ふじたにっねお</sup>、石井進(号南放)、小泉政孝は、愛媛(県)師範学校出身者であった。野村正三郎、木村武郷は東京高等師範学校出身者であった。大正13年より勤務を続けた藤谷は大学開学期の美術関係教官では唯一の教授となった。特に、藤谷、野村、石井は、愛媛の美術教育の振興に大きく寄与した。藤谷が中心となって昭和14年に愛媛県図画手工研究会が創設された。さらに戦後には愛媛美術教育研究会(昭和24年結成、昭和36年より愛媛美術教育連盟、現在に至る)が創設され、初代会長を藤谷が務め、その後を野村、石井、さらに後には奥定一孝が引き継いでいく<sup>7)</sup>。

藤谷庸夫の著書に『小学校に於ける美育とその実際』(関印刷所出版部、昭和3年)がある。また藤谷が様々な場で発表した論考が、藤谷庸夫先生追慕の会『たんぼ』(藤谷馨、昭和8年)にまとめられている。画家としても知られ、昭和4年帝展入選、翌年愛媛県美術工芸展開催にあたっては創設委員、昭和21年には愛媛美術協会を結成し、理事長となる<sup>8)</sup>。

野村正三郎の著書に、小中学校教師参考書として『工作教育の実際』(開成書院、昭和31年)がある。図画工作科は、図画と工作の分野に分けて考えることは教科の意味を誤解されやすく、教科名も造形科や美術科に改める必要があろうと述べた上で、現状の図画工作科は描画指導偏重と指摘し、立体的表現・工作指導について説明している。また、昭和39年9月から昭和44年3月まで教員養成大学二部会美術部門副委員長となった。作家活動も盛んに行い、戦前は太平洋画会、中央美術展、日本水彩画会、文展等多数入選を重ね、戦後は二科会を中心に活躍する<sup>9)</sup>。二科会には初期は油彩や彫塑作品を出品し入選を重ねていたが、ある時期「美術を中心とする教師の集いがあった折、漆工芸作品を見て漆の美に魅せられ、カシュ絵での表現に変わった」(野村言)として、それ以来カシュ絵(人工の漆絵)の作品発表になった<sup>10)</sup>。

石井進も、前述の愛媛美術教育研究会等を通して愛媛県の美術教育振興に尽力した。小学校・中学校の検定教科書の編集にも携わる。さらに、愛媛の南画の先駆者の吉田蔵澤の研究者でもある。伊予画人研究会会長として愛媛新聞社『伊予の画人』(愛媛新聞社、昭和61年)の出版に貢献する。同書の執筆者には奥定一孝や稲次保夫もいた。日本画家であり、昭和23年愛媛日本画研究会(昭和37年愛媛日本画会と改称)を結成するなど、愛媛の美術文化の発展に寄与した<sup>11)</sup>。

この時期、美術科教育関係授業は、藤谷、野村、石井は担当することは充分可能であったと想像されるが、担当者を明確に示す資料は見当たらなかった。昭和40年3月卒業生の話によると、学科目設置前後の頃は、美術科教育関係授業を担当者は明確に決まっておらず、

ただ美術理論関係授業は石井が担当していたとのことである<sup>12)</sup>。石井は学科目制度発足後「美術理論・美術史」に所属することとなる。

2. 昭和 39 年 2 月学科目制度発足時に示された学科目は、絵画、彫塑、美術理論・美術史、美術科教育の四つであった。ただ暫くは学科目「美術科教育」に人的配置はなされなかった。昭和 48 年に榎原弘二郎（東京教育大学・同院）が美術科教育の学科目で着任する。榎原は工芸教育研究を中心に行っていく。榎原の埼玉大学転出後、昭和 58 年に倉園昭雄（東京教育大学）が長崎大学より転入する。倉園は木工作家でもあった。長崎大学では最初は学科目「美術科教育」に所属し、途中から「構成」に所属移動し、愛媛大学では再び「美術科教育」に所属することとなった。

3. 平成 2 年、倉園の退官に伴いその後任として、寺戸(改姓佐藤)<sup>ちかこ</sup>史子（広島大学・同院）が着任する。寺戸は「造形的みたて」を中心に研究していた。さらに、大学院設置に際し、それまで学科目「絵画」に所属していた奥定一孝（愛媛大学・東京芸術大学大学院美術教育学）が大学院は「美術科教育」、学部は「絵画」を担当することとなった。奥定は、画家であり、かつ美術教育も専門とした。東京芸術大学大学院美術研究科美術教育学専攻第一期入学生で、修士論文題目は「モホリ・ナギの構成教育」であった。平成 5 年 4 月に大学院教育学研究科が設置され、そこに美術教育専攻も奥定と寺戸の美術科教育分野二名体制で設置された。

#### 4 高知大学

1. 高知師範学校から高知大学教育学部へ美術関係教官はほぼ移行した。最初期は美術科教育を専門とする教官はいなかった。

2. 昭和 39 年 2 月学科目制度発足時に示された学科目は、絵画、構成、美術理論・美術史、美術科教育の四つであった。そして昭和 42 年 4 月に特別教科(美術・工芸)教員養成課程が設置される。その頃から、絵画を専門とする筒井広道（東京美術学校西洋画）が絵画と美術科教育を、デザインを専門とする<sup>じんせんじ</sup>秦泉寺正一（東京美術学校図画師範科）が構成と工芸科教育を兼担した。実際にそれぞれ美術科教育、工芸科教育の授業を担当した。筒井は一水会、日展で活躍する画家であり、高知県美術展覧会の理事長を務める等、高知県の美術文化の振興にも寄与した。さらに昭和 47 年に山崎哲雄（東京美術学校工芸科図案部）が着任する。学科目は美術・工芸科教育で、専門はデザインであった。その後、筒井は昭和 50 年、秦泉寺は昭和 53 年に定年退官となる。それに伴って、絵画を専門とする竹村和夫（東京芸術大学）が学科目を絵画から美術科教育に一時的に移し、さらに講座を異にする教育学専門の鳥居昭美が美術科教育関係授業を担った。そして、昭和 55 年に立原慶一（茨城大学・東京芸術大学大学院美術教育学）が着任した。

3. 平成 5 年に金子宜正が着任し、さらに宮城教育大学に転出した立原の後任として、平成 7 年に上野行一（京都教育大学・大阪教育大学大学院）が着任する。金子はバウハウス、特にヨハネス・イッテン研究で知られる。上野は、最初、造形における「みたて」を研究し、その後アメリカ・アレナスの鑑賞方法を踏まえて日本における対話による鑑賞を推進した。

平成 8 年 4 月に全国で最後に大学院教育学研究科が設置され、そこに美術教育専攻も金子と上野の美術科教育分野二名体制で設置された。

## 註

- 1) 鳥取大学学芸学部『学生手引』昭和 24-25 年度、『学芸学部履修規定』昭和 26 年度、『学生便覧』昭和 29-31 度、『履修規定とその解説』昭和 32-36 年度。
- 2) 島根大学関係者による教示（平成 23 年 9 月聞き取り）。
- 3) 『岡山大学職員録』昭和 25 年度（10 月 30 日現在）に「絵画（教育法）佐藤義太郎」とある。
- 4) 広島大学 50 年史編集委員会広島大学文書館『広島大学五十年史 通史編』（広島大学、平成 19 年）を参照した。
- 5) 同上、111-116 頁。
- 6) 昭和 46 年 3 月卒業生による教示（平成 30 年聞き取り）。
- 7) 詳細が愛媛美術教育連盟『美連創立 50 周年記念誌 美連の歩みに見るえひめの美術教育』（愛媛美術教育連盟、平成 16 年）に記される。同連盟創立 50 周年記念式典実行委員長は奥定一孝であった。
- 8) 『セキ美術館開館 10 周年記念 愛媛・感動の美術家たち展 第 2 期展 大正から戦前の昭和激動の時代・美を求めた画家たち』（セキ美術館、平成 19 年）。
- 9) 野村正三郎『野村正三郎作品集』（野村正三郎、昭和 63 年）。
- 10) 『セキ美術館開館 10 周年記念 愛媛・感動の美術家たち展 第 4 期展 愛媛ゆかり 花開く戦後の画家たち』（セキ美術館、平成 20 年）。
- 11) 石井南放先生の退官を記念する会『石井南放作品集・退官記念』（昭和 53 年）。
- 12) 昭和 40 年 3 月愛媛大学卒業生による教示（平成 28 年 10 月聞き取り）。

表44 鳥取大学




表45 島根大学




表46 岡山大学




表47 広島大学




表48 山口大学






表49 徳島大学




表50 香川大学




表51 愛媛大学





表 52 高知大学



## 中国地方

### 1 鳥取大学

次の資料を参照して表を作成した。鳥取大学創立 30 周年記念誌編集・刊行委員会『鳥取大学三十年史』（鳥取大学、昭和 58 年）。鳥取大学創立 50 周年記念誌編集・刊行委員会『鳥取大学五十年史』（鳥取大学、平成 13 年）。中等教科書協会『中等教育諸学校職員録』昭和 5-7、9-12 年版。鳥取県教育会『鳥取県学事関係職員録』（鳥取県教育会事務所）大正 15-昭和 3、昭和 5-10、12-18、20-21 年度版。鳥取県教育関係職員互助会/鳥取県教育委員会事務局調査企画課/鳥取県教育委員会指導調査課/鳥取県教育委員会庶務課/全国教育調査研究会鳥取支部/鳥取県教育調査研究協会『鳥取県教育関係職員録』昭和 25、27-28、31-43、47-平成 15 年度。鳥取大学学芸学部『学生手引』昭和 24-25、27-28 年度、『学芸学部履修規定』昭和 26 年度、『学生便覧』昭和 29-31 度、『履修規定とその解説』昭和 32-36 年度の各所収「教官名簿」。大正 15 年度から平成 15 年度にかけて年度ごとの職員録や名簿を確認することを原則としたが、昭和 2、4、19、22、23 年度のものは確認できなかった。なお昭和 25 年度『鳥取県教育関係職員録』の「発刊のことば」によると、教職員録は鳥取県教育会の解散に伴い昭和 22 年度版を最後として以後出版されなかった。さらに次の資料を参照して補正した。「職員異動」鳥取県女子師範学校『校友会誌』第 3 号（鳥取県女子師範学校・鳥取県立八頭高等女学校校友会、昭和 7 年）124-126 頁。「歴代職員」鳥取県師範学校学友会『尚徳 創立五十周年校舍改築落成記念号』（昭和 12 年）93-100 頁。「五 職員」鳥取県女師範学校・鳥取県立八頭高等女学校『創立十周年記念誌』（昭和 12 年）96、116-121 頁。鳥取県師範学校『鳥取県師範学校要覧（昭和十六年七月）』（昭和 16 年）6-8 頁。鳥取県女子師範学校・鳥取県立八頭高等女学校『校友会同窓会会員名簿（昭和十二年七月現在）』（昭和 12 年）2、3、5、7 頁。「母校奉職の恩師」有終会『会員名簿』第 10 号（昭和十六年七月調）（昭和 16 年）128-134 頁。鳥取師範学校女子部『同窓会会員名簿（昭和二十三年四月現在）』（昭和 23 年）1-5 頁。「恩師消息（昭和二一年六月～二四年三月）」鳥取師範学校男子部本科昭和二十四年三月卒業生『鳥取師範学校 卒業三十周年記念誌』（昭和 54 年）7-9 頁。「恩師消息」卒業四十周年記念誌刊行委員会『永久のいのちを一卒業四十周年記念誌一』（鳥取師範学校昭和二十四年卒業同期生会、平成元年）253-256 頁。鳥取県師範学校昭和十五年三月卒業生『五十周年記念誌』（昭辰会、平成 2 年）52 頁。鳥取大学『学生便覧』昭和 31、58 年度版。鳥取大学学芸学部『会員名簿（昭和 35 年版）』（鳥取大学学芸学部同窓会、昭和 35 年）。鳥取大学『鳥取大学研究者一覧（昭和 36 年度）』（昭和 36 年）。鳥取大学研究者総覧編集会議・鳥取大学庶務部庶務課『鳥取大学研究者総覧（1986）』（昭和 62 年）、『同（1991）』（平成 4 年）、『同（1997）』（平成 9 年）、『同（2001）』（平成 14 年）。鳥取大学産学連携推進機構『研究者総覧 2005』（平成 17 年）。「歴代教員配置一覧」鳥取大学教養部『回想の教養部』（鳥取大学教養部、平成 7 年）9-10 頁。上田保子『上田敏和展一時のひびき』（上田敏和、平成 18 年）42-43 頁。

## 2 島根大学

次の資料を参照して表を作成した。中等教科書協会『中等教育諸学校職員録』昭和 5-7、9-12 年版。中等教科書協会『師範学校中学校職員録』昭和 13、14 年版。島根県教育会『島根県内教育関係職員録』昭和 5-18、21、22 年度。島根県教職員組合『島根県教育関係職員録』昭和 23-36、40、42 年度。島根県教育委員会『教職員名簿』昭和 33-平成 15 年度。『島根大学職員録』昭和 35-平成 15 年度。島根大学教育学部同窓会『同窓会誌』第 2-60 号（昭和 27 年-平成 21 年）。島根師範学校同窓会『昭和十四年度同窓会会員名簿』。『島根大学要覧』昭和 27 年度。なお『島根県内教育関係職員録』によると、昭和 15 年度の 1 年のみ女子師範に「手」の講師として山本一男と花田定富がいるが、昭和 16 年度には山本は「習」講師、花田は「地」講師に移った。二者とも島根出身で前年まで女子師範附属小学校代用浜田町原井尋常高等小学校教諭であった。純然たる手工の担当者ではなかったのかもしれないが、表には資料の記載にもとづき示すこととした。なお特設音楽の設置された音楽教育研究室の沿革に関しては島大音研誌編集委員会『My Onken History 島根大学教育学部特設音楽課程 30 周年記念』（島大音研同窓会、昭和 60 年）、特設体育の設置された保健体育研究室の沿革に関しては齋藤重徳『島根大学保健体育研究室史「体研史」』（齋藤重徳、平成 26 年）に詳しい。

## 3 岡山大学

次の資料を参照して表を作成した。岡山大学二十年史編さん委員会『岡山大学二十年史』（岡山大学、昭和 44 年）、岡山大学 30 年史編纂委員会『岡山大学史（昭和 44 年～昭和 54 年）』（岡山大学、昭和 55 年）、岡山大学 40 年史編さん委員会『岡山大学史（昭和 54 年～平成元年）』（岡山大学、平成 2 年）、岡山大学創立 50 周年記念事業委員会『岡山大学史（平成元年～平成 11 年）』（岡山大学、平成 11 年）。中等教科書協会『中等教育諸学校職員録』昭和 5-7、9-12 年版。岡山県教育会『岡山県学事関係職員録』昭和 2-5、8-18、22-25、27-40 年度。岡山大学『岡山大学職員録』昭和 24-平成 15 年度。岡山大学『岡山大学要覧』昭和 30-31、34、36、38-43、47、51、53、55、57、59、61、63 年度。岡山大学庶務部庶務課『岡山大学研究者総覧 1992』（平成 5 年）。昭和 5 年度から平成 15 年度にかけて年度ごとの職員録や名簿を確認することを原則としたが、昭和 19-21 年度のものは確認できなかった。なお在職期間等について一部ははっきりしないことがあった。佐藤一章の退官年月は、岡山大学二十年史編さん委員会、前掲書、244 頁では 31 年 9 月、やかげ郷土美術館『没後 40 年 佐藤一章展』（やかげ郷土美術館、平成 12 年）とやかげ郷土美術館『岡大特美教室からの波動』（やかげ郷土美術館、平成 14 年）では昭和 30 年 9 月となっている。当時をご存知の方によると昭和 31 年 9 月であろうとのことであったので（平成 24 年 9 月聞き取り）、表にはそのように示す。柚木祥吉郎の退官年月は、岡山大学二十年史編さん委員会、前掲書、234 頁の「退官者及び転出者」表では、昭和 32 年 8 月 16 日とあり、245 頁の各専攻紹介では昭和 33 年 3 月とあった。『岡山大学職員録』に最後に柚木の名前が見られたのは昭和 32 年版（昭和 32 年 11 月 1 日現在、11 月 5

日発行)であり、昭和33年3月が正しいのかも知れないが、断言できないので、可能性のある年月を共に示しておいた。また江見貢は『岡山大学職員録』『岡山県学事関係系職員録』では昭和30年10月から助手とあり、『岡大特美教室からの波動』6頁には、卒業後すぐに磯井如真付きの副手となったと本人による記述があった。副手は表には反映されないが、ここに記録しておく。

#### 4 広島大学

まず、次の資料を参照した。広島大学二十五年史編集委員会『広島大学二十五年史 通史編』(広島大学、昭和54年)、『同 部局編』『同 包括校史』(昭和52年)。広島大学50年史編集専門委員会広島大学文学館『広島大学五十年史 通史編』(広島大学、平成19年)。広島大学50年史編集専門委員会広島大学50年史編集室『広島大学五十年史 資料編上』『同 資料編下』(広島大学、平成15年)。昭和23年以前在職教官に関しては、次の資料を参照した。広島県教育会/広島県教職員組合/広島県学校生活協同組合『広島県学事関係職員録』昭和13-18、23-26年度。金子一夫「学術研究助成基金補助金成果報告書平成25～27年度『大正・昭和戦前期の中等学校図画教員と出身美術学校の総覧的研究』課題番号25370126 第2部滋賀県～在外学校」平成28年、144、145頁。

#### 5 山口大学

次の資料を参照して表を作成した。山口大学30年史編集委員会『山口大学30年史』(山口大学、昭和57年)362-365、366-369、422-424頁。山口大学50年史編集委員会『山口大学50周年記念誌』(山口大学、平成11年)212-213、217-218、233、253頁。山口県教育会『山口県学事関係職員録』大正15-昭和19年度版。山口教職員組合『山口県教職員録』昭和23-平成15年度版。山口大学『山口大学職員録』(山口大学)昭和46-49、61年度版。昭和5年度から平成15年度にかけて年度ごとの職員録や名簿を確認することを原則としたが、昭和20-22年度のものだけは確認できなかった。さらに次の資料を参照して補正した。山口県師範学校同窓会『会報 第26号 興水先生追悼号』(山口県師範学校同窓会、昭和16年)所収「客員名簿」。山口大学教育学部同窓会『山口大学教育学部同窓会誌』昭和38、58、62、平成4年度版各所収「客員名簿」。山口大学教育学部同窓会『同窓会名簿』(山口大学教育学部同窓会、平成9年)所収「客員名簿」。次の8名の就退任年月に関しては、山口大学教育学部同窓会『同窓会名簿』所収「客員名簿」の記載を、山口大学の教示による年月に修正した。森本宏の退任：昭和55年3月→昭和55年4月。友近琢男の退任：昭和54年3月→昭和54年4月。伊藤釣の退任：昭和50年3月→昭和49年11月。細田育宏の就任：昭和37年4月→昭和37年6月。吉賀将夫の就任：昭和46年4月→昭和46年9月。横山省三の就任：昭和47年4月→昭和46年9月。川口政宏の就任：昭和50年4月→昭和50年1月。武市勝の退任：昭和61年12月→昭和61年11月。さらに、田村伝次が文検出身の手工教員であったことと没年は、細田実「田村伝次先生を想う」昭四会記念誌編集委員会『昭和四年三月 山口県師範学校卒業五十周年記念誌「光被」』(山口県師範学校昭四会、昭和53年)17頁を

参照した。なお、原田康一は、昭和 24 年 6 月より昭和 35 年 4 月まで山口大学教育学部に在職する（山口大学 30 年史編集委員会、前掲書、368 頁）。彫塑塾出身らしいが、講座は職業技術に所属した。細田育宏（昭和 6－平成 21）の就任時期は、昭和 37 年 4 月とするもの（山口大学教育学部同窓会、前掲書）と、昭和 37 年 6 月とするもの（細田和子『木工美術 細田育宏の世界』（平成 22 年）所収「功績調書 細田育宏」）がある。表には前者を反映する。

#### 四国地方

##### 1 徳島大学

次の資料を総合して表を作成した。徳島県師範学校内渭水会『会員名簿』（昭和 14 年 9 月現在）、同（昭和 15 年 9 月現在）、同（昭和 17 年 2 月現在）。徳島県女子師範学校・徳島県立徳島高等女学校淬礪済美同窓会『会員名簿』（昭和 6 年 8 月現在）。徳島県教育会『徳島県学事関係職員録』昭和 8、14、15、24、26－平成 15 年度。『徳島大学職員録』昭和 26－43 年度。兵庫教育大学教務部教務課『兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科研究者総覧』（兵庫教育大学、平成 15 年）。河崎良行に関しては、美術出版デザインセンター『河崎良行デッサン集』（河崎良行デッサン集刊委員会、平成 10 年）、潮見泰成『河崎良行彫刻作品集 1989－2000』（河崎良行彫刻作品集刊行委員会、平成 13 年）を参照した。

##### 2 香川大学

まず、次の資料を参照した。香川大学『香川大学十年史』（香川大学、昭和 34 年）。香川大学 30 年史編集委員会『香川大学三十年史』（香川大学、昭和 57 年）。香川大学五十年史編集委員会『香川大学五十年史』（香川大学、平成 12 年）。次に、『履修の手引き』昭和 36－45、47－平成 10 年度（授業担当者名有）で美術科授業担当者を確認した。さらに次の資料も参照した。『香川大学教育学部同窓会報 昭和 49 年 10 月 25 日』第 11 号（昭和 49 年 10 月 25 日）3 頁、同 13 号（昭和 51 年 7 月 25 日）4 頁。金子一夫「学術研究助成基金補助金成果報告書平成 25～27 年度『大正・昭和戦前期の中等学校図画教員と出身美術学校の総覧的研究』課題番号 25370126 第 2 部滋賀県～在外学校」平成 28 年、188、189 頁。

##### 3 愛媛大学

まず、愛媛大学 50 年史編集専門委員会『愛媛大学五十年史』（愛媛大学開学 50 周年記念事業委員会、平成 11 年）を基礎として表を作成した。「第二章 教育学部」の「(6)美術教育講座」（253 頁）に教官の在職期間、専門、学科目等が、「第三章 大学の改革・再編と拡充」の「第六節 教育学部をめぐる動き」（131－132 頁）に大学院設置の背景等が記述されている。昭和 23 年以前在職教官に関しては次の資料を参照して表を作成した。金子一夫「学術研究助成基金補助金成果報告書平成 25～27 年度『大正・昭和戦前期の中等学校図画教員と出身美術学校の総覧的研究』課題番号 25370126 第 2 部滋賀県～在外学校」平成 28 年、198、199 頁。さらに次の資料を参照した。愛媛県教育会『愛媛県教育



関係職員録』昭和 24-27 年度。『愛媛大学要覧』(昭和 24 年 11 月 11 日)。愛媛大学『学生便覧』昭和 41-48 年度。愛媛大学『学生生活の手引き』51、53-58、61 年度。愛媛大学庶務部庶務課『愛媛大学職員録』(愛媛大学庶務部庶務課)昭和 37、40、45-48、50-52、54-平成元年度。愛媛大学大学院教育学研究科『履修の手引き』平成 5-15 年度。愛媛大学庶務部庶務課『愛媛大学教育研究者要覧 1995』(愛媛大学、平成 7 年 1 月 1 日現在)、『同 1999』(平成 11 年 6 月 1 日現在)。『同 2001』(平成 13 年 8 月 1 日現在)。藤谷庸夫『小学校に於ける美育とその実際』(関印刷所出版部、昭和 3 年)。藤谷庸夫先生追慕の会『たんぼ』(藤谷馨、昭和 8 年)。石井南放先生の退官を記念する会『石井南放作品集・退官記念』(昭和 53 年)。石井南放『南放随想 続 絵と文』(愛媛県警察本部協賛、昭和 56 年)。愛媛日本画会『第 25 回愛媛日本画展記念図録』(昭和 61 年)。『第 20 回記念南風会展図録』(南風会、昭和 63 年)。石井南放『石井南放画集』(求龍堂、平成元年)。野村正三郎『野村正三郎作品集』(野村正三郎、昭和 63 年)。野村正三郎『工作教育の実際』(開成書院、昭和 31 年)。小泉政孝『小泉政孝作品集』(昭和 51 年)、小泉政孝『小泉政孝作品集—石鎚百景—』(昭和 56 年)を参照した。奥定一孝『奥定一孝油彩画』(奥定一孝、平成 7 年)。愛媛新聞社『伊予の画人』(愛媛新聞社、昭和 61 年)。愛媛県立美術館『戦前の愛媛の洋画家たち』(愛媛県立美術館、平成 5 年)。『セキ美術館開館 10 周年記念 愛媛・感動の美術家たち展 第 2 期展 大正から戦前の昭和 激動の時代・美を求めた画家たち』(セキ美術館、平成 19 年)。『セキ美術館開館 10 周年記念 愛媛・感動の美術家たち展 第 4 期展 愛媛ゆかり 花開く 戦後の画家たち』(セキ美術館、平成 20 年)。愛媛美術教育連盟『美連創立 50 周年記念誌 美連の歩みに見るえひめ の美術教育』(愛媛美術教育連盟、平成 16 年)。

#### 4 高知大学

まず、高知師範学校略史編集委員会『高知師範学校史』(高知師範百年祭実行委員会、昭和 49 年)、高知大学 30 年史編集委員会『高知大学三十年史』(高知大学三十年史刊行委員会、昭和 57 年)を基礎として表を作成した。昭和 23 年以前在職教官に関しては、金子一夫「学術研究助成基金補助金成果報告書平成 25～27 年度『大正・昭和戦前期の中等学校図画教員と出身美術学校の総覧的研究』課題番号 25370126 第 2 部滋賀県～在外学校」平成 28 年、208、209 頁を参照した。昭和 34 年以降在職教官に関しては、高知大学特美 30 周年記念誌編集委員会『高知大学特美 30 周年記念誌』(高知大学特美 30 周年記念誌編集委員会、平成 10 年)、高知大学学生課『学生便覧』(高知大学)昭和 48、49 年度、如泉会『会員名簿』(高知大学教育学部内 如泉会、平成元年)を参照した。加藤寛の経歴に関しては、『図解 日本の漆工 てのひら手帖』(東京美術、平成 26 年)を参照した。

## 第七章 各教員養成大学・学部における美術教育学の人的制度基盤の成立過程

### —九州・沖縄地方—

#### 1 福岡教育大学

1. 福岡第一師範学校と福岡第二師範学校から福岡学芸大学へ美術関係教官はほぼ移行した。最初期は美術科教育を専門に担当・研究する教官はいなかった。

2. 昭和 39 年 2 月学科目制度発足時に示された学科目は、絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、美術科教育の五つすべてであった。福岡第二師範学校から勤務を続ける野中義明（東京高等師範学校図画手工専修科）が昭和 50 年頃に絵画から美術科教育の学科目に所属を移動した。野中は昭和 58 年に定年退官となる。

3. 昭和 58 年 4 月に大学院教育学研究科が設置された。昭和 57 年頃に吉井宏（東京芸術大学工芸）が構成から美術科教育の学科目に所属を移動する。さらに昭和 58 年に井上正作（東京芸術大学工芸・同院美術教育学）が美術科教育で新しく採用される。そして、昭和 61 年 4 月に、大学院美術教育専攻が吉井と井上の美術科教育分野二名体制で設置された。

#### 2 佐賀大学

佐賀大学の美術講座の歴史に関しては、中牟田佳彰・前村晃「佐賀大学美術・工芸小史—特設美術科創設より美術・工芸課程まで—」に詳しい<sup>1)</sup>。

1. 佐賀師範学校から佐賀大学教育学部へ美術関係教官はほぼ移行した。昭和 28 年 4 月特別教科(美術・工芸)教員養成課程が設置され、石本秀雄（東京美術学校図画師範科）の強い指導の下、新体制が築かれていった。美術専門大学を目指す勢いであった。絵画を専門とする久富邦夫（帝国美術学校）、その後任の深草廣平（東芸術大学油・パリ国立美術学校院）が、絵画との兼担の形で美術科教育関係授業を主として担っていた<sup>2)</sup>。

2. 昭和 39 年 2 月学科目制度発足時に示された学科目は、日本画、西洋画、木工、金工、陶芸、彫塑、構成、美術理論・美術史、美術・工芸科教育であった。ただ、学科目「美術・工芸科教育」所属教官は長らく不在であった。昭和 58 年 4 月から平成 3 年 10 月まで永守基樹（大阪教育大学・同院）が構成と美術科教育の担当者として在職した。ただ、永守は正式には学科目「構成」所属であった。その後、永守は和歌山大学の学科目「美術科教育」所属教官として転出する。

3. 大学院設置を前提に、平成 2 年に前村晃（佐賀大学・東京学芸大学大学院・早稲田大学大学院）、平成 5 年に大学院設置要員として筑波大学を退官した宮脇理（東京教育大学）が着任した。平成 5 年 4 月に大学院教育学研究科が設置され、そこに大学院美術教育専攻も宮脇と前村の美術科教育分野二名体制で設置された。

### 3 長崎大学

1. 長崎師範学校から長崎大学学芸学部へ美術関係教官はほぼ移行できた。最初期は美術科教育を専門に担当・研究する教官はいなかった。

2. 昭和 39 年 2 月学科目制度発足時に示された学科目は、絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史の四つであった。昭和 44 年 5 月に学科目「美術科教育」が設置された。それと同時に、中島三雄（群馬県師範学校・東京高等師範学校芸能科）が絵画から美術科教育の学科目に所属を移動した。さらに昭和 51 年に倉園昭雄（東京教育大学）が美術科教育の学科目で新しく採用されるが、1 年ほど美術科教育に所属した後、構成へ所属移動する。その後を引き継ぐ形で昭和 53 年に米田明生（佐賀大学）が美術科教育の学科目で採用される。米田は工芸も担当していた。美術科教育は中島、米田の二人体制となる。昭和 59 年、中島の退官に伴いその後任として井川惺<sup>いかわせいりょう</sup>（東京芸術大学・同院油画）が美術科教育の学科目で採用される。井川は、美術科教育の学科目に 3 年ほど所属した後、専門である絵画の学科目に所属を移動した。その後を引き継ぐ形で昭和 62 年に村田利裕（京都教育大学・広島大学大学院）が美術科教育の学科目で着任し、その 3 年後に鳴門教育大学へ転出した。

3. 村田の後任として、文部省教科調査官であった板良敷敏（大阪教育大学）が美術科教育の学科目で平成 2 年に着任する。そして、昭和 6 年 4 月に大学院教育学研究科が設置され、そこに美術教育専攻も米田と板良敷の美術科教育分野二名体制で設置された。

### 4 熊本大学

1. 熊本師範学校から熊本大学教育学部へ美術関係教官はほぼ移行した。美術科教育を専門に担当・研究する教官はいなかった。

2. 昭和 39 年 2 月学科目制度発足時に示された学科目は、絵画、彫塑、構成の三つであった。昭和 47 年 5 月に学科目「美術科教育」が設置された。熊本大学内ではその前年の昭和 46 年に学科目「美術科教育」の増設が決まり、師範学校時代から勤務を続けた、絵画を専門とする岡周末<sup>ちかすえ</sup>（東京美術学校西洋画科）が絵画から美術科教育の学科目へ所属を移した。岡は昭和 48 年に定年退官となる。岡の定年後は、同じく師範学校時代から勤務を続け、絵画を専門とする平野三代喜（帝国美術学校）が、それまで所属していた彫塑から美術科教育の学科目に移った。平野は 7 年ほど美術科教育に所属した後、定年前の 1 年間、絵画の学科目に所属を移す。平野が絵画に移った後は、熊本大学教育学部附属中学校勤務経験のある黒川滉二が美術理論・美術史から美術科教育の学科目に所属を移動する。このように初期は教官の所属移動によって美術科教育は維持されていく。

3. 昭和 56 年に菅生均（東京学芸大学・筑波大学大学院）が美術科教育の学科目に新しく採用される。昭和 62 年、黒川退官に伴いその後任として、横出正紀（筑波大学大学院）が美術科教育で着任する。菅生は木工も兼担した。昭和 61 年 4 月に大学院教育学研究科が設置される。福岡教育大学より益田凡夫<sup>なみお</sup>（東京教育大学）を迎え、大学院美術教育専攻は、菅生、横出、益田の美術科教育分野三名体制で、平成 4 年 4 月に設置された。

## 5 大分大学

1. 大分師範学校から大分大学学芸学部へ美術関係教官はほぼ移行した。美術科教育を専門に担当・研究する教官はいなかった。

2. 昭和 39 年 2 月学科目制度発足時に示された学科目は、絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史の四つであった。昭和 42 年 5 月に学科目「美術科教育」は設置される。昭和 42 年に熊田真幸（東京芸術大学美学・同院）が学科目「美術科教育」所属教官として新しく採用される。昭和 47 年に熊田は大阪教育大学に造形芸術学の学科目で転出する。その後任として、日本画を専門とする露木恵子（東京芸術大学・同院）が美術科教育の学科目で着任する。さらに昭和 56 年 4 月に富田礼志（愛媛大学・東京芸術大学大学院美術教育学）が新たに着任して、美術科教育分野二名体制となる。同年 7 月に露木は宇都宮大学に転出する。露木の後任として、昭和 57 年に山木朝彦（横浜国立大学・同院）が美術科教育の学科目で着任する。

3. 平成 4 年 4 月に大学院教育学研究科が設置される。平成 6 年 4 月に、大学院美術教育専攻は富田と山木の美術科教育分野二名体制で設置された。この時期、佐賀大学に勤務していた宮脇理も非常勤講師として大学院の美術科教育授業を担うなど助力した。

## 6 宮崎大学

1. 宮崎師範学校から宮崎大学学芸学部へ美術関係教官はほぼ移行した。美術科教育を専門に担当・研究する教官はいなかった。

2. 昭和 39 年 2 月学科目制度発足時に示された学科目は、絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史の四つであった。昭和 42 年 5 月に学科目「美術科教育」が設置された。最初は師範学校から勤めていた教官の所属移動で人的配置はなされた。まず、師範学校から勤務を続けていた出水勝利（東京美術学校図画師範科）が、定年退官の一年前に絵画から美術科教育の学科目に所属を移動する。出水退官の後、同じく師範学校から勤務を続けていた岩尾信夫（大分県実業補習学校教員養成所・文検西用）が絵画から美術科教育の学科目に所属を移動する。そして岩尾の定年退官後は、昭和 50 年に柴田和豊（大阪教育大学・東京芸術大学大学院美術教育学）が新たに着任する。柴田は昭和 59 年に三重大学に転出し、その後の約 6 年間は美術科教育所属教官不在となった。この間の美術科教育関係授業は、美術理論・美術史の石川千佳子と非常勤講師が担った。そして平成元年に上山浩（三重大学・大阪教育大学大学院）が美術科教育の学科目で新たに採用された。

3. 平成 6 年に、竹内博（東京学芸大学）が京都教育大学より転入する。竹内は大学院が設置されてから約 2 年間の在職であった。竹内は複数の大学院設置に関わっており、いわゆる大学院設置要員であったと言えよう。平成 6 年 4 月に大学院教育学研究科が設置され、そこに美術教育専攻も竹内と上山の美術科教育分野二名体制で設置された。

## 7 鹿児島大学

1. 鹿児島師範学校から鹿児島大学教育学部へ美術関係教官はほぼ移行した。美術科教育を専門に担当・研究する教官はいなかった。

2. 昭和 39 年 2 月学科目制度発足時に示された学科目は、絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、美術科教育の五つすべてであった。学科目「美術科教育」にはすぐに人的配置はなされなかった。最初の学科目「美術科教育」所属教官は、絵画から所属移動した小池鉄太郎（香川県立工芸学校・東京美術学校日本画）であった。小池は、師範学校から勤務を続け、油絵を制作していた。美術科教育の学科目に所属を移した数年後に定年退官となる。小池の後任として、橋本泰幸（東京学芸大学・同院）が美術科教育の学科目で着任する。昭和 56 年、橋本の広島大学転出に伴いその後任として、茂木一司（筑波大学・同院）が美術科教育の学科目で着任する。

3. 平成 6 年 4 月に大学院教育学研究科が設置される。平成 9 年に服部鋼資（愛知学芸大学）が新たに採用される。筑波大学の附属小学校教諭からの転任であった。そして、平成 10 年 4 月に大学院美術教育専攻が、服部と茂木の美術科教育分野二名体制で設置された。全国で最後から二番目の設置であった。

## 8 琉球大学

先にその概観を記しておく<sup>3)</sup>。昭和 25 年琉球大学開学時、美術関係教官は応用学芸学部芸術学科に 1 名置かれ、昭和 27 年 4 月新学則に伴う学部再編により、応用学芸学部には所属していた芸術科は、美術専攻と改称して教育学部に移る。さらに昭和 29 年新学則により文理学部に移り、昭和 30 年に美術工芸科と改称する。昭和 42 年琉球大学設置法の一部改正に伴い学部が 4 学部<sup>4)</sup>に再編される際に、美術工芸学科の所属が法文学部か教育学部か問題になった末、美術工芸の専門家養成を主目的とする学科として法文学部に所属した。昭和 47 年の国立移管に伴って、専門家養成と教員養成を両立させることを前提にして教育学部に移動する。

1. 沖縄師範学校から琉球大学応用学芸学部及び教育学部に美術関係教官は移行しなかった。上記のように、応用学芸学部芸術学科の教官は大城皓也 1 名のみであった。大城は昭和 27 年 3 月に退官する。昭和 27 年 4 月に教育学部美術科となって教官数も徐々に増える。昭和 42 年には法文学部所属となり、美術専門が充実していく。法文学部所属でも教職課程は残り、美術科教育関係授業は宮城健盛（東京美術学校<sup>けんせい</sup>図画師範科）が主として担当していた。

2. 昭和 47 年の国立移管に伴って、学科目制度に最初に示された学科目は、絵画、織染、陶芸、彫塑、構成、美術科教育の六つであった。学科目「美術科教育」に宮城健盛と稲嶺成祐（琉球大学）が所属した。稲嶺は昭和 53 年から昭和 56 年までの間、教養部に所属を移動する。昭和 53 年に西村貞雄（琉球大学・東京芸術大学大学院彫刻）が美術科教育の学科目で新たに採用される。その後、西村は彫刻の学科目に所属を移動する。また、昭和 56 年に美術理論・美術史の学科目で採用されていた小林正秀（東京芸術大学）が一時期、美術科教育

も兼担していた。

3. 平成 2 年 4 月に大学院教育学研究科が設置され、そこに美術教育専攻も設置された。稲嶺は教養部から所属が教育学部に戻った後は美術科教育を担当し続ける。稲嶺は画家であるとともに、沖縄県造形教育連盟会長を務めるなど沖縄県の美術教育振興に尽力した。

## 註

- 1) 中牟田佳彰・前村晃「佐賀大学美術・工芸小史—特設美術科創設より美術・工芸課程まで—」佐賀大学文化教育学部美術・工芸教室『50 周年記念誌佐賀大学美術・工芸教室 50 年』（佐賀大学、平成 15 年）91-101 頁。なお、その続編と言える前村晃「佐賀大学における美術・工芸教室の変遷—「特美」の設置から今日まで—」佐賀大学美術館『佐賀大学美術館 開館記念特別展 美術・工芸教室 60 年の軌跡 I 「特美」の育成者たち』（佐賀大学美術館、平成 25 年）69-77 頁もある。
- 2) 佐賀大学史編纂委員会『佐賀大学四十年史』（第一法規、平成 6 年）239 頁には「美術科教育 久富邦夫講師（昭和 24～46）助教授在職中退官。後任に深草廣平講師（昭和 46～現、教授）、なお深草教授は学科目変更により西洋画担当。」とされるが、学科目所属に関しては確定できなかった。前村晃、前掲書、72 頁には「美術教育の分野は、以前には、各教官が分担するかたちで守ってきた。美術教育のプロパーとして最初に着任したのは、永守基樹講師/助教授（昭 58-平成 5）であるが、永守はデザイン分野の兼任でもあった」とされる。
- 3) 次の資料を参照した。琉球大学開学 30 周年記念誌編集委員会『琉球大学三十年』（琉球大学、昭和 56 年）311-313 頁。琉球大学開学 50 周年記念史編集専門委員会『琉球大学五十年史』（琉球大学、平成 12 年）306 頁。

表53 福岡教育大学








表55 長崎大学




表56 熊本大学




表57 大分大学




表58 宮崎大学




表59 鹿児島大学





表60 琉球大学



## 九州・沖縄地方

### 1 福岡教育大学

まず、福岡教育大学創立 40 周年記念行事実行委員会『福岡教育大学四十年の歩み』（福岡教育大学、平成元年）、平田宗史『福岡県教員養成史研究 戦前編』（海鳥社、平成 6 年）『同 戦後編』（平成 10 年）を参照した。さらに次の資料を用いて表を作成した。金子一夫「学術研究助成基金補助金成果報告書平成 25～27 年度『大正・昭和戦前期の中等学校図画教員と出身美術学校の総覧的研究』課題番号 25370126 第 2 部滋賀県～在外学校」平成 28 年、214、215 頁。福岡第二師範学校一覧『福岡第二師範学校一覧』（福岡第二師範学校、昭和 18 年）。福岡学芸大学『福岡学芸大学要覧』昭和 31 年度。福岡県教育会/教育春秋社/教育公論社『福岡県下学事関係職員録』（昭和 3、5、8、10、12、17、18、21-31、33、40-42、47-50、53、35、48、61、平成 4 年度）。福岡県福岡師範学校内松浦繁太郎『創立五十年誌』（福岡師範学校内創立五〇年記念会雑誌部、大正 15 年）。福岡県福岡師範学校創立六十周年記念会『創立六十年誌』（福岡県福岡師範学校創立六十周年記念会、昭和 11 年）。鳥飼里の会『福岡県女子師範学校誌』（鳥飼里の会、昭和 48 年）。福岡県小倉師範学校内西田貞実『富陵 三十周年記念号』（福岡県小倉師範学校校友会、昭和 13 年）。

### 2 佐賀大学

まず次の資料を参照した。佐賀大学史編纂委員会『佐賀大学四十年史』（第一法規、平成 6 年）。佐賀大学文化教育学部美術・工芸教室『50 周年記念誌佐賀大学美術・工芸教室 50 年』（佐賀大学、平成 15 年）。佐賀大学美術館『佐賀大学美術館 開館記念特別展美術・工芸教室 60 年の軌跡 I 「特美」の育成者たち』（佐賀大学美術館、平成 25 年）。特に、中牟田佳彰・前村晃「佐賀大学美術・工芸小史—特設美術科創設より美術・工芸課程まで—」佐賀大学文化教育学部美術・工芸教室、前掲書、91-101 頁、前村晃「佐賀大学における美術・工芸教室の変遷—「特美」の設置から今日まで—」佐賀大学美術館、前掲書、69-77 頁に、佐賀大学特設美術の変遷が具体的に記され、参考になった。さらに次の資料も参照した。佐賀大学美術・工芸科教室『美術・工芸教育学』第 2 号（平成 7 年）、同 3 号（平成 8 年）。筒井茂雄『筒井茂雄』（昭和 51 年）。佐口七朗『造形教育シリーズ第 4 巻 うつくしい色彩』（教材社、昭和 38 年）。昭和 23 年以前在職教官に関しては、金子一夫「学術研究助成基金補助金成果報告書平成 25～27 年度『大正・昭和戦前期の中等学校図画教員と出身美術学校の総覧的研究』課題番号 25370126 第 2 部滋賀県～在外学校」平成 28 年、238、239 頁を参照した。

### 3 長崎大学

次の資料を総合して表を作成した。長崎大学三十五年史刊行委員会編集室『長崎大学三十五年史』（長崎大学、昭和 59 年）。長崎大学五十年史刊行委員会『長崎大学五十年史』（長崎大学、平成 5 年）。長崎教育会『長崎県学事関係職員録』大正 14-昭和 17 年度。長崎大学『長崎大学便覧』昭和 40-46 年度。長崎大学教育学部『長崎大学教育学部業績目録』No. 1（長崎大学、昭和 45 年）、同 No. 2（昭和 56 年）、同 No. 4（平成 4 年）、

同 No. 5 (平成 9 年)。長崎大学自己評価総括委員会『長崎大学研究者総覧』(長崎大学、平成 5 年)。また、米田明生『卒業研究成果＝窯芸・染色工芸＝青春 火土水』(長崎大学教育学部、平成 13 年) から、学科目美術科教育を担った米田は、工芸の卒業制作指導もしていたことがわかった。

#### 4 熊本大学

次の資料を参照して表を作成した。熊本大学教育学部・熊本大学教育学部同窓会『創立百周年記念誌』(熊本大学教育学部・熊本大学教育学部同窓会、昭和 49 年)。熊本大学 30 年史編集委員会『熊本大学三十年史』(熊本大学、昭和 55 年)。熊本大学 60 年史編集委員会『熊本大学六十年史』(熊本大学、平成 24 年)。熊本大学教育学部『開設授業科目一覧表』昭和 46-60 年度。昭和 23 年度以前在職教官に関しては、金子一夫「学術研究助成基金補助金成果報告書平成 25～27 年度『大正・昭和戦前期の中等学校図画教員と出身美術学校の総覧的研究』課題番号 25370126 第 2 部滋賀県～在外学校」平成 28 年、256、257 頁を参照した。さらに次の資料も参照した。平野三代喜『平野三代喜作品集』(熊本大学教育学部美術科、昭和 56 年)。

#### 5 大分大学

大分大学創立 30 周年記念誌編集・刊行委員会『大分大学三十年史』(大分大学、昭和 58 年)。大分大学創立 50 周年記念誌編集・刊行委員会『大分大学五十年史』(大分大学、平成 13 年)。大分県教育会『大分県学事関係職員録』大正 15-昭和 3、昭和 5-10、12-18、20-21 年度。大分県教育委員会事務局調査企画課/指導調査課/庶務課/全国教育調査研究会大分支部『大分県教育関係職員録』昭和 25、27-28、31-32-43、47-平成 15 年度。大分大学学芸学部『学生手引』昭和 24-25、27-28 年度。『学芸学部履修規定』昭和 26 年度。『学生便覧』昭和 29-31 度。『履修規定とその解説』昭和 32-36 年度。さらに次の資料を参照して補正した。「歴代職員」大分県師範学校学友会『尚徳 創立五十周年校舍改築落成記念号』(昭和 12 年) 93-107 頁。大分県女師範学校・大分県立八頭高等女学校『創立十周年記念誌』(昭和 12 年) 96、116-121 頁。大分県師範学校『大分県師範学校要覧(昭和十六年七月)』6-8 頁。有終会『会員名簿』第 10 号(昭和 16 年 7 月調) 128-134 頁。「恩師消息(昭和二一年六月～二四年三月)」大分師範学校男子部本科昭和 24 年 3 月卒業生『大分師範学校 卒業三十周年記念誌』7-9 頁。大分師範学校女子部『同窓会会員名簿(昭和 23 年 4 月現在)』。大分県女子師範学校『校友会誌』第 3 号(大分県女子師範学校・大分県立八頭高等女学校校友会、昭和 7 年) 124-126 頁。「歴任教員配置一覧」大分大学教養部『回想の教養部』(平成 7 年) 9-10 頁。大分県師範学校昭和十五年三月卒業生『五十周年記念誌』(昭辰会、平成 2 年) 52 頁。上田保子『上田敏和展一時のひびき一』(上田敏和、平成 18 年) 42-43 頁。大分大学『大分大学研究者一覧(昭和 36 年度)』(昭和 36 年)。大分大学研究者総覧編集会議・大分大学庶務部庶務課『大分大学研究者総覧(1986)』(昭和 62 年)、『同(1991)』(平成 4 年)、『同(1997)』(平成 9 年)、『同(2001)』(平成 14 年)。大分大学産学連携推進機構『研究者総覧 2005』(平成 17 年)。



## 6 宮崎大学

次の資料を用いて表を作成した。宮崎大学五十年史刊行委員会『創立五十周年記念誌』（宮崎大学、平成 11 年）。宮崎県教育会『宮崎県学事関係職員録』大正 10、昭和 2、5-15、18、19、24、25、28、33 年度。宮崎県教育会館『宮崎県教職員録』昭和 57-平成 15 年度。宮崎大学『宮崎大学研究者要覧 1991』（宮崎大学、平成 3 年）塩月桃甫に関しては宮崎県立美術館『塩月桃甫展』（宮崎県立美術館、平成 13 年）、篠原勇に関しては篠原勇『新しい折紙』（日本色彩社、昭和 34 年）を参照した。

## 7 鹿児島大学

次の資料を用いて表を作成した。鹿児島大学三十年史編集委員会『鹿児島大学三十年史』（鹿児島大学、昭和 55 年）。鹿児島大学五十年史編集委員会『鹿児島大学五十年史』（鹿児島大学、平成 12 年）。鹿児島大学厚生補導部/鹿児島大学学生部『学生便覧』昭和 29-平成 15 年度。鹿児島県教育会『鹿児島県学事関係職員録』大正 11、12、3-19、23 年度。鹿児島県教職員組合/鹿児島県教育用品『鹿児島県教職員録』昭和 44-平成 15 年度。鹿児島大学研究者総覧編集委員会『鹿児島大学研究者総覧』（鹿児島大学、平成 6 年）、同（平成 9 年）、同（平成 14 年）。服部鋼資に関しては、「新任教師紹介」鹿児島大学広報委員会『鹿大広報』第 146 号、平成 10 年 2 月 20 日、24 頁を参照した。厚東孝治に関しては、厚東孝治『厚東孝治作品集 2002』（鹿児島大学退官記念白陵会委員会、平成 14 年）、池川直に関しては、池川直『池川直彫刻集 1976-2000』（錦織与志二、平成 12 年）を参照した。

## 8 琉球大学

まず次の資料を参照した。琉球大学『十周年記念誌』（琉球大学、昭和 36 年）、琉球大学二十周年記念誌編集委員会『琉球大学二十周年記念誌』（琉球大学、昭和 45 年）、琉球大学開学 30 周年記念誌編集委員会『琉球大学三十年』（琉球大学、昭和 56 年）、琉球大学開学 50 周年記念史編集専門委員会『琉球大学五十年史』（琉球大学、平成 12 年）。昭和 23 年以前在職教官に関しては次の資料を参照して表を作成した。金子一夫「学術研究助成基金補助金成果報告書平成 25～27 年度『大正・昭和戦前期の中等学校図画教員と出身美術学校の総覧的研究』課題番号 25370126 第 1 部直轄学校～三重県」平成 28 年、300-301 頁。『龍潭同窓会会員名簿』（沖縄師範学校龍潭同窓会、昭和 53 年）18-34 頁。沖縄師範龍潭同窓会『龍潭百年（沖縄師範学校百年記念誌）』（龍潭同窓会、昭和 55 年）34-45 頁。大学移行後の美術講座に関しては、次の資料を参照して表を作成した。琉球大学、前掲書、127、279 頁。琉球大学二十周年記念誌編集委員会、前掲書、484 頁。琉球大学開学 30 周年記念誌編集委員会、前掲書、311-316 頁。琉球大学開学 50 周年記念史編集専門委員会、前掲書、306-311 頁。琉球大学広報委員会『琉球大学研究者総覧 1978』（琉球大学庶務部庶務課、昭和 53 年）53-56 頁及び『同 1991』（平成 4 年）50-53 頁。

## 第八章 教員養成大学・学部における美術教育学の人的制度基盤の成立過程の実相—二事例—

### 第一節 はじめに

第二章から第七章において、全国の教員養成大学・学部が本研究の設定する三時期区分をどのように進んでいったのか明らかにしてきた。ただ、それらは概要であったので、本章では、特定の二大学に関して、その成立過程の詳細な解明を試みる。

まず、地方大学の事例として島根大学を取り上げる。比較的規模の大きな教員養成大学・学部及び美術講座の場合は、美術関係教官に関して大学史に記されていることが多い。あるいは美術講座の沿革をまとめた出版物が作られていることも稀にある。ただ、多くの地方大学は未整理の状態にある。また、資料や書類上の記載と実際は異なることもある。島根大学は筆者の勤務先であるので関係者に確認しやすい。

次に、特設美術の事例として岡山大学を取り上げる。特設美術が置かれた教員養成大学とそうでない大学とで人的制度及び人的配置がどのように違うのか確認する。特設美術の設置に伴って、学科目制度より前に教官の専門性は明確化していく。ただ美術科教育の明確化は特設美術の設置された大学すべてに当てはまるわけではないことには注意する。前述したように、岡山大学は美術関係教官の専門性の明確化に伴い、美術科教育の専門性の明確化も進み、美術科教育関係授業の主たる担当者が定まり、さらに学科目や大学院美術教育専攻の設置も早かった。

なお、本章は、有田洋子「美術教育学の制度的基盤の成立過程—島根大学における人的制度と配置—」『島根大学教育学部紀要』第45巻、平成23年、47-55頁、有田洋子「美術教育学の制度的基盤の成立過程—岡山大学における人的制度と配置—」前掲誌、第46巻、平成24年、91-100頁を加筆修正したものである。

### 第二節 島根大学の場合

#### 1 島根師範学校から島根大学教育学部への移行期

##### (1) 大学への移行期

昭和24年5月、松江高等学校、島根師範学校、島根青年師範学校を母胎として、島根大学は発足した<sup>1)</sup>。発足当初、教育学部と文理学部が設置された。教育学部は、島根師範学校男子部（松江市）、島根師範学校女子部（浜田市）、島根青年師範学校（出雲市）を母胎として発足した。教育学部発足当時、島根大学教育学部松江本校と島根大学教育学部浜田分校と島根大学教育学部出雲分教場があった。その後、出雲分教場は昭和25年4月に、浜田分校は昭和27年3月に廃止された。なお、大学発足と同時に師範学校は廃止されたわけではなく、師範学校在校生が卒業するまでの間、師範学校が併置されていた。師範学校在校生が大学へ編入する場合もあった。教官に関しても、大学に籍を置く者と師範学校に籍を置く者あ

るいは兼任していた者、様々であった。島根大学の場合も昭和 26 年 3 月まで島根大学島根師範学校が併置されていた。このように大学への移行は徐々に進んでいった。なお、島根大学教育学部には、昭和 29 年に特別教科（音楽）教員養成課程、昭和 42 年に特別教科（保健体育）教員養成課程が設置される。

美術講座に関して、島根師範学校から島根大学教育学部へ教官はほぼ移行できた。初期の島根大学美術講座は、図画（絵画）の井上善教、工作（工芸）の天野茂時、図画工作（絵画工芸）の小谷忠芳、書道の金森米三郎という体制で始まった。昭和 20 年以降に島根師範学校及び島根青年師範学校に在職しながら大学には移行しなかった教官として、大瀧直平、田中正、景山浩基、坂本収司が確認された。なお、国立公文書館蔵「国立島根大学設置計画書」中の「現在経営している学校の現況」には以下のように記されていた。

#### 島根師範学校

教官三級 天野茂時 工作 島根師範二部卒

教官三級 井上善教 図画 島根師範一部卒

教官二級 大瀧直平 図画・工作 第二臨時教員養成所図画手工科卒

#### 島根青年師範学校

教官三級 坂本収司 図画・工作 島根師範卒

井上善教（明治 44 年一昭和 52 年）は島根県飯石郡三刀屋の覚専寺住職佐々木龍順の六男に生まれた<sup>2)</sup>。昭和 7 年に島根県師範学校本科第一部を卒業し、同年に松江市雑賀尋常小学校訓導、そして昭和 11 年に島根県師範学校訓導となった。同年 8 月、文部省検定試験合格により中等学校西洋画用器画の免許状を取得し、昭和 14 年に島根県師範学校教諭となった。昭和 18 年に島根県師範学校は官立の島根師範学校となった。昭和 18 年に同校教諭、昭和 20 年に同校助教授として男子部に勤務した。昭和 24 年 7 月より島根大学教育学部助教授となった。担当は図画（絵画）であった。

天野茂時<sup>3)</sup>（明治 39 年一昭和 45 年）は島根県松江市の出身であった。昭和 3 年に島根県師範学校本科第二部卒業、昭和 4 年に島根県師範学校専攻科卒業の後、島根県公立尋常高等師範学校訓導、島根県公立農林学校土木技術教師として勤務した。昭和 11 年に中等学校手工科免許状を取得した。翌昭和 12 年から島根県公立青年学校教諭等を経て、昭和 14 年 4 月には朝鮮総督府の公州女子師範学校教諭となった。そして、昭和 22 年に島根師範学校男子部勤務となった。天野も井上善教と同様に、昭和 24 年 7 月より島根大学教育学部助教授として在職していたはずであり、そのように示す資料もあるが、『島根県教育関係職員録』では昭和 25 年 5 月 1 日現在において島根大学島根師範学校勤務とある。担当は工作（工芸）であった。

小谷忠芳<sup>4)</sup>（明治 44 年一平成 10 年）は、山口県山口市の出身であった。昭和 4 年に広島県私立山陽中学校を卒業し、昭和 8 年に広島高等師範学校第二臨時教員養成所図画手工科

を卒業した。昭和8年より大阪府公立高等小学校訓導、福岡県公立中学校教諭、兵庫県公立中学校教諭、広島県公立高等女学校教諭として勤務した。そして昭和24年5月に島根師範学校女子部に赴任した。昭和25年1月より島根大学島根師範学校と島根大学教育学部（浜田分校）講師とを兼任したはずであるが、『島根県教育関係職員録』では昭和25年5月1日現在において島根大学島根師範学校勤務とある。昭和26年3月、島根師範学校の廃止に伴い、島根大学教育学部（浜田分校）講師となり、さらに昭和27年3月に島根大学教育学部松江本校に異動した。担当は図画工作（絵画工芸）であった。

金森米三郎<sup>5)</sup>（明治38年—平成11年）は島根県簸川郡檜山村の出身であった。大正13年に島根県尋常科本科正教員養成所を修了し、尋常科正教員の免許状を取得した。その後幾つかの講習を受けて小学校本科正教員の免許状を取得した。さらに昭和9年に文部省検定試験（中等教員習字科）に合格し、昭和12年3月より島根県師範学校教諭となった。昭和18年に官立となった島根師範学校の男子部に助教授として勤務した。上記の井上と同様に、昭和24年7月より島根大学教育学部助教授として在職していたはずであり、そのように示す資料もあるが、『島根県教育関係職員録』では昭和25年5月1日現在において島根大学島根師範学校勤務とある。担当は書道であった。

なお、昭和21年以降に島根師範学校に在職していながら大学へ移行しなかった大瀧、田中、景山、坂本に関しては次の通りである。島根師範女子部に在職していた大瀧直平は昭和24年に富山大学教育学部に異動した。大瀧は新潟出身で、昭和8年に広島高等師範学校第二臨時教員養成所図画手工科卒業者であった。長く富山大学教育学部で教鞭をとり後進を育てた。昭和24年度までは島根師範学校女子部で、昭和25年度からは島根大学島根師範学校で書道を教えていた島根県浜田出身の田中正は、島根大学へ移行しなかったものの、後に島根大学教育学部非常勤講師として赴任することとなった。昭和21年度に島根師範学校男子部で工作を教えていたことが確認された島根出身の景山浩基、島根青年師範学校で図画・工作を教えていた坂本収司に関しては、その後の動向は不明であった。いずれにしろ四名とも大学発足までの在職期間は短い。

島根師範学校から島根大学教育学部へ移行した教官に関して次のような傾向がうかがえる。1. 出身地が島根で、出身校も島根師範学校関係であること。2. 松江にあった男子部勤務であること。3. 在職期間が長いこと。

特に1.の傾向は島根大学の場合に特徴的であり、昭和12年の金森、昭和14年の井上の赴任の頃から、徐々に顕著になっていったように見える。昭和10年代後半には、東京美術学校図画師範科や東京高等師範学校図画手工専修科の出身者、あるいは出身地が島根以外の文部省検定合格者で、島根県師範学校及び島根師範学校の美術関係教官として長く在職した者は確認されなかった。

ただそれ以前には様々な出身校や出身地の教員が在職した時期もあった<sup>6)</sup>。昭和10年代前半は、東京美術学校図画師範科出身者では坂元一男（鹿児島）が長年在職していた。東京高等師範学校図画手工専修科出身者では、森一雄（長野）、大坪実（兵庫）、瀬沢幸男（兵庫）、

原稻生（福岡）が在職した。後に坂元は奈良学芸大学、原は東京学芸大学、森は学習院・信州大学に赴任する。文部省検定試験合格者では長井八十一（徳島）が長年にわたって島根県女子師範学校に在職した。

それが昭和 15 年以降になるとほとんどが島根出身者かつ島根師範学校関係の出身者で文部省検定試験合格者の教官となる。

他大学では師範学校から大学への人員の移行は大問題となったこともあった。出身校による対立、例えば、東京美術学校出身者と東京高等師範学校出身者、どちらが大学に移行するかで対立が起きた大学もあった。そのような当時の様相からすると、島根大学の場合は、大学への教官の移行は比較的スムーズであったと言えよう。

なお、後に美術科教育学会の前身の大学美術教科教育研究会の発起人の一人となる鈴木寛男（昭和 46 年より奈良教育大学教官）は、島根県師範学校昭和 16 年 3 月卒業であり、在学時期的に井上善教や坂元一男の薫陶を受けたであろう。

## **(2) 大学移行後の展開**

さらに大学移行後の展開を見ていく。いくらかの人員の出入りはあるものの、出身地が島根で、出身校も島根師範学校関係であることの原則は、昭和 50 年まで維持された。

大学によっては、大学発足直後、学士取得者、旧帝大系教官、東京美術学校出身等の実技の実力者、日展等の当時社会的に認められていた展覧会の実力者などが新たに赴任することがあった。そのような場合、それらの教官は最初から教授として赴任する等、職階や待遇が厚かった。それに対して師範学校から移行した教官は講師や助教授に据え置かれる等した。

それと比べると島根大学の場合、美術講座内においては、大学発足後も安定していたと察せられる。しかも卒業生は、島根の美術教員となり、島根大学教官が上層に位置する島根洋画会に出品し、そこでの位置づけが教育現場での位置づけとも関連していたこともあったらしい。島根の美術教育界及び美術界は島根大学を中心に循環していた様子がうかがえる。

ただ島根大学教育学部内の美術講座としては特異なこともあった。工作（工芸）の担当をして、仏像等の日本美術史の研究をしていた天野<sup>7)</sup>が、昭和 38 年に技術科（電気）に移籍した。天野は移籍後も日本美術史関係授業を担当していたようであった。さらに昭和 39 年まで教授に昇任する教官はなかった。

大学発足直後の書道の金森、図画（絵画）の井上、工作（工芸）の天野、図画工作（絵画工芸）の小谷という体制の後の、島根大学教育学部の美術関係教官の在職状況は次の通りである。

昭和 27 年から、順に、角守久、高橋俊英、細田育宏<sup>やすひろ</sup>が助手として勤めた。皆、出身地は島根で、島根師範学校あるいは島根大学教育学部の出身であった。角と高橋の在職期間は短い<sup>8)</sup>、細田は 5 年間助手を勤めた。細田は昭和 25 年に島根師範学校卒業後、東京教育大学教育学部芸術学科に進学し、卒業後すぐに島根大学教育学部附属中学校教諭となり、島根大学教育学部助手、山口大学教育学部講師を経て、東京学芸大学に赴任した<sup>9)</sup>。

そして昭和 34 年に米原智<sup>10)</sup>が絵画担当の講師として赴任した。米原は島根師範学校卒業生で、在学時期からすると、井上、金森に教わっていたであろう。昭和 19 年に島根師範学校卒業後、島根県公立学校教員を経て、昭和 33 年島根大学教育学部附属小学校教官となった。そこからの島根大学教育学部への異動であった。昭和 63 年まで在職した。

### (3) この時期の教科教育関係授業

この時期の島根大学には、美術科教育専門の担当教官は不在であった。そうは言っても当然ながら教科教育関係授業は実施された。では誰が担当したのか。担当者を明示した資料を確認することはできなかった。ただ、当時のことを知る方によると、小谷が担当していたとのことであった(平成 23 年 9 月聞き取り)。これまで述べてきたように、全国的に当時の教官は教科教育を担当したとしない傾向にあった。島根大学の場合もそうであったらしい。そこで、唯一出身が島根県師範学校ではなく広島高等師範学校第二臨時教員養成所であり、在職歴も短い小谷に白羽の矢が立ったようであった。もっとも小谷は、卒業制作は洋画・日本画・彫塑・金工・木工、業績は絵画・彫塑・図案・写真と多岐にわたり、小・中・高等学校教員の経験もあり、島根師範学校及び島根大学赴任後も図画(絵画)も工作(工芸)も担当しており、そういったことから適任とされたのかもしれない。また小谷は自身の退官記念講演会で「美術教育にたずさわるものは平面と立体と両方に通じ、またその周辺及び歴史にも学ぶのがなければならない」と説いたと言う<sup>11)</sup>。小谷の美術教育観、そして美術に関することなら何でもできた師範学校教官らしい様子が垣間見える。いずれにしてもこの時期の小谷は多忙であったらしい。そのような時期に、助手の細田の山口大学が転出となり、昭和 36 年度は助手不在となった。このような状況で、新たに助手として採用されたのが、石野眞であった<sup>12)</sup>。石野は昭和 35 年に島根大学教育学部を卒業し、大阪市公立中学校教員をしていた。小谷とも関係があったらしい。

以上のように、島根師範学校から島根大学への移行期において、美術科教育を専門に担当するあるいは研究内容とする教官はいなかった。そして「美術教育学」というものは認識されていなかった。また島根大学の場合の特徴として、大学へ移行した教官には出身地が島根で出身校も島根師範学校関係である者が多いことが挙げられる。そのため大学移行後の展開も、美術講座内においては比較的落ち着いて進んでいったことが推察される。

## 2 学科目の設置と具体的人員の配置

昭和 39 年学科目制度発足により、島根大学の場合、学科目制度発足の頃から昭和 44 年度末(昭和 45 年 3 月)まで、絵画と彫塑の学科目のみで、不完全講座と呼ばれる状態であった。学科目制度発足により、美術科教育の学科目を置かなければならなくなったが、島根大学の場合、昭和 44 年度末まで担当者不在であった。文部省から照会もあつて、昭和 45 年 4 月 17 日文部省令第 14 号「国立大学の学科及び課程並びに学科目に関する省令の一部を改正する省令」によって美術科教育の学科目を置くこととなり、昭和 45 年 4 月に彫塑の助手をしていた石野眞が講師となって美術科教育の学科目に所属することとなった。なお美術

理論・美術史の学科目はその後も未設置の状態は続く。石野は美術科教育に配属となってからもデザインや構成の授業を担っていたこともあったらしい。その後、昭和 51 年に、東京芸術大学大学院美術研究科（美学専攻）を修了した猿田量<sup>13)</sup>が美術科教育担当として採用され、石野は構成の学科目に移動した。なお、猿田の採用に際して絵画（油絵）ができることが求められていたようで、赴任後は美術科教育関係授業だけでなく絵画（油絵）の授業も担当していたこともあった。その後は大学院設置の頃まで島根大学の美術科教育は猿田一人が担当した。猿田は美術科教育学会の前身である大学美術科教育研究会の第一回研究会（昭和 54 年）からの参加者であった。猿田の赴任により制度上は美術教育学の人的整備が確定された。

また長らく担当者不在であった構成も、昭和 51 年、東京芸術大学大学院修了の高橋正訓の着任と、石野の所属移動により人的に整備がなされた。

猿田・高橋の赴任の頃から、出身地や出身校の様々な者が在職するようになった。彫塑の小谷の後任に東京芸術大学美術学部彫刻専攻科卒業の倉澤實、絵画の米原の後任は筑波大学大学院修了の新井知生が赴任した。なお美術理論・美術史の専任教官は後に猿田が移るまで不在であった。

なお、島根大学の場合、学科目制度で示された書道の学科目は国語関係学科目と並んだ順であったものの、実質としては大学院設置を目前にした昭和 63 年まで書道教官は美術講座に所属した。美術科教育の学科目が置かれる前年の昭和 44 年に書道の金森が定年退官を迎えた。その後任に島根師範学校卒業生で島根師範学校附属中学校勤務歴もある野津栄が書道担当として採用された。野津は昭和 44 年から昭和 63 年まで在職した。

### 3 大学院美術教育専攻の設置と展開

平成 3 年に島根大学に大学院教育学研究科が設置された。そして平成 7 年に美術教育専攻は設置された。大学院を設置するには資格審査を通る必要があり、この時期、全国的に教官の異動や専門分野の移動があった。島根大学の場合、猿田が美術理論・美術史へ移った。既述のように猿田は東京芸術大学大学院では美学を専攻していた。修了論文題目は「批評の不在」であった。大学赴任後も美術教育研究とともに美術理論研究を続けた研究者でもあったためであろうか。なお、大学院開設時に移っていたのは確実であるが、平成 6 年に既に移っていた可能性もある。大学院設置のためには美術科教育に㊦と合の教官を揃えることが必須条件であった。新たに美術科教育に㊦と合一人ずつ担当が必要となり、大阪で中学校教員として活躍していた島根大学教育学部卒業生の間鍋武敷、筑波大学大学院博士課程芸術学研究科芸術学専攻（芸術教育学）で学び、鹿児島で公立学校講師をしていた川路澄人が採用された。この二人から純粋に美術科教育専門の教官が勤務することになったと言えよう。島根大学においてはこの時期に制度的に美術教育学が成立したと言えよう。

なお、この大学院設置の頃までは各教官の在職期間が長い。ほとんどが定年退官を迎え、あるいは他大学への転出なく勤めあげた。

その後の展開を少し示しておく。間鍋の定年退官後は、その後任として、広島大学大学院修了で広島大学教育学部附属学校教員経験もある佐々有生が鳴門教育大学より転入した。川路は学部改組に伴い昭和 15 年に初等教育開発講座へ移籍した。さらに、平成 16 年 4 月、大学法人化に伴い、鳥取大学の教員養成課程の学生定員 70 名を島根大学に、島根大学の教育職員免許取得を卒業要件としない課程の学生定員 100 名を鳥取大学に移動し、全国初の県境を越えて再編統合を実現させた<sup>14)</sup>。

### 第三節 岡山大学の場合

#### 1 岡山師範学校から岡山大学教育学部への移行期

##### (1) 大学への移行期の様相

岡山医科大学、岡山医科大学附属医学専門部、第六高等学校、岡山師範学校、岡山青年師範学校、岡山農業専門学校を主たる母胎として、岡山大学は法文学部、教育学部、理学部、農学部、医学部からなる総合大学として発足した<sup>15)</sup>。理学部と法文学部の新設、一般教養要員のため、岡山師範学校及び岡山青年師範学校教官定員を大幅に供出することとなり、岡山大学教育学部は大学移行完了時の教官定員は 55 名での始まりであった<sup>16)</sup>。

教育学部（岡山市津島）は、岡山師範学校（岡山市門田）と岡山青年師範学校（倉敷市）を主たる母胎とする。最初期の美術講座は、岡山師範学校から移行した教官により構成された。岡山師範学校は昭和 26 年 3 月まで併置され、そこから大学への移行は徐々になされた。

岡山大学二十年史編さん委員会『岡山大学二十年史』（昭和 44 年）に、岡山大学設置認可申請書に芸能科（図画・工作・書道）とあったと記される<sup>17)</sup>。国立公文書館蔵「岡山大学設置認可申請書 昭和二十三年七月二十六日 岡山大学設置期成会」には次のように記される。

教育学部 芸能科第二 図画・工作・書道

「総長及学部教員予定」

助教授	芸能科	絵画	岡山師範本科	昭 21. 10. 2,	24. 4. 1	佐藤義太郎	明 38. 6. 30
助教授	芸能科	書道	岡山師範一部	昭 21. 10. 2,	24. 4. 1	絹田文夫	明 42. 4. 1
助教授	芸能科	絵画	東美図画師範	昭 21. 10. 1,	24. 4. 1	大島勲	大 5. 6. 1
講師	芸能科	工作	徳島師範	昭 21. 10. 1,	24. 4. 1	広岡豊一	明 33. 1. 1
講師	芸能科	工作	岡山工芸	昭 21. 10. 2,	24. 4. 1	渡辺正夫	明 43. 2. 28

岡山師範学校の美術関係教官は、工作担当の廣岡豊一を除き、岡山大学教育学部へ移行した。昭和 24 年に佐藤義太郎、昭和 25 年に渡辺正夫、昭和 26 年に大島勲が、師範学校教官から大学教育学部講師となった。書道の絹田文夫も大学へ移行した。

佐藤義太郎は、大正 14 年に岡山師範学校を卒業し、昭和 3 年に文部省検定（西洋画・用器画）合格となり、昭和 15 年より岡山県師範学校に赴任する。図画・絵画を主に担当した



と思われるが、工作・図工を担当した年もある<sup>18)</sup>。昭和 25 年からは日展・白日会・水彩連盟・日展水彩作品協会に作品発表していた<sup>19)</sup>。なお、昭和 3 年の文部省検定の合格者に同じく岡山県師範学校出身の河井達海がいた。河井は大阪師範学校・大阪学芸大学の美術講座の中心的存在となっていく。

渡辺正夫<sup>20)</sup>は、昭和 2 年に岡山市立岡山工芸学校を卒業し、昭和 10 年に文部省検定試験に合格し、昭和 18 年より岡山師範学校男子部に赴任する。工作（工芸・木工）を担当した。

大島勲<sup>21)</sup>（大正 5—平成 3）は、岡山県に生まれ、昭和 14 年東京美術学校図画師範科を卒業し、熊本県天草中学赴任後、愛知県等の中学校に勤務し、昭和 21 年より岡山師範学校女子部に勤務する。図画（絵画）を担当した。画業に関しては、後に教育学部で同僚となる柚木祥吉郎の父の柚木久太が会長の洋画団体火虹会に所属し、昭和 25 年創元会第 9 回展初入選、昭和 26 年第 7 回日展初入選、昭和 27 年創元会会員、昭和 54 年創元会運営委員となったことが挙げられる。

昭和 33 年度に教育学部人文（後の国語）講座に移るまでは、書道教官も図画工作教官と同じ講座に所属されていた<sup>22)</sup>。書道教官に、絹田文夫と大館允雄がいた。ただ、特設美術の主目的は美術・工芸の高等学校教員養成なので、書道教官は特設美術設置に伴って所属講座が移ったと思われる。実感とは異なるが、法律的に正式なのは科目、学科目であり、教官組織としての講座や教室は便宜的な各大学独自の措置と言われる。昭和 33 年あるいは特設美術設置期に移ったというよりも、岡山大学教育学部はそのような区分に修正したと言うのが適切かもしれない。

なお岡山大学の場合、美術講座は、かなり初期から美術と工芸の二室体制であった。いつからかを示す資料は確認できなかった。ただ先述のように大学設置認可申請書には芸能科（図画・工作・書道）とあり、教官も、図画（美術）あるいは工作（工芸）といった高等学校教科に沿った分担をしており、開学当初から実質はこの二体制で分かれていたものと思われる。他の多くの大学でも芸能科（図画・工作・書道）の区分、美術教官の図画（絵画）と工作（工芸）の分担がなされていた。それを二室体制とするかは教官定員等の規模が大きく関係していたであろう。岡山大学が美術と工芸の二室体制となったと断言できるのは、高等学校の美術と工芸の教員養成を主目的とする特設美術の設置の頃である。

そして大学設置翌年の昭和 25 年に、佐藤章（改名一章、以下一章）が美術講座初の教授として学外から新規採用される。岡山大学では開学初期から特設美術設置の構想があった<sup>23)</sup>。佐藤一章の牽引の下、昭和 28 年に特設美術が開設となる。

岡山大学の場合、師範学校から移行した教官陣に新たに外部から教授として佐藤一章を招聘したこと、そして特設美術の設置が特徴であり、その後の展開にも影響した大きな出来事であった。大学発足直後、師範学校教官のみの講座には、学士取得者、旧帝大系教官、東京美術学校出身等の実技の実力者、日展等の当時社会的に認められていた展覧会の実力者等が新たに赴任することがあった。そのような場合、師範学校教官に比べてそれらの教官は最初から教授として赴任する等、職階や待遇が厚かった。岡山大学の場合もこれにあたろう。

## (2) この時期の教科教育関係授業

昭和 24 年に岡山大学が発足してから昭和 28 年に特設美術が開設されるまでの間、美術科教育を専門とする教官は不在であった。師範学校教官は図画工作に関することであれば何でもできたとされる。佐藤一章を除き、師範学校教官であった佐藤義太郎・渡辺正夫・大島勲は、誰もが美術科教育を担当することは可能であったであろうが、誰もがそれを研究専門とするわけではなかった。ただ、この時期にも教科教育法の授業はあったわけで、誰かが担当しなくてはならない。これは他の多くの教員養成大学・学部が直面した共通の問題である。『岡山大学職員録』昭和 25 年度（10 月 30 日現在）に「絵画（教育法）佐藤義太郎」とあり、少なくとも昭和 25 年度は佐藤義太郎が担当したものと思われる<sup>24)</sup>。昭和 25 年度の人員構成、佐藤義太郎・渡辺正夫・大島勲・佐藤一章を考えると、最年長・最古参で、図画を専門としながらも工作指導歴もある師範学校教官であった佐藤義太郎が担当したのに不自然さはないだろう。ただ上記のような職員録への表記は、あくまでも絵画を主たる専門とした上で教育法も担当したというように見て取れる。

いずれにせよ、岡山師範学校から岡山大学教育学部への移行期は、全国的にそうであったように、美術科教育を専門とする人材はいなかった。当然ながら、制度的に美術科教育の専門性は保証されておらず、「美術教育学」も認識されていなかった。

## 2 学科目の設置と具体的人員の配置

### (1) 専門化の兆し

昭和 39 年学科目制度発足により、岡山大学には、西洋画、木工、陶芸、彫塑、構成、美術・工芸科教育が示された。ちょうど当時の岡山大学の現員の専門に対応した形となっているように見える。それまでは多くの大学の美術講座では、図画と工作あるいは美術と工芸といった漠然とした区分けがなされていたが、図画工作に関することであれば何でもできる師範学校出身の教官が多かったこともあり、それで対応できていた。それが学科目制度を機に、教官の専門性が明確化していくこととなる。

ただ、岡山大学の場合、学科目に先んじて特設美術の設置に伴って教官の専門性が明確して学科目に類するものができていた可能性がある。美術・工芸の高等学校教員養成を主目的とした特設美術においては、専門的かつ多彩な美術・工芸に関する教育が要される。そのため実質としても専門性の明確化は急務とされたであろう。岡山大学の特設美術開設期の学科目に類するものの具体的構成が明記された資料は確認できなかったが、同時期に特設美術の設置された大学のものは確認できた。岡山大学と同年の昭和 28 年開設の佐賀大学では特設美術設置に伴って「学科目は日本画、西洋画、彫塑、構成、美術理論、木材工芸、金属工芸、窯芸、美術・工芸科教育と整備」されたらしい<sup>25)</sup>。昭和 27 年開設の京都学芸大学では「美学・美術史、構成学、工芸学、絵画学―日本画、絵画学―西洋画、彫塑学の学科群」が設けられた<sup>26)</sup>。これら二例からも、岡山大学でも同様に学科目に類するものがあり、そこには多様な美術・工芸諸分野が置かれた可能性がある。そして美術科教育は、佐賀大学の

ように初期から置かれたかもしれない場合もあれば、京都学芸大学のように設置直後はなかった場合もある。さらに実際の教官の配置の時期とはずれている場合もある。前章で確認したように、佐賀大学の学科目「美術・工芸科教育」に人的配置が確定したのは平成2年であった。

岡山大学の場合、昭和32年より戸田忠吾が着任し、美術・工芸科教育関係の授業を主担当していた。ただ昭和38年までは洋画（一）（二）、彫塑、工芸、美術理論の「区分」しかなかったもので、戸田は美術理論に貼り付けられていたと思われる<sup>27)</sup>。

なお、その後、資料に明示されていた岡山大学の学科目は次の通りである。昭和43年度は、日本画、西洋画、木工、染織、金工、陶芸、彫塑、構成、美術理論・美術史、美術工芸教育であった<sup>28)</sup>。このうち定員のない、日本画、染織、金工等は非常勤講師が、美術理論・美術史は法文学部教官が兼担していた。昭和55年度・平成元年は共に、絵画、彫塑、美術・工芸科教育（美術）、構成、工芸、美術・工芸科教育（工芸）で、すべて定員と現員が揃っていた<sup>29)</sup>。

次に、特設美術設置期の岡山大学美術講座の様相と、この時期の美術科教育の様相を順に記す。

## (2) 特設美術開設期

岡山大学特設美術設置にあたり、教官定員が増え、新たに多くの教官が要請されることとなった。そして、その要員は佐藤一章の意向にもとづいて<sup>30)</sup>、社会的に高名な作家を招聘することとなる。主たる要員は、日展における有力者であった。佐藤一章自身、日展の有力者であり、日展の岡山誘致の立役者であった。そして後任も日展及び光風会・創元会・東光会といった日展系の作家が続く。佐藤一章の在任期間は6年程度であるが、その影響は後々まで続くように見える。特設美術設置前後で美術講座の構成教官は次のように変わった<sup>31)</sup>。

### 特設美術設置前（昭和26年）

教授 佐藤一章  
講師 佐藤義太郎  
講師 大島勲  
講師 渡辺正夫  
講師 絹田文夫（書）  
講師 大館允雄（書）  
非常勤講師 岡本金一郎（号錦朋）

### 特設美術設置後（昭和28年）

教授 佐藤一章：美術主任教授  
教授 磯井如真：工芸主任教授  
助教授 柚木祥吉郎  
助教授 佐藤義太郎  
助教授 絹田文夫（書）  
講師 大島勲  
講師 渡辺正夫  
講師 大館允雄（書）  
非常勤講師 池田昇一（号遥邨）  
非常勤講師 宮本隆  
非常勤講師 竹内清  
非常勤講師 岡本素六

特設設置後、新たに、工芸主任教授として漆芸の磯井雪枝（号如真、以下如真）、助教授として西洋画の柚木祥吉郎が招聘された。美術講座の教官数が増加した。

佐藤一章（明治 38—昭和 35）<sup>32)</sup> は、岡山県に生まれ、昭和 4 年に東京美術学校西洋画科卒業、その後日展・帝展・光風会展等で作品発表受賞を重ねる。昭和 22 年に日展審査員となり、山陽新聞社の要請を受けて日展の岡山誘致に奔走し、翌 23 年初めての日展地方展開催を実現させる。昭和 25 年岡山大学教育学部の美術講座の主任教授となった。

磯井如真（明治 16—昭和 39）<sup>33)</sup> は、香川県に生まれ、明治 36 年に香川県立工芸学校容器漆工科卒業、その後幾つかの職を経つつ多くの作品発表受賞を重ねる。日展招待出品や日展審査員をつとめる等の重鎮であった。大学赴任 3 年後の昭和 31 年に重要無形文化財(蒔罎)の保持者に認定され、人間国宝となった。大学赴任時は年齢 70 歳で、定年制度に囚われない特別採用だったと思われる。

西洋画の柚木祥吉郎<sup>34)</sup>（大正 8—平成 17）は、洋画家柚木久太の長男として東京に生まれる。祖父・弟も画家の一家であった。昭和 16 年に東京美術学校油画科を卒業し、その後日展や一水会等で入選受賞を重ねる。昭和 28 年より日展委嘱出品、一水会会員推挙となり、同年に岡山大学に赴任する。昭和 32 年日展不出品を決め、一水会を退会する。この頃岡山大学を去る。その後春陽会等で活躍し、ノートルダム聖心女子大学名誉教授となった。

岡山大学の西洋画教官の系譜は日展系作家が続く。佐藤一章の後任は、渡辺浩三・平通武男・川上一巳まで、佐藤義太郎の後任は、能登靖幸・福島隆壽・西山松生まで、大島勲の後任は、小川一尊まで、日展系作家が代々続く。なお遡って初期の岡山県師範教官であった石原義武も創元会等の日展系画壇で活躍した画家であった。日展系以外の西洋画教官の登場は、平成 6 年赴任の泉谷淑夫までなかった。

彫塑も同様に、最初期の非常勤講師の岡本錦朋の頃から、その後任の宮本隆・中村宏・蛭田二郎・上田久利まで日展で活躍する作家が継続している。

非常勤講師は、例えば二科会の竹内清など分野作家も見えるが、やはり日展系作家が多い。岡山師範学校及び岡山大学卒業生も多い。後に人間国宝となる伊勢崎惇（号淳）や太田儔も岡山大学卒業後に非常勤講師に名を連ねる。特に初期の非常勤講師はかなり重きを置かれていた様子が垣間見える記録もある<sup>35)</sup>。特設美術における美術工芸諸分野の充実した指導のため、当然ながらそれに応じて専門的かつ多彩な非常勤講師が必要とされたのであろう。

この時期、全国的に教員養成大学・学部的美術講座には大なり小なり実技重視すなわち教科専門重視の気風があった。特設美術設置により、岡山大学ではそれがいっそう強まったと思われる。教官数は増加し、著名な作家による専門的な指導がなされ、さらに卒業生の多くも学校教員としてはもちろん、作家としても精力的に活躍していた。

### (3) この時期の美術科教育関係授業

昭和 32 年に戸田忠吾が新たに採用され、美術科教育関係授業の主たる担当者となる。『岡山大学要覧』によると、昭和 42 年度は、美術・工芸科教育関係授業の大部分を戸田が、いくつかを師範学校から移行した教官の佐藤、渡辺、大島が担当していた<sup>36)</sup>。戸田の後任とし

て、昭和 46 年に黒川建一が赴任する。

戸田忠吾<sup>37)</sup>（明治 38—？）（昭和 8 年君島から戸田に改姓）は、大正 14 年 3 月に栃木県師範学校卒業、同年 3 月に栃木県訓導、同年 4 月に東京高等師範学校入学及び昭和 3 年 3 月に同校卒業、その卒業直後に福井県師範学校に赴任する。さらに昭和 4 年 8 月福島県師範学校教諭となる。昭和 15 年 11 月から昭和 21 年 3 月まで奈良県女子師範教諭兼訓導となる。その後同附属中学校及び高等学校兼任を経て、奈良女子大学文学部より、昭和 32 年 10 月岡山大学教育学部に転任となった。著書に『農村手工教育』（昭和 14 年）、『技術科教育論』（昭和 35 年）等がある。

黒川建一<sup>38)</sup>（昭和 11 年— ）は、三重県に生まれ、昭和 35 年に東京教育大学芸術学科（彫塑専攻）卒業、昭和 37 年に同大学教育学科（教育方法専攻）卒業、昭和 41 年に同大学大学院修士課程（教育方法専攻）修了をする。三重大学で非常勤講師を勤め、その後、昭和 46 年 4 月に岡山大学に赴任する。昭和 49 年 6 月愛知教育大学（幼児教育）に転出した。著書に『保育としての造形指導』（三晃書房、昭和 50 年）、その他幼児教育・保育における表現・造形に関する編著書が多数ある。

なお、戸田の赴任と同じ頃、法文学部助教授の脇田秀太郎が美術理論・美術史の分野を兼担することとなる。大学移行期の大幅な教官供出の交換条件に「教育学部中等教員養成課程の教科専門中、人文系は法文学部、理科系は理学部が担当する」というものがあっただろう<sup>39)</sup>。これと直接関係するかははっきりしないが、岡山大学教育学部では美術理論・美術史は、法文・文学部教官が兼担することが続く。

以上のように、岡山大学の場合、昭和 39 年学科目制度以前に美術科教育関係授業を主として専門に担当する教官がいた。それは特設美術の設置によって、教官の専門が師範学校時代の図画や工作といった大きな枠組みではなくなり、細分化していったことを背景とすると思われる。ただ、同じく特設美術が設置された京都教育大学や佐賀大学は、それぞれの大学の項で既に述べたが、美術専門が強く意識されていて美術教育の人的整備は後回しになった。

そして、厳密に言うと、戸田は手工・技術科教育を専門とする研究者であった。戸田の後任の黒川建一は幼児教育を専門とする研究者であった。どちらも美術科教育と関係ないわけではないが、それを中心の研究とするわけでもない。美術科教育を研究内容とする名実共に美術科教育を専門とする教官の赴任は、全国的にそうであったように岡山大学の場合も大学院の設置を待つ。

### 3 大学院美術教育専攻の設置と展開

昭和 55 年 4 月に岡山大学大学院教育学研究科が設置された。美術教育専攻は第一陣として同年に開設された。

既述のように、大学院美術教育専攻の設置の時期は、岡山大学は全国的に早かった。その頃、美術科教育を専門とする人材は僅かにしか存在しなかった。大学院設置には教科教育の

㊦教官と合教官が 1 人ずつ必要で、㊦教官となり得る美術科教育の業績をもつ者はさらに稀であった。なお昭和 38 年に東京芸術大学に全国初の美術教育学専攻の大学院が設置され、そこで美術教育学を専門とする研究者の養成が進んでいったわけであるが、修了生は僅かで、まだ若く大学院の㊦教官となるには時期尚早の場合が多かったであろう。そういった状況において、大学院美術教育専攻設置の早期は、美術科教育を専門とする限られた人員が、大学院設置のための要員として、全国を渡るという様相が見られた。

そのような背景の中、岡山大学に美術科教育担当として赴任するのが、宮脇理である。文部省教科調査官であった宮脇が、黒川建一の後任として昭和 50 年 4 月に招聘された。

宮脇理<sup>40)</sup> (昭和 4— ) は、東京に生まれ、昭和 28 年に東京教育大学教育学部芸術学科を卒業する。その後、北海道学芸大学助手・講師、東京教育大学附属小学校教諭、福島大学助教授、文部省教科調査官を経て、昭和 50 年に岡山大学助教授として赴任する。昭和 54 年に転出し、横浜国立大学教授となり同大学大学院美術教育専攻の創設、さらにその後は筑波大学教授となり同大学博士課程に芸術教育学の分野の創設に寄与する。筑波大学定年退官後、佐賀大学教授となり同大学大学院美術教育専攻設置に尽力する。その他にも福島大学や大分大学の大学院美術教育専攻創設時にも非常勤講師で助力した。

宮脇は、岡山大学、横浜国立大学と立て続けに大学院設置要員として異動を重ねる。昭和 54 年 4 月に岡山大学を転出し、同年 4 月に横浜国立大学へ移っている。大学院美術教育専攻設置の時期は、岡山大学は昭和 55 年 4 月で、横浜国立大学は昭和 54 年 4 月である。当然ながら大学院設置の前に、その審査は行われる。岡山大学の場合、昭和 54 年 4 月以前の宮脇で準備を行い、その後、熊本高工に引き継いだのであろう。また横浜国立大学の場合、昭和 54 年 4 月大学院設置と同時に宮脇は赴任しており、赴任以前に審査を通過していたであろう。それだけ美術科教育を専門とする人材が不足していたことと、大学院設置が大改革であったことが推察される。

そして宮脇の後任として熊本高工<sup>たかのり</sup>が昭和 54 年 4 月に、それとは別に新たに吉田<sup>すすぐ</sup>湊が昭和 53 年 4 月に赴任する。

熊本高工<sup>41)</sup> (大正 7—平成 20) は、山梨県に生まれ、昭和 13 年東京府青山師範学校を卒業する。昭和 30 年まで東京都公立小学校教諭として勤務し、その間に、昭和 13 年海軍短期現役兵、平成 17 年早稲田大学専門学校政治経済学科卒業、昭和 23 年東京美術学校油画科内地留学修了となる。さらに昭和 32 年に東京教育大学芸術学科構成専攻卒業し、その後お茶の水大学附属中学校に勤める。昭和 44 年に女子美術大学教授、昭和 49 年に東京造形大学教授を経て、昭和 54 年に岡山大学教育学部に教授として赴任する。昭和 56 年には工芸主任となる。その後、昭和 58 年に上越教育大学に教授として転出し、そこでも昭和 61 年に美術主任となり、昭和 62 年に定年退官した。同年造形美術教育研究所長となった。

吉田湊<sup>42)</sup> (大正 11—平成 13) は、昭和 22 年 3 月東京美術学校油画科を卒業し、東京都内の中学校・高等学校教員として 30 年程勤務した後、昭和 53 年 4 月に岡山大学に赴任する。在任中に高等学校学習指導要領協力者主査をつとめる。浮世絵研究家であり、歌人でも

あった。

岡山大学の場合、宮脇の助走があり、それを熊本が継ぎ、さらに吉田が加わり、美術科教育専門の教官が揃い、昭和 55 年 4 月に大学院美術教育専攻が設置される。岡山大学の場合、この時期、美術教育学の人的制度基盤が成立したと言える。

その後の様相も示しておく。熊本の上越教育大学への転出に伴い、昭和 58 年 4 月に仁井一郎が赴任する。仁井は、岡山大学教育学部及び同専攻科卒業・修了生で、岡山県公立中学校勤務の後、岡山大学教育学部附属中学校教諭として 12 年にわたる勤務の後、岡山大学に赴任する。

吉田の後任として、太田将勝が昭和 60 年 4 月に、さらにその後任として赤木里香子が平成 4 年 12 月 1 日に赴任することとなる。太田は東北大学大学院文学研究科美学美術史学専攻修了後、中・高等学校教諭及び美術館学芸員等を経て、岡山大学に赴任し、平成 4 年 3 月に上越教育大学へ転出した<sup>43)</sup>。赤木は筑波大学大学院博士課程芸術学研究科芸術学専攻を修了し、美術教育関係で最初に学術博士を取得した後、岡山大学に赴任した<sup>44)</sup>。

なお、学部と大学院ではその組織構成が異なり、学部の所属と大学院の所属が異なることがある。岡山大学では、教育学部では幼児教育に所属するの場勇が、大学院では美術教育専攻に所属し、美術科教育を担当するということがあった。的場は、岡山師範学校出身で、岡山大学教育学部附属学校で主に図画工作担当として長年勤務の後、岡山大学教育学部の幼児教育の教官として赴任した。また吉田は、学部では美術・工芸科教育、大学院では「絵画」に所属していたとする資料もある<sup>45)</sup>。吉田は浮世絵をはじめとする絵画研究者でもあったためであろうか。

学部においては、美術・工芸の高等学校教員養成を主目的する特設美術ということから、教科教育が二人体制となった大学院設置後は、指導領域を美術と工芸とに分担するようになったようである。吉田・太田・赤木が美術、熊本・仁井が工芸であった。

大学院美術教育専攻設置の頃の美術科教育以外の分野の様相にも少しだけ触れておく。いくつかの大学でそうであったように、大学院設置前後に、担当学科目や分野の移動があった。それまで工芸（木工）を担当していた前川穰司が構成に移り、工芸（木工）に技術講座から江見貢が戻ってきた。江見は岡山大学教育学部卒業生で、長らく美術講座の助手・講師と附属学校教諭を兼務し、昭和 44 年に工芸（木工）担当として美術講座に赴任し、その直後に技術講座に移り、昭和 55 年大学院設置の時期に美術に戻ってきた。

また、大学院設置頃に実技専門教官の多くが論文を作成していた。作品業績が十分に足りていたであろう日展系教官まで作成していた。大学院設置に際して文部省から示唆される専攻目的・内容のコンセプトは大学ごとに異なるとされる。岡山大学の場合は実技専門教官も論文業績を要求されたものと推察される。

その後、平成 8 年 4 月に、兵庫教育大学、上越教育大学、岡山大学、鳴門教育大学の四大学からなる、兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科が設置される。岡山大学ではちょうどその前後に人員の異動が幾つか見られる。この連合大学院の設置により美術教育学の人

的制度基盤は新たな段階に入ったと思われるが、それについては本研究の考察範囲の対象外となるので、設置された事実を示すに止める<sup>46)</sup>。

以上のように、岡山大学の場合、特設美術の設置に伴って教官の専門性が明確化して学科目制度以前に美術科教育関係授業の主たる担当者が在職し、学科目制度発足と同時に美術科教育の学科目も設置され、それへの人的配置もすぐになされ、大学院美術教育専攻の設置も早かった。全国の中でも早い段階で美術教育学の人的制度基盤が成立していったと言える。

#### 第四節 まとめ

隣接する対照的な二大学の人的整備過程を詳細に検討して、二大学での対照的な人的整備過程を確認できた。島根大学は地方の比較的小さな大学で、島根(県)師範学校出身の教官が多く典型的な地域密着型の大学であった。学科目や大学院の教育政策が実質化していくのも遅い。それに対して隣の県にある岡山大学は、規模の大きな大学で特設美術設置にも成功し専門美術大学に遜色ない美術専門の教育を目指した。専門化の一環として学科目設置以前から特定教官が教科教育科目を主に担当し、学科目制度発足後は学科目「美術・工芸科教育」が設置されそれへの人的配置もすぐになされ、大学院設置も早かった。このように隣の大学同士でもかなり違うことを示すことができた。ただ、特設美術が設置された大学であっても、専門化の一環として美術教育専門が整備されるのではなく、美術専門だけが強調され、美術科教育の人的制度整備が後回しになる場合もある。

#### 註

- 1) 島根大学開学三十周年史編集委員会『島根大学史』(島根大学、昭和 56 年)。
- 2) 井上に関しては、島根県立博物館『井上善教遺作展』(島根県立博物館、昭和 55 年)、井上善教「教職回顧 思い出」島根大学教育学部同窓会『同窓会誌』第 27 号、昭和 50 年、60-61 頁を参照した。
- 3) 天野に関しては、島根大学教育学部蔵資料を参照した。
- 4) 小谷に関しては次の資料を参照した。小谷忠芳「教職回顧 思い出」島根大学教育学部同窓会『同窓会誌』第 26 号、昭和 49 年、36-37 頁を参照した。「教職回顧 思い出」には退官を迎えた小谷本人の回想が記され、最初「浜田の女子師範に赴任した」とある。ただ、これ以外に女子師範赴任を明記する資料はなかった。最初に女子師範赴任ならば、小谷と同窓の大瀧の後任とするのが、小谷の赴任時期と大瀧の異動時期からすると妥



当であろう。

- 5) 金森に関しては、金森朴堂『遊神帖』(報光社、昭和 60 年)、金森朴堂『座右帖』(八洪水、昭和 49 年)を参照した。
- 6) ただ書道に関しては昭和初期からずっと島根出身の教官が大多数である。島根以外で確認されたのは鳥取の福政定男、岡山の薬師寺毅であった。また書道の特徴に、金森以前の教官は体育等の別教科を兼担していたことが挙げられる。
- 7) 天野茂時は、大学設置後は工作(工芸)を担当していたが、研究は日本美術史を専門としていたと思われる。論文が多数ある。文部省内地研究員として京都大学文学部美学研究室に留学もした(『同窓会誌』第 2 号、昭和 27 年、40-41 頁)。技術科移籍後も日本美術史関係の授業を担当していたことを示す資料もある。
- 8) 同様の傾向の大学もあるが、島根大学の「当時の助手は、2、3 年で学校教育の現場へ出るのが慣例」であったらしい(石野眞「美術教育における細田育宏先生の思い出」細田和子『木工美術 細田育宏の世界』(ニューカラー写真印刷、平成 22 年) 208 頁)。
- 9) 細田和子、前掲書。
- 10) 米原に関しては、米原智『造形への思索 画業 60 周年記念 米原智画集』(印刷企画社、平成 18 年)を参照した。
- 11) 島根大学教育学部同窓会『同窓会誌』26 号、昭和 49 年、64 頁。
- 12) 石野に関しては島根デザイン連盟ホームページ(<http://design.shimane.tv/members/ishino.html>)、GLOBAL(<http://jglobal.jst.go.jp/public/20090422/200901074834091269>)を参照した(平成 23 年 9 月 20 日確認)。
- 13) 美術科教育学会二〇年史編纂委員会『美術科教育学会二〇年史』(美術科教育学会、平成 11 年)。
- 14) 島根大学ホームページ([http://www.shimane-u.ac.jp/\\_common/images/01/stories/pdf/jouhoukoukai/gyomu/genkyo\\_chosa/edu\\_e.pdf](http://www.shimane-u.ac.jp/_common/images/01/stories/pdf/jouhoukoukai/gyomu/genkyo_chosa/edu_e.pdf)) (平成 26 年 9 月 20 日確認)。
- 15) 岡山大学に関する基本的事項は次の文献を参考にした。岡山大学二十年史編さん委員会『岡山大学二十年史』(岡山大学、昭和 44 年)、岡山大学 30 年史編纂委員会『岡山大学史(昭和 44 年～昭和 54 年)』(岡山大学、昭和 55 年)、岡山大学 40 年史編さん委員会『岡山大学史(昭和 54 年～平成元年)』(岡山大学、平成 2 年)、岡山大学創立 50 周年記念事業委員会『岡山大学史(平成元年～平成 11 年)』(岡山大学、平成 11 年)。
- 16) 岡山大学二十年史編さん委員会、前掲書、195 頁。
- 17) 同上、244 頁。
- 18) 佐藤義太郎は、岡山県教育委員会『岡山県学事関係職員録』昭和 15、16 年度では「図手」、昭和 17 年度では「図工作」を担当したとある。
- 19) 岡山大学二十年史編さん委員会、前掲書、244 頁。
- 20) 渡辺正夫に関しては、岡山大学二十年史編さん委員会、前掲書、245 頁、岡山大学 30 年史編纂委員会、前掲書、155 頁を主に参照した。

- 21) 大島勲に関しては、岡山大学二十年史編さん委員会、前掲書、244 頁、岡山大学 30 年史編纂委員会、前掲書、154 頁を参照した。
- 22) 大学移行期から昭和 32 年度までの『岡山県学事関係職員録』『岡山大学職員録』『岡山大学要覧』の教官名の記載も図画工作教官と書道教官は隣接しており、図画担当教官も工作担当教官も書道担当教官も全員「美術」教官として名簿に記載されていた年もある。岡山県教育委員会『岡山県学事関係職員録』によると、昭和 28-30 年度版では、絹田も大館も「美」もしくは「美術」に分類されていた。その後昭和 31-32 年度版では、「書道」と明記されるものの、美術教官の名と隣接していた。昭和 33 年度版より、教育学部人文（後の国語）に分類された。この頃の『岡山大学要覧』における記載にも同様の変遷が見られる。
- 23) 岡山大学二十年史編さん委員会、前掲書、202 頁。
- 24) 『岡山大学職員録』昭和 25 年度（10 月 30 日現在）。
- 25) 中牟田佳彰・前村晃「佐賀大学美術・工芸小史―特設美術科創設より美術・工芸課程まで―」佐賀大学文化教育学部美術・工芸教室『50 周年記念誌佐賀大学美術・工芸教室 50 年』（佐賀大学、平成 15 年）92 頁。
- 26) 京都教育大学開学 30 周年記念誌編集委員会『京都教育大学開学三十周年記念誌』（京都教育大学、昭和 55 年）91 頁。
- 27) 岡山大学教育学部事務部『岡山大学教育学部概況』昭和 33、34、38 年度編を参照した。
- 28) 「昭和 43 年度学科目別定員および現員」岡山大学二十年史編さん委員会、前掲書、282-283 頁を参照した。
- 29) 「昭和 55 年度講座および学科目別定員および現員」岡山大学 30 年史編纂委員会、前掲書、141、142 頁、及び「平成元年度講座及び学科目別定員及び現員」岡山大学 40 年史編さん委員会、前掲書、144-146 頁を参照した。
- 30) 新たに招聘された教官らによる当時の回想録に、佐藤一章からの依頼であったことが記される（やかげ郷土美術館『岡大特美教室からの波動』（やかげ郷土美術館、平成 14 年）4、5 頁）。竹内清は、佐藤一章から特設美術設置要員として、デザイン担当の助教授で来てくれないかという依頼があり、非常勤講師という条件で受けたという。宮本隆も、佐藤一章の要望で、彫塑の非常勤講師の岡本欽朋の後任の依頼があり、その後任者が見つかるまでという条件で引き受けたという。
- 31) 『岡山県学事関係職員録』昭和 24、25、27、28 年度版及び『岡山大学職員録』昭和 24-28 年度版を参照した。
- 32) 佐藤一章に関しては、やかげ郷土美術館、前掲書、及び同『やかげ郷土美術館開館 20 周年記念 佐藤一章展／一章ゆかりの画家展』（やかげ郷土美術館、平成 22 年）、岡山大学二十年史編さん委員会、前掲書、244、245 頁を参照した。
- 33) 磯井如真に関しては、岡山大学二十年史編さん委員会、前掲書、245 頁及びやかげ郷土美術館『岡大特美教室からの波動』前掲書、6、7、50 頁を参照した。

- 34) 柚木祥吉郎に関しては、やかげ郷土美術館、前掲書、52 頁、岡山大学二十年史編さん委員会、前掲書、245 頁を参照した。
- 35) 例えば、竹内清による当時の回想録によると、大学入試のデッサン試験の監督採点にも携わったらしい（やかげ郷土美術館、前掲書、4 頁）。
- 36) 『岡山大学要覧』（自昭和 41 年度至昭和 42 年度）（昭和 42 年発行）によると、昭和 42 年度は、教科教育法七つ中、五つを戸田（美術・工芸科教育法通説、美術指導法、工芸指導法、工芸教材論 A・B）、二つを大島（美術教材論 A・B）が担当した。教材研究二つ中、図画工作教材研究 A を佐藤義太郎と渡辺正夫が、図画工作教材研究 B を大島と戸田が担当した。
- 37) 戸田忠吾に関しては、岡山大学二十年史編さん委員会、前掲書、245 頁、岡山大学 30 年史編纂委員会、前掲書、155 頁、『美育』記事、『奈良女子高等師範学校一覧 昭和十八年度』等を参照した。
- 38) 黒川建一に関しては、岡山大学 30 年史編纂委員会、前掲書、155 頁、黒川建一『保育としての造形指導』（日本文教出版、昭和 50 年）奥付頁にある略歴を参照した。
- 39) 岡山大学二十年史編さん委員会、前掲書、199 頁。
- 40) 宮脇理に関しては、岡山大学 30 年史編集委員会、前掲書、155 頁、佐賀大学教育学部美術・工芸科『美術・工芸教育学』第 2 号「宮脇理先生退官記念号」213 頁を参照した。
- 41) 熊本高工に関しては、岡山大学 30 年史編集委員会、前掲書、155 頁、岡山大学 40 年史編さん委員会、前掲書、169 頁、熊本高工『児童画の歴史』（日本文教出版、昭和 63 年）奥付にある略歴を参照した。
- 42) 吉田漱に関しては、岡山大学 30 年史編集委員会、前掲書、154 頁、岡山大学 40 年史編さん委員会、前掲書、169 頁、国際浮世絵学会会誌『浮世絵芸術』No. 142、平成 14 年、32-35 頁、山陽新聞掲載「岡大の顔」167 号を参照した。
- 43) 太田将勝に関しては、岡山大学 40 年史編さん委員会、前掲書、168 頁、岡山大学創立 50 年周年記念事業委員会、前掲書、227 頁、及び太田将勝ホームページ (<http://www.otamas.com/hihyou.html>) を参照した（平成 24 年 9 月 20 日確認）。
- 44) 赤木里香子に関しては、筑波大学芸術学系芸術教育学研究室『藝術教育学』第 4 号、平成 4 年、179 頁を参照した。
- 45) 『岡山大学概要』昭和 50-60 年度を参照した。なお、大学院非常勤講師の美学者の後藤狷士や山縣熙も「絵画」の所属とされ、この場合の「絵画」は研究対象を示すのであろう。ただ、吉田は東京美術学校油画科卒業で、当然ながら非常に絵が上手かったそうで、実技指導も十分に可能であったと思われる。
- 46) その後の岡山大学の展開を簡単に示しておく。さらに、平成 11 年度に学部改組により特設美術の学生が募集停止となる。教官定員と学生定員は、学校教育教員養成課程小学校教育専攻、学校教育教員養成課程中学校教育専攻、新たに開設したいわゆるゼロ免課程の総合教育課程生涯教育コースに分けられた。平成 16 年の国立大学法人化後の平成

18 年に総合教育課程は廃止となり、再び学校教育教員養成課程の小学校・中学校教育コースからなる教育体制に再編され、美術関係教員もここにまとめられた。平成 30 年 1 月現在も教科教育二人体制は維持されたまま続いている。

## 第九章 美術科教育教官の全体像

### 第一節 本章の構成

第一章で美術教育学の成立に関わる制度を見てきた。第二章から第八章にかけて、その制度が全国の教員養成大学・学部にとどのように波及し実現したのか、具体的な人員配置はどのようになされたのかを見てきた。それらの結果を踏まえて、本章では美術科教育教官の全体像を明らかにする。

第二節では、第二章から第七章の結果を踏まえて、全国の美術科教育教官の推移を概括的かつ数値的に捉える。方法としては、まず全国の教員養成大学・学部の美術科教育教官一覧表を作成し、それをもとに、美術科教育教官の人数、人的配置の形態、出身母胎について検討する。第三節では、上記の概括的かつ数値的なまとめではこぼれ落ちてしまう、個々の大学に勤務した個々の教官の具体的な種々相を捉える。第四節では、それらを端的に総括する。それぞれ本研究が採用した三時期区分にもとづいて検討する。

### 第二節 全国美術科教育教官一覧

#### 1 全国美術科教育教官一覧表

全国の教員養成大学・学部の美術科教育教官を抽出し、その勤務を網羅的に把握して表を作成した（表 61）。この表で美術教育学の人的制度成立過程を端的に可視化できた。

この表から、まず 1. 年を追うごとに徐々に美術科教育教官が配置され、その人数が増えていき、大学院が設置されていくという大きな動きが見て取れる。ただ、昭和 39 年学科目制度発足と同時に美術科教育教官が増えたわけではないことも見て取れる。学科目制度発足と同時に学科目「美術科教育」の配置がなされたのは制度上 21 大学で、その後徐々に増設され昭和 53 年に制度上設置完了となる。しかも制度上学科目「美術科教育」が配置されても、それへの人的配置がなされるのは暫くしてからの場合もあることに気づく。

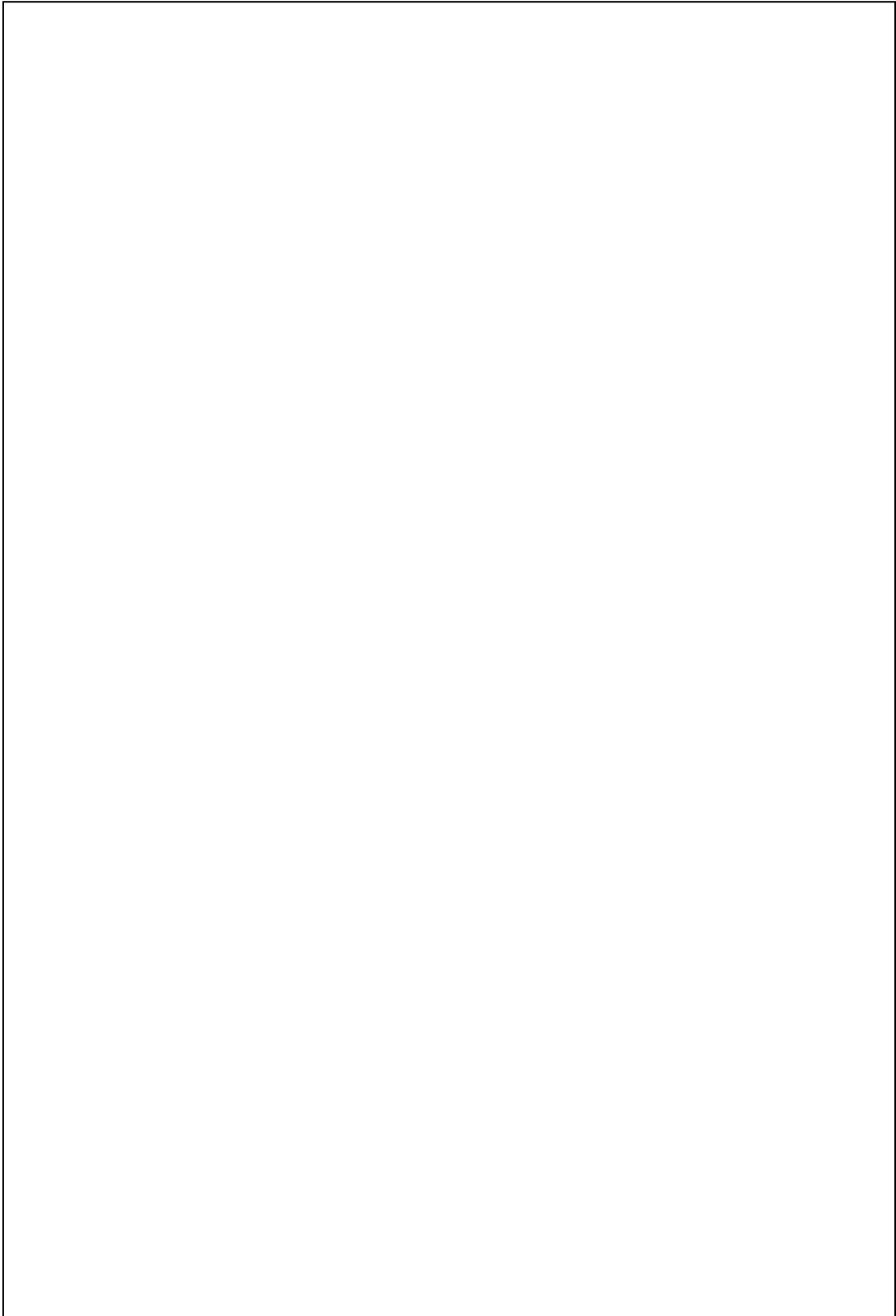
さらに 2. 学科目の設置の時点で、大学内で教官の所属移動が頻発していることにも気づく。それに加えて、大学院設置の時点では、一教官が複数の大学に短期間在職するという転出入を繰り返す事例がいくつかある。それは通常の異動とは異なる意味をもつと想像できる。

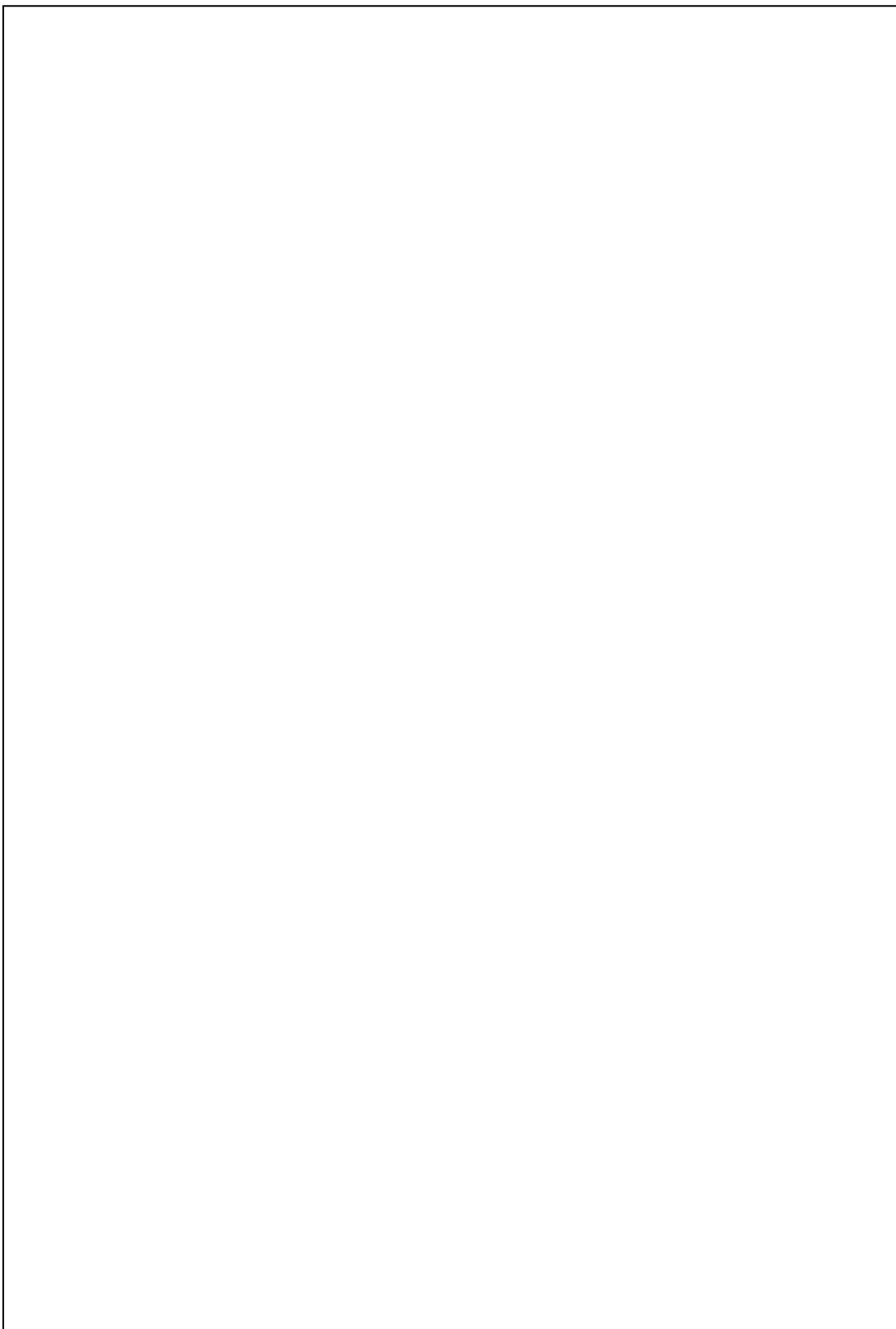
また 3. 教官の出身母胎として、何度も登場する修学校があり、それを類型化できそうである。

さらに 4. 出身校に勤務する教官、いわゆる自校出身者も徐々に増えているように見える。

以上を踏まえて、1. 人数、2. 学科目・大学院設置に伴う教官の所属決定の類型、3. 出身母胎、4. 自校出身者の観点で、次項以下で美術科教育教官の推移について検討する。

表 61 全国美術科教育教官一覽









## 2 美術科教育教官の人数

美術科教育教官総数は、同一人でも複数の大学に勤務した場合は重複して数えて、のべ人数としたもので、学科目人的配置後～大学院設置前は 174 人、大学院設置後は 171 人が確認された。転入を重複集計しない実人数は、学科目人的配置後～大学院設置前は 166 人、大学院設置後は 153 人であった。学科目が設置されてからの期間よりも大学院が設置されてからの期間の方が総じて短いにもかかわらず、ほぼ同数の美術科教官が在職した。その理由は、大学院美術教育専攻設置のために、分野「美術科教育」に講義及び学位論文の指導が担当できる「㊟教官」と、講義及び学位論文指導の補助が担当できる「合教官」が一名ずつ計二名必要であったためである。また、大学数に比べて大学院設置前に 174 人も多くの美術科教育教官が確認されたのは、短期間で学科目「美術科教育」所属教官が交代した大学があったからである。どのように人的配置がなされたのかは次項で検討する。なお、美術科教育学会の前身である大学美術教科教育研究会の第 1 回研究会（昭和 54 年 3 月）の参加者は 30 人のみであった<sup>1)</sup>。

そして、昭和 39 年以降、学科目「美術科教育」に人的配置がなされてから、平成 15 年度までに確認される美術科教育教官の実人数は 229 人であった。

## 3 学科目・大学院設置に伴う教官の所属決定の類型

学科目「美術科教育」と大学院の分野「美術科教育」への教官の所属決定のさまざまな形、すなわち所属決定の類型、そして、それぞれ最初の所属教官と後任教官との違いを検討する。本項では、1. 学科目設置時（学科目「美術科教育」初所属教官のみ抽出）、2. 学科目設置後（学科目設置がなされてから大学院設置がなされるまでの 1. を含まない学科目「美術科教育」所属教官、すなわち後任教官がいた場合それを抽出）、3. 大学院設置時（大学院設置時の分野「美術科教育」初教官のみ抽出）、4. 大学院設置後（3. を含まない分野「美術科教育」教官、すなわち後任教官がいた場合それを抽出）の「4 時期」を計測点として検討する。

各時期で、学科目設置前あるいは大学院設置前からの「継続」、在職教官の「所属移動」、「新規採用」、新規採用の中でも他大学からの「転入」、いずれによって美術科教育教官の人的配置はなされていったのか、表とグラフに示す（表 62、図 7-9）。

表 62 と図 7 は、同一人でも複数の大学に勤務した場合は重複して数えて、のべ人数として集計したものである。例えば、最初の勤務先で所属移動によって学科目「美術科教育」の最初の所属教官となった後に転出して、転出先で大学院の分野「美術科教育」の最初の教官として新規採用（転入）された場合は、学科目設置時の所属移動、大学院設置時の新規採用（転入）の両方に数えた。さらに図 7 を百分率で示したものが図 8 である。図 8 は各時期の所属決定件数の総数を分母として算出した。そして、図 9 は、表 62 の「学科目設置」と「大学院設置」での小計を所属決定件数の総計で割った百分率を並べたもので、大学院設置前後での所属決定の類型の変化を比較しやすくするために示す。

表 62 4 時期での美術科教育教官の継続・移動・新採（のべ人数）

	学科目設置			大学院設置		
	1.学科目設置時 （初教官）	2.学科目設置後 （後任教官）	小計	3.大学院設置時 （初教官）	4.大学院設置後 （後任教官）	小計
継続	5	0	5	78	0	78
所属移動	39	20	59	8	1	9
新規採用	15	95	110	16	68	84
（新規採用中の転入）	(1)	(10)	(11)	(10)	(17)	(27)
各時期の所属決定件数の総数	59	115	174	102	69	171

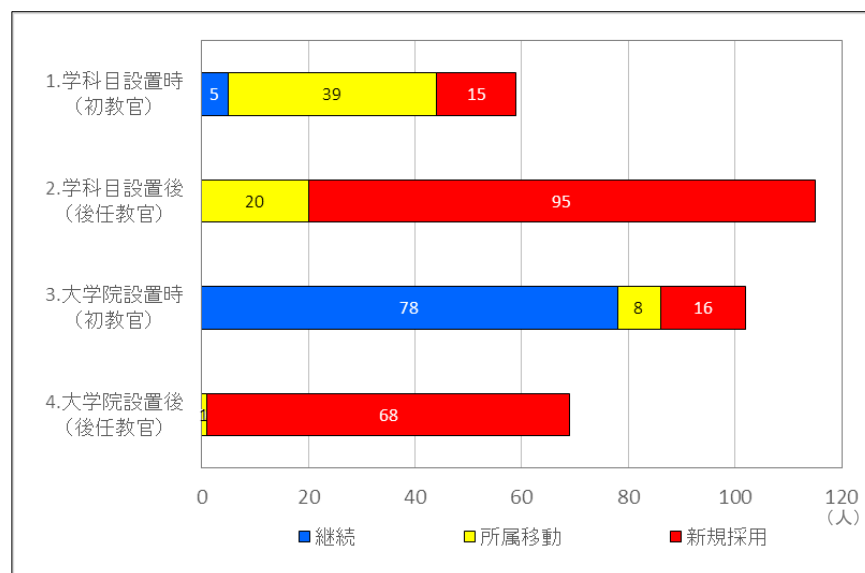


図 7 4 時期での美術科教育教官の継続・移動・新採（のべ人数）

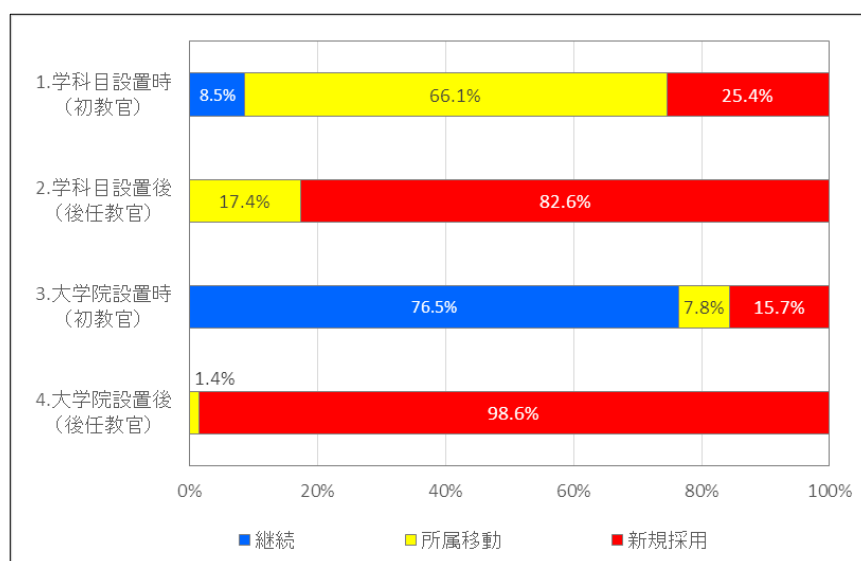


図 8 4 時期での美術科教育教官の継続・移動・新採（百分率）

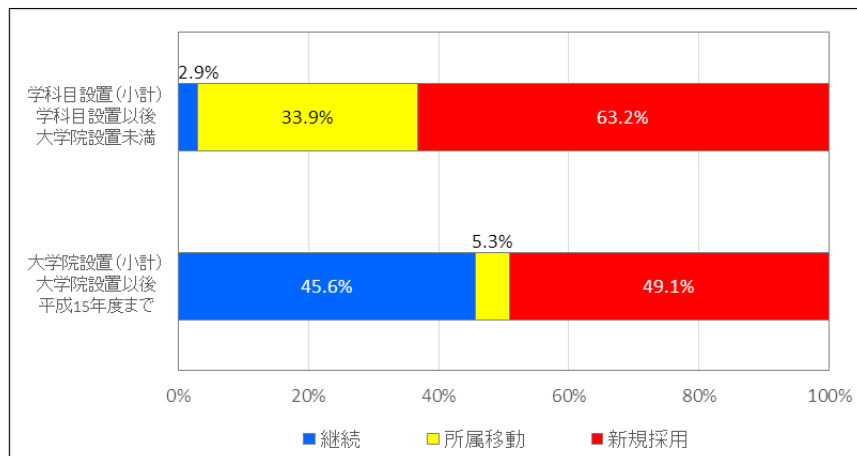


図9 学科目設置以後（大学院設置未満）と大学院設置以後の所属決定類型比較図（百分率）

学科目設置時は、学科目「美術科教育」は在職教官の所属移動で満された場合が最多で、66.1%（所属移動の件数を所属決定件数の総数で割った。2 大学以上に勤務の場合は重複集計。以下同様）であった。実技や美術理論等を専門としていた教官が所属移動して学科目「美術科教育」を担った。次節で検討するが、美術科教育の担い手には、年長者、教職経験者、等になった。そして、この時期はまだ形式だけの移動でも済んだし、図画工作に関して何でもできた東京美術学校図画師範科や東京高等師範学校図画手工専修科・芸能科出身者がまだ多数在職していたので、形式的所属でも美術講座が不安定になることはなかった。なお、学科目設置時の「継続」の内訳は、東京学芸大学と愛知教育大学といった学科目制度前から美術科教育が美術専門と分化していた場合である。

学科目設置後も所属移動は 17.4%あったものの、この時期は新規採用で満たす場合が大幅に増えた。ただ学科目「美術科教育」設置先発校では採用時に美術教育学の専門性が意識されていなかった場合が多い。次第に、養成機関で養成された専門家も登場し、さらに大学院設置が目前となって専門性を意識せざるを得ない大学も多くなってくる。

また、いったんは学科目「美術科教育」に所属していたのに、大学院設置前に本来の専門であろう学科目に移動する場合があった。一人の教官が複数回の所属移動をした事例もあった。

大学院設置時は、分野「美術科教育」への所属移動は 7.8%と僅かになる。その内訳は大学院設置の時点のみ助力する形で所属移動した場合と、当人の専門実質に応じた場合とがある。

大学院設置後は、分野「美術科教育」への所属移動は 1.4%と極僅かとなり、ほとんどすべてが新規採用となる。新規採用の内訳は養成機関で養成された専門家の採用と他大学からの転入に大別される。

#### 4 美術科教育教官の出身母胎の推移

師範学校在職の美術関係教官の主たる出身母胎は、東京美術学校（最多は図画師範科）、東京高等師範学校図画手工専修科・芸能科、文部省検定試験である。その他に広島高等師範学校第二臨時教員養成所図画専修科があるが、昭和8年3月卒業の23人一回限りであり、師範学校に勤務したのも数人であった。戦後、師範学校が新制国立大学になっても美術関係教官の多くが師範学校から移行したので、主たる出身母胎は似たようなものであった。

その後、学科目「美術科教育」人的配置開始から大学院美術教育専攻設置にかけて在職した美術科教育教官の出身母胎はどのように変化したのか検討する。前項と同じく「4 時期」を計測点とする。1. 東京美術学校・東京芸術大学系（以下、東京芸大系）、2. 東京高等師範学校・東京教育大学・東京文理科大学・筑波大学系（以下、筑波大系）、3. 他の大学院美術教育専攻、4. それら以外をその他に分けて集計して表とグラフにまとめて検討する（表 63、図 10-12）。なお 3. に関して、他の教員養成大学・学部としなかったのは、1. 2. は専門家養成を念頭にいた学校であり、それらと揃えるためである。また退学者や研究生に関しても当該学校で学んだことには変わらないので集計した。

表 63 と図 10 は、各出身母胎の占有率を見るため、一教官に二つ以上の修学校がある場合は重複して数えて、のべ人数として集計したものである。例えば、東京芸術大学卒業で筑波大学大学院修了の場合は、東京芸大系と筑波大系の両方に数えた。さらに図 10 を百分率で示したものが図 11 である。図 11 は各時期の出身母胎件数の総数を分母として算出した。図 12 は表 63 の「学科目設置」と「大学院設置」での小計を出身母胎件数の総計で割った百分率を並べたもので、大学院設置前後での出身母胎の変化を比較しやすくするために示す。

表 63 4 時期での美術科教育教官の出身母胎（すべてのべ人数）

	学科目設置			大学院設置		
	1. 学科目設置時 (初教官)	2. 学科目設置後 (後任教官)	小 計	3. 大学院設置時 (初教官)	4. 大学院設置後 (後任教官)	小 計
東美校・東芸大/院	24	43	67	28	10	38
東高師・東文理大・東教大/院・筑大/院	23	28	51	28	16	44
東京学芸大学大学院	1	5	6	4	11	15
大阪教育大学大学院	2	5	7	8	7	15
横浜国立大学大学院	0	2	2	5	3	8
広島大学大学院	0	2	2	1	6	7
その他	10	32	42	32	17	49
各時期の出身母胎件数の総数	60	117	177	106	70	176

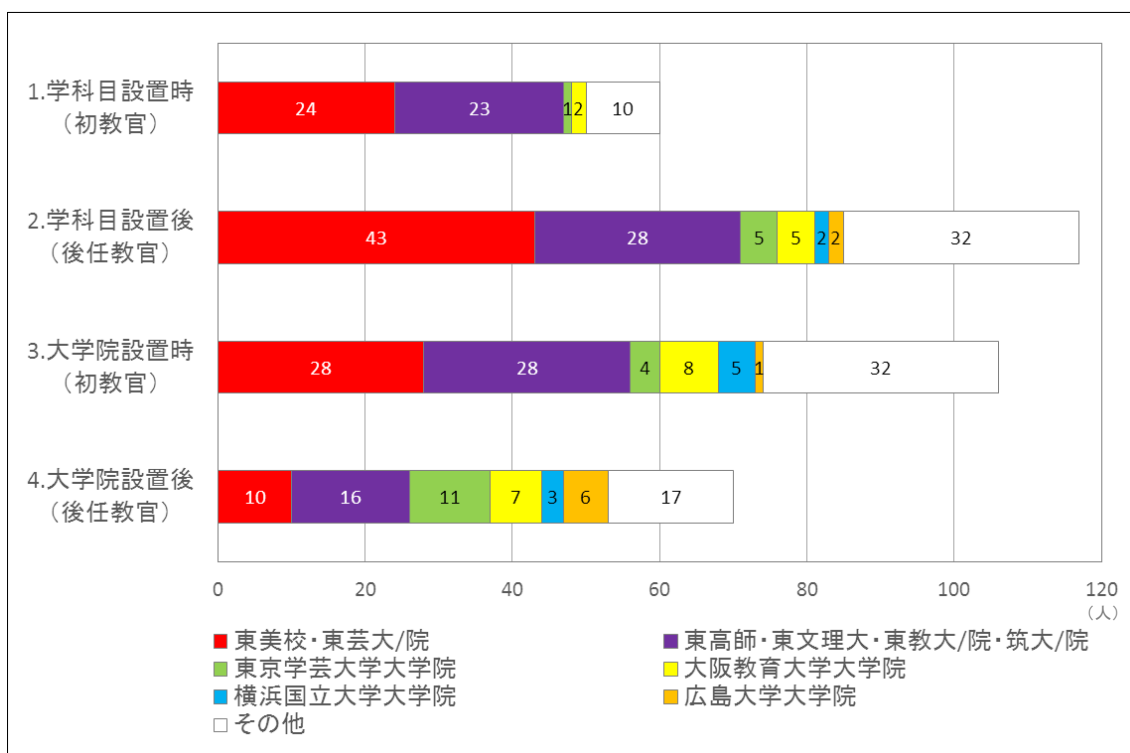


図 10 4 時期での出身母胎人数比較図 (のべ人数)

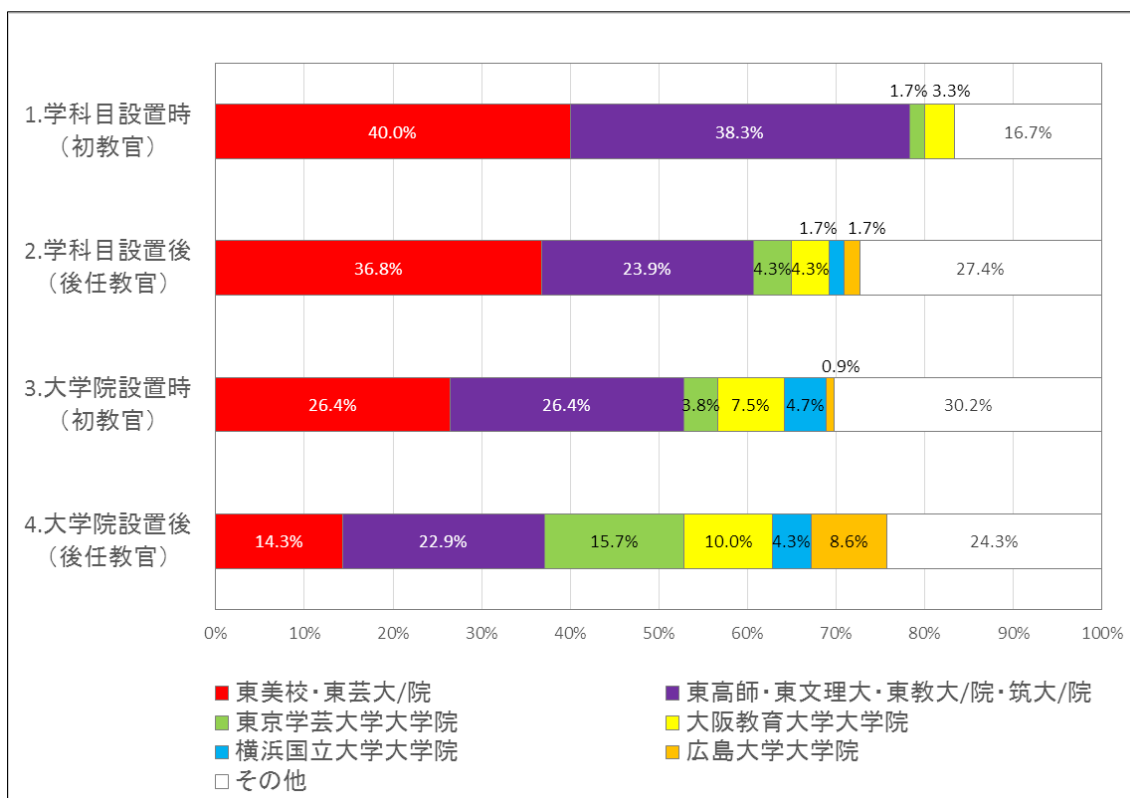


図 11 4 時期での出身母胎人数比較図 (百分率)

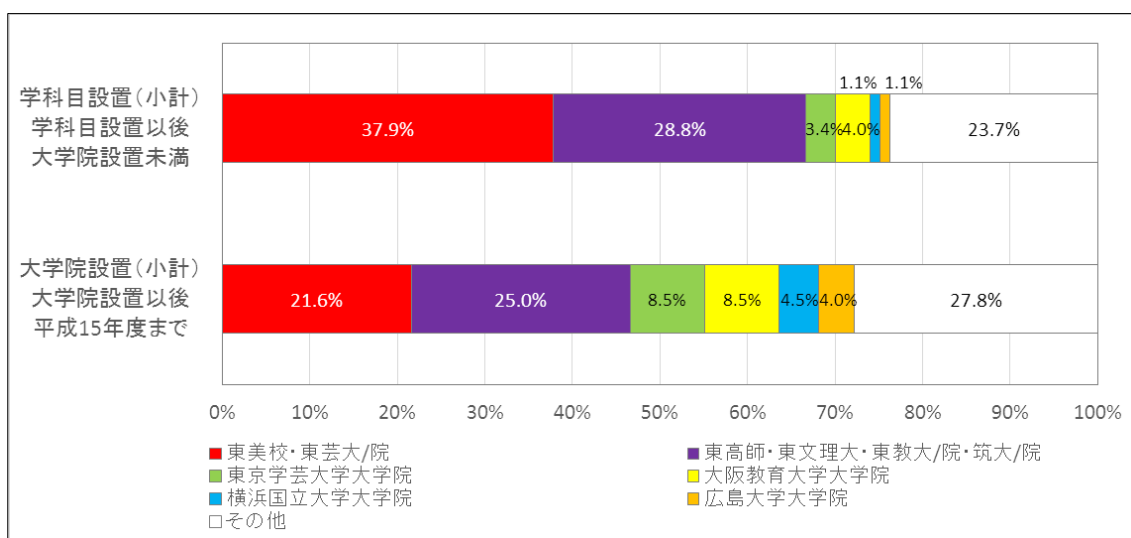


図 12 学科目設置以後（大学院設置未満）と大学院設置以後の出身母胎比較図（百分率）

図 10-12 から美術科教育教官の出身母胎に関して、次のような傾向が見て取れる。

1. 東京芸大系と筑波大系が二大出身母胎であった。

2. ただ、東京芸大系と筑波大系の占有率は徐々に低くなっていく。学科目設置時は、東京芸大系が 40.0%、筑波大系が 38.3%と多くを占めた（各出身母胎数を出身母胎件数の総数で割った。2 校以上出身校者は重複集計。以下同様）。その後、学科目設置後は、東京芸大系 36.8%、筑波大系 23.9%、大学院設置時は、東京芸大系 26.4%、筑波大系 26.4%、大学院設置後は、東京芸大系 14.3%、筑波大系 22.9%となる。

3. 特に、東京芸大系は学科目設置時と大学院設置後を比べると 40.0%から 14.3%へと大幅に減っている。東京芸大系が減ったのは、近接領域専門家の便宜的な採用では大学院が設置できなくなったためであろう。それでも一定数が存続したのは、初期の同大学院美術教育学専攻で養成された教官が既に全国の大学に勤務していたためである。そして人数が増えなかったのは、同大学院美術教育学専攻が学校教育の美術教育学研究者養成から社会教育専門家養成へと方針転換し、学校教育の美術教育学研究者の養成を目指さなくなったことが大きな要因と思われる<sup>2)</sup>。

4. 先の二大出身母胎が減っていく分、大学院設置先発校（東京学芸大学・大阪教育大学・横浜国立大学・広島大学）が増えていく。それら大学院設置先発校の占有率を合計すると、学科目設置時 5.0%、学科目設置後 12.0%、大学院設置時 17.0%、大学院設置後 38.6%と順調に増加している（それぞれ時期ごとに、表 63 の東京学芸大学大学院・大阪教育大学大学院・横浜国立大学大学院・広島大学大学院の合計を出身母胎件数の総数で割った）。特に東京学芸大学と大阪教育大学の大学院美術教育専攻の躍進が見て取れた。

5. 大学院設置先発校の中では東京学芸大学と大阪教育大学が二大母胎であった。前者出身の美術科教育教官は、初期は多く自校に赴任し、後に全国各地の大学に赴任していった。後者出身のそれは初期から全国各地の大学に赴任した。

## 5 自校出身者

図 10-12 の「その他」の内訳を見ると、自校出身者が多かった。そこで、純粋に自校出身者を抽出してみると、その実人数は 52 人が、昭和 39 年から平成 15 年度までに確認された。同期間の美術科教育教官の実人数は 229 人であったので、やはり自校出身者は多い。次に、これまで同様「4 時期」を計測点として、各時期における自校出身者を集計して表とグラフにまとめて検討する（表 64、図 13・14）。

表 64 と図 13 は、同一人でも複数の時期にまたがって勤務した場合は重複して数えて、のべ人数として集計した。例えば、学科目「美術科教育」初所属教官となった後、そのまま大学院設置後も分野「美術科教育」初教官となった場合は、学科目設置時と大学院設置時で集計した。図 13 を百分率で示したものが図 14 である。各時期の自校出身者のべ人数を各時期の美術科教育教官のべ人数で割った。

表 64 自校出身者

	学科目設置			大学院設置		
	1. 学科目設置時 (初教官)	2. 学科目設置後 (後任教官)	小 計	3. 大学院設置時 (初教官)	4. 大学院設置後 (後任教官)	小 計
自校出身者のべ人数	12	16	28	22	20	42
各時期の美術科教官のべ人数	59	115	174	102	69	171

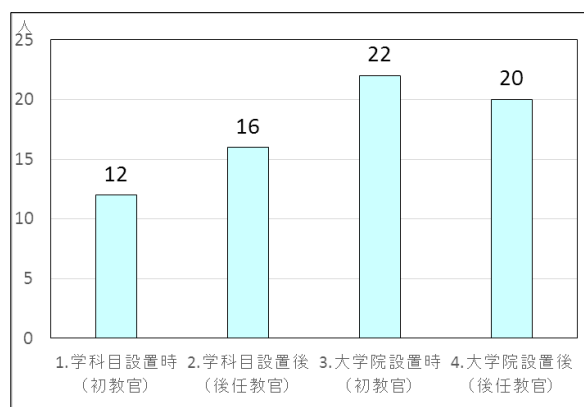


図 13 自校出身者のべ人数の変化

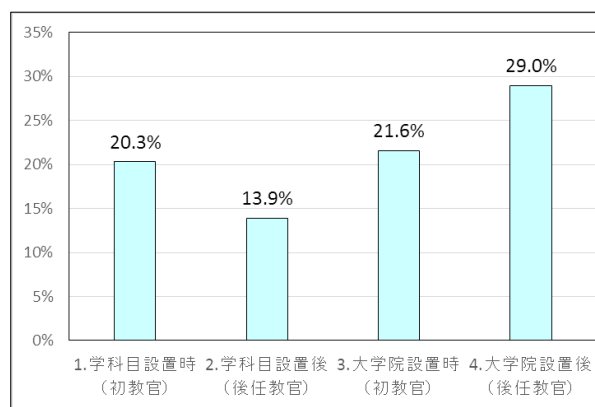


図 14 自校出身者の百分率の変化

自校出身者は、のべ人数で学科目設置時 12 人(20.3%)、学科目設置後 16 人(13.9%)、大学院設置時 22 人(21.6%)、大学院設置後 20 人(29.0%)と、一時的な減はあれ全体としては増えていった。その要因には、その自校出身者に採用に足る研究業績があったという前提で、人物についても確証があること、長期間の定着が期待できること等が挙げられよう。また、当該校の教育成果を示す材料にもなるという要因もあったであろう。



### 第三節 美術教育学の人的制度基盤の成立過程における人的種々相

#### 1 はじめに

本節では、第二節で行った概括的で数値的なまとめではこぼれ落ちてしまう、個々の大学に勤務した個々の教官の具体的な種々相を検討する。本研究が採用してきた三時期区分にもとづいて検討する。

#### 2 師範学校から大学移行期—「美術教育学」人的制度未成立期

##### (1) 本項の概要

この時期の次に述べるような一般的状況の中で、美術教育学に対する大学による様々な対応について検討する。一般的状況とは、師範学校から教員養成大学・学部に移行して間もない頃は美術教育学というものは認識されていなかった。制度的に教官の専門は図画か工作かであり教科教育等の細分化はされてなく、授業科目としてのみ教科教育法があった。その背景の一つに、戦後の教員養成は師範教育の反省すなわち固くて狭い視野の克服のため、教科教育の専門性よりも教養教育が重視されていたことが挙げられる。つまり教科専門に重きが置かれ、美術講座は全国的に実技が中心に据えられていた。もう一つには、図画・工作に関することなら何でもできた東京美術学校図画師範科や東京高等師範学校図画手工専修科・芸能科の卒業生が教官として師範学校から大学に多数移行し、実技でも授業法でも担当できたことがある。そのような中で各大学の美術科教育関係授業の担当体制はどのようなであったかを見る。

##### (2) 担当体制の4類型

学科目「美術科教育」が未だ導入されていない段階での美術科教育関係授業担当体制は以下のような4類型に分けることができる。これ見ると分担が多く、そして主たる担当者がいた場合は、東京美術学校図画師範科と東京高等師範学校の出身者が担っていたことがわかる。教官名の後の（ ）内には修学校を記す。以下同様とする。

1. 複数分担体制：最も多いのは、複数教官で分担している大学であった。

2. 専門であるからという理由ではなく、年長者・講座主任・旧帝国大学卒業者等の実力者が担当する大学がいくつかあった。例えば、茨城大学の稲村退三（東京府青山師範学校・東京美術学校図画師範科）、静岡大学の松岡圭三郎（静岡県師範学校・東京美術学校図画師範科）、大阪学芸大学の高妻巳子雄（大阪府天王寺師範学校・東京美術学校図画師範科）、富山大学の玉生正信（京都大学）である。それらの大学では美術科教育はそれなりの重要性が認識されていたと言える。また、これらの教官の多くは、その地方の美術教育の振興にも寄与した。

3. 明確にはないが、緩やかに主たる担当者が決まっている大学もあった。まず、組織上、美術科教育が分化していた場合がある。愛知学芸大学がそうである。愛知学芸大学には開学時より多種の教科教育が集められた「教科教育教室」という組織があった。そこに川口四郎（東京高等師範学校）が所属していた。ただ、実質、川口は美術科教育関係授業を専ら担当していたわけではなく、絵画も受け持ち、教科教育教室に所属していない教官も美術科教育関係授業を担当していた。また、組織上分けられていたわけでないが、美術科教育関係授業の主担当者が緩やかに決まっていた場合がある。例えば、新潟大学の諸橋政範（東京美術学校図画師範科）、横浜国立大学の三浦寛三（東京高等師範学校図画手工専修科）、神戸大学の上野省策（東京美術学校図画師範科）、岡山大学の戸田忠吾（東京高等師範学校図画手工専修科）、鳥取大学の船井美周（東京美術学校図画師範科）、琉球大学の宮城健盛（東京美術学校図画師範科）である。絵画等、自身の専門と合致する授業と兼担する形で美術科教育関係授業を受け持っていた。

4. 教官の専門が明確に分化していて、美術科教育関係授業の担当者が組織上も実質も明確化していた大学が僅かにあった。東京学芸大学がそうである。東京学芸大学は開学の頃から「美術」と「芸術学」と「美術科教育」に教官の所属は分けられ、組織上も実質の授業担当も美術科教育教官と美術専門教官とで分化していた。東京学芸大学の美術科教育教官は、糟谷実（長崎県師範学校・東京美術学校図画師範科）、山田武（東京美術学校図画師範科）、林部伝七（文検西用・東京高等師範学校）、吉田義英（東京高等師範学校芸能科）であった。

### **(3) 特異な事例**

師範学校から新制中学校・高等学校教員となり、後に大学に戻ってくる教官の事例があった。例えば、信州大学の宮坂彦一（東京高等師範学校図画手工専修科）、田原幸三（長野県師範学校・文検図画・手工・東京高等師範学校）、金沢大学の北浜淳（石川県師範学校）、大阪教育大学の木村茂（天王寺師範学校・東京体育専門学校）が挙げられる。信州大学の宮坂彦一と、金沢大学の北浜淳は、後に学科目「美術科教育」所属となる。

## **3 学科目「美術科教育」設置期**

### **(1) 本項の概要**

昭和 39 年の学科目制度を受けて学科目「美術科教育」が設置され始めた頃は、美術科教育の専門的な研究者と言える人は未だ僅かしか存在しなかった。それゆえ美術科教育ではない教科専門の教官、特に実技教官が学科目「美術科教育」に所属することが多かった。また、美術科教育は実技ではなく理論であるということから、美学や美術史の専門家が所属する場合もあった。前時期のように、美術の専門家であれば美術科教育の研究もできるはずとされていたことがうかがえる。美術の専門的熟達者こそ美術科教育の担当に相応しいとして引き受けた場合と、それとは反対にやむなく請け負った場合があった。その他に、美術教育実践経験者こそ美術科教育の担当に適しているとして小中高等学校教員経験のある教

官が担う場合もあった。学科目「美術科教育」担当者への対応は大学により様々であった。制度上「美術科教育」は発足したが、美術教育学の独自性・専門性はまだ完全には認識されていなかった。そのため、学科目「美術科教育」所属教官とその専門が一致しない印象は少なからずあった。

そのうち、美術教育学研究者養成機関で養成された専門家が世に出てくる。その美術教育学専門の人材が徐々に各教員養成大学・学部採用され始める。しかし、大学によって美術教育学の専門性に対する認識が無い、あるいは大学に専門性の認識があっても需要に人材養成が追いつかないので、美術専門の教官を採用せざるを得なかったことが最初のうちにはあった。そのような状況であったので、必然的に学科目「美術科教育」設置先発大学と設置後発大学では対応が違っていた。

## (2) 様々な時期的不整合

学科目は制度的配置と同時に人的配置がなされたとは限らなかった。人的配置が遅れた場合も少なくない（表 65 参照）。例えば、愛媛大学には昭和 39 年 2 月学科目制度発足と同時に学科目「美術科教育」が示されたが、それに人的配置がなされるのは 9 年後の昭和 48 年 2 月であった。榎原弘二郎（東京教育大学・同院）が新規採用された。山梨大学には昭和 53 年 4 月に全国で最後に学科目「美術科教育」が示されたが、それに人的配置がなされるは昭和 58 年 4 月であった。画家の寺坂公雄（愛媛大学）が新規採用された。学科目設置から人的配置の確定までに時間が最も長くかかったのは佐賀大学であった。佐賀大学には昭和 39 年 2 月学科目制度発足と同時に学科目「美術・工芸科教育」が示され、それに教官が一時期に配置された可能性もあるが、確実に人的配置がなされたのは平成 2 年である<sup>3)</sup>。前村晃（佐賀大学・東京学芸大学大学院・早稲田大学大学院第一文学部哲学科）が新規採用された。なお、それ以前の昭和 57 年から、後に和歌山大学の学科目「美術科教育」所属教官として転出する永守基樹（大阪教育大学・同院）が在職していたが、ポストは構成で、構成と美術科教育を兼担していた<sup>4)</sup>。

そして、必ずしも大学院設置の早かった大学が、学科目設置も早かったわけではない。例えば、広島大学は、学科目設置が昭和 51 年 5 月で全国的にも遅かったのに、その 5 年後の昭和 56 年に短期間で大学院美術教育専攻設置を実現し全国的にも早い設置となった。具体的には、大学院設置のため昭和 53 年に石原英雄（東京高等師範学校）、昭和 56 年に橋本泰幸（東京学芸大学・同院）を採用した。昭和 51 年の学科目設置から、昭和 53 年と昭和 56 年に美術科教育教官二人の着任を経て、昭和 56 年の大学院美術教育専攻設置まで 5 年間という急速な整備であった。

表 65 学科目の制度的配置と人的配置の時期及び大学院教育学研究科と同美術教育専攻設置の時期

大学名	学科目の配置		大学院	
	制度	人員	教育学研究科	美術教育専攻
北海道教育大学 札幌	昭和39年2月	昭和58年頃	平成4年	平成4年
北海道教育大学 岩見沢		昭和56年	平成4年	平成4年
北海道教育大学 函館		昭和50年頃	平成5年	平成10年
北海道教育大学 旭川		昭和56年頃	平成5年	平成8年
北海道教育大学 釧路		昭和47年頃	平成7年	平成10年
弘前大学	昭和44年5月	昭和44年頃	平成6年	平成11年
岩手大学	昭和39年2月	昭和39年	平成7年	平成7年
宮城教育大学	昭和42年4月	昭和48年11月	昭和63年	平成2年
秋田大学	昭和51年5月	昭和51年5月	平成元年	平成3年
山形大学	昭和39年2月	昭和40年代	平成5年	平成7年
福島大学	昭和39年2月	昭和39-43年	昭和60年	平成3年
茨城大学	昭和39年2月	昭和42年	昭和63年	昭和63年
宇都宮大学	昭和42年5月	昭和42年12月	昭和59年	昭和63年
群馬大学	昭和48年4月	昭和50年代	平成2年	平成2年
埼玉大学	昭和39年2月	昭和50年4月	平成2年	平成2年
千葉大学	昭和39年2月	昭和39年	昭和57年	昭和57年
東京学芸大学	昭和39年2月	昭和39年	昭和41年	昭和43年
横浜国立大学	昭和39年2月	昭和39年	昭和54年	昭和54年
新潟大学	昭和49年6月	昭和49年	昭和59年	昭和59年
富山大学	昭和50年4月	昭和52年頃	平成6年	平成8年
金沢大学	昭和53年4月	昭和55年	昭和57年	平成2年
福井大学	昭和47年5月	昭和49年	平成4年	平成7年
山梨大学	昭和53年4月	昭和58年4月	平成7年	平成9年
信州大学	昭和39年2月	昭和39年	平成3年	平成4年
岐阜大学	昭和40年3月	昭和45年頃	平成7年	平成8年
静岡大学	昭和45年4月	昭和40か41年	昭和56年	昭和56年
愛知教育大学	昭和39年2月	昭和39年	昭和53年	昭和53年
三重大学	昭和39年4月	昭和42年頃	平成元年	平成元年
滋賀大学	昭和42年5月	昭和40年代後半	平成3年	平成3年
京都教育大学	昭和44年5月	昭和49年頃	平成2年	平成2年
大阪教育大学	昭和39年2月	昭和39年頃	昭和43年	昭和50年
神戸大学	昭和39年2月	昭和39年	昭和56年	昭和56年
奈良教育大学	昭和44年5月	昭和45年9月	昭和58年	昭和58年
和歌山大学	昭和47年5月	昭和47年12月	平成5年	平成5年
鳥取大学	昭和48年4月	昭和48年4月	平成6年	平成8年
島根大学	昭和45年4月	昭和45年4月	平成3年	平成7年
岡山大学	昭和39年2月	昭和39年	昭和55年	昭和55年
広島大学	昭和51年5月	昭和53年6月	昭和55年	昭和56年
山口大学	昭和39年2月	昭和45年	平成3年	平成3年
徳島大学	昭和39年2月	昭和40年頃	-	-
香川大学	昭和44年5月	昭和44年頃	平成4年	平成4年
愛媛大学	昭和39年2月	昭和48年2月	平成5年	平成5年
高知大学	昭和39年2月	昭和42年頃	平成8年	平成8年
福岡教育大学	昭和39年2月	昭和50年頃	昭和58年	昭和61年
佐賀大学	昭和39年2月	平成2年	平成5年	平成5年
長崎大学	昭和44年5月	昭和44年	平成6年	平成6年
熊本大学	昭和47年5月	昭和46年	昭和61年	平成4年
大分大学	昭和42年5月	昭和42年	平成4年	平成6年
宮崎大学	昭和42年5月	昭和42年	平成6年	平成6年
鹿児島大学	昭和39年2月	昭和42年頃	平成6年	平成10年
琉球大学	昭和48年4月	昭和47年	平成2年	平成2年

本表は、第一章の表4・9、第二章から第七章における調査結果をもとに作成した。

### (3) 所属決定類型の実際

#### ①在職教官の所属の移動

学科目「美術科教育」は所属移動によって人的配置がなされた場合が多かった。最初の学科目「美術科教育」所属教官におけるその割合は特に高く 66.1%に上ったことは既に示した(図8)。以下に具体例を挙げる。教官名の後の( )内は修学校と旧担当を示す。

##### 1. 師範学校から長年勤務していた教官が学科目「美術科教育」に所属移動になった場合

北海道教育大学函館分校の宮林繁雄(東京美術学校図画師範科: 絵画)、岩手大学の藤原徳太郎(札幌師範学校・東京美術学校図画師範科: 絵画)、茨城大学の宮澤治正(東京美術学校図画師範科: 絵画)、宇都宮大学の渡辺安友(川端画学校・東京美術学校図画師範科: 絵画)、千葉大学の森桂一(東京美術学校図画師範科: 絵画)、岐阜大学の田代栄喜(岐阜県師範学校・文検手工: 彫塑)、三重大大学の園田正治(東京高等師範学校: 構成)、滋賀大学の北川威夫(滋賀県師範学校・文検西用: 絵画)、京都教育大学の松井清人(山口師範学校・東京高等師範学校: 絵画)、鳥取大学の船井美周(東京美術学校図画師範科: 絵画)、徳島大学の河野太郎(東京美術学校図画師範科: 絵画)、福岡教育大学の野中義明(東京高等師範学校: 絵画)、長崎大学の中島三雄(群馬県師範学校・東京高等師範学校: 絵画)、熊本大学の岡周末(東京美術学校西洋画科: 絵画)、宮崎大学の出水勝利(東京美術学校図画師範科: 絵画)、鹿児島大学の小池鉄太郎(香川県立工芸学校・東京美術学校日本画科: 絵画)等である。なかでも山口大学の森本宏は専門・所属移動を多数行った(東京美術学校図画師範科: 工作・工芸・書道から絵画へ、さらに美術理論・美術史へ、そして美術科教育へ)。彼らは年齢的に定年前の数年間の所属であった場合が多い。

##### 2. 新制国立大学赴任後、所属あるいは専門を移動した場合

北海道教育大学釧路分校の福井凱将(北海道学芸大学釧路分校: 絵画から美術科教育へ)、弘前大学の石原英雄(東京高等師範学校: 彫塑から美術科教育へ)、信州大学の横田通(信州大学・東京芸術大学大学院・同専攻科: 美術理論・美術史から美術科教育、さらに彫塑へ)、島根大学の石野眞(島根大学: 彫塑から美術科教育、さらに構成へ)、茨城大学の山崎猛(茨城大学: 構成から美術科教育へ)等がいる。さらに複雑多岐な専門・所属移動をした、信州大学の関谷俊行(信州大学長野師範学校・信州大学: 工芸から技術講座の木材加工へ、さらに絵画、さらに美術理論・美術史、そして美術科教育へ)がいる。大学院設置前に本来の専門に所属を移動する場合と、大学院設置の後も継続して美術科教育を担当した場合とに分けられる。そして自校出身者が多い。

#### ②新規採用の場合

新規採用によって学科目「美術科教育」所属教官となった場合は初期には少ないが、徐々に増えていく。新規採用された教官が、自分は美術科教育専門であると自己規定していれば理想的である。初期で言えば、東京学芸大学の村内哲二(東京高等師範学校・東京文理科大学教育学)、埼玉大学の都築邦春(愛知教育大学・東京教育大学大学院)、三重大大学の

藤江充（愛知教育大学・東京芸術大学大学院美学）、神戸大学の東山明（神戸大学）、和歌山大学の長谷川哲哉（愛知教育大学・東京芸術大学大学院美術教育学専攻）、愛媛大学の榎原弘二郎（東京教育大学・同院）、高知大学の立原慶一（茨城大学・東京芸術大学大学院美術教育学専攻）、宮崎大学の柴田和豊（大阪教育大学・東京芸術大学大学院美術教育学専攻）、鹿児島大学の橋本泰幸（東京学芸大学・同院）等がそれに当たるであろう。

新採教官が近接領域の専門であると自己規定している場合は、数年間美術科教育に所属した後、自己規定している専門の学科目に移動することが多い。他大学に転出して本来の専門学科目に所属する場合もある。例えば、大分大学の露木恵子（東京芸術大学・同院）は美術科教育で採用され、後に宇都宮大学の美術理論・美術史（造形芸術学）と絵画で転出した。長崎大学の井川惺亮（東京芸術大学・同院）は美術科教育で採用され、後に絵画へ移動した。

この背景には美術科教育教官の需要に供給が追いつかなかった事情がある。教官採用は延期することは難しい。そして、美術科教育の専門性は未だ確立していない。そのような状況で、教官公募に応じて授業も担当したことに採用側は感謝していたと思われる。

### ③継続の場合

学科目制度発足前から既に美術科教育を組織上専門に担当して、学科目「美術科教育」にも継続して所属したのは、前述したように東京学芸大学と愛知教育大学の事例に限られた。

## (4) 専門性認識前の過渡的事例

美術教育学の専門性が一般的認識になる前の過渡的で興味深い事例は、長谷川哲哉の和歌山大学（学科目「美術科教育」）赴任の際のエピソードである<sup>5)</sup>。

和歌山大学に助手として赴任したのは昭和四七（一九七二）年一二月一日であったが、その時点では弱冠二五才であった。同年の三月に東京芸術大学大学院の美術教育専攻を修了して間もない時で、同年にできた研究生制度によって講座に残っていた。当時も就職はそんなに容易でなく将来に不安をおぼえていたが、八月に指導教官の桑原実先生より、「君は和歌山へ行く気はないか」と聞かれてから不安も解消していった。その八月は、二科会に出品手続きをとるために在京していたのだが、その節に桑原先生より話があったわけである。先生は当時の美術教育の権威であると同時に、二科会会員の油絵作家でもあったので、私に以前より出品を勧めていたのだが、しかし私は団体展の問題を知っていたし、また修士論文「ハーバード・リードの芸術教育論」を書いた後でもあるので、その気になっていなかった。けれども再三の勧めにより、短期間に描いて出品することにした。和歌山大学に赴任した後から聞くと、私の採用にあたっての業績評価の対象は二科展入選作であり、修士論文は殆ど問題にされなかった、とのことであった。修士論文を書くために相当の努力をしてきていたので、これは最初の衝撃であった。美術教育の論文がまだ地方大学では無視に近い地位に置かれていたわけである。しかし私の所属学科目は美術教育であり、これの設置がその年度に文部省より認可されて、公募をしていたのである。しかし、和歌山大学に限ったことではなかったで

あろうが、教科教育への理解はまだ全く不十分で、例えば理科教育の学科目が認可されても物理学や化学の出身者を採用していた。そうした情勢下にあつては、私の業績評価も上記のような具合におこなわれたのは当然でもあった。

長谷川は、東京芸術大学大学院の美術教育学専攻修了者第一号であつた。専門家養成機関で養成された専門家と言え、そして本人もその研究者として身を立てる意欲に満ちていた。それにもかかわらず、採用する側の大学では、まだ美術教育学の専門性は認識していなかった実例と言えよう。長谷川が和歌山大学に着任する、すなわち昭和47年の頃の話である。そして、長谷川は教科教育への無理解は他教科でも同じであつたとしている。

学科目「美術科教育」は設置され人的配置もなされても、その専門性が未だ十分に理解されていない場合も多かった。全国的に教官の専門との整合性が明確に図られたのは、次の大学院設置時期からである。

#### **4 大学院美術教育専攻の設置と「美術科教育」専門家の登場**

##### **(1) 本項の概要**

大学院美術教育専攻設置は、美術教育学の専門性を大学教官に認識させる決定的な契機となった。大学院美術教育専攻設置認可には、文部省の設置審査委員会から必置分野「美術科教育」の講義及び学位(修士)論文指導担当可と認められた「㊦教官」と、講義及び学位論文指導補助担当可と認められた「合教官」が一名ずつ必要であつた。そこでの審査対象は美術教育学に関する研究論文業績であつた。それゆえ便宜的な所属では済まなくなった。大学院設置初期は、美術教育学専門家は未だ少なかったため、一人の教官が大学院の美術科教育教官として複数の大学間を異動する事例もあつた。その後、徐々に美術教育学専門家養成と大学院美術教育専攻設置との需給バランスがとれるようになった。

大学院美術教育専攻の分野「美術科教育」教官の大部分は、大学院美術教育専攻を修了した人材となっていく。彼等は美術教育学専門家であることを出身大学院が保証した人材であつた。さらに設置審査委員会の審査を通過したことで政府が公的にその専門性を保証した。ただ、徐々に教科調査官や学習指導要領作成協力者といった文部省関係者も、研究論文業績というより教育行政実績を評価されて、美術科教育教官になる場合もあつたように見えるとはいえ、大学院美術教育専攻の設置によって美術教育学の人的制度と人的配置が成立したと言える。

##### **(2) 大学院美術教育専攻の設置への温度差**

以下のことは第一章で指摘した。重要なので再度確認しておく。当初、美術・音楽・体育といった実技系講座では、大学院設置に反対する教官も少なからずあり、構想及び設置が難航する大学もあつた。教科専門よりも教科教育が重視されることへの懸念があつたためである。例えば、大学院設置先発校の大阪教育大学教育学研究科の設置年と美術教育専

攻設置年とに開きがあるのは、美術講座教官、特に実技系教官が大学院設置に抵抗していたためであった。「花篤先生退官記念座談会」に大阪教育大学の大学院創設期の状況が詳細に記される。それは、花篤實と花篤を囲んだ那賀貞彦、岩崎由紀夫、田中久和たちとの談話をまとめたものである。花篤の言葉を以下に一部引用する<sup>6)</sup>。

大学院設立の課程で美術、音楽といった芸術系の教官が最後まで消極的で、他講座より 6、7 年遅れた筈だよ。始めにいったように芸術系は芸大方式を目指していたので、「学」というのは門外だったし、第一我が国にそんな大学での芸術教育研究講座のパターンがそれ迄なかったもので、戸惑っていたというより、そんな大学院をやる暇があれば、一枚でも作品を作ると教授たちが公言して開き直っている状況だった。

さらに大阪教育大学大学院創設に対して、当時退官していた高妻巳子雄までもが、「我が国の美術教育は山本鼎画伯以来実技を中心に発展してきた」と意見したという<sup>7)</sup>。

また、必ずしも大規模校や美術講座の力の強いところから大学院は設置されたわけではない。特設美術のあった大学間でも差がある。早い段階で特設美術が設置された京都学芸大学（昭和 27 年）、岡山大学及び佐賀大学（昭和 28 年）であるが、大学院美術教育専攻は岡山大学に昭和 55 年、京都教育大学に平成 2 年、佐賀大学には平成 5 年に設置と差がある。特設美術は高等学校教員養成を主目的として設置されたものの、実質の教育方針には美術専門家養成もあった。美術専門家養成の立場からすれば、教科教育を中心とする教科教育専攻大学院は望むところではないであろう。

既に述べたように都市圏の規模の大きい埼玉大学は、学部としては大学院そのものの設置に消極的であったと言われる。

大学院美術教育専攻の設置は、美術教育学を制度的に成立させるものであったが、全教員養成大学・学部、そして全美術教官がそれに熱心であったわけではなかった。依然として教科教育より教科専門を重視する意識があったと言える。

### (3) 大学院美術教育専攻の美術科教育教官の類型

大学院美術教育専攻設置時に美術科教育分野の教官になったのは、1. 大学院修了者（大学院設置先発校修了者）、2. 自校出身者、3. 文部省関係者（教科調査官・学習指導要領作成協力者等）あるいは附属校教員経験者に分けられる。その背景には、前述したように、大学院設置のためには文部省の設置審査委員会の審査を通過する必要がある、便宜的な所属では済まなくなったことがあろう。

1. 大学院修了者の占める割合は、大学院美術教育専攻が設置されて以降、飛躍的に増加した。なかでも、前節で見たように、大学院設置先発校（東京学芸大学・大阪教育大学・横浜国立大学・広島大学）修了者の採用は順調に増加していき、大学院設置後には 38.6%にまで上った（図 11）。なお、他の教員養成大学・学部卒業生がこれらの大学院を修了する場合



も多い。東京学芸大学、大阪教育大学については既に述べた。大学院設置前後の時期に大阪教育大学大学院で花篤實と那賀貞彦の薫陶をうけた修了者が多数全国に赴任したことは特筆される。横浜国立大学大学院と広島大学大学院の修了者は、大学院設置の時期に各教員養成大学・学部へ赴任していく。前者は全国各地、後者は中国・四国地方への赴任が多い。初期の専門家養成機関としての大学院に関しては、次の(4)で検討する。

2. 自校出身者は、大学院設置前から安定的に一定数いる。学科目「美術科教育」から大学院分野「美術科教育」まで引き続いて担った教官に自校出身者が多い。大学院設置後はさらに増加傾向にある。既に述べたように業績・人物が把握でき、将来までの定着が期待でき、場合によっては当該校の教育成果の証明になったためであろう。全国美術科教育教官表(表61)を見ると、大学院設置の初期は、各大学学部を卒業してから東京芸術大学大学院(美術教育学専攻)や大阪教育大学大学院を修了し、教官として出身校に戻ってくる例が多い。なお、東京学芸大学大学院修了者は初期には多く東京学芸大学教官となり、次第に全国各地の教員養成大学・学部への赴任も増えていく。

3. 前節では特に指摘しなかったが、文部省関係者(教科調査官・学習指導要領作成協力者等)あるいは附属校教員経験者の採用も増えていく。この類型の場合、大学院修了者ではないこともある。この類型の中には、(5)で検討するように、大学院設置のために着任した後、2、3年で退職した教官、さらには他大学大学院設置のために転出して二つ以上の大学院設置に関わった教官もいた。

#### **(4) 美術科教育教官を養成した大学院**

美術科教育教官の出身母胎となったのは、1. 東京芸術大学、2. 東京教育大学・筑波大学、3. 東京学芸大学・大阪教育大学の大学院に類別できる。それら出身母胎・養成機関の設置年と主教官を見ておく。設置の早かった順に記す。

東京芸術大学は昭和27年に東京美術学校図画師範科が廃止され、美術科教員を専門的に養成する組織が無い状態が続いた。しかし、昭和38年に東京芸術大学大学院美術研究科が設置され、昭和44年から美術教育学専攻生の募集が開始された。その初期の卒業生の多くが全国の教員養成大学・学部の学科目「美術科教育」を担った。主任教官は桑原實であった。第一期卒業生に上述の長谷川哲哉がいた。

東京学芸大学は昭和41年に大学院教育学研究科の設置が始まり、昭和43年に大学院美術教育専攻が設置された。主任教官は村内哲二であった。

大阪教育大学は昭和43年に大学院教育学研究科の設置が始まり、昭和50年に大学院美術教育専攻が設置された。主任教官は花篤實であった。那賀貞彦もその教育に関わった。

筑波大学は昭和59年に大学院に芸術教育学研究室が設置された。主任教官は宮脇理であった。

これら大学院の初期修了生の多くが全国の教員養成大学・学部の学科目「美術科教育」所属教官及び大学院分野「美術科教育」教官となり、美術教育学の研究・教育を担うようになる。

## (5) 大学院設置要員

大学院設置のために着任し、2、3年で退職した教官、さらに他大学へ大学院設置のために転出した教官がいた。具体的には以下の教官たちである。ここでの教官名の後の（ ）内には大学院設置に関わって在職した大学名を記す。

石原英雄（広島大学→秋田大学）、新川昭一（金沢大学）、宮脇理（横浜国立大学→筑波大学→佐賀大学）、益田凡夫（熊本大学）、竹内博（京都教育大学→宮崎大学）。なお、南部正人も香川大学→北海道教育大学と関わったが、北海道教育大学出身者であり、いわゆる大学院設置要員というより自校に戻った事例と言えよう。

純粹に大学院設置要員と言えるのは、二大学以上に名前のある石原英雄、宮脇理、竹内博となろう。また、大学院設置時ではないが、複数の大学院に短期間在職した樋口敏生は、大学院要員と言えるであろう。石原以外は文部省の教科調査官や学習指導要領作成協力者であった。

## 第四節 まとめ

### 1 概括的・数値的検討

全国の教員養成大学・学部の美術科教育教官一覧表を作成し、それをもとに、全美術科教育教官の人数、学科目及び大学院設置に伴う所属決定の類型、美術科教育教官の出身母胎、自校出身者について検討した。

(1) 昭和39年以降、学科目「美術科教育」に人的配置がなされてから、平成15年度までに確認される美術科教育教官の実人数は229人であった。

(2) 学科目・大学院設置に伴う教官の所属決定の類型には、在職教官の所属移動、新規採用、継続があった。大学院設置前は在職教官の所属移動で学科目「美術科教育」への人的配置がなされる場合が多く、初所属教官では66.1%と最多であったが、その後は減少し、大学院が設置された後の所属移動は極僅かとなった。

(3) 美術科教育教官の出身母胎としては、東京芸大系と筑波大系が二大母胎であった。ただ、それらの出身者は徐々に減少し、その分、大学院美術教育専攻設置先発校出身者が増えていった。

(4) 自校出身者は、一時的な減はあれ、いずれの時期も13%以上を保ち、全体としては増えた。

### 2 人的種々相

概括的・数値的まとめではこぼれ落ちてしまう人的種々相は、三時期区分において以下のようになった。

(1) 師範学校から大学移行期 学科目「美術科教育」導入前は美術教育学の人的制度は未成立であった。①そこでの美術科教育授業担当体制は次の4類型に分けられた。1. 複数教官で分担した体制。2. 専門という理由ではなく、年長者・講座主任・旧帝国大学卒業者等の実力者が担当した体制。3. 明確にはなく緩やかに主たる担当者が決まっていた体制。

4. 教官の専門が明確に分化し、美術科教育授業の担当者が組織上も実質も明確化していた体制。②また、師範学校から大学ではなく、中学校・高等学校へ異動した後、大学へ赴任するという特異な事例があったことを指摘した。

(2) 学科目「美術科教育」設置期 学科目制度によって「美術科教育」が制度上発足し、その所属教官が決定したものの、最初のうちは美術教育学の専門性はまだ十分に認識されなかった。①学科目「美術科教育」設置とそれへの人的配置の間に時間的ずれが生じた大学もあったことを確認した。②所属決定の3類型に関して実例を示した。③専門性認識前の過渡的事例を紹介して、教科専門に比べて教科教育の理解がされていなかったことを指摘した。

(3) 大学院美術教育専攻設置期 大学院美術教育専攻の分野「美術科教育」の二名の教官は文部省の設置審査委員会の研究論文業績審査を通過しなければならなかった。そのため、初期の分野「美術科教育」教官の専門性は高く、美術教育学の人的制度は成立したと言える。①大学院あるいは美術教育専攻の設置に対して大学によって温度差があったこと、特に実技系教官が積極的ではなかった大学があったことを確認した。②大学院の美術科教育教官の類型は、1. 大学院修了者（大学院設置先発校修了者）、2. 自校出身者、3. 文部省関係者（教科調査官・学習指導要領作成協力者等）あるいは附属校教員経験者に分けられた。③美術科教育教官の養成機関は、東京芸術大学、東京教育大学・筑波大学、東京学芸大学・大阪教育大学の大学院に類別でき、その設置年と主教官を確認した。④大学院設置要員の事例を示した。

## 註

- 1) 美術科教育学会二〇年史編纂委員会『美術科教育学会二〇年史』（美術科教育学会、平成11年）11頁。
- 2) 金子一夫・有田洋子「美術教育学の成立過程—東京芸術大学の場合—」『茨城大学教育学部紀要(教育科学)』第62号、平成25年、123-135頁。
- 3) 第七章に記した通り、永守基樹、前村晃以前には久富邦夫、深草廣平が所属していた可能性もあるものの、はっきりしない。
- 4) 佐賀大学史編纂委員会『佐賀大学四十年史』（第一法規、平成6年）239頁。永守の「ポストは大学院設置につき学科目を美術科教育に変更し、宮脇理へ」と記される。
- 5) 長谷川哲哉「研究会か学会かの議論（一）」美術科教育学会二〇年史編纂委員会『美術科教育学会二〇年史』（美術科教育学会、平成11年）22頁。
- 6) 「花篤先生退官記念座談会」大阪教育大学美術教育講座・芸術講座『美術科研究』第16号、平成10年、8頁。
- 7) 同上、5頁。

## 結 章

### 第一節 本研究の目的と問題の所在

本研究の目的は戦後日本の美術教育学の実質的成立に先立って人的制度と人的配置が整備された過程を明らかにすることであった。この目的設定の背景に美術教育学の内実が十分でないのに、人的制度が不安定になりつつあることがあった。美術教育学の人的制度と人的配置は美術教育学の言わば太田智己の言う「学術インフラ整備」であった。その過程を明らかにすることによって、美術教育学の内容的成立の歴史性も明らかになることを期待した。

本研究は人的制度と人的配置過程を官立師範学校から新制国立大学になる昭和 24 年から、大学院美術教育学専攻が全国に設置完了となる平成 11 年までの 50 年間で捉えた。その 50 年間で学科科目導入が始まる昭和 39 年、そして昭和 40 年代の大学院美術教育専攻設置開始からの斜線的境界によって三区分別し、それぞれの段階での美術教育学の人的整備実態を明らかにした。解明すべき問題は以下のように設定した。

- 1 美術教育学に関する人的制度はどのように展開したか
- 2 美術教育学の人的配置の全国的推移はどのようなになるか
- 3 美術教育学の人的配置の個別事例の詳細はどのようなものになるか
- 4 全国美術科教育教官の数値的・類型的把握はどのようなになるか

方法としては全国の教員養成大学・学部を悉皆調査して配置された美術科教育教官を明らかにし、さらにそれら教官と配置に関する類型を明らかにすることとした。二大学を個別事例として人的整備の詳細を示した。また、全国の美術科教育教官数はどれくらいになるか、人材をどのように配置したか、その人材を養成した母胎である修学校は何であったかを調査し、概括的・数値的にまとめて考察し、さらにそのようなまとめではこぼれ落ちてしまう人的種々相を検討した。

### 第二節 本研究の成果

第一章では、まず美術教育学の人的制度基盤の成立過程を概観し、戦後の教員養成大学・学部に関わる教育政策の展開を確認し、教育刷新委員会での議論、講座制と学科目制の議論、昭和 30 年代の目的大学化政策による学科目制度の出現と大学の反発、昭和 40 年代からの大学院教育学研究科設置政策を明らかにした。

次に師範学校から教員養成大学・学部への美術関係教官の移行期の検討に移り、新制国立大学設置に関して国立公文書館蔵「大学設置認可申請書」を参照し、教育学部と学芸大学・学部の名称の問題、師範学校教官の新制大学への移行の困難と混乱を明らかにした。定員化された大学教官への推薦順位をめぐる内部での混乱はあったものの、美術関係教官の場合、相対的にスムーズに順次移行した。その背景には、戦前の美術関係の最高学府は東京美術学

校や東京高等師範学校といった高等専門学校であり、それらの卒業生が美術関係教官の多くを占めていたことがある。そして、当時は教科専門、特に実技の業績が優先され、文展、日展、二科展等への入選が選考で高く評価された。また、師範学校内での大学教官推薦をめぐる角逐事例があったことも判明した。

学科目制度が制定されるまでには各大学等からの反発とそれに伴う文部省との折衝があったこと、昭和 39 年から設置され始めた学科目の組み合わせは大学によって違ってしたこと、そして最も欠けていた学科目「美術科教育」が順調に増設されて昭和 53 年までに全国設置が完了したことを明らかにした。

大学院教育学研究科及び同美術教育専攻の設置経過を調査してみると、地方では人員が揃わないので設置が遅れた大学もあったが、実技を主内容とする美術講座に大学院での学問的研究はそぐわないという理由で美術教育専攻設置に積極的ではなかった大学もあった。平成 2 年からそれらを押し切るように毎年数校のペースで美術教育専攻が設置され、平成 11 年に全国設置が完了した。平成 2 年から文部省の方針が全国設置に変わった背景には、大学間の差別化に対する国立大学協会の激しい反発があったこと、専修免許状の登場等があったことを指摘した。また、美術教育専攻のコンセプトは文部官僚が各大学の大学院準備担当者から意見聴取をしつつ決定したので大学によって違っていたことが判明した。

第二章から第七章で、全国の教員養成大学・学部的美術教官の推移を網羅的に調査し、便宜的に各地方に分割して表に可視化して解説した。各大学の美術科教育教官がどのように推移したかを以下のように明らかにした。

北海道地方：1. 師範学校から教員養成大学へ美術関係教官はほぼ移行した。美術科教育を専門に担当・研究する教官はいない。2. 学科目「美術科教育」の制度上の設置は早かったもののそれへの人的配置は遅めで、在職教官の所属移動と、大学院美術教育専攻設置先発校で養成された美術科教育専門家の新規採用によって定員は充足された。最初期の担当者は必ずしも美術科教育専門家とは限らない。3. 大学院の設置も遅めで、平成 4 年に北海道で最初の大学院美術教育専攻が札幌分校と岩見沢分校の協同で設置された。平成 8 年に旭川校、平成 10 年に函館校と釧路校に設置された。大学院設置時期に、美術科教育専門家が揃えられていく。大学院での美術科教育教官の出身母胎は、徐々に北海道教育大学が増えていく。

東北地方：1. 師範学校から教員養成大学・学部へ美術関係教官はほぼ移行した。宮城師範学校から東北大学教育学部への移行は難航した。美術科教育を専門に担当・研究する教官はいない。2. 学科目「美術科教育」の設置と人的配置は岩手大学と福島大学は早く、秋田大学は遅めであった。多くは在職教官の所属移動によって定員は充足された。最初期の担当者は必ずしも美術科教育専門家とは限らない。3. 大学院美術教育専攻の設置は遅めで、すべて平成年代に入ってからであった。平成 11 年に弘前大学に全国で最後に設置されたことによって、全国的美術教育学の人的制度基盤の整備は完了した。

関東地方：1. 師範学校から教員養成大学・学部へ美術関係教官はほぼ移行した。東京学芸大学と横浜国立大学への移行は難航した。東京学芸大学では、学科目制度に先んじて美

術科教育専門が明確化していた。組織上も実質の美術科教育関係授業担当も美術専門と分化していた。2. 学科目「美術科教育」の設置と人的配置は全体的に早く、昭和 39 年から 40 年代前半中に学科目設置と人的配置がなされたところが多い。埼玉大学は学科目設置は早かったものの人的配置は遅めであった。群馬大学は学科目設置と人的配置はともに遅めであった。最初期の担当者は必ずしも美術科教育専門家とは限らない。3. 昭和 43 年に東京学芸大学に全国で最初に大学院美術教育専攻が設置された。その他の大学も多くは昭和年代中に設置された。埼玉大学と群馬大学には平成 2 年に設置された。

中部地方：1. 師範学校から教員養成大学・学部へ美術関係教官はほぼ移行した。ただ、金沢大学と信州大学では一部の美術関係教官は移行せず、数年後に大学教官として戻り、後に学科目「美術科教育」に所属した。愛知学芸大学では学科目制度に先んじて「教科教育教室」が設置され、組織上、美術科教育の担当者が明確化していた。2. 学科目「美術科教育」の設置と人的配置は、信州大学と東海地方の大学は早かったが、新潟大学と山梨大学と北陸地方の大学は遅めであった。在職教官の所属移動と美術科教育専門家の新規採用によって定員は充足された。3. 昭和 53 年に全国で三番目に愛知教育大学に大学院美術教育専攻が設置された。その後、昭和 56 年に静岡大学、昭和 59 年に新潟大学、平成 2 年に金沢大学、平成 4 年に信州大学、平成 7 年に福井大学、平成 8 年に富山大学と岐阜大学、平成 9 年に山梨大学にそれぞれ設置された。

近畿地方：1. 師範学校から教員養成大学・学部へ美術関係教官はほぼ移行したが、大阪学芸大学では難航した。美術科教育を専門に担当・研究する教官はいない。2. 学科目「美術科教育」の設置と人的配置は早めで、昭和 40 年代に近畿地方の全大学に人的配置は完了した。在職教官の所属移動と美術科教育専門家の新規採用によって定員は充足された。3. 昭和 50 年に全国で二番目に大阪教育大学に大学院美術教育専攻が設置され、その後、昭和 56 年に神戸大学、昭和 58 年に奈良教育大学、平成元年に三重大学、平成 2 年に京都教育大学、平成 3 年に滋賀大学、平成 5 年に和歌山大学に設置された。

中国地方：1. 師範学校から教員養成大学・学部へ美術関係教官はほぼ移行したが、広島大学では難航した。美術科教育を専門に担当・研究する教官はいない。2. 学科目「美術科教育」の設置と人的配置は、岡山大学は早く、広島大学は昭和 50 年代に入ってからと遅めであった。在職教官の所属移動と美術科教育専門家の新規採用によって定員は充足された。3. 大学院美術教育専攻は昭和 55 年に岡山大学、昭和 56 年に広島大学、その他は平成年代に設置された。

四国地方：1. 師範学校から教員養成大学・学部へ美術関係教官はほぼ移行した。美術科教育を専門に担当・研究する教官はいない。2. 学科目「美術科教育」は、香川大学に昭和 44 年、その他は昭和 39 年に設置された。人的配置は昭和 40 年代にそれぞれなされた。在職教官の所属移動と新規採用によって定員は充足された。3. 大学院美術教育専攻は全て平成年代に設置された。なお大学院教育学研究科は全国で最後に高知大学に設置された。

九州・沖縄地方：1. 師範学校から教員養成大学・学部へ美術関係教官はほぼ移行した。美術科教育を専門に担当・研究する教官はいない。2. 学科目「美術科教育」は福岡教育大学と佐

賀大学と鹿児島大学は昭和 39 年に、その他は昭和 40 年代に設置された。先の三大学は学科目が設置されてから人的配置がなされるまで年数がかかり、後の大学は学科目の設置後すぐに人的配置もなされた。在職教官の所属移動と美術科教育専門家の新規採用によって定員は充足された。3. 大学院美術教育専攻の設置は全体的に遅めで、昭和 61 年に九州・沖縄地方で最初の大学院美術教育専攻が福岡教育大学に設置された。その他は平成年代に設置され、平成 10 年に全国で最後から二番目に鹿児島大学に設置された。

第八章では、隣接する対照的な二大学である島根大学と岡山大学を取り上げて美術講座の人的整備過程の詳細を検討した。島根大学は地方の比較的小さな大学で、島根(県)師範学校出身の教官が多く典型的な地域密着型の大学であった。学科目や大学院の教育政策が実質化していくのも遅い。それに対して岡山大学は、規模の大きな大学で特設美術設置にも成功し専門美術大学に遜色ない美術専門の教育を目指した。専門化の一環として学科目設置以前から特定教官が教科教育科目を主に担当し、学科目制度発足と同時に学科目「美術・工芸科教育」が設置され、大学院設置も早かった。このように隣の大学同士でもかなり違うことを示すことができた。ただ、特設美術が設置された大学であっても、専門化の一環として美術教育専門が整備されるのではなく、美術専門だけが強調され、美術科教育の整備が後回しになる場合もあった。

第九章では、ほぼ全国的美術科教育教官とその勤務を網羅的に把握し、表にまとめた。そして美術科教育教官の推移として、1. 人数、2. 学科目・大学院設置に伴う教官の所属決定の類型、3. 出身母胎、4. 自校出身者という四観点で分析した。概括的・数値的実証によって美術教育学の人的制度基盤の成立過程の基本的像を捉えた。昭和 39 年以降、学科目「美術科教育」に人的配置がなされてから、平成 15 年度までに確認される美術科教育教官の実人数は 229 人であった。教官の所属決定に関しては、学科目設置時は所属移動が多かったが、大学院が設置された後は所属移動は僅かになった。教官の主たる出身母胎は東京美術学校・東京芸術大学と東京高等師範学校・東京文理科大学・東京教育大学・筑波大学であった。前者は初期に多かったが徐々に減少し、後者は微減していく。その分、大学院設置先発校出身者が増加していく。また、自校出身者は一時的な減はあれ全体としては増えていった。

さらに、概括的・数値的まとめではこぼれ落ちてしまう、個々の大学及び個々の教官の具体的な相を三時期区分で検討した。学科目制度導入前では、美術科教育関係授業の担当体制とその特殊事例を明らかにした。学科目「美術科教育」設置期では、その制度導入と人員配置に時間差があったこと、その所属教官の研究内容との不整合及び採用する大学側の美術教育学の専門性への理解不十分があったことを明らかにした。大学院美術教育専攻設置期では、大学や教官によってその設置に対する温度差があったこと、美術科教育教官には大学院修了者、自校出身者、文部省関係者の三類型があったこと、さらに美術科教育教官を養成した大学院やいわゆる大学院設置要員を明らかにした。大学院美術教育専攻の分野「美術科教育」の教官は文部省の設置審査委員会での研究論文業績審査を通過しなければならなかった。そのため、初期の分野「美術科教育」の教官の専門性は高く、人的制度としては成立したと言える。

そして、四問題は以下のように解明した。

1 美術教育学に関する人的制度はどのように展開したか

師範学校から教員養成大学・学部へ美術関係教官の多くは移行した。この第一段階では美術教育学という専門は明確に制度化されていなかった。第二段階の学科目「美術科教育」の設置によって形式的に美術科教育専門が出現した。文部省から示された学科目は大学ごとに異なっていた。各学科目整備の進度は様々であったが、学科目「美術科教育」は昭和 53 年までに全国設置された。さらに第三段階である大学院美術教育専攻の設置によって美術教育学専門が実質化し、美術教育学の人的制度基盤は成立した。教科教育専攻大学院が昭和 40 年代の特定大学設置方針から昭和 53 年頃に全国設置へと政策転換し、さらに平成 2 年から急速に各地に設置されていったことに伴って、美術教育専攻も各地に設置されていき平成 11 年に全国設置が完了した。

2 美術教育学の人的配置の全国的推移はどのようなになるか

全国を北から六地方に分け、大学ごとの人的配置の三段階を明らかにできた。学科目「美術科教育」設置とそれへの人的配置は同時であったとは限らず、人的配置が遅れた場合もあった。さらに学科目「美術科教育」及び大学院の分野「美術科教育」を担った教官を特定した。また概括的に見ると、中央の大都市圏の大学や地方の中核都市にある大学は人的制度も人的配置も早い傾向がある一方、周辺地方の大学では遅れ気味であった。

3 美術教育学の人的配置の個別事例の詳細はどのようなものになるか

地方の小規模大学である島根大学と地方ながら大規模大学である岡山大学では、前者が学科目・大学院ともに遅れ気味に設置されたのに対して、後者は特設美術設置とも相俟って常に先進校であろうとした。隣県の大学であっても対照的であった。

4 全国美術科教育教官の数値的・類型的把握はどのようなになるか

昭和 39 年以降、平成 15 年度までに確認される美術科教育教官の実人数は 229 人であった。学科目設置に際しては所属移動によって美術科教育の人的配置はなされた。大学院設置に際しては所属移動が減って新規採用が増えた。美術科教育教官の出身母胎は東京美術学校・東京芸術大学と東京高等師範学校・東京文理科大学・東京教育大学・筑波大学が大部分を占め、前者は徐々に減少、後者は微減した。その分、大学院美術教育専攻設置先発校出身者が増えた。自校出身者は微増した。その他、人的配置の遅れや実際の専門との不整合等もあった。



この四問題を軸に、九章にわたって美術教育学の人的制度基盤の成立過程を検討し、大学ごとの多様性と紆余曲折のある立体的な像として提示した。それは概括すると次のようになる。美術教育学の人的制度基盤は、大学での教養教育重視を原則とした戦後の教員養成政策が徐々に教職の専門性重視へ転換していくことに呼応して、昭和 39 年から同 53 年までに学科目「美術科教育」が全国設置され、そして美術教育の学問化に異和を示す大学はあったものの昭和 43 年から平成 11 年までに大学院美術教育専攻が全国設置されることによって完成する。

そして、序章で仮説として提示した三時期区分の概念図は、ここまでの調査検討結果を水平軸の時間と垂直軸の大学数に反映させて以下のように修正される。

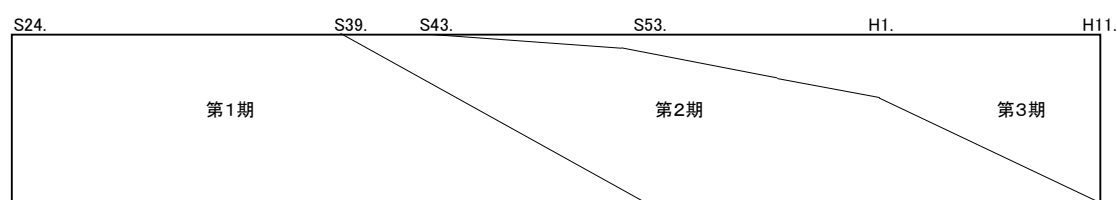


図 15 本研究での三時期区分の修正概念図

### 第三節 本研究の意義と可能性、そして今後の課題

#### 1 本研究の意義

本研究は全国的美術教育学の人的制度と人的配置を網羅的・実証的に提示して、上述のように、今までに明らかになっていなかった事実を多数明らかにした。それらは今後の美術教育学研究の歴史的課題を考える堅固な基盤になろう。特に美術教育学の人的制度と人的配置が、教育政策によって教員養成大学・学部簡単に実現したわけではなく、教育政策と個々の大学組織と個々の具体的人間との厩大な相克と時間によって成立していったことが実感できる。美術教育学の学的確立のための人的体制が整っている現在、それをかつての学的確立意識の発生前へと逆行させたくはない。この美術教育学の人的制度基盤の成立過程を明らかにしたことによって、今後の美術教育学や美術教育実践の論議がより発展することを期待する。

#### 2 本研究の可能性

本研究は、今後の美術教育学研究を着実に前進させる基礎研究として機能するであろう。前項で述べたような研究や議論を逆行させてはならないというような心理的影響に止まらないで、種々の美術教育関係研究や活動に寄与できる可能性がある。例えば、全大学の美術講座体制及び全美術科教育教官を明らかにしたことは、今後の研究でそのデータを参照

することが可能となる。本研究で扱った事象や個々の教官は刻々と歴史的時間の中に入っていくので、今後、美術教育学実質的成立過程の研究、あるいは各大学の美術科教員養成史、さらには各教官についての個人研究が今後次々と発生することは確実である。それらの研究で基礎的事実の確認を最初からする多大な労力を省き、対象について概観的像を得させやすくする。また、様々な美術教育関係者、それこそ各種教員、研究者、さらには関連業者まで、現在の特定の大学美術講座について考えるとき、その歴史を踏まえざるを得ない。本研究はささやかながらそれに貢献できるであろう。

### 3 今後の課題

本研究で人的制度の詳細は公の資料に残されていないことが多かった。また、関係者の証言が得られても、近過去のことなので証言者名はもちろん、事実に関しても記載することはできないことがあった。それでも、今後も関係者へのインタビュー調査を続け、質的充実を図り、公表できる時を待ちたい。

そして、美術関係教官勤務表は最善を尽くしたつもりであるが、さらなる校訂作業を継続する。特に平成年代に入ってから教員勤務の実態が不確かな大学があるので、確認作業をする。

また、学科目「美術科教育」の導入前後あたりまで、東京美術学校図画師範科や東京高等師範図画手工専修科卒の師範学校・大学教官が各府県の美術教育研究と実践を指導した、大きな役割に気づいた。それらの人物の功績を美術教育学にどう継承していくかも今後の研究課題であるし、地方美術教育史に研究においては外せない対象となる。

さらに、美術教育関係学会が美術教育学の人材養成に対する寄与も少なくないと認識しながら、それについて検討対象にすることはできなかった。初期の学科目「美術科教育」の所属教官のほとんどは美術科教育の理論、ましてや美術教育学については漠然としたイメージしかなかった。しかし、学科目「美術科教育」の存在は、その専門性と学的確立への努力を所属教官に迫る圧力となった。多くの所属教官は個々に試行錯誤している状態であった。そこで各大学の「美術科教育」担当者の連帯と美術科教育研究の専門性確立を目的として、昭和54年に鈴木寛男・大勝恵一郎の呼びかけにより大学美術教科教育研究会が発足した。そこに全国各地の大学の美術科教育担当教官が多数参加した。同研究会は、第四回まで奈良教育大学で開催され、第五回から美術科教育学会として全国組織の学会となった。美術科教育専門家養成に対する大学美術教科教育研究会、初期の美術科教育学会の寄与は大きい。また、日本教育大学協会第2部美術部門に附属する形で大学美術教育学会、昭和26年4月創立の伝統をもつ日本美術教育学会もあり、これらと美術教育学の人材養成に関しても今後の課題としたい。

また、今回対象外としたいいわゆる新構想教育大学での美術教育学の人的配置と美術教育学の内実の検討もしなくてはならないと考えている。

## 参考文献・資料目録

### 序章

#### 単行本

- ・市川昭午『臨教審以後の教育政策』（教育開発研究所、平成7年）。
- ・宇佐美寛『教育哲学』（東信堂、平成23年）。
- ・内海巖『社会認識教育の理論と実践』（葵書房、昭和46年）。
- ・太田智己『社会とつながる美術史学』（吉川弘文館、平成27年）。
- ・金子一夫『近代日本美術教育の研究 明治時代』（中央公論美術出版、平成4年）。
- ・金子一夫『美術科教育の方法論と歴史』（中央公論美術出版、平成10年）。
- ・金子一夫『美術科教育の方法論と歴史〔新訂増補〕』（中央公論美術出版、平成15年）。
- ・竹田清彦・高橋健夫・岡出美則『体育科教育学の探究—体育授業づくりの基礎理論』（大修館書店、平成9年）。
- ・東京教育大学社会科教育研究会『社会科教育の本質』（明治図書、昭和46年）。
- ・中村亨『日本美術教育の変遷 教科書・文献による体系』（日本文教出版、昭和54年）。
- ・西本繁夫『日本の美術教育発達史』（明治図書出版、平成3年）。
- ・日本教育大学協会研究促進委員会『教科教育学研究』（同会、昭和59年）。
- ・野地潤家『国語教育学史』（共文社、昭和49年）。
- ・橋本泰幸『日本の美術教育—模倣から創造への展開』（明治図書、平成6年）。
- ・美術科教育学会二〇年史編纂委員会『美術科教育学会二〇年史』（美術科教育学会、平成11年）。
- ・兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科『教育実践学の構築—モデル論文の分析と理念型の提示を通して』（東京書籍、平成18年）。
- ・広島大学教科教育学研究会『教科教育学Ⅰ—原理と方法—』（建帛社、昭和61年）。
- ・宮脇理『工藝による教育の研究』（建帛社、平成5年）。
- ・山形寛『日本美術教育史』（黎明書房、昭和42年）。
- ・山田昇『戦後教員養成史研究』（風間書房、平成5年）。
- ・TEES 研究会『「大学における教員養成」の歴史的研究』（学文社、平成13年）。
- ・ショッパ、レオナード・J.『日本の教育政策過程 1970～80年代教育改革の政治システム』（三省堂、平成17年）。英文原著は、1991年（平成3年）。

#### 定期刊行物・論文等

- ・有田洋子「美術教育学の制度的基盤の成立過程—島根大学における人的制度と配置—」『島根大学教育学部紀要』第45巻、平成23年、47-55頁。
- ・有田洋子「美術教育学の制度的基盤の成立過程—大阪教育大学・岡山大学の場合—」『第50回大学美術教育学会宮城大会宮城教育大学発表概要集』48頁、平成23年9月24日発表。
- ・有田洋子「美術教育学の制度的基盤の成立過程—岡山大学における人的制度と配置—」『島

- 根大学教育学部紀要』第46巻、平成24年、91-100頁。
- ・有田洋子「美術教育学の制度的基盤の成立過程—山口大学における人的制度と配置—」『島根大学教育学部紀要』第47巻、平成25年、61-69頁。
  - ・有田洋子「研究ノート 美術教育史研究部会から -3- 戦後の教員養成大学・学部における美術教育学の制度的基盤の成立過程」『美術科教育学会通信』第85号、平成26年2月、19-20頁。
  - ・有田洋子「美術教育学の制度的基盤の成立過程—関西の教員養成大学・学部の場合—」（美術教育史部会「地方美術教育史の諸相Ⅱ」）『美術科教育学会第36回奈良大会発表概要集』23頁、平成26年3月20日発表。
  - ・有田洋子「美術教育学の制度的基盤の成立過程—鳥取大学における人的制度と配置—」『島根大学教育学部紀要』第48巻、平成26年、27-38頁。
  - ・有田洋子「美術教育学の制度的基盤の成立過程—九州地方—」『美術科教育学会第38回大阪大会発表概要集』24頁、平成28年3月19日発表。
  - ・有田洋子「美術教育学の制度的基盤の成立過程—東海地方—」『美術科教育学会第39回静岡大会発表概要集』17頁、平成29年3月27日発表。
  - ・有田洋子・金子一夫「美術教育学の成立過程—東京芸術大学の場合—」『第34回美術科教育学会新潟大会新潟大学発表概要集』102頁、平成24年3月28日発表。
  - ・金子一夫「美術教育史の意義と方法」『アート・エデュケーション』vol.3 No.3、平成3年5月、7頁。
  - ・金子一夫「大正・昭和戦前期の中等学校図画教員と出身美術学校の総覧的研究(1)～(5)」『茨城大学教育学部紀要(教育科学)』第61-64号、平成24-27年。
  - ・金子一夫「旧植民地の図画教員(一)～(八)」『一寸』第62-68号、平成27、28年。
  - ・金子一夫「旧植民地の図画教員 附論。旧植民地外の在外学校」『一寸』第69号、平成29年。
  - ・金子一夫「大正・昭和戦前期中等学校図画教員1 北海道(1)」『一寸』第70号、平成29年。
  - ・金子一夫「美術教育研究の歴史的課題」『美術科教育学会通信』No.82、平成25年2月、1-2頁。
  - ・金子一夫「美術教育方法論における超越的外部の必然性—『無規定的過程』その他—」『美術教育学』第37号、平成28年、207-218頁。
  - ・金子一夫「現代美術教育学研究の問題点とその解決—贈与交換論による美術教育の再定義を通して—」『美術教育学』第38号、平成29年、179-191頁。
  - ・金子一夫・有田洋子「美術教育学の制度的基盤の成立過程—東京芸術大学の場合—」『茨城大学教育学部紀要』第62号、平成24年、123-135頁。
  - ・教育指導者講習研究会『第九回 後期 教育指導者講習研究集録 図画科教育』（昭和27年12月序）。
  - ・桐田清秀「戦後日本教育政策の変遷—教育課程審議会答申とその背景—」『花園大学社会福祉学部研究紀要』第18号、平成22年、121-140頁。

- ・三枝康高「科学としての教科教育学」『現代教育科学』第143号、昭和44年、82-83頁。
- ・佐藤昌彦・宮脇理「IFEL (The Institute For Educational Leadership) への眼差し—ものづくりの重要性、その認識を深めるための一路程として—」『第33回美術科教育学会富山大会 研究発表概要集』35頁、平成23年3月26日発表。
- ・杉山明男「教員養成のカリキュラム」『岩波講座 現代教育学 18 教師』(岩波書店、昭和36年) 151頁。
- ・立原慶一「第32回美術科教育学会仙台大会のご案内【最終案内】」『美術科教育学会通信』No. 73、平成22年2月、1頁。
- ・永守基樹「代表理事就任にあたって—運営の基調と体制—」『美術科教育学会通信』No. 83、平成25年6月、1-2頁。
- ・永守基樹「2019年問題—美術教育学の曲がり角」『美術科教育学会通信』No. 91、平成28年2月、1-2頁。
- ・美術科教育研究集会『第1回美術科教育研究集会報告書』昭和44年。
- ・美術科教育学会美術教育史研究部会「美術教育学の制度的基盤の成立過程」『第33回美術科教育学会富山大会概要集』81頁、平成23年3月27日発表。
- ・美術科教育学会美術教育史研究部会『美術教育史研究部会通信』第37号、平成23年5月。
- ・藤原智也「ポスト・デモクラシーにおける美術科教育の正統性の問題」『美術教育学』第37号、平成28年、387-400頁。
- ・蒔苗直道「戦後数学教育の指針『はじめのことば』に関する一考察」『筑波数学教育研究』第18号、平成11年、35-44頁。
- ・立法考査局文教科学技術課(瀬上翔)「教員免許・養成制度をめぐる議論—時代に対応した教員資格制度の構築—」『調査と情報—ISSUE BRIEF—』No.885、平成27年。
- ・数学教育学会ホームページ (<http://mes-j.or.jp/> (平成29年10月20日確認))。
- ・日本数学教育学会ホームページ (<http://www.sme.or.jp/about/history/> (平成29年10月20日確認))。
- ・日本理科教育学会「日本理科教育学会のこれまでの歩みについて」(日本理科教育学会ホームページ <http://www.sjst.jp/about/history/> (平成29年10月20日確認))。

## 第一章

### 単行本

- ・秋田大学教育学部創立百周年記念会『創立百年史 秋田大学教育学部』(秋田大学教育学部創立百周年記念会、昭和48年)。
- ・海後宗臣・寺崎昌男『大学教育』(東京大学出版会、昭和44年)。
- ・京都教育大学一二〇周年記念誌編集委員会『京都教育大学百二十年史』(京都教育大学、平成13年)
- ・現代日本教育制度史料編集委員会『現代日本教育制度史料』第25-45巻(東京法令出版、

昭和 62 年-平成 2 年)。

- ・埼玉大学 50 年史編纂専門委員会『埼玉大学五十年史』（埼玉大学 50 年史刊行会、平成 11 年）。
- ・東京学芸大学二十年史編集委員会『東京学芸大学二十年史—創基九十六年史—』（東京学芸大学創立二十周年記念会、昭和 45 年）。
- ・東京学芸大学創立五十周年記念誌編集委員会『東京学芸大学五十年史 資料篇』（東京学芸大学創立五十周年記念事業後援会、平成 11 年）。
- ・土屋基規『戦後日本教員養成の歴史的研究』（風間書房、平成 29 年）。
- ・長浜功『昭和教育史の空白』（日本図書センター、昭和 61 年）。
- ・百年史編集委員会『百年史 埼玉大学教育学部』（百年史刊行会、昭和 51 年）。
- ・百年史編集委員会『百年史 千葉大学教育学部』（百年史刊行会、昭和 56 年）。
- ・文部省『学制百年史』（帝国地方行政学会、昭和 47 年）。
- ・文部省『学制百二十年史』（ぎょうせい、平成 4 年）。
- ・山田昇『戦後教員養成史研究』（風間書房、平成 5 年）。
- ・和歌山大学 50 年史編纂委員会『和歌山大学 50 年史』（和歌山大学、平成 12 年）。
- ・和歌山大学教育学部『和歌山大学教育学部創立百周年記念 100 年のあしあと』（和歌山大学教育学部、昭和 50 年）。
- ・TEES 研究会『「大学における教員養成」の歴史的研究』（学文社、平成 13 年）。

#### 定期刊行物・論文等

- ・金子一夫「美術史の中の美術教育」北澤憲昭 他『美術のゆくえ、美術史の現在』（平凡社、平成 11 年）52-68 頁。
- ・「花簫先生退官記念座談会」大阪教育大学美術教育講座・芸術講座『美術科研究』第 16 号、平成 10 年、1-19 頁。

## 第二章

- ・金子一夫『近代日本美術教育の研究—明治時代—』（中央公論美術出版、平成 4 年）。
- ・金子一夫「学術研究助成基金補助金成果報告書平成 25～27 年度『大正・昭和戦前期の中等学校図画教員と出身美術学校の総覧的研究』」（課題番号 25370126）。

### 北海道教育大学

- ・『北海道学芸大学概要』（昭和 26 年 7 月現在）。
- ・北海道聯合教育会・北海道教職員組合調査部『北海道教育関係職員録』昭和 14-18、20、22-30 年度。
- ・北海道学芸大学『職員住所録』24-29 年度。
- ・北海道学芸大学/北海道教育大学庶務部『北海道学芸大学職員録』昭和 29-平成 15 年度。
- ・北海道学芸大学『北海道学芸大学要覧』26-40 年度。

- ・北海道学芸大学/北海道教育大学『学生便覧』昭和 38-41 年度。
- ・北海道教育大学研究発表委員会『北海道教育大学研究者総覧』（北海道教育大学総務部総務課、平成 15 年）。

#### 北海道教育大学（札幌）

- ・北海道学芸大学札幌分校・北海道学芸大学札幌分校創立七十周年記念事業協賛会『北海道学芸大学札幌分校七十小史』（昭和 31 年）。
- ・北海道教育大学札幌分校創立九十周年記念事業協賛会『北海道教育大学札幌分校九十年小史』（昭和 51 年）。
- ・北海道学芸大学札幌分校『履修手引』昭和 32-34、36-38 年度。
- ・北海道学芸大学札幌分校『昭和 35 年度前期開設科目』。
- ・北海道学芸大学札幌分校『履修手引付表』昭和 36-38、40 年度開設科目。
- ・北海道学芸大学札幌分校『学生便覧付表』昭和 41、43-55 年度開設（授業）科目。
- ・北海道学芸大学札幌分校『昭和 55 年度開設授業の概要』。
- ・北海道教育大学教育学部札幌校『北海道教育大学札幌 教育と研究』No. 1（平成 5 年）同、No. 2（平成 8 年）。
- ・吉田五左衛門『小学校手工科に適用せる木工製図及工作法 改訂増補版』（北海道教育新聞社、昭和 4 年）。
- ・吉田五左衛門先生の顕彰碑を設立する会『みんなの五左さん』（吉田五左衛門先生の顕彰碑を設立する会、昭和 46 年）。
- ・札幌芸術の森美術館『丸山隆彫刻展図録』（財団法人札幌市芸術文化財団、平成 16 年）。
- ・畠山三代喜『畠山三代喜 金工の世界』（畠山三代喜、平成 10 年）。
- ・阿部宏行「北海道の美術教育の礎に関する一考察～藤野高常の教育的視座について～」北海道教育大学紀要（教育科学編）第 63 巻第 1 号、平成 24 年、1-12 頁。

#### 北海道教育大学（岩見沢）

- ・創立 75 周年記念誌編集委員会『北海道教育大学岩見沢校創立 75 周年記念誌』（北海道教育大学岩見沢校、平成 10 年）。
- ・80 周年記念事業委員会記念誌部『北海道教育大学青陵会 80 周年記念誌「八十年誌」』（北海道教育大学青陵会、平成 15 年）。
- ・創立 90 周年を祝う会実行委員会記念事業部記念誌編集委員会『北海道教育大学青陵会 90 周年記念誌「90 年誌」』（北海道教育大学青陵会、平成 25 年）。
- ・『北海道学芸大学岩見沢分校要覧 昭和 31 年 7 月 1 日現在』。
- ・北海道学芸大学岩見沢分校『履修要項』昭和 39 年度。
- ・北海道学芸大学岩見沢分校『開講科目一覧表』昭和 44 年度。
- ・北海道学芸大学岩見沢分校『授業時間割』昭和 48、53、56-58 年度。
- ・北海道学芸大学岩見沢分校『開講科目一覧』平成 8、10、12 年度。
- ・北海道教育大学岩見沢分校『開講科目一覧表』昭和 45、46、49-53、56-58 年度。

- ・北海道立近代美術館『砂田友治展 人間原像一生へのオマージュ』（北海道立近代美術館、平成 14 年）。

#### 北海道教育大学（函館）

- ・北海道函館師範学校『創立二十五年史』（北海道函館師範学校、昭和 11 年）。
- ・『北海道学芸大学 函館分校要覧（昭和 34 年 6 月・開学十周年記念）』（昭和 34 年）。
- ・夕陽会『会員名簿』（夕陽会、昭和 57 年）（昭和 57 年 12 月 1 日現在）。
- ・北海道教育大学函館分校創立六十年史編纂委員会『創立六十年史』（北海道教育大学函館分校、昭和 50 年）。
- ・北海道教育大学教育学部函館校『北海道教育大学教育学部函館校創立 80 周年開学 45 周年記念要覧』（北海道教育大学教育学部函館校、平成 6 年）。
- ・北海道教育大学函館校創立 90 周年記念行事準備委員会『北海道教育大学函館校創立 90 周年記念要覧』（北海道教育大学函館校、平成 16 年）。
- ・夕陽会 90 周年記念事業委員会『北海道教育大学夕陽会創立 90 周年記念誌「九十年誌」』（夕陽会、平成 20 年）。
- ・北海道立函館美術館『折原久左エ門展 金属造形—創造の軌跡』（北海道立函館美術館、平成 23 年）。

#### 北海道教育大学（旭川）

- ・北海道学芸大学旭川分校四十年史編集委員会『北海道学芸大学旭川分校四十年史』（北海道学芸大学旭川分校四十年史刊行委員会、昭和 39 年）。
- ・北海道教育大学旭川分校創立六十周年記念誌集員会『北海道教育大学旭川分校六十年史』（北海道学芸大学旭川分校六十周年記念事業実行委員会、昭和 59 年）。
- ・北海道教育大学旭川校記念誌出版小委員会『北海道教育大学旭川分校七十周年記念誌』（北海道教育大学旭川校創立七十周年並びに大学院開設記念会、平成 5 年）。
- ・片山晴夫 他『北海道教育大学旭川分校 80 周年記念誌』（北海道教育大学旭川校 80 周年記念事業実行委員会、平成 15 年）。
- ・海老名尚 他『北海道教育大学旭川分校 90 周年記念誌』（北海道教育大学旭川校 90 周年記念事業実行委員会、平成 25 年）。
- ・北海道学芸大学/教育大学旭川分校/校『学生便覧』昭和 38-平成 11 年度。朝倉力男記念美術館『朝倉力男洋画作品集』（朝倉力男記念美術館、平成 4 年）。
- ・北海道立旭川美術館『生の刻印/雪景の譜 朝倉力男展図録』（北海道立旭川美術館、平成 7 年）。

#### 北海道教育大学（釧路）

- ・北海道教育大学釧路分校二十年史編集委員会『北海道教育大学釧路分校二十年史』（北海道教育大学釧路分校二十年史刊行委員会、昭和 43 年）。
- ・北海道教育大学釧路分校 40 周年記念誌刊行委員会『北海道教育大学釧路分校 40 年史—この十年のあゆみ』（北海道教育大学釧路分校 40 周年記念事業実行委員会、平成元年）。



- ・北海道教育大学釧路校六十年史編集委員会『北海道教育大学釧路校六十年史』（北海道教育大学釧路校創立 60 周年記念事業実行委員会、平成 22 年）。
- ・生方秀紀・栢野彰秀『理科教育研究室 40 周年記念誌』（北海道教育大学釧路校理科教育研究室、平成 20 年）。
- ・北海道学芸大学/教育大学釧路分校『講義時間割一覧表』昭和 40、52 年度。

## 弘前大学

- ・青森県師範学校『創立四十年記念誌』（大正 4 年）。
- ・青森県師範学校『創立六十年記念誌』（昭和 11 年）。
- ・青森師範学校同窓会『会員名簿』（青森師範学校同窓会、昭和 26 年）。
- ・『青森県学事関係職員録』大正 7、9、11-13、昭和 3-6、9、11、13、18 年度。
- ・『青森県教育職員録』（大正 15 年）。
- ・青森師範学校『青森師範学校概要』（昭和 23 年）。
- ・青森県師範学校同窓会・弘前大学教育学部『青森師範学校志』（弘前大学出版会、平成 18 年）。
- ・弘前大学二十年史編纂委員会『弘前大学二十年史』（弘前大学、昭和 48 年）。
- ・弘前大学創立 50 周年記念事業実行委員会 50 年史編纂専門委員会『弘前大学五十年史 通史編』『同 資料編』（弘前大学・弘前大学創立 50 周年記念事業後援会、平成 11 年）。
- ・弘前大学『学生便覧』昭和 28-平成 15 年度（弘前大学）。
- ・弘前大学事務部庶務課（昭和 41-48 年度は弘前大学事務局庶務部庶務課、昭和 49 年度以降は弘前大学庶務部庶務課）『弘前大学要覧』昭和 25、27、31、32・33、34・35、36・37、38・39・40、41・42、43・44、45・46、47・48、49・50・51、52・53、54・55、56・57、58・59、60・61、62・63、平成元・2、3・4、6、9、12 年度（弘前大学）。
- ・弘前大学庶務課『弘前大学学報』昭和 24-平成 16 年。
- ・弘前大学自己評価委員会『弘前大学教育・研究者総覧』平成 7、9、11、13 年度（弘前大学）。
- ・堀米勢吉『堀米勢吉画集』（堀米勢吉、昭和 58 年）。

## 岩手大学

- ・記念誌編集委員会『岩手大学特設美術科創設 40 周年記念誌』（特設美術科創設 40 周年記念事業実行委員会、平成 7 年）。
- ・岩手大学創立 50 周年記念誌編集委員会『岩手大学五十年史』（岩手大学、平成 12 年）。
- ・岩手県教育会『岩手県学事関係職員録』大正 15、昭和 4、6-8、10、12-19、35、36、44-47、49 年度。
- ・岩手大学『学習案内』昭和 36-52 年度。
- ・岩手大学『学生便覧』昭和 53-平成 11 年度。
- ・岩手大学庶務課『岩手大学通報』昭和 25-平成 16 年度。
- ・『岩手県師範学校一覧表（昭和 8 年 4 月 30 日現在）』。
- ・岩手大学学芸学部美術同窓会『会報』第 1 号（発行年不明）。

- ・岩手大学教育学部創基百年記念発行委員会『岩手大学教育学部 創基百年』（岩手大学教育学部、昭和 51 年）。
- ・岩手大学教授藤原徳太郎氏退官記念事業会『記念のしおり』（昭和 44 年）。
- ・平沢広・菊池桂・伊藤真紀子「伊藤昌彦年譜」『シリーズVI [岩手の現代作家] 伊藤昌夫 伊藤由美子 ゴトウ・シュウ 田村史郎』（萬鐵五郎記念美術館、平成 11 年）。
- ・海野経『海野経・ノート』（海野経、昭和 59 年）。
- ・深澤省三『深澤省三画集』（荻生書房、平成元年）。
- ・佐々木一郎『岩手の美術と共に歩んで』（佐々木一郎、昭和 62 年）。
- ・岩手大学アートフォーラム『森口多里その足跡を辿る』（岩手大学アートフォーラム、平成 21 年）。
- ・ミューズの花びら編集委員会『ミューズの花びら』（美工会、平成 18 年）。

## 宮城教育大学

- ・箕田源二郎 他『井手則雄追悼文集』（矢野和江、昭和 63 年）。
- ・宮城師範学校同窓会『同窓会名簿昭和 41 年版』（宮城師範学校同窓会、昭和 41 年）。
- ・宮城県師範学校同窓会『同窓会報』第 7 号（昭和 3 年）。
- ・宮城県教員組合『宮城県教育関係職員録』昭和 21 年度（昭和 21 年 3 月）。
- ・東北大学教育学部 50 年史編集委員会『東北大学教育学部 50 年の歩み』（東北大学教育学部、平成 11 年）。
- ・宮城教育大学二十年史資料集編纂委員会『宮城教育大学二十年史資料集Ⅱ』（宮城教育大学二十年史資料集編纂委員会、平成 63 年）。
- ・宮城教育大学三十年史資料集編纂委員会『宮城教育大学三十年史資料集Ⅱ』（宮城教育大学三十年史資料集編纂委員会、平成 8 年）。
- ・宮城教育大学 40 年史資料集編集委員会『宮城教育大学四十年史資料集Ⅱ』（宮城教育大学 40 年史資料集編集委員会、平成 18 年）。
- ・宮城教育大学庶務課『学報』。
- ・宮城教育大学学生生活委員会『学園だより』。
- ・東北大学教養部『昭和 27 年 4 月 東北大学教養部学生便覧』（昭和 27 年）。
- ・渡辺雄彦『渡辺雄彦作品集 1968-1998』（平成 11 年）。
- ・土屋瑞穂作品集を作る会『土屋瑞穂の彫刻』（土屋瑞穂作品集を作る会、平成 10 年）。
- ・高橋喜和作品集刊行会・代表土屋瑞穂・事務局宮城県美術館普及部内『高橋喜和作品集』（高橋喜和作品集刊行会、平成 7 年）。
- ・創童舎『東北の子ども版画』（東北電力、平成 7 年）。
- ・尾崎真人ほか『TOHOKU／TOKYO 1925～1945—東北の画家たち』（読売新聞社・美術館連絡協議会、平成 12 年）。
- ・宮城県美術館『特別展「アートみやぎ 2003」図録』（宮城県美術館、平成 15 年）。
- ・「新任教官自己紹介」宮城教育大学学生生活委員会『学園だより』第 94 号（宮城教育大

学学生生活委員会、平成 12 年 7 月)。

## 秋田大学

- ・秋田県師範学校『秋田県師範学校一覧表』昭和 7 年 4 月現在。同、昭和 8 年 4 月現在。
- ・秋田県女子師範学校『秋田県女子師範学校一覧表』昭和 3-6、6、9、13、15 年。
- ・秋田県教育会『秋田県教育関係職員録』大正 15、昭和 2-16 年度。
- ・秋田大学庶務部庶務課『秋田大学一覧』昭和 24・25、26、27・28、29・30、31・32、33・34、35・36、37・38、39・40、41・42、43・44、45・46・47、48・49、50・51、52・53、54・55、56・57、58・59、60・61、62・63、平成元・2、3・4、5・6、7・8、9・10、11・12、13・14 年度。
- ・秋田大学学生部『学生便覧』昭和 37、39-41 年度。
- ・秋田大学事務部庶務課『秋田大学学報』第 1-302 (291、295 欠) 号、昭和 20-平成 15 年 2 月 1 日。
- ・秋田大学教育学部『秋田大学教育学部研究者総覧』(秋田大学、平成 4 年)。
- ・秋田大学教育文化学部『秋田大学教育文化学部研究者総覧』(秋田大学、平成 11 年)。
- ・秋田大学『秋田大学研究者総覧』(秋田大学、平成 19 年)、同 (平成 22 年)。
- ・阿部米蔵『阿部米蔵作品集』(秋田マイクロ写真印刷、昭和 52 年)。
- ・阿部米蔵『構成の理論—詩精神の探求』(秋田マイクロ写真印刷、昭和 42 年)。
- ・薄金兼次郎『芸術学入門—人間形成のための芸術理解—』(内田老鶴圃、昭和 38 年)。
- ・秋田県立近代美術館『第 62 回国民体育大会公開競技スポーツ芸術主催事業 特別企画展 描かれた秋田展図録』(秋田県立近代美術館、平成 19 年)。
- ・佐々木良三『絵をつくる 人生を描く』(秋田魁新報社、平成 27 年)。
- ・猪巻明『猪巻明日本画展』(喜多方市美術館、平成 20 年)。
- ・遠藤敏明『〈自然と生きる〉木でつくろう 手でつくろう』(小峰書店、平成 24 年)。

## 山形大学

- ・山形大学教育学部同窓会『昭和三十年十月現在 会員名簿』(昭和 30 年)。
- ・山形大学『会員名簿 昭和 46 年版』(昭和 46 年)。
- ・長野亘『寂 (私の記録)』(長野亘教授退官記念誌出版委員会、昭和 50 年)。
- ・「真下慶治記念美術館ホームページ」([http://www.massimo-k.org/01\\_profile.html](http://www.massimo-k.org/01_profile.html)、平成 29 年 8 月 20 日確認)。
- ・山形教育学部九十年誌編集委員会『山形大学教育学部九十年誌』(山形大学教育学部同窓会、昭和 43 年)。

## 福島大学

- ・福島県師範学校『福師創立六十年』(福島県師範学校、昭和 8 年)。
- ・『福島県女子師範学校一覧表』(昭和 8 年 5 月 1 日現在)。
- ・福島県女子師範学校『福島県女子師範学校沿革史』(福島県女師範学校、昭和 8 年)。
- ・『福島県教育関係職員録』大正 15、昭和 3、4、6、7、12、14、16、18、21 年度。
- ・福島県女子師範学校同窓会『会員名簿』昭和 6 年 12 月現在。

- ・福島大学学芸学部『学生便覧』昭和 28 年度。
- ・福島県教員組合『職員録 昭和 29 年度』（福島県学校生活協同組合、昭和 29 年）。
- ・福島大学『福島大学職員録』昭和 35、36、40、43、45-55、62-平成 4、9-11、13、14 年度。
- ・福島県教育会館『福島県教育関係職員録』昭和 58-平成 4、6-11、13、14 年度。
- ・福島大学庶務課『福島大学学報』第 1-256 号、昭和 24-64 年。
- ・福島大学庶務課『福島大学要覧』昭和 63、平成 5、8 年度。
- ・福島大学教育学部同窓会吾峰会『会員名簿』昭和 36、41、46、51、56、62、平成 5、11 年度。
- ・福島大学教育学部『福島大学教育学部研究者総覧』（平成 5 年）。
- ・福島大学教育学部『学科課程表』昭和 59-63 年度。
- ・福島大学教育学部百年史編纂委員会『福島大学教育学部百年史』（福島大学教育学部同窓会吾峰会、昭和 49 年）。
- ・福島大学教育学部同窓会『福島大学教育学部同窓会吾峰会百十年史』（福島大学教育学部同窓会吾峰会、平成 9 年）。
- ・大江孝『画家 美術教育 美校での王様 叔父飛田昭喬の前期』（喬樹会、昭和 54 年）。
- ・梅宮英亮「山川忠義の絵画」梅宮英亮『福島県洋画界と三人の画家たち』（歴史春秋出版、昭和 63 年）。
- ・青津清喜『青津清喜画集』（青津清喜、昭和 55 年）。

### 第三章

#### 茨城大学

- ・茨城大学美術科同窓会『六号館』第 2 号（稲村退三先生ご退官記念特集号）（昭和 42 年）。
- ・茨城大学美術科同窓会『六号館』第 3 号（宮澤治正先生ご退官記念特集号）（昭和 53 年）。
- ・茨城大学美術科同窓会『六号館』第 4 号（大道武男先生ご退官記念特集号）（昭和 54 年）。
- ・茨城大学美術科同窓会『六号館』第 5 号（巻島友治先生ご退官記念特集号）（昭和 57 年）。
- ・茨城大学美術科同窓会『六号館』第 6 号（城戸夏男先生ご退官記念特集号）（昭和 58 年）。
- ・茨城大学美術科同窓会『六号館』第 7 号（西田亨先生御退官記念特集号）（昭和 60 年）。
- ・茨城大学美術科同窓会『六号館』第 8 号（上田薫先生御退官記念特集号）（平成 7 年）。
- ・茨城大学美術科同窓会『六号館』第 9 号（山崎猛先生御退官記念特集号）（平成 8 年）。
- ・茨城大学美術科同窓会『六号館』第 10 号（後藤末吉先生御退官記念特集号）（平成 9 年）。
- ・茨城大学美術科同窓会『六号館』第 11 号（森田義之先生御退官記念特集号）（平成 11 年）。
- ・茨城大学美術科同窓会『六号館』第 12 号（松田正己先生御退職記念特集号）（平成 17 年）。
- ・茨城大学美術科同窓会『六号館』第 13 号（十河雅典先生御退職記念特集号）（平成 21 年）。
- ・茨城大学美術科同窓会『六号館』第 14 号（寺本輝正先生御退職記念特集号）（平成 28 年）。
- ・茨城大学美術科同窓会『六号館』第 15 号（金子一夫先生御退職記念特集号）（平成 28 年）。

#### 宇都宮大学

- ・宇都宮大学教育学部史編纂委員会『宇都宮大学教育学部百十五年史』（宇都宮大学教育学

部、平成元年)。

- ・宇都宮大学大学史編纂委員会『宇都宮大学四十年史』(宇都宮大学、平成2年)。
- ・栃木県師範学校『創立六拾年』(栃木兼師範学校、昭和8年)。
- ・下野教育会(昭和3-5年度)/栃木県教育会(昭和6-27年度)/栃木県連合教育会(昭和28-53年度)『栃木県学事関係職員録』昭和3-8、10-18、23-24、27-44、46-53年度。
- ・宇都宮大学『職員録』昭和39、40、42-47、51-平成7年度。
- ・宇都宮美術館『渡辺安友展』(宇都宮美術館、平成18年)。
- ・宇都宮美術館『矢口洋展』(宇都宮美術館、平成16年)。

## 群馬大学

- ・群馬大学『群馬大学十年史』(群馬大学、昭和38年)。
- ・群馬大学教育学部百年史編修委員会『群馬大学教育学部百年史』(群馬大学教育学部同窓会、昭和54年)。
- ・群馬県師範学校同窓会『会員名簿』昭和5年12月現在。同、昭和11年12月現在。
- ・『昭和24年11月 群馬大学要覧』。
- ・『学生便覧』昭和30、37、39-41年度。
- ・『大学一覧』昭和31年度、昭和36年度。
- ・『群馬大学教育学部案内』平成17年度。
- ・群馬大学自己評価等実施委員会専門委員会『群馬大学教官総覧』(群馬大学庶務部庶務課、平成5年)。
- ・群馬大学学芸学部同窓会『会員名簿』昭和27年10月現在。同、昭和35年1月現在。同、昭和50年3月現在。同、昭和60年3月現在。
- ・大学美術教育学会『会員名簿』昭和55年度。
- ・『日本美術学校同窓会名簿』(発行年不明)。
- ・日本文化財研究所アーカイブデータベース  
(<http://www.tobunken.go.jp/aterials/bukko/10108.html>、平成29年8月10日確認)
- ・狩野守『狩野守画集』(光村印刷、平成13年)。

## 埼玉大学

- ・百年史編集委員会『百年史 埼玉大学教育学部』(百年史刊行会、昭和51年)。
- ・埼玉大学自己評価等委員会『埼玉大学教官総覧 1993』(埼玉大学、平成5年)。『同 1998』(平成10年)。『同 2001』(平成14年)。
- ・都築邦春「本田貴侶教授の人と業績」『埼玉大学紀要 教育学部』第57巻第1号、平成20年、171-177頁。

## 千葉大学

- ・千葉県師範学校『創立六十周年記念千葉県師範学校沿革史』(千葉県師範学校、昭和9年)。
- ・『千葉師範学校一覧 昭和十八年度』(千葉師範学校、昭和18年)。
- ・百年史編集委員会『百年史 千葉大学教育学部』(百年史刊行会、昭和56年)。

- ・千葉大学五十年史編集委員会『千葉大学五十年史』（千葉大学、平成 11 年）。
- ・『千葉大学学報』第 2-623 号（昭和 26 年 8 月 15 日-昭和 62 年 5 月 15 日）、第 27 号（別冊）（平成 18 年 4 月 1 日）。
- ・大学美術教育学会『会員名簿』昭和 58-平成 8 年度。
- ・森桂一・戸田健夫『水彩画の基礎』（ダヴィット社、昭和 48 年）。
- ・戸田健夫『水彩画の道しるべー制作・鑑賞から発表まで』（ダヴィット社、平成 6 年）。
- ・戸田健夫『水彩の指導』（三晃書房、平成 5 年）。
- ・太田洋三『太田洋三画集』（生活の友社デザインセンター、平成 9 年）。
- ・大木武男『デザインの全体像』（三一書房、昭和 46 年）。
- ・武内和夫「武内和夫年譜」『武内和夫作品集』（武内和夫、昭和 62 年）。
- ・武内和夫『たのしい絵の教室』（国土社、昭和 50 年）。

#### 東京学芸大学

- ・平野英史「美術教育学成立過程の制度史的研究（東京学芸大学の場合）」（口頭発表資料）、美術科教育学会美術教育史研究部会「美術教育学の制度的基盤の成立過程」第 33 回美術科教育学会富山大会、平成 23 年 3 月 27 日。
- ・東京学芸大学二十年史編集委員会『東京学芸大学二十年史一創基九十六年史一』（東京学芸大学創立二十周年記念会、昭和 45 年）。
- ・東京学芸大学創立五十周年記念誌編集委員会『東京学芸大学五十年史 通史編』『同 資料編』（東京学芸大学創立五十周年記念事業後援会、平成 11 年）。
- ・東京府青山師範学校『東京府青山師範学校一覽』（昭和 15 年現在）。同（昭和 17 年 6 月 1 日現在）。
- ・『東京府第一師範学校一覽』（昭和 19 年 9 月 1 日現在）。

#### 横浜国立大学

- ・教育学部史編纂委員会『横浜国立大学教育学部の歩み』（横浜国立大学教育人間科学部、平成 14 年）。
- ・『神奈川県公立学校職員録』昭和 28 年度。
- ・『小関利雄と子供たちの世界』（神奈川県立近代美術館、平成 17 年）。
- ・竹田信夫・小関利雄『図案 単位と構成』（同学社、昭和 29 年）。
- ・三浦寛三『色彩学概論（再訂版）』（創文社、昭和 55 年）。
- ・横浜美術館学芸部『國領経郎展』（横浜美術館、平成 11 年）。
- ・宮脇理「構成・デザイン教育に貢献された真鍋一男先生 日本デザイン学会名誉会員・真鍋一男先生へのインタビュー」『デザイン学研究』No. 83、平成 3 年、11-12 頁。

### 第四章

#### 新潟大学

- ・新潟大学二十五年史編集委員会『新潟大学二十五年史 総編』『同 部局編』（新潟大学二

十五年史刊行委員会、昭和 49 年)。

- ・新潟大学五十年史編集委員会『新潟大学五十年史 部局編』(新潟大学五十年史刊行会、平成 12 年)。
- ・新潟大学教育学部高田分校『高田分校三十年史』(新潟大学教育学部高田分校、昭和 56 年)。
- ・新潟大学教育学部長岡分校創立三十周年並びに閉校記念事業実行委員会『悠久の丘—新潟大学教育学部長岡分校創立三十周年並びに閉校記念誌—』(新潟大学教育学部長岡分校創立三十周年並びに閉校記念事業実行委員会、昭和 56 年)。
- ・新潟大学『学生便覧』昭和 28、31-34 年度。
- ・新潟大学『大学院学生便覧』昭和 59 年度。
- ・青柳三郎『児童画の指導』(美術出版社、昭和 52 年)。

## 富山大学

- ・富山大学『富山大学十五年史』(富山大学、昭和 39 年)。
- ・富山大学年史編纂委員会『富山大学五十年史』(富山大学、平成 19 年)。
- ・「美術科各研究室のプロファイル」富山大学教育学部学窓会『会誌』第 38 号(昭和 47 年)。
- ・富山教育学窓会『会員名簿』昭和 27、31、36、40、44、48、50-平成元年度。
- ・玉生正信「美術教育における創造性の形成と造形性」『美學』第 22 号(2)、昭和 46 年、1-10 頁。

## 金沢大学

- ・金沢大学 50 年史編纂委員会『金沢大学五十年史部局篇』(金沢大学創立 50 周年記念事業後援会、平成 11 年)。
- ・石川県教育会『石川県学事関係職員録』昭和 2、10-12、14-18、21、22 年度。
- ・石川県教職員組合『石川県学事関係職員録』昭和 23 年度。
- ・石川県教職員組合・石川県学校消費生活協同組合『石川県学事関係職員録』昭和 29-54 年度。
- ・金沢大学学生部『学生便覧』昭和 25-平成 12 年度。
- ・『金沢大学総覧』昭和 25 年度(昭和 25 年 10 月 1 日)。
- ・金沢大学『金沢大学一覧』昭和 33-37、43、46 年度。
- ・金沢大学点検評価委員会『金沢大学研究者総覧』(金沢大学点検評価委員会、平成 9 年)平成 8 年 7 月 1 日現在)。
- ・金沢大学『教員調査』昭和 51 年度(昭和 51 年 5 月 1 日)。同、昭和 52 年度(昭和 52 年 5 月 1 日現在)。同、昭和 53 年度(昭和 53 年 5 月 1 日現在)。
- ・金沢大学『昭和五一五年度附属施設等教員調査』(昭和 55 年 5 月 1 日現在)。
- ・金沢大学教育学部『授業要項』昭和 45 年度後期、昭和 46 年度前期、昭和 46 年度後期、昭和 47 年度後期、昭和 47 年度 V・VII 期、昭和 48 年度前期、昭和 48 年度後期、昭和 49 年度前期、昭和 49 年度後期、昭和 50 年度前期、昭和 51 年度後期。

- ・金沢大学学生部『金沢大学大学院便覧』（金沢大学学生部）平成 2-26 年度。
- ・金沢大学庶務課『金沢大学事務通報』。
- ・宮坂元裕「訃報 林先生ご逝去」『公益社団法人日本美術教育連合ニュース』No. 147、平成 28 年 6 月、21 頁。
- ・石川県立美術館『石川県立美術館開設 50 周年記念 近代日本美術の精華—東京芸大美術館コレクションを中心に—』（石川県立美術館、平成 21 年）。

## 福井大学

- ・福井県師範学校同窓会『同窓会報告』第 25-38 号、昭和 2-15 年。
- ・福井師範学校同窓会『同窓会誌』（昭和 22 年）。
- ・福井師範学校校友会『啓成詞林』第 44 号（昭和 8 年）。
- ・福井県鯖江女子師範学校・福師県立鯖江高等女学校『昭和十六年七月 我が校ノ教育』（昭和 16 年）。
- ・福井県鯖江女子師範学校・福師県立鯖江高等女学校『みどり』第 10 号（昭和 13 年）。
- ・福井大学『学生便覧』昭和 25-平成 15 年度。
- ・福井大学事務部庶務課『福井大学学報』第 1 号-Vol. 54、昭和 24-平成 15 年。
- ・11 年会酒井ブロック一同『雪の輪—福師 11 年会 50 周年記念文集—』（春近文庫、昭和 61 年）。
- ・田中隆盛『田中隆盛油絵展』（田中隆盛、昭和 50 年）。

## 山梨大学

- ・丸田銓二郎『山梨大学学芸学部沿革史』（山梨大学学芸学部、昭和 39 年）。
- ・『国立山梨大学創設案』（昭和 23 年 7 月 30 日設置申請）（山梨大学附属図書館蔵）。
- ・『山梨大学（改定案）教官年次別及び学部別教室別配当名簿表』（山梨大学附属図書館蔵）。
- ・山梨大学『学生便覧』昭和 27-平成 16 年度。
- ・山梨大学『職員録』昭和 27、28、35-39、41-50、52、53、55-63、平成 5-14 年度。
- ・山梨大学『山梨大学要覧』昭和 30-平成 14 年度。
- ・山梨大学『山梨大学概要』昭和 40-平成 14 年度。
- ・山梨大学『学報』第 1-494 号（昭和 26-平成 12 年）。

## 信州大学

- ・信州大学教育学部九十年史編集委員会『信州大学教育学部九十年史』（信濃教育会、昭和 40 年）。
- ・信州大学教育学部三十年誌刊行会『信州大学教育学部三十年誌』（信州大学教育学部三十年誌刊行会、昭和 57 年）。
- ・信州大学教育学部五十年誌編纂部会『信州大学教育学部五十年誌』（信州大学教育学部創立 50 周年記念事業実施委員会、平成 11 年）。
- ・信州大学教育学部業生名簿刊行会『信州大学教育学部卒業生名簿』（信州大学教育学部卒業生名簿刊行会、昭和 56 年）。



- ・信濃教育会事務所『長野県学事関係職員録』大正 15-平成 15 年度。
- ・信州大学庶務課『職員録』昭和 27-29、36、39 年度。
- ・卒業生名簿作成委員会『信州大学教育学部卒業生名簿 昭和三十八年』（創立九十周年記念会、昭和 38 年）。
- ・信州大学教育学部美術科同窓会『信州大学教育学部美術科 30 周年記念誌』（信州大学教育学部美術科同窓会、昭和 55 年）。
- ・記念誌編纂専門部会『信州大学創立 50 周年記念誌：新たな創造と交流を目指して』（信州大学、平成 11 年）。
- ・信州大学自己点検・評価運営委員会『信州大学研究者総覧 1995』（信州大学、平成 7 年）。
- ・信州大学自己点検・評価委員会『信州大学教育研究者総覧 2001 年度版』（信州大学、平成 14 年）。
- ・関谷俊行「教員養成 38 年を回顧して」庶務部庶務課委『信州大学学報』第 492 号（平成 7 年 3 月 1 日）。
- ・信州大学教育学部美術科同窓会関谷俊行教授退官記念行事実行委員会『関谷俊行教授退官記念論文集』（平成 8 年）。

#### 岐阜大学

- ・岐阜県師範学校父母会『名簿』大正 15、昭和 2、5、7、8、9、10、12、13、15、16 年度。
- ・『岐阜県学事関係職員録』昭和 22、24-49 年度。
- ・岐阜大学庶務部庶務課『岐阜大学要覧』昭和 25、自 33 至 35、43、45、48、51、54、57、60、63、平成 4、10 年度。
- ・岐阜大学庶務課『学報』第 7 号（昭和 26 年 11 月 15 日）。
- ・岐阜大学『学生便覧』昭和 31、33、34、42、43、59 年度。
- ・岐阜県師範同窓会『会報』（会員名簿）第 15 号（昭和 6 年）、第 16 号（昭和 7 年）、第 17 号（昭和 8 年）、第 19 号（昭和 10 年）、第 20 号（昭和 11 年）、第 25 号（昭和 17 年）。
- ・岐阜大学学芸学部/教育学部同窓会『会員名簿』昭和 26、31、35、38、48 年、平成 11 年。
- ・岐阜大学『大学要覧』（岐阜大学、昭和 25 年）。
- ・岐阜大学研究者一覧編集委員会『岐阜大学研究者一覧』（岐阜大学、昭和 55 年）。
- ・岐阜大学自己評価実施委員会『岐阜大学研究者一覧』（岐阜大学、平成 7 年）、同（平成 11 年）。
- ・齋藤暁子「昭和初期手工教育の実際—加茂農林学校における木工による手工教育を探る」『美術教育学』第 29 号、平成 20 年。
- ・土屋常義「水彩画家早川国彦 人と作品」東海女子短期大学『紀要』第 5 号、東海女子短期大学、昭和 50 年、9 頁。
- ・岐阜県美術館『郷土作家紹介シリーズ 1 色と形の世界 坂井範一展』（昭和 58 年）。
- ・岐阜大学『学生便覧』昭和 31、33、34 年度。
- ・『大学要覧』昭和 33、34、35 年度。

- ・円空顕彰会・岐阜県文化財保護協会『土屋常義先生叙勲記念』（昭和48年）。
- ・土屋常義「私の青春日記」『岐阜日日新聞』昭和45年7月26日、6頁。
- ・土屋常義「児童画について」『岐阜タイムス』昭和30年4月21日、4頁。

## 静岡大学

- ・静岡大学10年史編集委員会『静岡大学十年史』（静岡大学、昭和37年）。
- ・静岡大学二十五年史編集委員会『静岡大学二十五年史』（静岡大学、昭和51年）。
- ・静岡大学50周年記念誌編集委員会通史編小委員会『静岡大学の五十年』（静岡大学、平成11年）。
- ・静岡大学創立50周年記念事業実行委員会・静岡大学教育学部美術教室『静岡大学創立五十周年記念美術展』（静岡大学教育学部美術教室、平成11年）。
- ・静岡大学事務局庶務課『静岡大学要覧』昭和37・38、39・40、41・42、43・44、45・46、47・48、49・50、51・52、53・54、55・56、57・58、61、62年度。
- ・静岡大学『学報』第1-346、349-363、365-518号（昭和37年6月1日-平成19年）。
- ・『静岡大学教官総覧』（平成5年）。
- ・松岡圭三郎画集刊行会『松岡圭三郎画集』（静岡教育出版会、昭和45年）。

## 愛知教育大学

- ・愛知教育大学史編纂専門委員会『愛知教育大学史』（愛知教育大学、昭和50年）。
- ・愛知教育大学『50周年記念誌編集資料 歴代職員名簿統計』（平成11年）。
- ・『教職60年・画業70年 鈴木三五郎記念画集』（名古屋市博物館、昭和55年）。
- ・『鈴木三五郎先生80年記念展』（名古屋市博物館、昭和55年）。
- ・刈谷市美術館・松本育子『松本光司展』（刈谷市美術館、平成4年）。
- ・画集編集委員会『市川晃画集』（市川晃先生退官記念画集刊行会、昭和61年）。
- ・画集編集委員会『磯谷桂治画集』（磯谷桂治先生退官記念画集刊行会、昭和61年）。
- ・大野元三先生退官記念行事事務局『回想録 子どもはなぜ絵をかくか』（昭和58年）。

## 第五章

### 三重大大学

- ・重大学開学50周年記念誌刊行専門委員会『三重大大学五十年史』通史編・部局史編・資料編（三重大大学開学50周年記念事業後援会、平成11年）。
- ・三重大大学教育学部同窓会百周年記念事業会『三重大大学教育学部創立百年史』（三重大大学教育学部同窓会百周年記念事業会、昭和52年）。
- ・三重大大学『職員録』昭和33年2月、34年12月、36年4月、37年5月、38年8月、39年10月、43年11月、44年か（表紙欠落不明、同書綴り順に沿って判断）、45年11月、46年12月。
- ・大学美術教育学会『会員名簿』（昭和55年）。
- ・三重大大学ホームページ「三重大大学教員紹介」  
([http://kyoin.mie-u.ac.jp/402\\_KY0IN\\_Search.aspx](http://kyoin.mie-u.ac.jp/402_KY0IN_Search.aspx)（平成29年7月20日確認））

## 滋賀大学

- ・滋賀大学史編集委員会『滋賀大学史』（滋賀大学創立 40 周年記念事業、平成元年）。
- ・滋賀大学史編集委員会『滋賀大学史—50 周年を迎えて—』（滋賀大学創立 50 周年記念事業実行委員会、平成 11 年）。
- ・川崎源『滋賀大学教育学部百年沿革史』（滋賀大学教育学部同窓会『会報』第 26 号（昭和 51 年）の別冊）。
- ・川崎源『滋賀大学教育学部百二十年史』（滋賀大学同窓会、平成 13 年）。
- ・滋賀県師範学校『滋賀県師範学校六十年史』（滋賀県師範学校、昭和 10 年）。
- ・滋賀県教職員組合『教育関係職員録 昭和 23 年度』（滋賀県教職員組合、昭和 23 年）。
- ・滋賀大学学芸学部同窓会『会報』第 16 号（昭和 40 年）。
- ・滋賀大学自己評価等検討委員会『滋賀大学研究者総覧 1999』（滋賀大学企画広報室、平成 11 年）。
- ・山尾平『山尾平作品集 みち芝』（山尾平作品集刊行委員会、平成 10 年）。
- ・北川威夫遺作展委員会主催『北川威夫遺作展』案内（平成 4 年）。
- ・秋元幸茂作品集出版と展覧会開催実行委員会『秋元幸茂作品集』（秋元幸茂作品集出版と展覧会開催実行委員会、平成 12 年）。
- ・鶴房健蔵『湖彩—鶴房健蔵作品集』（鶴房健蔵、平成 6 年）。
- ・『山田良定と郷土の弟子たち展』（「山田良定と郷土の弟子たち展」実行委員会、平成 17 年）。

## 京都教育大学

- ・京都教育大学開学 30 周年記念誌編集委員会『京都教育大学開学三十周年記念誌』（京都教育大学、昭和 55 年）。
- ・京都教育大学一二〇周年記念誌編集委員会『京都教育大学百二十年史』（京都教育大学、平成 13 年）。
- ・京都府教育会『京都府学事関係職員録』（京都府教育会）大正 15-昭和 18、25-平成 15 年度。

## 大阪教育大学

- ・大阪学芸大学『大阪学芸大学 15 年史』（大阪学芸大学、昭和 39 年）。
- ・大阪教育大学 120 周年記念誌編纂委員会『大阪教育大学教室沿革史』（大阪教育大学 120 周年記念誌編纂委員会、平成 8 年）。
- ・「花篤先生退官記念座談会」大阪教育大学美術教育講座・芸術講座『美術科研究』第 16 号、平成 10 年、1-19 頁。
- ・花篤實「大阪教育大学における美術教育学の制度的基盤の成立過程」（口頭発表資料）、美術科教育学会美術教育史研究部会「美術教育学の制度的基盤の成立過程」第 33 回美術科教育学会富山大会、平成 23 年 3 月 27 日。
- ・教育通信社『大阪府学事職員録』昭和 17、18、21 年度。

- ・大阪教員組合『大阪府学校職員録』昭和 24 年度。
- ・大阪教職員組合『大阪府学校教職員録』昭和 25、26、27、29、30、33、35-42、44、47-60 年度。
- ・河井洋『河井達海画集』（芸術春秋社、昭和 52 年）。
- ・大阪児童美術研究会『敬慕 高妻巳子雄先生』（大阪児童美術研究会、昭和 58 年）。

## 神戸大学

- ・神戸大学教育学部沿革史編集委員会『神戸大学教育学部沿革史』（神戸大学教育学部、昭和 46 年）。
- ・神戸大学教育学部五十年史編集委員会『神戸大学教育学部五十年史』（神戸大学紫陽会、平成 12 年）。
- ・神戸大学百年史編集委員会『神戸大学百年史』（通史・部局史）（神戸大学、平成 17 年）。
- ・兵庫県教育会『兵庫県学事関係職員録』大正 14、昭和 7、9、10、13、17、19 年度。
- ・兵庫県教職員組合『昭和 23 年度職員録』。
- ・兼行武四郎先生「退官記念画集」刊行会『兼行武四郎画集』（昭和 42 年）。
- ・上野省策『斎藤喜博と美術教育』（一莖書房、昭和 59 年）。

## 奈良教育大学

- ・奈良教育大学創立百周年記念会百年史部『奈良教養大学史一百年の歩み一』（奈良教育大学創立百周年記念会、平成 2 年）。
- ・奈良教育大学大学院設置 20 年記念誌編集実行委員会『奈良教育大学大学院 20 年史』（奈良教育大学大学院設置 20 年記念誌編集実行委員会、平成 16 年）。
- ・奈良教育大学大学院教育学研究科美術教育専攻美術コース書道コース『奈良教育大学大学院美術教育専攻修了研究報告』（奈良教育大学大学院美術教育講座（美術コース、書道コース）第 1 号-第 16 号（平成 11 年-平成 16 年）。
- ・国立大学法人奈良教育大学点検評価委員会『奈良教育大学教員総覧』（奈良教育大学、平成 18 年）。

## 和歌山大学

- ・和歌山大学『十年のあゆみ』（和歌山大学、昭和 34 年）。
- ・和歌山大学教育学部『和歌山大学教育学部創立百周年記念 100 年のあしあと』（和歌山大学教育学部、昭和 50 年）。
- ・和歌山大学 50 年史編纂委員会『和歌山大学 50 年史』（和歌山大学、平成 12 年）。
- ・和歌山県教育会『和歌山県学事関係職員録』昭和 2、4、5、9、10、11-17 年度。
- ・和歌山県師範学校『師範学校一覧表』（昭和 10 年 10 月 1 日現在）。
- ・和歌山県女子師範学校『同窓会名簿』（和歌山県女子師範学校、昭和 17 年）。
- ・和歌山県女子師範学校『会員名簿』（昭和 15 年 9 月現在）。
- ・紀学同窓会『紀学同窓会会員名簿』（昭和 46 年）。
- ・和歌山大学自己点検・評価委員会『和歌山大学の現状と課題 1993』（和歌山大学、平成 5 年）。

- ・ 峠原敏夫『峠原敏夫画集』（峠原敏夫、昭和 60 年）。
- ・ 寺口淳治「保田龍門自筆年譜」和歌山県立近代美術館『大正のまなざし―若き保田龍門とその時代―』（和歌山県立近代美術館、平成 6 年）112-119 頁。
- ・ 樋口弘之『白色ポルトランドセメントを主材料とした学園像（その他）（Monument）の制作研究 1959～1970』（昭和 45 年）。
- ・ 長谷川哲哉『ミューズ教育思想史の研究』（風間書房、平成 17 年）。

## 第六章

### 鳥取大学

- ・ 鳥取大学創立 30 周年記念誌編集・刊行委員会『鳥取大学三十年史』（鳥取大学、昭和 58 年）。
- ・ 鳥取大学創立 50 周年記念誌編集・刊行委員会『鳥取大学五十年史』（鳥取大学、平成 13 年）。
- ・ 中等教科書協会『中等教育諸学校職員録』昭和 5-7、9-12 年版。
- ・ 鳥取県教育会『鳥取県学事関係職員録』鳥取県教育会事務所、大正 15-昭和 3、昭和 5-10、12-18、20-21 年度。
- ・ 鳥取県教育関係職員互助会・他『鳥取県教育関係職員録』昭和 25、27-28、31-43、47-平成 15 年度。
- ・ 鳥取大学学芸学部『学生手引』昭和 24-25、27-28 年度。
- ・ 『学芸学部履修規定』昭和 26 年度。
- ・ 『学生便覧』昭和 29-31 度。
- ・ 「職員異動」鳥取県女子師範学校『校友会誌』第 3 号（鳥取県女子師範学校・鳥取県立八頭高等女学校校友会、昭和 7 年）124-126 頁。
- ・ 「歴代職員」鳥取県師範学校校友会『尚徳 創立経せて。五十周年校舍改築落成記念号』（昭和 12 年）93-100 頁。
- ・ 「五 職員」鳥取県女師範学校・鳥取県立八頭高等女学校『創立十周年記念誌』（昭和 12 年）96、116-121 頁。
- ・ 鳥取県師範学校『鳥取県師範学校要覧（昭和十六年七月）』（昭和 16 年）。
- ・ 鳥取県女子師範学校・鳥取県立八頭高等女学校『校友会同窓会会員名簿（昭和十二年七月現在）』（昭和 12 年）。
- ・ 「母校奉職の恩師」有終会『会員名簿』第 10 号（昭和十六年七月調）（昭和 16 年）、128-134 頁。
- ・ 鳥取師範学校女子部『同窓会会員名簿（昭和二十三年四月現在）』（昭和 23 年）。
- ・ 「恩師消息（昭和二一年六月～二四年三月）」鳥取師範学校男子部本科昭和二十四年三月卒業生『鳥取師範学校 卒業三十周年記念誌』（昭和 54 年）7-9 頁。
- ・ 「恩師消息」卒業四十周年記念誌刊行委員会『永久のいのちを一卒業四十周年記念誌一』（鳥取師範学校昭和二十四年卒業同期生会、平成元年）253-256 頁。

- ・鳥取県師範学校昭和十五年三月卒業生『五十周年記念誌』（昭辰会、平成2年）。
- ・鳥取大学『学生便覧』昭和31、58年度。
- ・鳥取大学学芸学部『会員名簿（昭和35年版）』（鳥取大学学芸学部同窓会、昭和35年）。
- ・鳥取大学『鳥取大学研究者一覧（昭和36年度）』（昭和36年）。
- ・鳥取大学研究者総覧編集会議・鳥取大学庶務部庶務課『鳥取大学研究者総覧（1986）』（昭和62年）、『同（1991）』（平成4年）、『同（1997）』（平成9年）、『同（2001）』（平成14年）。
- ・鳥取大学産学連携推進機構『研究者総覧2005』（平成17年）。
- ・鳥取大学教養部『回想の教養部』（鳥取大学教養部、平成7年）。
- ・上田保子『上田敏和展一時のひびき』（上田敏和、平成18年）。

## 島根大学

- ・中等教科書協会『中等教育諸学校職員録』昭和5-7、9-12年版。
- ・中等教科書協会『師範学校中学校職員録』昭和13、14年版。
- ・島根県教育会『島根県内教育関係職員録』昭和5-18、21、22年度。
- ・島根県教職員組合『島根県教育関係職員録』昭和23-36、40、42年度。
- ・島根県教育委員会『教職員名簿』昭和33-平成15年度。
- ・『島根大学職員録』昭和35-平成15年度。
- ・島根大学教育学部同窓会『同窓会誌』第2-60号（昭和27年-平成21年）。
- ・島根師範学校同窓会『昭和十四年度同窓会会員名簿』。
- ・『島根大学要覧』昭和27年度。
- ・島大音研誌編集委員会『My Onken History 島根大学教育学部特設音楽課程30周年記念』（島大音研同窓会、昭和60年）。
- ・齋藤重徳『島根大学保健体育研究室史「体研史」』（齋藤重徳、平成26年）。

## 岡山大学

- ・岡山大学二十年史編さん委員会『岡山大学二十年史』（岡山大学、昭和44年）。
- ・岡山大学30年史編纂委員会『岡山大学史（昭和44年～昭和54年）』（岡山大学、昭和55年）。
- ・岡山大学40年史編さん委員会『岡山大学史（昭和54年～平成元年）』（岡山大学、平成2年）。
- ・岡山大学創立50周年記念事業委員会『岡山大学史（平成元年～平成11年）』（岡山大学、平成11年）。
- ・中等教科書協会『中等教育諸学校職員録』昭和5-7、9-12年版。
- ・岡山県教育会『岡山県学事関係職員録』昭和2-5、8-18、22-25、27-40年度。
- ・岡山大学『岡山大学職員録』昭和24-平成15年度。
- ・岡山大学『岡山大学要覧』昭和30-31、34、36、38-43、47、51、53、55、57、59、61、63年度。
- ・岡山大学庶務部庶務課『岡山大学研究者総覧1992』（平成5年）。
- ・やかげ郷土美術館『没後40年 佐藤一章展』（やかげ郷土美術館、平成12年）。
- ・やかげ郷土美術館編集『岡大特美教室からの波動』（やかげ郷土美術館、平成14年）。

## 広島大学

- ・広島大学二十五年史編集委員会『広島大学二十五年史 通史編』（広島大学、昭和 54 年）『同 部局編』『同 包括校史』（昭和 52 年）。
- ・広島大学 50 年史編集専門委員会広島大学文学館『広島大学五十年史 通史編』（広島大学、平成 19 年）。
- ・広島大学 50 年史編集専門委員会広島大学 50 年史編集室『広島大学五十年史 資料編上』『同 資料編下』（広島大学、平成 15 年）。
- ・広島県教育会/広島県教職員組合/広島県学校生活協同組合『広島県学事関係職員録』昭和 13-18、23-26 年度。

## 山口大学

- ・山口大学 30 年史編集委員会『山口大学 30 年史』（山口大学、昭和 57 年）。
- ・山口大学 50 年史編集委員会『山口大学 50 周年記念誌』（山口大学、平成 11 年）。
- ・山口県教育会『山口県学事関係職員録』大正 15-昭和 19 年度。
- ・山口教職員組合『山口県教職員録』昭和 23-平成 15 年度。
- ・山口大学『山口大学職員録』（山口大学）昭和 46-49、61 年度。
- ・山口県師範学校同窓会『会報 第 26 号 興水先生追悼号』（山口県師範学校同窓会、昭和 16 年）。
- ・山口大学教育学部同窓会『山口大学教育学部同窓会誌』昭和 38、58、62、平成 4 年度。
- ・山口大学教育学部同窓会『同窓会名簿』（山口大学教育学部同窓会、平成 9 年）。
- ・細田実「田村伝次先生を想う」昭四会記念誌編集委員会『昭和四年三月 山口県師範学校卒業五十周年記念誌「光被」』（山口県師範学校昭四会、昭和 53 年）17 頁。
- ・細田和子『木工美術 細田育宏の世界』（平成 22 年）所収「功績調書 細田育宏」。

## 徳島大学

- ・徳島県師範学校内渭水会『会員名簿』（昭和 14 年 9 月現在）。同（昭和 15 年 9 月現在）。同（昭和 17 年 2 月現在）。
- ・徳島県女子師範学校・徳島県立徳島高等女学校淬礪済美同窓会『会員名簿』（昭和 6 年 8 月現在）。
- ・徳島県教育会『徳島県学事関係職員録』昭和 8、14、15、24、26-平成 15 年度。
- ・『徳島大学職員録』昭和 26-43 年度。
- ・兵庫教育大学教務部教務課『兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科研究者総覧』（兵庫教育大学、平成 15 年）。
- ・美術出版デザインセンター『河崎良行デッサン集』（河崎良行デッサン集刊委員会、平成 10 年）。
- ・潮見泰成『河崎良行彫刻作品集 1989-2000』（河崎良行彫刻作品集刊行委員会、平成 13 年）。

## 香川大学

- ・香川大学『香川大学十年史』（香川大学、昭和 34 年）。
- ・香川大学 30 年史編集委員会『香川大学三十年史』（香川大学、昭和 57 年）。
- ・香川大学五十年史編集委員会『香川大学五十年史』（香川大学、平成 12 年）。

- ・『履修の手引き』昭和 36-45、47-平成 10 年度。
- ・香川大学教育学部同窓会報 昭和 49 年 10 月 25 日』第 11 号（昭和 49 年 10 月 25 日）。  
同、13 号（昭和 51 年 7 月 25 日）。

## 愛媛大学

- ・愛媛大学 50 年史編集専門委員会『愛媛大学五十年史』（愛媛大学開学 50 周年記念事業委員会、平成 11 年）。
- ・愛媛県教育会『愛媛県教育関係職員録』昭和 24-27 年度。
- ・『愛媛大学要覧』（昭和 24 年 11 月 11 日）。
- ・愛媛大学『学生便覧』昭和 41-48 年度。
- ・愛媛大学『学生生活の手引き』51、53-58、61 年度。
- ・愛媛大学庶務部庶務課『愛媛大学職員録』（愛媛大学庶務部庶務課）昭和 37、40、45-48、50-52、54-平成元年度。
- ・愛媛大学大学院教育学研究科『履修の手引き』平成 5-15 年度。
- ・愛媛大学庶務部庶務課『愛媛大学教育研究者要覧 1995』（愛媛大学、平成 7 年 1 月 1 日現在）、『同 1999』（平成 11 年 6 月 1 日現在）。『同 2001』（平成 13 年 8 月 1 日現在）。
- ・藤谷庸夫『小学校に於ける美育とその実際』（関印刷所出版部、昭和 3 年）。
- ・藤谷庸夫先生追慕の会『たんぼゝ』（藤谷馨、昭和 8 年）。
- ・石井南放先生の退官を記念する会『石井南放作品集・退官記念』（昭和 53 年）。
- ・石井南放『南放随想 続 絵と文』（愛媛県警察本部協賛、昭和 56 年）。
- ・愛媛日本画会『第 25 回愛媛日本画展記念図録』（昭和 61 年）。
- ・『第 20 回記念南風会展図録』（南風会、昭和 63 年）。
- ・石井南放『石井南放画集』（求龍堂、平成元年）。
- ・野村正三郎『野村正三郎作品集』（野村正三郎、昭和 63 年）。
- ・野村正三郎『工作教育の実際』（開成書院、昭和 31 年）。
- ・小泉政孝『小泉政孝作品集』（昭和 51 年）。
- ・小泉政孝『小泉政孝作品集一石鎚百景一』（昭和 56 年）。
- ・奥定一孝『奥定一孝油彩画』（奥定一孝、平成 7 年）。
- ・愛媛新聞社『伊予の画人』（愛媛新聞社、昭和 61 年）。
- ・愛媛県立美術館『戦前の愛媛の洋画家たち』（愛媛県立美術館、平成 5 年）。
- ・『セキ美術館開館 10 周年記念 愛媛・感動の美術家たち展 第 2 期展 大正から戦前の昭和 激動の時代・美を求めた画家たち』（セキ美術館、平成 19 年）。
- ・『セキ美術館開館 10 周年記念 愛媛・感動の美術家たち展 第 4 期展 愛媛ゆかり 花開く 戦後の画家たち』（セキ美術館、平成 20 年）。
- ・愛媛美術教育連盟『美連創立 50 周年記念誌 美連の歩みに見るえひめ的美術教育』（愛媛美術教育連盟、平成 16 年）。

## 高知大学



- ・高知師範学校略史編集委員会『高知師範学校史』（高知師範百年祭実行委員会、昭和 49 年）。
- ・高知大学 30 年史編集委員会『高知大学三十年史』（高知大学三十年史刊行委員会、昭和 57 年）。
- ・高知大学特美 30 周年記念誌編集委員会『高知大学特美 30 周年記念誌』（高知大学特美 30 周年記念誌編集委員会、平成 10 年）
- ・高知大学学生課『学生便覧』（高知大学）昭和 48、49 年度。
- ・如泉会『会員名簿』（高知大学教育学部内 如泉会、平成元年）。
- ・『図解 日本の漆工 てのひら手帖』（東京美術、平成 26 年）。

## 第七章

### 福岡教育大学

- ・福岡県福岡師範学校内松浦繁太郎『創立五十年誌』（福岡師範学校内創立五〇年記念会雑誌部、大正 15 年）。
- ・福岡県福岡師範学校創立六十周年記念会『創立六十年誌』（福岡県福岡師範学校創立六十周年記念会、昭和 11 年）。
- ・鳥飼里の会『福岡県女子師範学校誌』（鳥飼里の会、昭和 48 年）。
- ・福岡県小倉師範学校内西田貞実『富陵 三十周年記念号』（福岡県小倉師範学校校友会、昭和 13 年）。
- ・福岡教育大学創立 40 周年記念行事实行委員会『福岡教育大学四十年の歩み』（福岡教育大学、平成元年）。
- ・福岡第二師範学校一覧『福岡第二師範学校一覧』（福岡第二師範学校、昭和 18 年）。
- ・福岡学芸大学『福岡学芸大学要覧』昭和 31 年度。
- ・福岡県教育会/教育春秋社/教育公論社『福岡県下学事関係職員録』（昭和 3、5、8、10、12、17、18、21-31、33、40-42、47-50、53、35、48、61、平成 4 年度）。
- ・平田宗史『福岡県教員養成史研究 戦前編』（海鳥社、平成 6 年）。
- ・平田宗史『福岡県教員養成史研究 戦後編』（海鳥社、平成 10 年）。

### 佐賀大学

- ・佐賀大学史編纂委員会『佐賀大学四十年史』（第一法規、平成 6 年）。
- ・佐賀大学文化教育学部美術・工芸教室『50 周年記念誌佐賀大学美術・工芸教室 50 年』（佐賀大学、平成 15 年）。
- ・佐賀大学美術館『佐賀大学美術館 開館記念特別展 美術・工芸教室 60 年の軌跡Ⅰ「特美」の育成者たち』（佐賀大学美術館、平成 25 年）。
- ・佐賀大学美術・工芸科教室『美術・工芸教育学』第 2 号（平成 7 年）。同、3 号（平成 8 年）。
- ・筒井茂雄『筒井茂雄』（昭和 51 年）。
- ・佐口七朗『造形教育シリーズ第 4 巻 うつくしい色彩』（教材社、昭和 38 年）。
- ・中牟田佳彰・前村晃「佐賀大学美術・工芸小史―特設美術科創設より美術・工芸課程ま

で―」佐賀大学文化教育学部美術・工芸教室『50周年記念誌佐賀大学美術・工芸教室 50年』(佐賀大学、平成15年)91-101頁。

- ・前村晃「佐賀大学における美術・工芸教室の変遷―「特美」の設置から今日まで―」佐賀大学美術館『佐賀大学美術館 開館記念特別展 美術・工芸教室 60年の軌跡Ⅰ「特美」の育成者たち』(佐賀大学美術館、平成25年)69-77頁。

## 長崎大学

- ・長崎大学三十五年史刊行委員会編集室『長崎大学三十五年史』(長崎大学、昭和59年)。
- ・長崎大学五十年史刊行委員会『長崎大学五十年史』(長崎大学、平成5年)。
- ・長崎教育会『長崎県学事関係職員録』大正14-昭和17年度。
- ・長崎大学『長崎大学便覧』昭和40-46年度。
- ・長崎大学教育学部『長崎大学教育学部業績目録』No.1(長崎大学、昭和45年)。同、No.2(昭和56年)。同、No.4(平成4年)。同、No.5(平成9年)。
- ・長崎大学自己評価総括委員会『長崎大学研究者総覧』(長崎大学、平成5年)。
- ・米田明生『卒業研究成果＝窯芸・染色工芸＝青春 火土水』(長崎大学教育学部、平成13年)。

## 熊本大学

- ・熊本大学教育学部・熊本大学教育学部同窓会『創立百周年記念誌』(熊本大学教育学部・熊本大学教育学部同窓会、昭和49年)。
- ・熊本大学30年史編集委員会『熊本大学三十年史』(熊本大学、昭和55年)。
- ・熊本大学60年史編纂委員会『熊本大学六十年史』(熊本大学、平成24年)。
- ・熊本大学教育学部『開設授業科目一覧表』昭和46-60年度。
- ・平野三代喜『平野三代喜作品集』(熊本大学教育学部美術科、昭和56年)

## 大分大学

- ・大分大学創立30周年記念誌編集・刊行委員会『大分大学三十年史』(大分大学、昭和58年)。
- ・大分大学創立50周年記念誌編集・刊行委員会『大分大学五十年史』(大分大学、平成13年)。
- ・大分県教育会『大分県学事関係職員録』大正15-昭和3、昭和5-10、12-18、20-21年度。
- ・大分県教育委員会事務局調査企画課/指導調査課/庶務課/全国教育調査研究会大分支部『大分県教育関係職員録』昭和25、27-28、31-32-43、47-平成15年度。
- ・大分大学学芸学部『学生手引』昭和24-25、27-28年度。
- ・『学芸学部履修規定』昭和26年度。
- ・『学生便覧』昭和29-31、58度。
- ・『履修規定とその解説』昭和32-36年度。
- ・大分県師範学校学友会『尚徳 創立五十周年校舎改築落成記念号』(昭和12年)。
- ・大分県女師範学校・大分県立八頭高等女学校『創立十周年記念誌』(昭和12年)。
- ・大分県師範学校『大分県師範学校要覧(昭和十六年七月)』。
- ・有終会『会員名簿』第10号(昭和16年7月調)。
- ・大分師範学校男子部本科昭和24年3月卒業生『大分師範学校 卒業三十周年記念誌』。

- ・大分師範学校女子部『同窓会会員名簿（昭和 23 年 4 月現在）』。
- ・大分県女子師範学校『校友会誌』第 3 号（大分県女子師範学校・大分県立八頭高等女学校校友会、昭和 7 年）。
- ・大分大学教養部『回想の教養部』（平成 7 年）。
- ・大分県師範学校昭和十五年三月卒業生『五十周年記念誌』（昭辰会、平成 2 年）
- ・上田保子『上田敏和展一時のひびき一』（上田敏和、平成 18 年）。
- ・大分大学『大分大学研究者一覧（昭和 36 年度）』（昭和 36 年）。
- ・大分大学研究者総覧編集会議・大分大学庶務部庶務課『大分大学研究者総覧（1986）』（昭和 62 年）。『同（1991）』（平成 4 年）。『同（1997）』（平成 9 年）。『同（2001）』（平成 14 年）。
- ・大分大学産学連携推進機構『研究者総覧 2005』（平成 17 年）。

#### 宮崎大学

- ・宮崎大学五十年史刊行委員会『創立五十周年記念誌』（宮崎大学、平成 11 年）。
- ・宮崎県教育会『宮崎県学事関係職員録』大正 10、昭和 2、5-15、18、19、24、25、28、33 年度。
- ・宮崎県教育会館『宮崎県教職員録』昭和 57-平成 15 年度。
- ・宮崎大学『宮崎大学研究者要覧 1991』（宮崎大学、平成 3 年）。
- ・宮崎県立美術館『塩月桃甫展』（宮崎県立美術館、平成 13 年）。
- ・篠原勇『新しい折紙』（日本色彩社、昭和 34 年）。

#### 鹿児島大学

- ・鹿児島大学三十年史編集委員会『鹿児島大学三十年史』（鹿児島大学、昭和 55 年）。
- ・鹿児島大学五十年史編集委員会『鹿児島大学五十年史』（鹿児島大学、平成 12 年）。
- ・鹿児島大学厚生補導部/鹿児島大学学生部『学生便覧』昭和 29-平成 15 年度。
- ・鹿児島県教育会『鹿児島県学事関係職員録』大正 11、12、3-19、23 年度。
- ・鹿児島県教職員組合/鹿児島県教育用品『鹿児島県教職員録』昭和 44-平成 15 年度。
- ・鹿児島大学研究者総覧編集委員会『鹿児島大学研究者総覧』（鹿児島大学、平成 6 年）。同（平成 9 年）。同（平成 14 年）。
- ・「新任教師紹介」鹿児島大学広報委員会『鹿大広報』第 146 号、平成 10 年 2 月、24 頁。
- ・厚東孝治『厚東孝治作品集 2002』（鹿児島大学退官記念白陵会委員会、平成 14 年）。
- ・池川直『池川直彫刻集 1976-2000』（錦織与志二、平成 12 年）。

#### 琉球大学

- ・琉球大学『十周年記念誌』（琉球大学、昭和 36 年）。
- ・琉球大学二十周年記念誌編集委員会『琉球大学二十周年記念誌』（琉球大学、昭和 45 年）。
- ・琉球大学開学 30 周年記念誌編集委員会『琉球大学三十年』（琉球大学、昭和 56 年）。
- ・琉球大学開学 50 周年記念史編集専門委員会『琉球大学五十年史』（琉球大学、平成 12 年）。
- ・『龍潭同窓会会員名簿』（沖縄師範学校龍潭同窓会、昭和 53 年）。
- ・沖縄師範龍潭同窓会『龍潭百年（沖縄師範学校百年記念誌）』（龍潭同窓会、昭和 55 年）。

- ・琉球大学広報委員会『琉球大学研究者総覧 1978』（琉球大学庶務部庶務課、昭和 53 年）。『同 1991』（平成 4 年）。

## 第八章

- ・井上善教「教職回顧 思い出」島根大学教育学部同窓会『同窓会誌』第 27 号（昭和 50 年）60-61 頁。
- ・『岡山県学事関係職員録』昭和 24、25、27、28 年度。
- ・岡山県教育委員会『岡山県学事関係職員録』昭和 15、16、17 年度。
- ・岡山大学二十年史編纂委員会『岡山大学二十年史』（昭和 44 年）。
- ・岡山大学 30 年史編纂委員編会『岡山大学史（昭和 44 年～昭和 54 年）』（昭和 55 年）。
- ・岡山大学 40 年史編さん委員会『岡山大学史（昭和 54 年～平成元年）』（平成 2 年）。
- ・岡山大学創立 50 周年記念事業委員会『岡山大学史（平成元年～平成 11 年）』（平成 11 年）。
- ・『岡山大学概要』昭和 50-60 年度。
- ・『岡山大学職員録』昭和 24-28 年度。
- ・『岡山大学要覧』自昭和 41 年度至昭和 42 年度（昭和 42 年）。
- ・岡山大学教育学部事務部『岡山大学教育学部概況』昭和 33、34、38 年度。
- ・金森朴堂『遊神帖』（報光社、昭和 60 年）。
- ・金森朴堂『座右帖』（八洪会、昭和 49 年）。
- ・中牟田佳彰・前村晃「佐賀大学美術・工芸小史—特設美術科創設より美術・工芸課程まで—」佐賀大学文化教育学部美術・工芸教室『50 周年記念誌佐賀大学美術・工芸教室 50 年』（佐賀大学、平成 15 年）91-101 頁。
- ・京都教育大学開学 30 周年記念誌編集委員会『京都教育大学開学三十周年記念誌』（京都教育大学、昭和 55 年）。
- ・熊本高工『児童画の歴史』（日本文教出版、昭和 63 年）。
- ・黒川建一『保育としての造形指導』（日本文教出版、昭和 50 年）。
- ・国際浮世絵学会会誌『浮世絵芸術』No. 142（平成 14 年）。
- ・小谷忠芳「教職回顧 思い出」島根大学教育学部同窓会『同窓会誌』第 26 号（昭和 49 年）。
- ・佐賀大学教育学部美術・工芸科『美術・工芸教育学』第 2 号「宮脇理先生退官記念号」。
- ・山陽新聞掲載「岡大の顔」167 号。
- ・島根大学開学三十周年史編集委員会『島根大学史』（島根大学、昭和 56 年）。
- ・島根大学教育学部同窓会『同窓会誌』26 号、昭和 49 年。
- ・島根県立博物館『井上善教遺作展』（島根県立博物館、昭和 55 年）。
- ・島根県教育会『島根県内教育関係職員録』昭和 5-18、21、22 年度。
- ・島根県教職員組合『島根県教育関係職員録』昭和 23-36、40、42 年度。
- ・島根県教育委員会『教職員名簿』昭和 33-平成 15 年度。
- ・『島根大学職員録』昭和 35-平成 15 年度。

- ・島根大学教育学部同窓会『同窓会誌』第2-60号（昭和27年-平成21年）。
- ・島根師範学校同窓会『昭和十四年度同窓会会員名簿』。
- ・『島根大学要覧』昭和27年度。
- ・筑波大学芸術学系芸術教育学研究室『藝術教育学』第4号、平成4年。
- ・『奈良女子高等師範学校一覧 昭和十八年度』。
- ・美術科教育学会二〇年史編纂委員会『美術科教育学会二〇年史』（美術科教育学会、平成11年）。
- ・細田和子『木工美術 細田育宏の世界』（ニューカラー写真印刷、平成22年）。
- ・やかげ郷土美術館『やかげ郷土美術館開館20周年記念 佐藤一章展／一章ゆかりの画家展』（やかげ郷土美術館、平成22年）。
- ・やかげ郷土美術館『岡大特美教室からの波動』（やかげ郷土美術館、平成14年）。
- ・米原智『造形への思索 画業60周年記念 米原智画集』（印刷企画社、平成18年）。
- ・太田将勝ホームページ（<http://www.ota-mas.com/hihyou.html>（平成24年9月20日確認））。
- ・島根大学ホームページ（[http://www.shimane-u.ac.jp/\\_common/images/01/stories/pdf/Jouhoukoukai/gyomu/genkyo\\_chosa/edu\\_e.pdf](http://www.shimane-u.ac.jp/_common/images/01/stories/pdf/Jouhoukoukai/gyomu/genkyo_chosa/edu_e.pdf)（平成26年9月20日確認））。
- ・島根デザイン連盟ホームページ（<http://design.shimane.tv/members/ishino.html>）、GLOBAL（<http://jglobal.jst.go.jp/public/20090422/200901074834091269>）（平成23年9月20日確認）。

## 第九章

### 単行本

- ・佐賀大学史編纂委員会『佐賀大学四十年史』（第一法規、平成6年）。
- ・美術科教育学会二〇年史編纂委員会『美術科教育学会二〇年史』（美術科教育学会、平成11年）。

### 定期刊行物・論文等

- ・金子一夫・有田洋子「美術教育学の成立過程—東京芸術大学の場合—」『茨城大学教育学部紀要（教育科学）』第62号、平成25年、123-135頁。
- ・「花篤先生退官記念座談会」大阪教育大学美術教育講座・芸術講座『美術科研究』第16号、平成10年、1-19頁。
- ・長谷川哲哉「研究会か学会かの議論（一）」美術科教育学会二〇年史編纂委員会『美術科教育学会二〇年史』（美術科教育学会、平成11年）22頁。

## 謝 辞

本研究を進めるにあたり、幅広い視野から二年間ご指導いただきました岡崎昭夫教授、そして岡崎教授ご退職後に引き継いでいてねいなご指導をいただいた石崎和宏教授には厚く御礼申し上げます。そして予備審査の段階から様々な問題のご指摘とご教示をいただきました直江俊雄教授、菅野智明教授、そして金子一夫茨城大学特任教授にも心から感謝申し上げます。

本研究は全国の教員養成大学・学部の事務局及び附属図書館はもとより、公立図書館、諸個人にまでに及ぶご協力の上に成り立っています。ご協力いただいた関係機関及び関係諸氏には、いくら御礼申し上げても足りないくらいです。

また、勤務先の島根大学同僚の先生方にはあたたかく見守っていただき、特に他教科の教科教育学の先生方にはご教示いただき、感謝申し上げます。

浅学菲才の私が論文を完成することができたのは、これらの方々のおかげです。

今後はこの研究をもとに美術教育学研究の発展にささやながら寄与できればと思っています。

平成 30 年 2 月 20 日

有田 洋子